

奥能登の文化誌

—石川県輪島市の生活文化の「伝統」と「現在」—

地域社会の文化人類学的調査 16



2006

富山大学人文学部文化人類学研究室

目 次

はじめに	竹内 潔	1
第1章 輪島市の概況		4
第2章 伝統工芸		
第1節 輪島塗について		
第2節 輪島塗食器の使用状況の変遷とその背景	野水 裕紀子	19
第3節 輪島塗における徒弟制度と後継者対策	渡辺 佳央里	31
第3章 伝統行事		
第1節 人口減少と高齢化による祭りの変化		
ー石川県輪島市里町周辺五町の水無月 <small>みなづき</small> 祭りの現状と展望を、特に人口減少との関係からー	進藤 至	46
第2節 市の坂の獅子舞、存続と現状	崎川 夏耶	94
第4章 地域と観光化		
第1節 キリコ祭りの観光化についての取り組み	塚本 枝里子	109
第2節 朝市の現状	佐久間 悠司	125
第3節 白米千枚田の観光化と保全活動	杉本 優子	137
第4節 輪島市での地酒普及への取り組みについて	稲田 有香里	151
第5章 海女の社会と文化		
第1節 海士町の概況		160
第2節 海士町と済州道の海女についての漁業と社会組織の比較	林 慧環（イム・ヘギョン）	165
第2節 海士町の食文化	飯塚 芳恵	175
第3節 チアマイという病	長谷川 彩	186
あとがき		193

はじめに

富山大学人文学部助教授 竹内 潔

富山大学人文学部の文化人類学コースでは、1981 年以来、授業の一環として北陸地方で実習調査をおこない、その成果を『地域社会の文化人類学的調査』として報告書のかたちで刊行してきた。本書は、その 16 冊目の調査報告書となる。また、輪島市でおこなった実習調査の報告書としては、10 号の『海民文化の現在』につづいて 2 冊目となる。

富山大学の文化人類学コースは、1979 年の創設以来、「人間のことは人間に学べ」という標語のもとに、フィールド・ワークを文化人類学の学習の中心に据えて、いわば「現場主義」とでもいうべき教育方針をとってきた。近年、文化人類学以外の学問でさかんに「フィールド・ワーク」という語が用いられるようになってきたのと裏腹に、文化人類学ではフィールド・ワークという営為とその成果を記述する問題についてさまざまな内省的な問題が提起されている。そのような文化人類学の現状からみれば、「現場主義」という指針は素朴に過ぎるかもしれない。しかし、自分たちと異なる生活と人生を営む人々との出会いによって、自他の差異と共通性をまず「実感」として得るという経験がなければ、文化人類学はたんなる「文化学」となって、既成の諸学問に対する自律性や批判的精神を失ってしまうだろう。また、学部学生が文化人類学を学ぶ意義は、まさに自分たちとは異なる人生を歩んできた人々、大学やアルバイト先などでは会うことのないような人々との出会いを通して、世界の豊かさと複雑さを体験として看取するところにある。自分の生きる世界と他者の生きる世界を実際に体験することによって、はじめて生きた文化、生きられる文化の探求が始まるのであり、その意味では文化人類学において、あるいは文化人類学の教育において、フィールド・ワークが持つ意義が喪われることはない。

今回の実習調査は、能登半島の北端、石川県輪島市においておこなった。調査テーマは学生が関心に応じて設定しているので、本報告書は、奥能登、あるいは輪島の生活文化の網羅的な報告ではない。若い学生たちと輪島という地域の出会いのなかから、それぞれのテーマが学生たちによって選び取られ、学生たちは自分たちが惹きつけられた事象について、自主的に調査をおこなった。したがって、これまで編んできた報告書と同様、この報告書も若い学生たちと地域の生活文化との邂逅の記録である。学生たちの若い感性と地域の文化的事象との相互作用の報告として読んでいただきたいと願う。

学生たちが輪島という地域との出会いで選び取ったテーマは、地場産業である輪島漆器や酒造の現状、朝市や「千枚田」における観光文化、農村地域の祭りや獅子舞、潜水漁をおこなう海女の人々の食文化、社会組織、疾患などであるが、どのテーマについても、学生たちは地域社会の現在の文脈との関連において、事象を理解しようとし、解釈を試みた。この報告書のサブタイトルを「石川県輪島市の生活文化の“伝統”と“現在”」としたゆえんである。

調査は主として夏季に合宿形式でおこなったが、学生たちはそれ以外の時期にも自主的に、ときには私の叱咤を受けて、調査のために足繁く、富山から数時間かかる輪島まで通った。地域社会の中に溶け込む努力、調査者と被調査者との距離を縮める努力を、学生たちは懸命に投じたと思う。しかし、学生たちの記述には、経験を文章化する未熟さのゆえ分かりにくい点が多々あると思われる。あるいは、事実関係の誤りが含まれているかもしれない。忌憚のないご批判やご助言を寄せていただければ幸いである。

謝辞

今回の調査では、各学生がそれぞれの調査の過程で、これまでの調査にもまして多くの方のあたたかなご援助やご配慮をたまわりました。以下に記して、それぞれの学生からの感謝の念をあらわしたいと思います。

野水裕紀子（第1節）は、輪島塗が地域住民の方々の生活にどのように関わっているのかを調査する上で、輪島市PTA連合会の前田孝様にさまざまな便宜をはかっていただきました。また、河井小学校の先生方にもたいへんお世話になりました。石川県輪島漆芸美術館学芸課の高柳浩子様には、貴重な時間を割いていただき、お話を聞かせていただきました。そして、藤八屋の塩土様、輪島市役所産業部商工業課の稲木様には、たくさんの職人の方々を紹介していただきました。

渡辺佳央里（第2節）は、輪島塗における徒弟制度と後継者問題について調査しましたが、輪島漆器商工業協同組合の岩坂克次様に多くの職人さんを紹介していただき、また、懇切に質問に答えていただきました。石川県立輪島漆芸技術研修所の岩波信雄様、輪島実業高校の先生方、輪島市役所産業経済部商工業課の島口慶一様、工房長屋の尾上利充様には、素朴な問いに対して親切に答えていただきました。なかでも、漆芸技術研修所の岩波信雄様には、研修所の生徒の方々にアンケート調査を行ううえで、たいへんお世話になりました。

また、野水裕紀子と渡辺佳央里の二人とも、ここでは一人一人のお名前をあげることはできませんが、じつにたくさんの輪島塗職人の方々から貴重なお話を聞かせていただきました。

進藤至（第3節）は、南志見地区の水無月祭りを調査しましたが、同地区の中川直哉宮司にたくさんのことを教えていただき、さらには、祭り当日に自宅に泊めていただきました。中小田定幸様は祭りの前日や準備日に自宅に泊めていただきました。また南高四様、楠知之様、中口様、谷内江様、小谷地様には、貴重なお話を聞かせていただき、資料提供をしていただきました。小学生の祭りの練習風景を見学する際は、中谷定盛先生にさまざまな便宜をはかっていただきました。

崎川夏耶（第4節）は、市の坂の獅子舞について調査する上で、橋本幸男様にさまざまな便宜をはかっていただきました。また、坂下照彦様、橋本政幸様、上元昭義様には、調査に多大のご協力をいただきました。

塚本枝里子（第 5 節）は、キリコ祭りの調査について、キリコ会館の越戸様、輪島市観光課の本田様、塗太郎の中宮様、天甚権兵衛の天甚様、ペンションかもめの湊田様、釣いかだ組合の宮野様、さらに本町商店街のたくさんの方々にお世話になりました。

佐久間悠司（第 6 節）は、輪島の朝市について調査する上で、輪島市朝市組合の方々に貴重なお話を聞かせていただき、また、資料を提供していただきました。

杉本優子（第 7 節）は、観光地である白米千枚田を調査しましたが、輪島市観光課、輪島市商工会議所、白米千枚田愛耕会、白米町にお住まいの方々、千枚田でボランティア活動をしている方々に、貴重な時間を割いて聞き取り調査に協力していただきました。

稲田有香里（第 8 節）は、輪島の地酒について調査する上で、清水酒造、日吉酒造、白藤酒造、中島酒造、谷川醸造、川清酒店、日吉酒店、高田酒店、酒のはしもと、鳳洲酒造組合、輪島商工会議所、安嶋是晴様に、多大の協力をいただきました。

イム・ヘギョン（第 9 節）は、海士町の社会組織を調査しましたが、西見義介海士町自治会長、自治会事務所の磯野様に貴重なお話を聞かせていただき、資料を提供していただきました。

飯塚芳恵（第 10 節）は、海士町の食文化を調査する上で、海士町自治会事務所の磯野様、北出様、岩坂様に懇切な教示をいただきました。また、船本様、漆谷様には、食文化に関わる貴重なお話を聞かせていただきました。

長谷川彩（第 11 節）は、潜水漁と関わる疾患について調査しましたが、舳倉島診療所山本大輔先生にたいへん貴重なお話を聞かせていただきました。また、海士町や舳倉島で、多くの海女の方々に体験談を懇切に話していただきました。

また、イム・ヘギョン、飯塚芳恵、長谷川彩の 3 名とも、舳倉島で調査をおこなった際に、同島の民宿「つかさ」に泊めていただき、民宿つかさの大角ご夫妻には、たいへんなご好意をいただき、お世話になりました。

合宿調査の際には、輪島前神社の中村裕宮司、海士町自治会長の西見義介様に、何度も無償で宿舎を提供していただきました。

以上にお名前を挙げさせていただいた方々だけでなく、今回の調査では輪島のじつに多くの方々のご協力をいただきました。輪島の人々の外来者に対するあたたかでこまやかな気づかいに助けられて、私たちは調査をおこなうことができました。

私たちの調査にご協力いただいたすべてのみなさまに心からのお礼を述べさせていただきます。ほんとうにありがとうございました。

第1章 輪島市の概況

第1節 輪島市の地理と自然環境

調査をおこなった輪島市は、石川県の北部、能登半島の北端に位置している。海岸部は外海に面し、日本海の荒々しさを感じさせる景観が連なっていて、その大部分が能登半島国定公園に指定されている。山地が約7割と平地が極めて少なく、北方の海上には輪島市に所属する舳倉島がある（図1）。平成18年2月に、門前町との市町村合併により、新たな輪島市が誕生した。この新輪島市は、東西約42キロメートル、南北約31キロメートル、面積は約430平方キロメートルで、石川県の約1割を占める。

輪島では昔から漁業が盛んであり、現在でも能登随一の漁港を擁しているが、また、潜水業（海女漁）が現在でもさかんにおこなわれている日本で唯一の地域としても知られている。

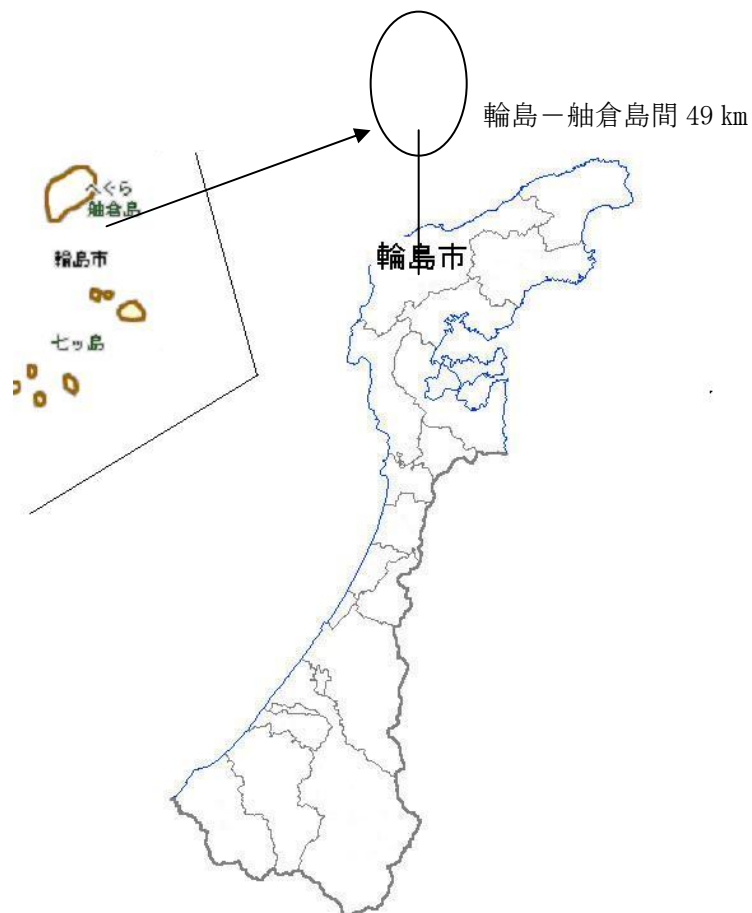


図1. 輪島市および舳倉島の位置

(<http://www.tokyo-jma.go.jp/home/kanazawa/mame/tokusei/tokusei.html> より)

気候の面では、輪島市は能登半島の先端に位置するために寒暖の季節風の影響を受けやすく、季節の移り変わりがはっきりしている。他の北陸の都市と比べると、夏はやや涼しく、冬は比較的降雪が少ない。

気温は夏季の 7 月、8 月が最も高く、平成 18 年の場合、最高気温は 34.7 度であった。一方、同じ平成 18 年で気温が最も低かったのは 2 月で、マイナス 4.5 度であった（表 1）。強風が吹くために冬の風は冷たく、体感温度は気温よりはるかに低い。また、強風のために、雪はさほど積もらず、平成 18 年の最深積雪量は 29 センチであった。

表 1. 月別平均気温・最高気温・最低気温・降水量

	平均気温	最高気温	最低気温	降水量
月	℃	℃	℃	mm
1	2.1	11.3	-3.1	145.5
2	3	15.1	-4.5	124.5
3	5.1	19.6	-2.4	164
4	9.8	23.5	-0.3	140.5
5	15.9	29.3	4.7	151.5
6	19.6	27.7	11.4	115
7	23	32.9	15.4	483
8	26.6	34.7	19.5	29
9	21.4	34.5	11.4	114
10	17	25.9	6.6	98
11	11.3	22.5	1.8	274
12	6.3	13.3	-1.2	278.5

第 2 節 輪島市の人口と産業

2-1. 人口

先に触れたように、平成 18 年 2 月 1 日に旧輪島市と旧門前町が合併し、新しい輪島市が誕生した。表 2 に、人口と世帯数について、旧輪島市と旧門前町と両者の合計に分けて、昭和 60 年（1985 年）から平成 17（2005 年）までの 20 年間の推移を 5 年ごとに示した。

表 2. 輪島市 世帯・人口の推移

単位：人

	旧輪島市				旧門前町				旧輪島市・旧門前町合計			
年度	世帯	男	女	計	世帯	男	女	計	世帯	男	女	計
S.60	9,163	15,975	17,041	33,016	3,546	5,692	6,285	11,977	12,709	21,677	23,326	44,993
H.2	9,255	15,105	16,320	31,425	3,475	5,101	5,701	10,802	12,730	20,206	22,021	42,227
H.7	9,223	14,138	15,420	29,558	3,395	4,532	5,154	9,686	12,618	18,670	20,574	39,244
H.12	9,244	13,204	14,550	27,754	3,381	4,108	4,723	8,831	12,625	17,312	19,273	36,585
H.17	9,870	12,783	13,697	26,480	3,377	3,717	4,314	8,031	13,247	16,500	18,011	34,511

(<http://www.city.wajima.ishikawa.jp/simin/zinnkousui.xls>) より作成

昭和 60 年（1985 年）の旧輪島市と旧門前町の合計世帯数は 12,709 世帯であるが、20 年後の平成 17（2005 年）には 13,247 世帯と増加している。しかし人口を見てみると、昭和 60 年（1985 年）では 44,993 人だが、平成 17 年（2005 年）は 34,551 人と減少している。旧輪島市と旧門前町を比べると、旧門前町が世帯、人口ともに減少傾向にあるのに対して、旧輪島市は世帯数が増加する一方で、人口が減少していて、旧輪島市では一世帯あたりの員数が減少していることが読み取れる。

2-2. 産業

次に輪島の産業について概観してみよう。

表 3. 産業別生産高（平成 17 年度）

区 分		新市	地 域		備考
			輪 島	門 前	
生産額	第 1 次産業 (千円) 農業産出額	2,921,000	1,488,000	1,433,000	H17 県市町村勢要 覧
	第 2 次産業 (千円) 製造品出荷額 等	21,845,110	16,661,960	5,183,150	
	第 3 次産業 (千円) 商品販売額	33,120,000	29,036,000	4,084,000	

(<http://www.city.wajima.ishikawa.jp/kurashi/plgaiyo.htm>) より作成

第2次、第3次産業の生産高が多く、第1次産業の総生産高に占める割合は低い。表には示していないが、この報告集でとりあつかう潜水漁の生産高は平成16年で約3億円であり、第1次産業の1割に相当する。また、やはりこの報告集で触れる輪島特産の輪島漆器の生産高は平成17年で72億円であり、第2次産業の3割を占めている。

表4. 産業別就業者数（平12.10.1） 「平成18年刊行 輪島市統計書」より抜粋

単位：人

区分		総数	男	女
第一次産業		2,882	1,649	1,233
	農業	1,835	919	916
	林業	190	146	44
	漁業	857	584	273
第二次産業		6,239	4,081	2,156
	鉱業	31	27	4
	建設業	2,504	2,145	359
	製造業	3,704	1,909	1,795
第三次産業		8,779	4,156	4,623
	電気・ガス・熱供給・水道業	82	68	14
	運輸・通信業	645	535	110
	卸売・小売業	2,889	1,131	1,758
	金融・保険業	263	98	165
	不動産業	13	8	5
	サービス業	4,006	1,642	2,364
	公務	881	674	207
	分類不能の産業	4	2	2

（平成18年刊 『石川県市町勢要覧』により作成）

第2次産業の製造業の従事者は就業者総数の半分を占め、表には示していないが、そのうち輪島漆器に従事する人は1,918人である。また潜水業に従事する人数は漁業従事者のうちの約4割に相当する。

第3節 輪島市の歴史

輪島は、中世においては、^{おおやしう}大屋 荘（輪島から穴水にかけての広大な地域）の中の湊町

であったことから大屋湊と呼称され（資料によっては、「親の湊」と表記されているものもある）、日本海遠隔地交易の重要な中継基地として、日本を代表する「三津七湊^{さんしんしちそう}」（注 1）の一つであり、おおいに栄えていた。「輪島」という地名が使われるようになるのは、室町時代中期である。なお、室町期には、温井氏（注 2）が、漆器の製作を重要な産業として保護したのがきっかけで、現在まで続く輪島塗の基礎ができた。

江戸時代の輪島は、河原田川西岸の鳳至町と東岸の河井町の二つの町から構成され、寛文 10 年(1670 年)には、輪島は当時の「町」としての格付けを得た。当時は海運業が盛んで、幕末の安政 4 年に輪島湊に入った船隻は、600 艘余りであったと言う。これらの船は、能登産の材木、枚木、小羽板(こばいた、屋根葺用の薄板)、木炭、魚類などを運んでいた。

当時、漁業もよくおこなわれていたが、さらに、鍛冶、そうめん業、紺屋、室屋（麴の製造・販売）、漆器業なども主要な生業であった。

明治 4 年(1871 年)、廃藩置県のと七尾県に編入されたが、翌年、七尾県が廃止され、石川県に属した。明治 22 年(1889 年)の町村制施行により輪島町をはじめとする 1 町 10 ヶ村に町村役場が設けられ、明治 41 年(1908 年)には大屋村と鳳至谷村が合併して大屋村となり、町野・西町・岩倉の 3 村が合併し、町野村ができた。

このようにして、輪島近郷は行政区域の変更が繰り返されたが、昭和 29 年(1954 年)、町村合併促進法に、もとづいて、輪島町、大屋村、河原田村、鵜巣村、西保村、三井村、南志見村の 1 町 6 ヶ村が合併して輪島市が誕生した。その後、町野町と合併し、すでに述べたように、平成 18 年(2006 年)には門前町と合併し、輪島はさらに大きな市となった。

注釈

(1) 三津七湊(さんしんしちそう)：室町時代末に成立した日本最古の海洋法規集である『廻船式目』に、日本の十大港湾として記されている三津、七湊の港湾都市の総称。三津は伊勢安濃津（津市）、筑前博多津（博多市）、和泉堺津（堺市）七湊は越前三国湊（坂井市）、加賀本吉湊（白山市）、能登輪島湊（輪島市）、越中岩瀬湊（富山市）、越後今町湊（直江津）（上越市）、出羽土崎湊（秋田湊）（秋田市）、津軽十三湊（五所川原市）。

(2) 温井(ぬくい)氏：南北朝時代以降、鳳至川と河原田川が合流する地点にあった大屋港を本拠として勢力を拡大していった国人。

第 4 節 輪島市の祭礼

次に、輪島の祭礼について概観してみよう。表 5 から分かるように、「輪島市祭」のような行政主導のイベントがある一方で、神事の一環として多彩な祭りが輪島市内のさまざまな地域でおこなわれている。そのなかでもっとも大規模な祭礼は、8 月に旧輪島町 4 町で数十本のキリコ（第 4 章 1 節参照）が登場する輪島大祭である。

表 5. 輪島市の祭礼

1 月	7 日	成斎祭（重蔵神社）	夜行われる。この日まで鳴り物は禁止されているが、この祭典ではじめて神楽太鼓が奏される。祭典後に、五穀豊穰を祈る。
3 月	1～7 日	如月祭（重蔵神社）	田畑を荒らす悪者を退治したのが始まりと伝えられている。以前は如月という名のおとり 2 月に行われていたが、明治以後は 1 ヶ月遅れの 3 月に行われている。
4 月	4～6 日	曳山祭（重蔵・住吉神社）	4・5 日は住吉神社、5・6 日は重蔵神社で行われる。両社ともその年の厄男たちによって行われる。重蔵神社では 5 日夜に「神主舞」と呼ばれる行事がある。
5 月	1・2 日	大幡祭り（大幡 ^{おおはた} 神杉 ^{かむすぎ} 伊豆 ^{いす} 牟比咩 ^{もひめ} 神社 ^{じんじや} ）	九社の神輿が鐘を鳴らしながら大幡神社に集合し、天下太平、五穀豊穰、村内平安を祈願する。
	8 日	嶽祭り（高洲神社）	ゴカヨーとも呼ばれ、高洲山の山開きの日。高洲山は奥能登で一番高く、「嶽山」と呼ばれている。
	11 日	麒麟山祭（真言宗高田神社）	能登の曾々木と真浦の間の急な崖を切り開き、400m の海道を造った海蔵寺住職の麒麟山和尚の遺徳を偲ぶ供養祭。
6 月	19・20 日	輪島市祭	輪島市あげての祭り。元は「塗師祭」に由来し、いわゆる産業祭。ブラスバンドや市民花火大会が行われる。
7 月	30・31 日	水無月祭（南志見住吉神社）	平成八年輪島市無形民俗文化財に指定。5 集落によって行われるキリコ祭りで、中心となるのが宵祭りの夜と本祭りの昼に、ホコを海に浸す「シオグリ」という「渚の神事」である。キリコとは、作豊漁に感謝して、御神輿にお供する縦型長方形の大きな御神燈のこと。

	31・1 日	名舟大祭〔白山神社〕	名舟町の氏神である奥津比咩の神を迎えて行われる大祭。海中にたっている鳥居まで神輿を船に乗せてこぎ出し、神を迎えることから始まり、翌日この鳥居に神送りするまで、古くから伝わる御陣乗太鼓が鳴り続ける。
8 月	23～26 日	輪島大祭	旧輪島町四町に鎮座する産土神の例大祭。キリコ数十本と、堤灯がみこしの共をして町内を練り歩くの。祭りに参加した人々は、この日にすべての厄を払い落とし、新しい神様が誕生する生命力を授かる。

第2章 伝統工芸

第1節 輪島塗について

1. 輪島塗の歴史

今日残されている最も古い輪島塗は、室町時代に作られた、市内の重蔵神社に伝わる朱塗扉であるが、歴史的には後世の江戸時代のはじめ頃から、堅くて丈夫な漆器が作られだした。また、江戸時代には後で詳しく説明する「沈金」や「蒔絵」の技法が始まり、美しい模様がほどこされた漆器が制作されるようになった。

輪島で独特の漆器が発達してきた理由はさまざまだと考えられるが、まず近隣にアテ、ケヤキ、漆、珪藻土^{けいそうど}など、漆器の素材となる材料が豊富にあったことである。また、早くから日本海航路の重要な寄港地として、材料や製品の運搬が便利であったことも漆器業が独自の展開を遂げた理由として挙げられる。

2. 輪島塗の特徴

輪島塗の漆器は100の工程を超える丁寧な手仕事の積み重ねで作られる。お椀の口や底などの壊れやすい箇所には、漆で布を貼って補強し、下地には、地の粉（珪藻土の一種である黄土を蒸し焼きにした後、くだいて粉にしたもの）を漆にまぜて、2回3回と塗り重ねて丈夫な漆器を仕上げていくのが輪島塗制作の特徴である。

また、輪島塗のもう一つの特徴として、制作工程が「塗師屋^{ぬしや}」を中心とする高度に専門化した分業システムであることがあげられる。塗師屋は、商品を作るにあたって、まず木地師に木地の製作を依頼する。できあがった木地は下地塗、研物、上塗職人によって塗りあげられる。加飾がほどこされる場合は蒔絵、沈金、呂色などの職人に任せられ、そうしてようやく完成した製品が塗師屋におさめられる。一つの工程に、およそ7人から8人の専門職人が関わっていて、その中心となるいわば指揮者が塗師屋なのである。このように工程を細分化することによって、それぞれの工程の精度を高めることができる。“輪島六職”（椀木^{わんき}地、指物^{さしもの}木^き地、曲物^{まげもの}木^き地、塗師^{ぬし}、蒔絵^{まきえ}、沈金^{ちんきん}）と呼ばれる分業制度は既に江戸時代後期に成立していたと言われているが、後にはさらに細分化が進み、現在では11職（椀木^{わんき}地、指物^{さしもの}木^き地、曲物^{まげもの}木^き地、朴木^{ほおき}地、下地塗^{したじぬり}、研物^{とぎもの}、上塗^{うわぬり}、呂色^{ろいろ}、蒔絵^{まきえ}、沈金^{ちんきん}、外箱^{そとばこ}）となっている。このように高度に専門化し分業した工程と塗師屋の巧みな指揮が、品質の高い漆器を生み出していると言える。

3. 輪島塗の現状

輪島塗の年間生産額は、全国に22ある漆器の産地の中で1位を誇っているものの、現在（平成17年度）は不景気の影響で平成2年度の約半分、およそ90億円となっている（表1）。また、輪島塗は、職人の減少や高齢化といった問題にも直面している。たとえば、輪

島塗の製造や販売に携わる従事者数について見てみると、平成 2 年（1990）の 2,894 人をピークに以降減少が続き、平成 17 年（2005）には 2 千人を割るにいたっている（表 2）。対策として、県立輪島実業高校インテリア科や輪島漆器共同高等職業訓練校、県立輪島漆芸技術研修所などの学科や機関が設立され、後継者育成への取り組みがおこなわれている。

表 1. 輪島塗生産額の推移

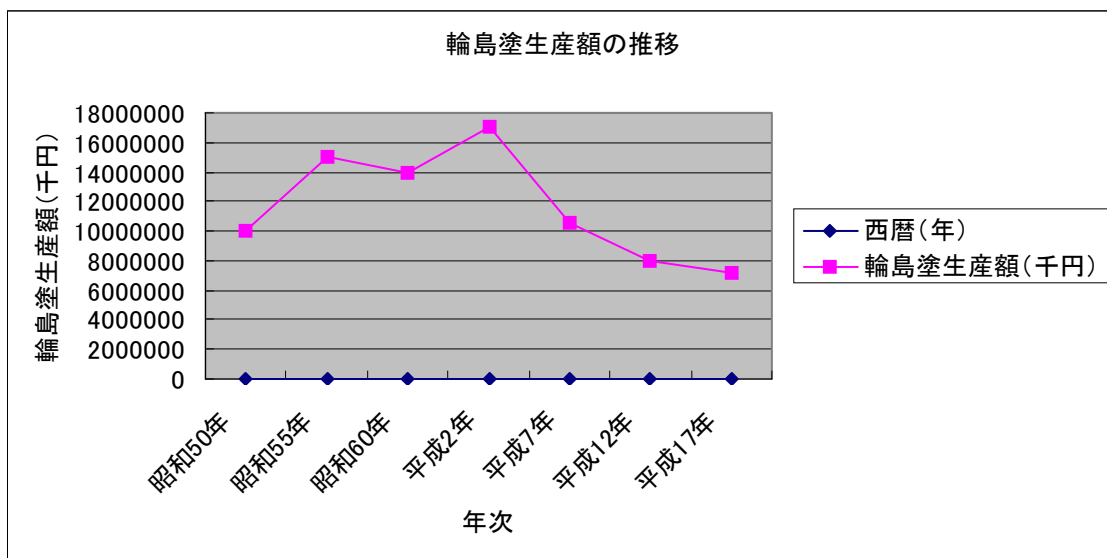
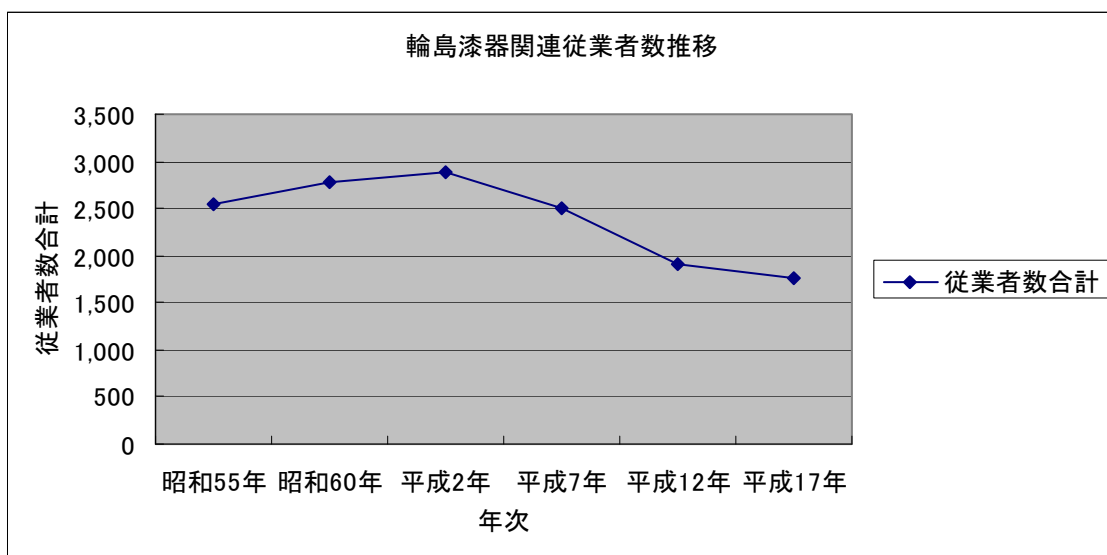


表 2. 輪島漆器関連従業者数推移



参考資料

輪島塗ガイドブック 輪島市産業経済部商工業課

輪島塗ガイドブック 輪島市漆器研究所

石川新情報書府 http://shofu.pref.ishikawa.jp/shofu/wajima/asu/asu_gen.html

輪島商工会議所 <http://www.wajimacci.or.jp/>

輪島塗のいま http://shofu.pref.ishikawa.jp/shofu/intro/HTML/H_S50205.html

輪島商工年鑑 輪島漆器商工業組合 2000 年

4. 輪島塗の製作分業の流れ

次に先にも少し触れた輪島塗の制作工程を詳しく見てみよう。以下では工程を図式化した図1にしたがって、各工程について説明していく。

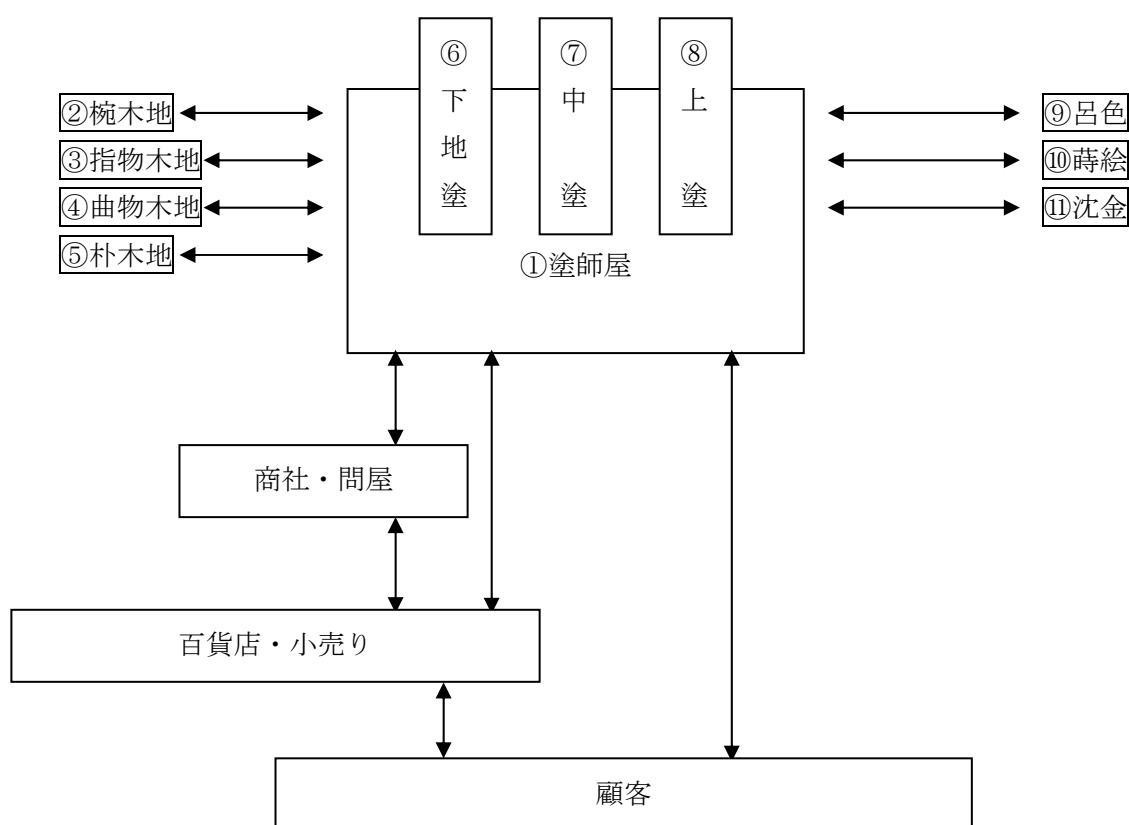


図1. 輪島塗製作分業の流れ

各工程の説明

- ① 塗師屋・・・漆器生産の工程のうち、製品の塗りを専門とする製造業と、仕上がった製品を売りさばく販売業を兼ねた家業をいう。家業によっては、塗りの

職人だけではなく、下地塗から呂色、蒔絵、沈金の加飾までの職人を抱えている場合もある。また、輪島の諸職に発注して注文の品をまとめるプロデューサーでもある。

② 椀木地・・・お椀や鉢などロクロで挽いて製作する木地



写真1. 電動ロクロで椀のかたちに削る



写真2. 細かく削るためにはノミを使う

③ 指物木地・・・お重や角盆など板を組み合わせる木地。

④ 曲物木地・・・丸盆や弁当箱など材料を水に浸し柔らかくして輪に曲げて乾燥する木地。

⑤ 朴木地・・・猫足など複雑な形を削り出す木地。



写真3. 猫足



写真4. さまざまな大きさのかんな

⑥ 下地塗



写真5. 漆と地の粉などを混ぜ合わせるため、やや粘性のある下塗り漆を塗っている様子

- ⑥－1. 刻苧^{こくそ}・・・切彫(木地の継ぎ目、割れなど補修の必要な箇所を小刀で削ること)をした箇所へ、木粉と糊漆を混ぜた刻苧漆を詰め、たいらにして傷を補修する。
- ⑥－2. 木地固め・・・全体に生漆^{きうるし}を染みこませ、木地を固める。
- ⑥－3. 木地磨き・・・粗いサンドペーパーで木地を磨き、次に塗る漆の接着を良くする。
- ⑥－4. 布着せ・・・椀の縁や高台など薄く壊れやすい箇所に、糊漆で布を貼り補強する。
布は麻布や粗い木綿布を使う。
- ⑥－5. 着せ物削り・・・布着せした布の縁や重なった箇所を削り、滑らかにする。
- ⑥－6. 惣身付け・・・布着せと木地の境に惣身漆をヘラで塗り、たいらにする。
- ⑥－7. 惣身磨き・・・粗いサンドペーパーを使い、全体を磨く。
- ⑥－8. 一辺地付・・・一辺地漆を、ひとつの面ごとに何回かに分けて、ヘラを使って全体に塗る。一辺地漆とは、珪藻土を蒸し焼きし、砕いてふるい分けた「輪島地の粉^{ちのこ}」と生漆と米糊を混ぜたものである。地の粉は粗い粉より一辺地粉・二辺地粉・三辺地粉と呼び、輪島塗が丈夫な理由のひとつである。
- ⑥－9. 空研ぎ・・・粗い砥石を使い、全体を空研ぎする。
- ⑥－10. 二辺地付・・・二辺地漆を一辺地と同じように全体に塗る。
- ⑥－11. 二辺地研ぎ・・・砥石や粗いサンドペーパーを使い軽く磨く。

⑥－12. 三辺地付・・・三辺地漆を二辺地と同じように全体に塗る。

⑥－13. 三辺地研ぎ・・・砥石や粗いサンドペーパーを使い軽く磨く。

⑥－14. めすり・・・水練り砥の粉と生漆を混ぜた錆漆を薄く塗る。

⑥－15. 地研ぎ・・・全体を砥石で水研ぎする。



写真6. 水研ぎの様子

⑦中塗り・・・全体に中塗漆を刷毛で塗った後、湿らせた塗師風呂に入れて乾かす。



写真7. 中塗り漆を塗る様子

⑦－1. 中塗り研ぎ・・・青砥石または木炭で水研ぎする。

⑦－2. 小中塗り・・・全体に中塗り漆を丁寧に刷毛で塗る。小中塗は、湿らせた塗師風呂に入れて乾かす。

⑦－3. 小中塗り研ぎ・・・全体を丁寧に青砥石または駿河炭で水研ぎする。

⑦－４．拭き上げ・・・上塗を美しく仕上げるために、手で触った跡や汚れを丁寧に拭き取る。

⑧上塗・・・上塗漆を、内側と外側の二回に分けて、刷毛目やホコリを付けないように丁寧に刷毛で塗る。上塗は漆が垂れないように回転風呂に入れて乾かす。



写真 8．上塗り漆を塗る様子



写真 9．乾燥用の回転風呂

⑨呂色・・・上塗をさらにたいらに研ぎ、磨き上げてツヤをあげる。最後は人の手のひらや指先で磨き上げる。

⑩蒔絵・・・筆に漆をつけて絵を描き、金粉・銀粉などを蒔付ける。乾燥後金銀粉をはたき落とすと、筆で描いた漆の部分にのみ金銀粉が残る。

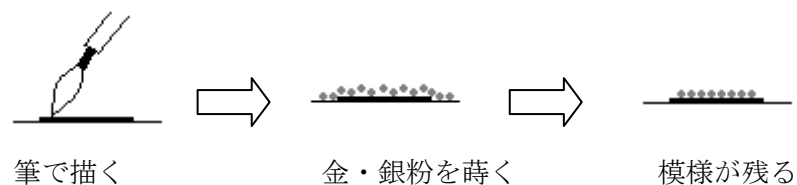
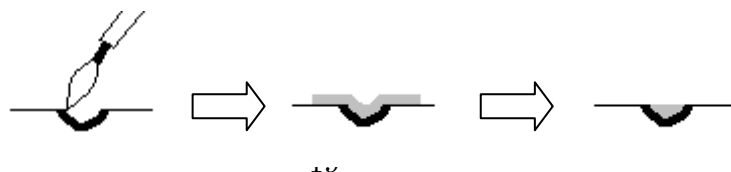


図 2．蒔絵の説明

⑪沈金・・・ノミで線や点を彫りながら絵を描き、薄く漆を塗って紙で拭き取り、金箔や金粉を彫ったところに入れる。漆が乾いた後で、余分な金を紙で拭き取ると、金色の模様があらわれる。



ノミで彫ったところへ
漆を塗り込む

金箔を貼る

余分な箔を拭き取る

図 3. 沈金の説明

参考資料

輪島塗ガイドブック 輪島市産業経済部商業課 2000 年

輪島塗工程見本解説 石川県漆芸美術館

輪島塗を生んだ輪島の町 輪島漆器商工業組合 1998 年

第2節 輪島塗食器の使用状況の変遷とその背景

野水裕紀子

1. はじめに

輪島市は、全国的にも著名な漆器の生産地である。私は、日常的に漆器に触れる機会を持ったことがなかった。だから輪島市が全国最大の漆器の産地だと聞いたことはあっても、輪島塗を実際に見たことも使ったこともなかった。なんとなく、輪島塗は輪島の人々が日常的に使う漆器といった想像をしていた。

しかし、実際に輪島に行ってみると、輪島塗の値段が高いことに驚いた。パンフレットやインターネットで調べたところ輪島塗は使い心地がよく、修理を繰り返せば半永久的に使うことができると書かれている。しかし、例えば小さなぐい飲み一つで8千円近くするような高価な品を、地元の人たちは日常的に購入し使用するのだろうか、という疑問を持った。

この調査では、輪島塗の食器に焦点を当て、輪島市のなかでも輪島塗の販売店が集中している河井町に居住している人たちが、輪島塗をどのように使用してきたのかについて、年代ごとに調べた。また、現在、日常的にどれくらいの頻度で輪島塗の食器が使われているかについても調査をおこなった。さらに、輪島塗の制作に関わる職人がいる家庭とない家庭とで輪島塗の食器の使用状況や頻度を比較してみた。以上のような調査の結果をまとめて、この報告では、伝統工芸である輪島塗が河井町の人たちの日常生活において果たしてきた役割や意味がどのように変化してきたかを、具体的に明らかにしたい。

2. 調査地概況

輪島市の中心に位置する河井町（図1）には、多くの観光客がやってくる朝市（第4章参照）があり、また、古くから輪島塗の職人の作業場や販売に携わる塗師屋^{ぬしや}¹が集まっている。河井町内を歩いていると、「塗師屋」、「上塗り^{うわぬり}」、「漆器販売店」といった看板がいたる所に掲げてあり、輪島塗の^{きじ}木地を削る電動ロクロの音が聞こえてくこともある。表1を見ればわかるように、輪島市の中で人口からみた職人の作業場の数が相対的に最も多いのは鳳至町^{ふげし}で、続いて河井町である。その一方、塗師屋と漆器販売店の数は、鳳至町よりも河井町の方が多い。¹：本章はじめの、「輪島塗の概況」参照。



図 1. 輪島の中の河井町の位置

表 1. 地域別にみた人口と輪島塗職人作業所数

地区名	人口（人）	輪島塗職人の 作業所数
<small>かわい</small> 河井	4,455	176
<small>ふげし</small> 鳳至	2,915	159
<small>こうのす</small> 鵜巣	1,715	24
<small>かわらだ</small> 河原田	2,182	30
<small>おおや</small> 大屋	6,056	71
<small>みい</small> 三井	2,302	7
<small>なじみ</small> 南志見	1,236	9
<small>せいほ</small> 西保	742	0
<small>まちの</small> 町野	3,351	5

輪島市ホームページ・『2000 年輪島商工名鑑』より作成

3. 輪島塗食器の使用状況の変遷

まず、河井町の住民たちは、どのような場面で輪島塗を利用してきたのか、また、利用の仕方は時代の移りかわりとともにどのように変化してきたか、について述べたい。河井町の 20 代から 70 代の男女 23 名を対象に、10 歳前後の年齢だった頃にどんな食器を使っていたのか尋ね、その結果を表 2 にまとめた。つまり、表 2 の「年代」は、回答者が 10 歳前後であった年代ということである。

聞き取りの中で挙げた輪島塗としては、主に、雑煮椀、重箱、茶たく²、盆、膳³、とそ器⁴、汁椀、箸などがあった。ここで、これらの輪島塗を、食器の用途別に四種類に分けた。具体的には、雑煮椀や重箱などを、「正月用の食器」、茶たくや盆などを「来客用の食器」、膳やとそ器などを「結婚式・葬式用の食器」、そして汁椀や箸などを「日常的に使う食器」とした。さらに、時代の移り変わりに伴った輪島塗の使用状況の変化をよりはっきり見るために、用途別の輪島塗食器の使用者を、1950～1960 年代と、1970～1980 年代とでそれぞれひとまとめにして、表 3 に示した。

² 湯飲みをのせてだす、小さな受け皿。

³ 飯椀や汁椀など 5 種類ほどの食器と、食器をのせ、収納するための台がセットになっている、主に会食の時に用いる食器（大塚民俗学会、1994）。

⁴ 祝い酒をつぐ際に用いる器。

表 2. 輪島塗食器の年代別使用状況

回答者が 10歳前 後だった ときの年 代	性別・ 現 在 の 年 齢 (歳)	輪島塗の食器（用途別）			
		正月用の食器	来客用の食器	結婚式・葬式 用の食器	日常的に使う 食器
1950 年代	女性・58	重箱	菓子皿、盆	なし	汁椀、箸
	男性・58	重箱	なし	膳、お銚子、杯	なし
	女性・58	重箱	盆、茶たく	膳	なし
	男性・52	なし	なし	なし	なし
	男性・67	なし	なし	膳	汁椀
	女性・54	なし	盆、茶たく	盆、杯	汁椀、箸
1960 年代	女性・49	重箱	なし	なし	なし
	女性・47	なし	なし	なし	なし
	女性・45	なし	なし	仏具の皿	箸
	男性・45	なし	菓子皿、茶たく	膳	箸
	男性・46	重箱	なし	なし	汁椀、箸、盆
	男性・46	重箱	なし	なし	汁椀、箸
	女性・42	重箱、雑煮椀	なし	膳	なし

	男性・41	重箱	菓子皿、盆	なし	汁碗、箸
	男性・48	重箱、とそ器、 雑煮碗	なし	なし	汁碗
1970 年代	女性・38	重箱	なし	なし	箸
	女性・39	とそ器	なし	神棚に供物を 供える皿	なし
	男性・30	雑煮碗	なし	なし	汁碗、箸
1980 年代	女性・27	重箱	盆	なし	なし
	女性・34	重箱	なし	なし	なし
	男性・34	なし	なし	なし	汁碗
	女性・34	重箱	なし	なし	汁碗、箸
	女性・30 代	なし	なし	なし	なし

表 3. 輪島塗の食器の使用者数の変化

食器の種類 年代	正月用の食器 (雑煮碗・重箱 など)	来客用の食器 (茶たく・盆な ど)	結婚式・葬式用 の食器 (膳・と そ器など)	日常的に使う食 器 (汁碗・箸な ど)
1950～60 (計 15 人)	9 / 15 (60%)	4 / 15 (27%)	7 / 15 (47%)	9 / 15 (60%)
1970～80 (計 8 人)	6 / 8 (75%)	1 / 8 (13%)	0 / 8 (0%)	4 / 8 (50%)

1950～60 年代と 1970～80 年代とで、調査対象の人数にばらつきがあるが、表 3 から、二つの注目すべき点を確認された。一点目は、1970 年ごろを境に、結婚式・葬式用の食器・来客用の食器の使用が、47%から 0%へと激減していることである。二点目は、正月用の食器の使用だけが、60%から 75%というふうに、他の用途に比べて相対的に減少していないことである。これらの点について考えれば、河井町の住民にとっての輪島塗製品が持つ役割と意味の変化を明らかにできるのではないだろうか。次に、結婚式・葬式用の食器・来客用の食器の使用が減った理由について仮説を述べる。「バブルの頃は（輪島塗製品を）

作れば売れた。今は、輪島塗は、余裕のある人の嗜好品みたいになってる」(50代男性)という言葉からわかるように、1970年ごろから、バブルがはじけた影響で輪島塗の売り上げが低迷し始めた。また、結婚式や葬式が家庭で行われなくなったことによって、膳やとそ器を使用する機会が減った。その結果、昔は誰もが所有し利用していた膳やとそ器も、今は、使わずにしまっている人が多いのではないか。これに対して、正月用の食器の使用が、他の用途に比べて相対的に減少していない理由についての仮説としては、正月におせちなどの特別な料理を食べる風習はすたれていないからではないかと考えた。これらの仮説をもとに、まずは、輪島塗の膳やとそ器をどのようにして利用していたのかを聞いた。すると、仮設と反して、1950～60年代で結婚式や葬式用の輪島塗の食器を所有していたのは、職人がいる家庭にほぼ限定されていた(表4-a)。結婚式や葬式で使う輪島塗の使用人と所有者は、必ずしも一致していなかったのである。その理由は次のように考えられる。まず、結婚式や葬式で使う膳となると、数十人分を用意しなければならなかった。さらに、祝い事には黒の漆器、葬式には朱塗りの漆器というふうに、場面によって使われるべき漆器の色が決まっていた。このようなわけで、同じ膳でも、結婚式と葬式用の最低2種類をそろえなければならず、その費用は並大抵のものではなかったことが容易に想定される。したがって、「職人やそれ関係の人がいるうち」(40代女性)や「でかい蔵がある裕福なうち」(50代男性)でない限り、正月や葬式の会食ができるような数の輪島塗の膳をそろえることは難しかったのである。続いて、1970年以降の、結婚式と葬式用の輪島塗の利用状況について述べる。表4-bから、1970年以降は、家に職人がいる・いないに関係なく、膳などが使われなくなっていることがわかる。その理由として、冠婚葬祭の際に本家に親戚が大勢集まって一緒に手料理を作り、共に食事をする機会が減少したことが考えられる。河井町の住民からも、「最近みんな、仕出し屋に料理を頼むね。今の仕出し屋はほとんどプラスチックばかり使ってる」(40代男性)、「今は、冠婚葬祭は家の外でやる。地域住民同士のつながりもない。だから膳やお重は必要ない。セレモニーホールにまかせたら、お金はかかるけど楽やしな」(50代男性)、「私が子供の頃には、結婚式のときに婚礼のお菓子を輪島塗のお重に入れて持っていった。それから、厄年の集まりのときは、お重に餅を入れて配った。最近、結婚式の出席者に配るお菓子はホテルが用意するから、輪島塗は関係ない。」(40代女性)、「うちの子どもにも使い方を教えようと思いつつ、もう嫁に行ってしまった。本人が手入れの仕方を知らないもの(輪島塗の重箱など)を、嫁入り道具に持たせることはできなかった」(50代女性)、「50・60年前には、輪島には葬儀屋なんてなかった。家で葬式をやる時には手伝いに来た若い女性に、60・70(代)の女性が輪島塗の洗いか・拭きか・料理の盛りか・しまいかを、手を取って教えていた」(50代男性)という言葉聞くことができた。

表4. 職人がいる家庭と職人がいない家庭の、輪島塗の使用者数の比較

a. 1950～1960年代

食器の種類 家庭状況	正月用の食器 (雑煮椀・重箱など) (人)	来客用の食器 (茶たく・盆など) (人)	結婚式・葬式用の食器 (重箱・とそ器など) (人)	日常的に使う汁椀・箸など (人)
職人がいる家庭 (人)	6 / 10	3 / 10	6 / 10	7 / 10
職人がいない家庭 (人)	3 / 5	1 / 5	1 / 5	2 / 5

b. 1970～1980 年代

食器の種類 家庭状況	正月用の食器 (雑煮椀・重箱など) (人)	来客用の食器 (茶たく・盆など) (人)	結婚式・葬式用の食器 (重箱・とそ器など) (人)	日常的に使う汁椀・箸など (人)
職人がいる家庭 (人)	3 / 3	1 / 3	0 / 3	1 / 3
職人がいない家庭 (人)	3 / 5	0 / 5	0 / 5	3 / 5

ここでもう一度、膳を始めとする、フォーマルで高価な輪島塗を取り巻く環境の変化をまとめてみる。冠婚葬祭が一般家庭で行われていた 1970 年ごろまでは、河井町の中で比較的裕福な者だけが輪島塗食器を所有していて、必要に応じて貸し出すか、または、近隣の町民が少しずつ金を出し合って共同購入した輪島塗食器を、近隣の世帯全体の共有財産として使う、というのが、膳やとそ器の使われ方だった。このように、共有財産として使う輪島塗を購入する組織は、「椀講」や「膳講」と呼ばれていた。「講」はある目的を達成するために作られる集団である。「椀講」や「膳講」は、椀や膳を共有するが、物や労働力を共有する組織としての講には、他にも「布団講」や「牛馬講」などが、かつての日本でみられた（大塚民俗学会、1994）。輪島では、この「椀講」や「膳講」の存在が、高価な輪島塗を手に入れることができない人でも、「儀礼用の食器」と「日常用の食器」とを使い分けることを可能にしていたと言える（大塚民俗学会、1994）。つまり、一般家庭に人が大勢集まって会食をする結婚式や葬式は、輪島塗が使われるとともに、その扱い方が上の世代から下の世代へと伝えられる大切な場だった。ところが、1970 年頃を境に、結婚式や葬式が行われる場が家庭からホテルや斎場へと移り変わった。そのため、結婚式・葬式用の輪島塗の食器が急激に使われなくなった。同様に、来客用の輪島塗食器、つまり茶たくや盆や菓子皿などが使われなくなってきていることも、冠婚葬祭の際の会食を始めとして、家に大勢の人が集まるフォーマルな場が減ってきていることに伴って起こった変化だと考

えられる。

次に、第二点目、なぜ正月用の雑煮椀や重箱を使うと答えた人が増えたのかについて考えてみる。大学進学や就職などのために、家族の構成員同士が1年の大半を遠く離れて暮らしているのは、今や日本中の多くの地域で見られる現象である。それでも、正月だけは帰ってくる人が多い。そんな状況下で、現在の河井町においてもまた、正月は、ふだん離れている家族や親族とのつながりを再確認し、強化する特別な日として位置づけられるようになっている。これに加えて、職人と塗師屋の町、河井町で育ったものとして、輪島塗食器をできるだけ多用することで輪島塗を守り続けていきたいという気持ちを、河井町の多くの人が抱いている。よって、河井町の人たちにとって、おせちを食べる時に輪島塗の重箱や雑煮椀を使うことは、漆器の産地輪島で生まれ育った者としての地元意識を再確認するという大切な意味を持っている。そのため、正月用の特別な輪島塗食器の使用は減っていないと考えられる。

4. 子どもたちと輪島塗

4-1. 職人の子どもと輪島塗

今回の調査中に話を聞いた職人の多くから、小さい頃から家で働く親や祖父の姿を見ているうちに自分もやってみたいと思うようになったのが、職人を志すようになったきっかけだということを聞いた。では、河井町に住んでいて親が職人である現代の子どもたちは、親や祖父母が職人として仕事をこなす姿を見る機会をどのくらい持っているのだろうか。

ほとんどの職人は、仕事場と自宅を兼用している。したがって、居間や客間に面した作業スペースで仕事をこなす父親や祖父の姿を、職人がいる家庭に生まれ育った子供たちは日常的に目にする。「自分が（手が届かないところに置いてある、のみや筆などの）道具を取ってくれるように自分の子どもに頼むから（大体の作業工程を子どもが自然と）覚えて、今ではこっちが何も言わなくても（次の作業で使うのみや筆などを）さっと渡してくれることもある」（50代男性）という語りからわかるように、家庭内手工業である輪島塗は、職人を親に持つ子どもたちと非常に近い距離にあることがわかる。

では、職人がいる家庭に生まれ育った子供たちは、普段、どのような種類の輪島塗を使って食事をしているのだろうか。このことについて、4人を対象に聞き取りを行った。

表5 河井町の子どもたちの輪島塗食器使用状況

対象 性別・年齢	日常的に使う食器で、輪島塗のもの	日常使う食器で、輪島塗以外のもの / 材質
女・10	なし	飯椀 / 陶器 汁椀・雑煮椀 / プラスチック おかず皿 / 陶器・ガラス
男・15	飯椀・汁椀	飯椀・おかず皿 / 陶器 箸 / プラスチック
女・13	箸	すべての皿 / 陶器・ガラス・プラスチック・木
女・10	汁椀・マグカップ	飯椀 / 陶器 おかず皿 / 陶器・ガラス・木

この表から、今の子どもたちがどのような輪島塗食器を使っているかは、1970～1980年代の大人たちの状況と比べて大差ないということが読み取れる（表1）。

4-2. 学校教育と輪島塗

続いて、河井町では学校教育の一環として輪島塗がどのようなかたちで取り上げられているのかを述べていこうと思う。輪島市内には鳳至小舢倉島分校を除いて、小学校が9校ある。そのうち河井小学校の学区には、輪島塗の職人が76世帯暮らしている。河井小学校の学区は、輪島市の各小学校学区の中でも、職人の作業場の数が一番多い。実際の作業場数としては、河井小学区には176箇所、鳳至小学区には159箇所、大家小学区には70箇所、残りの小学校の学区にはそれぞれ10～20箇所ほどである（広報わじま 2005年3月号、『2000年輪島商工名鑑』）。

表3・4が示しているように、特別な日の輪島塗として正月のお重くらいしか使われなくなりつつある傾向の中、河井小学校では、輪島の伝統工芸を見直す取り組みを積極的に行っている。ここからは、河井小学校の教育活動のなかで、輪島塗がどのように取り上げられているかを述べていこうと思う。まずは、総合学習の時間について紹介する。社会科の授業で地場産業について習うのが4年時であるため、4年生になると、週3回ある総合学習の時間に輪島塗について調べる活動が始まる。昨年度は9月～1月にかけて、1コマ45分の授業で30回分行われた。平成17年度の活動内容は次のようだった。まず、輪島塗の歴史や製造工程について、教師から簡単な説明を受け、作業をしている職人をスケッチする。その後、事前に生徒からの質問をファックスで送っておいた輪島塗販売店を見学し、販売員から質問に回答してもらう。このように輪島塗の製造・販売に関する基礎知識に触れたのち、教師が設定した「輪島塗の将来について」というテーマに沿って、各自でさらに調べる。生徒たちが調べる方法は、漆芸美術館の学芸員、漆芸研修所教員から話を

聞く、職人の家を直接訪ねてインタビューをする、などがある。調べた結果は新聞形式でまとめ、年度末まで学校の廊下に張り出されたのち、生徒に返却された。次に、給食で輪島塗を使用している様子について紹介する。学校給食での輪島塗の使用は、平成8年から、輪島市内の全小中学校で始まった（漆ニュース http://www.wajima.or.jp/tokusan/urusi_news.html）。河井小学校では年に数回、輪島塗の汁椀と箸で給食を食べる。この輪島塗給食の日には、普通教室ではなく配膳室という教室で食べる。ただし、河井小学校の先生方と生徒たちの話では、市から配られた椀の数に限りがあり、配膳室も大人数を収容できる広さではないため、給食で輪島塗を使うのは生徒一人当たり年に2,3回程度という頻度になるようだ。さらに、河井小学校では昭和57年から卒業制作として「蒔絵沈金パネル」を作成している。作品は、6年の12月ごろから、蒔絵・沈金職人の指導のもとで作られる。作品の大きさは年によって違うが、平均すると200㎡ほど（『河井小学校卒業制作写真館漆の輪』）。実際に校舎内を歩いて、作品が飾られている場所を確かめてみると、1階に5作品、2階に12作品が展示されていた。いずれも階段の踊り場、集会室、校長室など、生徒や来客者が頻繁に行き来する場所を中心に飾ってあった。作品の位置もそれほど高くないため、背が低い低学年の子どもでも間近で作品を眺めることができる配慮がなされているようだった。教頭先生の話によると、小学校内に飾りきれない残りの作品は、能登空港など石川県内外の大勢の人の目に触れる場所に飾ってあるようだ。ここで河井小学校の蒔絵沈金パネルの写真を数点、次に載せる。



写真. 廊下の踊り場にある蒔絵沈金パネル（左）と校長室の蒔絵沈金パネル（右）

次に、河井小学校の6年生31人を対象に、汁椀と飯椀に焦点を絞った使用状況をさらに詳しく聞いた。その結果が下の表5である。日常的に使われる輪島塗食器のうち代表的なものとしては、汁椀と箸が挙げられることが表2・3からわかる。しかし、箸に関しては、輪島塗か、それ以外の漆塗り製品やプラスチック樹脂製品なのかを子どもたち自身で

判断するのは難しいと考えられる。そのため、生徒に箸の材質を問うことは割愛した。

表 6. 河井小学校の生徒の飯椀・汁椀使用状況

食器 \ 材質	輪島塗		陶器		その他・不明	
	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
飯椀	4 / 31	12.9	21 / 31	67.7	6 / 31	19.4
汁椀	11 / 31	35.5	10 / 31	32.3	10 / 31	32.3

上の表から、約半数の子どもが、輪島塗の汁椀を日常的に使っていることがわかった。また、表 5 と合わせて見たところ、親が職人だからといって、輪島塗食器の使用頻度が飛びぬけて高いとか、親が職人ではない子どもたちが使ったことがないような珍しい輪島塗食器を使っているといった例は確認されなかった。表 6 と表 3 を合わせて考えてみると、輪島塗の汁椀は、1950 年代から現代まで、河井町の幅広い世代の人たちに使われていると言えることができる。

5. 輪島塗の展望

河井町に住む人たちの間で、輪島塗食器の使用頻度には、年齢によって若干の違いがあるようだ。30～50 代の人とは他の年齢層の人ほど輪島塗食器を使わず、むしろプラスチックや陶器でできた食器を多用する傾向がある。30～50 代の人たち、特に女性の多くは家事や仕事で忙しく、食事の準備と後片付けに割ける時間があまり多くない。したがって、機能性や食事にかかる時間の短縮などの面から、輪島塗よりも傷つきにくく、電子レンジや食器洗い機に耐えられる陶器製の食器を好むようだ。例えば 49 歳の女性は、「漆器は電子レンジにかけられないから、少し不便に感じることもある」と話していた。これに対して 60～70 代の人たちは「特別な日には特別な手料理を食べる」(50 代男性)という意識が比較的強く、日常的にも正月などの特別な日にも、輪島塗を多く使う傾向にある。このことは、聞き取りをした河井小学校の生徒で輪島塗の膳を使ったことがあると子どもたちの全員が、それを祖父母の家に正月かお盆に行った時にしか使った経験がないと答えたことからもうかがえる。

輪島塗食器を所有する比較的裕福な職人が、必要に応じて他の人に貸し出すか、または、村人が少しずつ金を出し合って共同購入した輪島塗食器を、地域の共有財産として皆で使っていたというのが、結婚式や葬式で使われる輪島塗を取り巻く状況だった。今日の河井町では、椀講や膳講といった食器を貸し出すための組織はほぼ消滅し、冠婚葬祭の際に共同し、「共有財産」の輪島塗食器を使って会食するという地域社会の連帯が河井町から失われつつある中で、フォーマルな輪島塗の食器の扱い方を教える場と、それを実際に使う場

の双方が減りつつある。同時に、冠婚葬祭がとり行われる場が家庭からホテルや斎場へと移ってきている。これらのことから、輪島塗の膳を使う人はこれからますます減っていくだろう。しかし、箸や汁椀など家庭内の日常の食事で使用される食器については、今後も輪島塗製品が使われ続けていくと予想される。地域社会のルールに沿った儀礼的な共同使用から、家族の中での日常的で自由な使用というふうに、輪島塗が使われる状況が移り変わるにつれて、これからは、以前は輪島塗で作られなかったドンブリやマグカップなど、地域社会の中での伝統的な使用方法にとらわれず、個人が自由に使うことができる新しい輪島塗食器が、近隣の繋がりが薄れ自律性が高くなった家族に浸透していく可能性がある。

7. 謝辞

職人や塗師屋や漆器店を経営されている方々をはじめ、工房長屋の職員、漆芸美術館の学芸員、輪島市役所の職員、河井小学校の先生方と6年生など、多くの方々が親切に接してくださったお陰で、今回の調査を進めることができた。お世話になった輪島の人たちに、心からお礼を申し上げたい。

参考資料

- ・ 漆ニュース http://www.wajima.or.jp/tokusan/urusi_news.html
- ・ 輪島市ホームページ <http://www.city.wajima.ishikawa.jp/simin/index.htm>
- ・ 広報わじま 2005年3月号
- ・ 『河井小学校卒業制作写真館漆の輪』河井小学校PTA役員会編集・発行、2002年
- ・ 『2000年輪島商工名鑑』輪島商工会議所発行
- ・ 『日本民俗学事典』大塚民俗学会編 弘文堂、1994年

第3節 輪島塗における徒弟制度と後継者問題

渡 辺 佳 央 里

1. はじめに

輪島塗は輪島の伝統工芸品として全国的に有名である。私は、昔から現在まで絶えることなく続いている伝統工芸品に強い関心があったので、輪島塗を作っている人々について調査を行うことにした。

調査を始めてまもなく、輪島塗の世界では、現在でも、職人のところに弟子入りするいわゆる徒弟制度が残っていることを知った。また、徒弟関係は、仕事の中だけにとどまらず、日常生活にも深く関わっていることもわかってきた。しかし、その一方で、弟子入りする若者の数が減っているという問題も生じていることもわかった。

この報告では、まず、徒弟制度が近年どのように変化をしてきたのか、また、日常生活における職人と弟子の関わりがどのようなものかについて明らかにする。次に、輪島塗産業の緊急の課題とも言える後継者問題への対策について、石川県や輪島市の取り組みを見ていきたいと思う。

2. 職人になる過程と後継者の現状

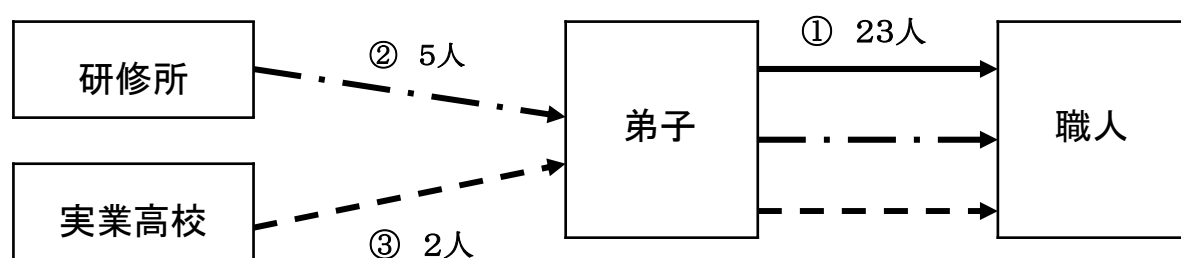


図1. 職人になる過程

図1は、実習中に聞きとりを行った30人の職人が、どのような過程を経て職人になったのかについて示したものである。

図1の①は、養成機関などを経ずに弟子入りして、修業後に職人になる人が23人ということである。②は、輪島市に設立されており、漆芸を学ぶことができる養成機関である石川県立輪島漆芸技術研修所を卒業後、弟子入りして、後に職人になる過程である。この過程を経て職人になった人は5人であった。③は、石川県立輪島実業高等学校という漆芸を学ぶことができるコースを設けている高校を卒業後、弟子入りして、後に職人になる過程である。この過程を経て職人になった人は2人であった。

図1から、輪島に設立されている漆芸について学ぶことができる学校に入ってから弟子入りする人よりも、すぐに弟子入りして職人になる人がもっとも多いことが分かる。

では、聞きとり調査を行った結果、もっとも多かった①の過程について現状をみていく。聞き取り調査を行っている時に印象深かったことは、20代、30代の人に出会うことが少

ないということだった。漆器組合の人の話によると、現在、弟子入りしたいという若者がいても、受け入れる親方が少ないということである。それには経済的な事情が深く関わっている。

1980年代後半から1990年代前半にかけてはバブル経済で、高級漆器である輪島塗が飛ぶように売れた。しかし、バブル崩壊後、高級品は売れなくなり、輪島塗もその打撃を受けた。仕事量が減り、弟子にやらせる仕事も減った。「仕事量と比較してみても、現状で大丈夫。若い人は必要ない。」と言う人もいる。また、仕事量が減ることで、親方の収入も減ることになる。そこに弟子をとった場合、弟子への給料が親方にとって、大きな痛手となるのである。給料については、昭和50年代頃から労働基準局が、弟子に仕事をさせることを雇用と考え、賃金を支払うように取り締まるようになった。現在の石川県の最低賃金は時給649円である。ある木地職の弟子に話を聞いたところ、現在の日給は5,200円であった。親方によっては、弟子に教えてやっているのだから、給料は必要ないということで、最低賃金以下の給料しか与えない場合もある。また、弟子は賃金に見合う技術がないため、雇わないという職人もいる。景気が良いときは、弟子を雇っても投資ができるが、不景気ではそれも不可能なのである。

また、「中途半端に辞めていくかもしれない若者を雇うことはできない。」と、現代の若者に対して、否定的な意見も聞かれた。現代の若者は金沢や首都圏に就職や進学する人が増えている。これは、輪島塗という収入の安定性がない地味な仕事に魅力を感じていない若者が増えているということである。若者の価値観、考え方の変化も後継者が減少している理由である。

経済的な事情や、若者の価値観の変化以外にも理由がある。それは、道具の減少という事情である。研ぎの工程で使用する研ぎ石がなくなっていることや、蒔絵に使用する筆は“ねじ筆”といって、ねずみの毛を使っているのだが、そのねずみが絶滅しそうなため、筆が作れないということである。現在蒔絵の筆は1本、4万円から5万円するという。今の職人は、すでに自分の道具を持っているが、今後職人になろうとする場合、道具に多額のお金をかけなければならず、親方も弟子に道具の投資をしなければならなくなる。道具がないと仕事ができないため、道具の減少は、新しい職人の減少につながってくる。

現在、弟子として親方のもとで修業している人の数は、正確には把握されていないが、漆器組合の人の話によると、およそ10人から20人くらいということだ。

弟子となる若者は減りつつあるが、現在でも職人になるために修業する場合、親方と弟子との間には“徒弟制度”が存在する。これから、その“徒弟制度”について詳しく見ていく。

3. 徒弟制度

輪島塗の世界では、徒弟制度のもとで親方と弟子という関係を組み、技術を伝承していく。親方と弟子は本当の家族、親子のような関係であるという。よってその関係は、仕事を離れた日常生活においても切れることはない。このような関係や、徒弟制度のもとで

技術を伝えるやり方は、昔から現在に至るまで変わることはなかった。しかし、細かく調査していくと、徒弟制度において、内側の詳しい内容が徐々に変化していることが分かった。これから、徒弟制度の変化について、仕事内と仕事外の両方の面から詳しく示していきたいと思う。

3-1. 仕事内での関係

昔は親方の家に住み込みで生活し、修業していた。現在、住み込みで技術を教わっている人はいない。いつ頃まで住み込みという形が残っていたかは、正確ではないが、35 年ほど前が最後だったのではないかということだ。

住み込みで修業する場合は、輪島塗の技術を教わるだけではなく、親方の家のトイレ掃除、風呂掃除、子守りやお遣いまでしなければならなかった。いわゆる雑用の方が多かったという。これらの雑用も仕事のひとつと考えられていたのだ。現在は住み込みではなく、トイレ掃除や風呂掃除、子守りなどをさせられることもないが、仕事場で立場が一番下の者は、仕事が始まる前に、他の人よりも早く来て、仕事道具の準備や仕事場の掃除をしなければならない。

技術の教わり方については、聞き取り調査を行っている限り、昔と今で大差はないと感じた。1 年目の人にはこの仕事、というような決まった仕事はなく、弟子の技術に応じて親方が仕事を与えていく。手取り足取り詳しく教えてもらうのではなく、親方や兄弟子たちの作業を見て覚えていく。親方が「これやっつけ」と言った仕事を見様見真似で実践する。したがって失敗するのは当たり前で、その失敗したものを親方や兄弟子が直しながら教えてくれて、どんどん仕事を覚え慣れていく。

「見て言われたことをやるから失敗は多い。でもそれで慣れていく。」(蒔絵師 50 代男性)

「見て盗む。あとは慣れるだけだよ。」(上塗師 40 代男性)

技術の伝承の仕方は昔も今も変わりなく、慣れることによって上達していくことが分かる。

技術を習得していく過程に昔と今では大きな変化はないが、親方の弟子に対しての接し方には違いが見られた。昔は親方の弟子への接し方はとても厳しかったという。実際に厳しい親方のもとで修業した人は生存されていないが、現在職人の親方が弟子だった時代は、厳しい親方が多かったという。その頃の話をお親方から聞いたことがあるという職人に話を聞くことができた。

「昔は親方が厳しく、失敗をした時、なにか口答えをした時には殴られることが頻繁にあったそうだ。戦前、戦中の親方はとても厳しかった。しかし、それは貧しい時代の、モノを大切にするという気持ちからくるものだった。戦後、裕福な時代になっていくと、道具や材料はすぐ買えるようになり、モノを大切にするという気持ちが薄れていった。」現在では弟子を殴るような親方は減り、厳しい人が減っていったそうだ。

また、休みや給料の面では、昔は連休や土日は関係なく、ずっと仕事で、たまに休みがあるくらいだった。夜なべも当然のようにあった。給料は盆と年末に 2 回もらえるだけだった。現在は連休もあり、週休 2 日制で、給料は毎月もらうことができる。親方と弟子と

いう関係ではあるが、雇用者と労働者という関係が強く見られるようになってきたと思う。

表 1. 仕事内での関係

	昔	今
雑用	トイレ・風呂掃除 子守り、お遣い	仕事場の準備・掃除
指導法	親方が弟子の技術にあった仕事を与える 弟子は見えて覚えて慣れる	
休日	なし(親方次第)	土・日
給与	盆・年末のみ	毎月

3-2. 仕事外での関係

親方と弟子、弟子兄弟は血の繋がった家族のような繋がりを持ち、仕事をしている時間だけの付き合いではない。

昼の休憩時間は、どこの仕事場でも昼食はみんなで一緒に食べる。みんな自分で弁当を持ってくるが、親方の奥さんが、味噌汁やお茶を作ってお出してくれる場合が多い。現在は朝食、夕食は各自自分の家ですませるが、昔の住み込みの時代は、言うまでもなく、親方の家族や弟子兄弟たちと同じ釜の飯を食べた。

また、昔は季節ごとの余暇活動や、祭りが頻繁に行われていた。昔は休みが少なく、一日中座って作業しなければならないので、親方が頃合いを見はからって、飲み連れて行ってくれたりしたそう。また、景気が良かったため、余暇活動に使うことのできるお金にも余裕があったそう。

< 季節ごとの余暇活動 >

春：山菜採り、たけのこ堀、花見、5月8日の高州山登り

夏：海水浴、バーベキュー

秋：アブラメ釣り、きのこ採り

冬：忘年会、新年会

現在でもまだ行われている余暇活動は、花見、忘年会、新年会くらいで、ほとんどの行事はもう行われなくなっている。その理由は、経済的なものである。余暇活動の費用は親方が持つが、現在はそのような負担を負うことができるほど、余裕があるわけではない。しかし、親方や弟子兄弟と飲みに行くことは現在でもよくあることだそう。また、加飾の場合、スケッチをしに、職場の人全員で外に出かけて行くという職人の話も聞いた。余暇活動以外では、正月のあいさつ回りは昔から今まで変わることなく行われている。

冠婚葬祭においては、昔も今も、親方と弟子は強いつながりを持っている。結婚式には親方、弟子兄弟から祝儀が渡される。子供が産まれた時は祝いのお金をあげたり、子供に

服を贈ったりする。葬式の時、香典はもちろんのこと、席は遺族と同席だそうだ。席順は、年齢に関係なく、仕事場内で上の立場の者から順に座る。親方が亡くなった時は、弟子たちは付きっきりで葬式の世話をする。

このように、仕事から離れた場でも、親方、兄弟子との縦のつながり、同期同士の横のつながりが強いことがわかる。それはまるで本当の家族のようである。

表 2. 仕事外での関係

	昔	今
食事	住み込みのため、 朝・昼・夕一緒	昼食は一緒 親方の奥さんから、 味噌汁等の提供
余暇活動	季節に合わせて 多々	花見・忘新年会
結婚・出産	祝儀、ベビー服等の贈り物	
葬式	遺族と同席、葬式の世話	

3-3. 独立について

独立をする場合、昔も現在も変わらず親方の支えが大きく影響している。弟子が自分で独立を決めるよりも、親方が「そろそろ独立するか。」と後押しをする場合が多い。

独立する時は、親方が設備投資の面で協力し、親方の所に仕事を持ってくる塗師屋とのネットワークも紹介してくれる。そのため、独立後、まったく仕事がないということなくなるのである。また、親方のもとに来る塗師屋と仲良くなっておくと、独立した時、自分のもとに仕事を持ってくる。

しかし、木地・上塗りの工程に関しては独立が難しいと言われている。それは木地にはロクロが、上塗りには回転風呂といった設備に多額の費用がかかるからである。特に景気の悪い現代では、親方が弟子に投資することが難しい。その反面、加飾に関しては、自分の筆があれば独立できるため、独立して仕事をする人が多い。

独立という場面においても、仕事上のネットワークを作る基盤に親方の存在があるため、徒弟制度の重要性がうかがえる。

3-4. 年季明けについて

輪島塗の世界では、親方のもとで修業して晴れて一人前の職人になる時に、“年季明け”という儀式が行われる。一般的には弟子入りして4年後に年季が明ける。4年という期間は必ずしも決められてはいないが、4年以下で年季が明けることはない。4年、もしくは4年以上で、年季明けする時期を親方が決める。

年季明け式は、弟子が上座に座り、親方と杯を交わし、三三九度をする。この行為を“親

子固め”とも言って、親方との縁をより強くするものである。祝いの品として、男性には親方の家紋が入った紋付き袴一式が、女性には家紋が入った着物が親方から贈られる。現在では、袴ではなくスーツを贈る場合や、仕事道具一式、タンス、道具箱など、実用性のあるものを贈るようになってきているようだ。

現在では行われなくなったが、昔は年季明け式が終わった後、式会場から家までの道を、兄弟子を先頭に、以下年季明けした弟子、弟子兄弟が行列になって、伊勢音頭という祝いの歌を歌いながら練り歩いたようだ。こうして、町中に誰が、いつ、どこで年季明けをしたか知らせていたようだ。

式の規模についてはさまざまであるが、昔は料亭などで盛大に行われていた。式の費用も、すべて親方が出していた。また、式には弟子兄弟、親方と縁のある職人や塗師屋、両親、友人、恋人など多くの人が参加した。現在は費用の面で親方の負担が大きいため、小規模に行われることが多いようだ。

20年から30年ほど前には、合同年季明け式というものも行われていた。バブル経済の時期は、もっとも弟子が多く、同じ時期に年季明けする人が多数いた。輪島塗は工程ごとに組合が存在しているため、組合ごとに毎年年季明け式が行われ、その年に年季明けする人はみんな出席した。合同で行うことにより、一斉に年季明けすることができ、親方の経済的負担も減り、年季明けする人同士の横の繋がりも強くなった。また、業種によって収入にばらつきがあるが、合同で行うことによって、どの工程も均一な式を行うことができるという面があった。

年季明けは、職人になってからも重要な位置をとる。「どこの年季明けか」と聞かれ、親方の名前を言うと、その職人の仕事や信用が分かるようだ。年季明けしてから数年間は親方のもとで働くが、ずっと同じ仕事場で働くことはない。たいていは、数年したら違う親方の職場へ移る。それは、同じ工程であっても、人が違えば仕事の行い方が違うからである。例えば、布着せの仕方、漆の混ぜ方、絵の描き方など、仕事自体は同じであっても、職人によって、やり方や感性が異なる。さまざまな知識を得るためにも、最初と違う職人のもとへ移ることは重要なのである。しかし、違う職場へ行ったからといって、年季明けしたところの親方や弟子兄弟と縁が切れるわけではない。年季明けした仕事場の人との付き合いは一生続くのである。ここでも徒弟制度の強さをみることができた。

表3. 年季明けについて

	昔	今
祝い品	男性:紋付き袴一式 女性:着物	男性:スーツ 仕事道具、タンス等
式の規模	料亭等で盛大に 伊勢音頭を歌い、 町内を練り歩く	家・料理屋で小規模 に

3-5. 徒弟制度への思い

徒弟制度という関係のもとで輪島塗の技術を習得していった何人かの職人に、徒弟制度をどのように思うか尋ねてみた。

「親方は親であり、友達でもある。」(30代 女性)

「閉鎖的に思うが、そのおかげで輪島塗という伝統工芸が守られている。」(40代 男性)

「親子や親戚のようなもの。人間関係がわずらわしいと思う人には向かないが、毎日同じ人と同じ環境の中で仕事を行うことの大切さを感じる。」(50代 男性)

「昔は徒弟制度の中で、技術だけではなく、人生や親方の価値観などについても学んでいた。現在はだいぶ徒弟制度が薄れてきて技術指導ばかりだが、人と人との縁や繋がりは大切に守られている。」(40代 男性)

「他県や他国から来る人でも、やる気がある人には徒弟制度の中で輪島塗を勉強してもらい、技術を伝えたい。」(70代 男性)

話を聞いていて、徒弟制度のような人と人との濃密な関係をつくる制度が存在するからこそ、輪島塗という巧みな技術や、職人独自の個性というものが伝承され今まで残ることができたのだと感じた。

以上のような徒弟制度を後世に残していくには、弟子となる若者が必要である。弟子入りするきっかけを与える場でもあり、若手育成のために設置された養成機関は現在どのような役割を果たしているのか、次に見ていく。

4. 養成機関の現状

先に示した図1より、研修所や実業高校といった養成機関を卒業して弟子入りする人は少ないことが分かる。聞き取り調査を行った結果、研修所を卒業して弟子入りし、職人になる人は、20代から40代の間にみられた。研修所は昭和42年に創立された。当時は、すでに弟子入りして、技術を身につけている人のみ入学することができ、学校で作業をするため、学校側からお金がもらえるという仕組みであった。そのため、40代の方は弟子として修業しながら研修所へ行く、という形をとっていた。昭和60年には、漆芸に関する知識が全くない人でも入学できるようになったが、卒業後弟子入りし、職人になる人は少ない。現在研修所へ入学する人は多いが、その後、輪島塗の後継者として残る人が少ないため、後継者不足対策に研修所が貢献しているとは言い難い面がある。

私が実習調査を行った時に、研修所の生徒たちにアンケート調査を実施した。この結果を以下に紹介し、現在輪島漆器業界に残る若手が減少していることを示す。

平成18年度 特別研修課程アンケート調査より

男性4名 女性17名 計21名

表4. 年齢と性別

	20 代	30 代
男性	2 名	2 名
女性	13 名	4 名

表5. 出身地と性別

	男性	女性
輪島市	0 名	1 名
県内(輪島市以外)	0 名	2 名
県外	4 名	13 名
国外	0 名	1 名

表6. 卒業後の進路について

	男性	女性
就職	0 名	1 名
弟子入り	0 名	4 名
普通研修課程へ進学	0 名	4 名
作家活動	2 名	3 名
他の土地へ行く	1 名	2 名
未定	1 名	3 名

平成 18 年度 普通研修課程アンケート調査より

男性 13 名 女性 21 名 計 34 名、 内回答者男性 13 名 女性 19 名 計 32 名

表7. 年齢と性別

	20 代	30 代
男性	8 名	5 名
女性	17 名	2 名

表8. 出身地と性別

	男性	女性
輪島市	3 名	2 名
県内(輪島市以外)	1 名	1 名
県外	8 名	16 名
国外	1 名	0 名

表9. 卒業後の進路について

	男性	女性
実家の塗師屋へ	1 名	0 名
弟子入り	1 名	2 名
作家活動	6 名	7 名
他の土地へ行く	0 名	1 名
未定	5 名	9 名

表 1 から表 6 の結果から分かるように、研修所には他県出身の人が多く、卒業後は地元へ帰る人が多いという。また、弟子入りしたいという人も少数で、弟子入りしたいという思いがある人でも受け入れ側がないため、実際は難しいという。卒業後に多いのは、個展や展覧会のための、作家活動として輪島塗を続けていきたいという人が多い。

次に、輪島漆器商工業組合が平成 15 年度に卒業生を対象にアンケート調査を行った結

果を載せる（輪島漆器商工業協同組合 雇用管理実態調査報告書より）。

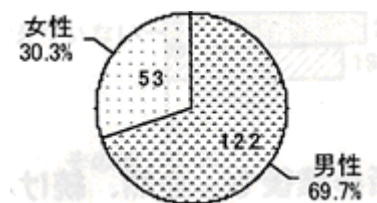


図2. 回答者性別

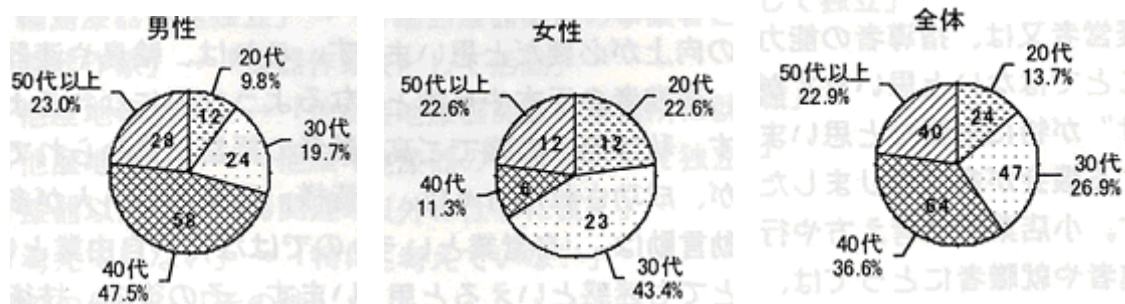


図3. 回答者年齢

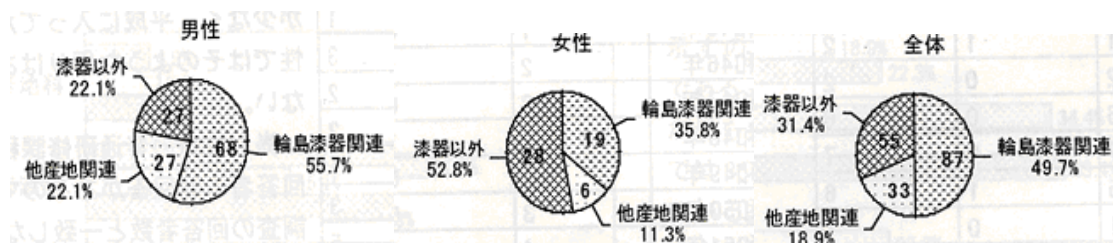
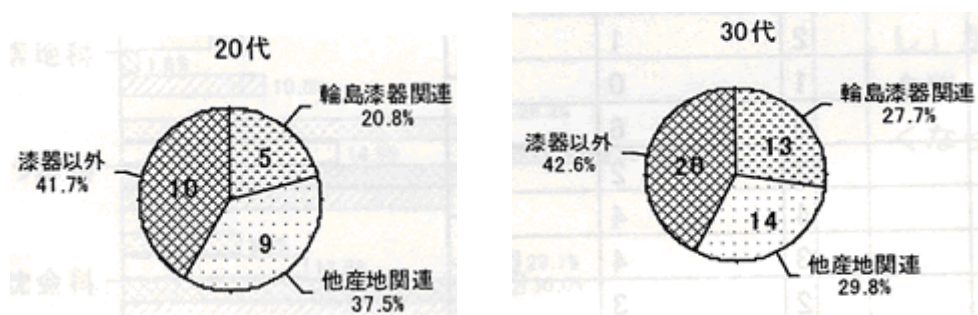


図4. 現在の仕事



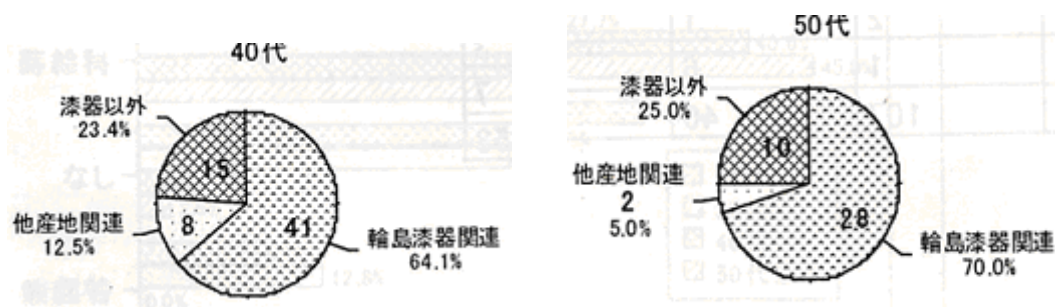


図5. 現在の仕事(回答者年齢別)

(輪島漆器商工業協同組合 雇用管理実態調査報告書より)

図4と図5の現在の仕事の結果を見ると、輪島漆器関連が全体のおよそ半分を占めているが、年齢別で見ると、それは30代から50代が大半を占め、20代は漆器以外の仕事に就く人が多い。この結果から、現在は研修所を卒業しても、輪島に残り漆器に関連する仕事に就く人が少ないことが分かる。

実業高校では、校長先生のお話を聞くことができた。実業高校を卒業して弟子入りする人は、現在ではいないそうだ。昨年は、漆芸関係のところに就職した人は一人、研修所に入学した人は3人ということだった。現在50代の人たちが実業高校を卒業する時は、ほとんどの卒業生が漆芸に携わる職に就くか、弟子入りしたということだ。

以上から、現在40代、50代の人々の時代は、養成機関を経た後は輪島塗に携わる人が多く、養成機関としての役割を果たしていたと言えるが、現状は深刻であり、ただ漆芸に関する知識を学ぶ場となっていることが分かる。今まで徒弟制度は、輪島塗を作る職人の中で重要な役割を担い生きてきたのだが、このまま弟子がいなくなることで、徒弟制度も一緒になくなっていくのだろうか。この危機に対して、行政はどのような動きをしているのかみていきたい。

5. 行政の取り組み

経済的な理由、時代の風潮による若者の価値観の変化などによって、後継者不足が懸念されている現在、輪島市や石川県はさまざまな取り組みを行っている。ここからは実際にどのような対策が行われているのかを紹介する。

5-1. 輪島市役所

平成12年度より、木地と塗りの工程において、弟子をとった親方には毎月5万円の“輪島塗技術後継者奨励金”を補助金として渡している。期間は最長で36ヶ月ということだ。

加飾の部門に関してはまだそのような取り組みはなされていないが、これは、木地と塗りは加飾に比べて後継者が不足していること、従事者の年齢が高いこと、収入の面を見ても加飾に比べると少ないといった理由のためである。この補助金の使い方は親方次第である。弟子の給料に使っても良いし、弟子への技術指導のために使っても良い。

しかし、どんな弟子でも、補助金をもらえる対象となるわけではない。対象は 40 歳以下で、漆芸に携わっていた期間が 2 年未満の人である。この制限を満たしていれば、親方が輪島漆器商工業協同組合や市へ申請する。その後、弟子に対して、プロフィールや、他の地域で学んでいた経歴があるかどうか、もしあったとしたら、他の地域へ戻ってしまう可能性があるか、輪島塗をずっと続けていく気があるか、なぜ輪島塗をやりたいのか、などを聞く面接を行い、組合や市が認めれば補助金を受けることができる。

市はこの他に、石川県立輪島漆芸技術研修所（後に詳しく説明）に対して、毎年 600 万円の支援をしている。

以上のように、輪島市は後継者育成に必要な資金の面で、大きく取り組みを行っていることが分かる。

5-2. 工房長屋

工房長屋は、輪島塗の展示販売や、木地作りから塗り、加飾までの各工房が集まり、観光客が身近に輪島塗を見て、触れることができる施設である。長屋には、さまざまな工房が集まっているが、その中の一つに“職人工房”というものがある。

職人工房は独立支援のための施設である。工房は家賃月 2 万円、2 年間の契約で借りることができる。ここには現在、弟子入りして年季が明けた後入居した人、研修所を卒業した後、弟子入りせずに入居した人など、4 人の職人が作業をしている。4 年目の人が 2 人、3 年目の人が 2 人である。2 年の契約ではあるが、新しく入居の希望者がいなかったため、継続して現在の職人たちが作業をしているのである。

ここで工房を借りるには、申込用紙に必要事項を書き、市の担当者が面接を行って入居が決まる。職人工房に入る場合、もっとも重要な条件は、10 時から 16 時までは作業を見に来た人たちに公開し、質問を受け付け、丁寧に応えてあげなくてはならないことである。また、通常の職場は土日が休みなのに対して、職人工房は水曜のみが休みということである。

仕事に関しては、同業者が長屋の方に仕事を持ってきたり、訪れた客から注文を受けたり、自分のネットワークの中で仕事を受けたりしている。これらの仕事を一人でこなしていくことで、将来自分の工房を構え独立する準備をしているのだ。

5-3. 石川県立輪島漆芸技術研修所

表10. 石川県立輪島漆芸技術研修所募集要項

	特別研修課程(2 ヶ年)	普通研修課程(3 ヶ年)
募集人員	専修科 10 人以内	<small>そ ち</small> 榛地科 5 人以内 <small>きゅうしつ</small> 髹漆科 5 人以内

		蒔絵科 5 人以内 沈金科 5 人以内
入学資格	高等学校を卒業した者 又は所長がこれと同等 程度の知識及び能力が あると認めた者。	中学校卒業以上の学力を有し、それぞ れ入学を希望する学科の基礎技術を習 得していると認められる者。 又は特別研修課程を卒業した者。 但し榛地科については髹漆の基礎技術 の基礎技術習得者を含むものとする。

(石川県立輪島漆芸技術研修所 2006 要覧より)

研修所は昭和 42 年に創立されたが、当時は普通研修課程のみであった。昭和 60 年に特別研修課程が新しく設置された。

普通課程に関しては文化庁の方から運営費が投資されるため、授業料がいらぬ。特別課程は、県が単独で運営しているため、教材費として年間 3 万円の授業料が必要となる。

特別課程では、一年間で漆について、木地以外のすべての作業について、広く浅く学ぶ。2 年目は^{そち}榛地・^{きゆうしつ}髹漆、^{まきえ}蒔絵、^{ちんきん}沈金の 3 つのコースに別れて、それぞれの技術を学ぶ。普通課程では、最初から 4 つの科のどれかに属し、勉強をする。研修所は輪島塗の技術を伝承する場ではなく、人間国宝の技術を伝承する場であり、輪島塗に限定するのではなく、漆芸・漆全般に関する技術を学ぶ場とされている。

特別課程を設置した理由については、県外の人や、輪島在住者が漆芸にまったく関わったことのない人へ開放し、輪島塗の後継者を育成するという目的もあった。しかし現実には、県外出身者は地元へ戻ったり、県内や輪島出身の生徒が少なかったり、弟子に入りたい人がいても、親方となってくれる職人がいなかったりと、漆芸に関する知識を学ぶ場としては最適だが、輪島塗の後継者対策としての機能は果たせていないという事実がある。研修所へ入学する人の多くは、“輪島塗”を学びに来るというよりも、“漆芸”や“人間国宝の技術”を学びに来るという意識が強いことが分かる。

研修所では木地から加飾までの知識をトータルで勉強することができるため、1 人で木地から作り始める技術を身に付けることができる。しかし、分業制をとる輪島塗の世界でもっとも重要となるネットワーク作りや、営業能力というものは身に付けることができない。また、「学校という機関で、生徒全員が同じ先生に同じように習うため、技術がマニュアル化され、オリジナリティが欠けてしまう。」といった職人の意見もあった。



写真1. 研修所での作業風景

5-4. 石川県立輪島実業高等学校

実業高校は昭和 45 年に創立された。現在、地域産業科に漆芸コースが存在する。この漆芸コースは以前インテリア科デザインコースであったが、平成 17 年度に学科改編が実施された。

地域産業科には生産工学コースと漆芸コースが存在し、1 年生では両方のコースの基礎を勉強する。2 年生からは、どちらかのコースで専門的に学ぶ。平成 18 年度は、1 年生 39 名、2 年生 12 名、3 年生 9 名が在籍している。2,3 年生の実技指導では、地元の職人を講師として呼び、授業を行っている。3 年生では卒業制作として木地からすべて一人で作品作りを行う。また、3 年生は、小学校や公民館で子供たちに沈金教室を行うなどの活動をしている。

漆芸コースも若手育成を目的として設置されたが、最近では、卒業して弟子に入る人は少なく、輪島塗に関連した就職をする人も少ない。漆芸とまったく関係のないところへ就職する人や、専門学校などへ進学する人が多い。現在 40 代から 50 代の人が卒業する頃は、ほとんどの卒業生が輪島で漆器に携わる仕事に就いたり、職人のもとへ弟子入りしたりしたそうだ。

研修所と同様に、漆に関する知識や技術を学ぶことはできるが、今後を担う後継者として残る若者がいないというのが現実である。



写真2. 教室の様子

以上、行政の取り組みを見てきたが、なかなか効果が表れていないようだ。また、一つ

心配なことは、若手を育てるために工房長屋や養成機関はあるが、徒弟制度を守ろうとする取り組みは、市役所の奨励金のみであることだ。養成機関は漆芸に携わり、弟子入りしたいと思うきっかけをつくる場であってほしいが、実際生徒は県外である地元へ帰っていく傾向にある。人間関係が希薄になりつつある今、人間同士の強い絆やネットワークをつくる役割を担っている徒弟制度の中で輪島塗を保存していく取り組みが必要とされると感じた。

6. まとめと考察

輪島塗において、昔の住み込みのような厳しい徒弟制度は薄れてきたが、縦のつながり、横のつながりをもっとも大切に考える徒弟制度は現在でも残っている。親方や弟子兄弟とは、本当の家族のような関係であり、そのつながりは仕事場にとどまらず、仕事の時間以外でも続いている。「親方とは一生のつながり」という言葉をどの職人さんも言っていた。また、どの職人さんに話を聞いていても、よく他の職人さんの話をしてくれた。良い面も悪い面もさまざまな情報を話してくれた。技術を伝えるだけではなく、人とのつながりが強い世界で、その中から技術について、それぞれの職人の個性について、人生や価値観についても考えていくことができるのだろう。

バブルが崩壊して、高級漆器である輪島塗の需要が減少したため、仕事量が減り、弟子への給料を払う余裕もなく、仕事自体も、今いる人数、または自分一人で行うことができるような量になった。組合の方には、「輪島塗の世界に弟子入りしたい。」という問い合わせがくるらしいが、現実には弟子をとってくれる親方がいないため、実状を詳しく説明して、研修所を紹介することしかできないようだ。しかし、後継者不足が進んでいるのは、経済的な理由がすべてではないと思う。現在の若者にとって、毎日座って黙々と作業を行い、自分の育った場所で伝統工芸を守りながら一生を過ごすということに価値観を持つ人が少ないのだと思う。地元から外へ出ることや、大学へ進学することや、便利な生活を送ることなどに価値観を見いだしている若者が多いのだと思う。

市や県では後継者対策のためにさまざまな活動を行っているが、現実には、後継者は減る一方である。学校という場合は、どんな人に対してもオープンで、良い講師も揃っている。学びたいと思う人にとってはとても良い場である。しかし、技術がマニュアル化してしまう、営業能力やネットワーク作りといったものは学ぶことができない、などの問題もあることを知った。また、分業制が輪島塗の特徴であるが、学校ではトータルで教えるため、学校で学んだ人は個人ですべて制作することができる。将来的には、「輪島塗」というものは残るだろうが、一般に広まる商品としてではなく、展覧会用の作品や、輪島塗という芸術作品の作家たちが輪島塗を残していくのだと思う。「後継者は減っているが、輪島塗自体は今後も残っていくはずだ。」と、どの職人さんも話してくれたが、その意味が商品としてではなく、作品として作る作家たちによって残されていくということなのだと感じた。

個人で一つの作品を作ることで分業制もなくなり、徒弟制度というものもいつか消えてしまうのかと思うと、とても寂しく感じる。伝統工芸を、技術の面だけではなく、人と人

とのつながりの面も含めて後世に残していった欲しいと心から思う。

今回の調査では、組合の方を始め、多くの職人さんにお話を聞くことができた。組合の方には資料提供やメールでの質問の返答、職人さんの紹介など、多くの面でお世話になった。話を聞いた職人さんは、みんな作業の手を止め、熱心に語って下さった。この調査に関わって下さったすべての方に、心から感謝を述べたい。

参考文献・ホームページ

「在来工業地域論－輪島と井波の存続戦略」2004年 須山 聡 古今書院

工房長屋 <http://ringisland.jp/nagaya/>

石川新情報書府 http://shofu.pref.ishikawa.jp/shofu/wajima/n_nenki.html

石川県立輪島漆芸技術研修所 平成18年度要覧

石川県立輪島実業高等学校 平成18年度学校要覧

第3章 伝統行事

第1節 人口減少と高齢化による祭りの変化

ー石川県輪島市里町を含む周辺5地域の水無月祭りの現状、特に人口減少との関係からー

進 藤 至

1. はじめに

石川県輪島市里町で7月30、31日に行われている水無月祭りは、祇園祭りと同じ夏越(名越)の祭りである。この祭りは、一年のうち、1月から6月までの上半期にたまった罪やケガレを祓い、残りの期間を健やかに生活するために行われている。

この祭りの形式は、各地域から神輿とキリコを降ろし、海に運び、そこで神に対して祓いを行うものである。そして、神輿を翌日の本祭りまで、中学校のグラウンドに安置するという祭りである。

一般的に祭りとは、準備、本番、後片付けなどを通して、地域内に住む幅広い年齢層の人々の間に交流を持たせる行事である。祭りに関わることで、各世代内での交流も盛んになる。加えて、祖父母ほどの年齢の人との間に交流が生まれることで、小学生ほどの年齢の子供が、地域の歴史や現在と過去との生活の変化などを知る場にもなる。また、青壮年の人々にとっては、年長者がどのように地域を取りまとめているのかを知り、今後自分たちがどのようにして、地域の取りまとめていくかを学ぶよい機会にもなる。

このように、ある地域で行われる祭りは、人と人とのつながりを保つことや、次世代の地域を運営していく人々を育成するという重要な役割を担っているといえる。

現在、日本全国で人口が減少しているという話をよく聞く。今回調査対象とした石川県輪島市里町も同様の問題を抱えている地域だと言える。では、このような状況の下で、地域で行われている祭りが、人口減少や高齢化などによって、どのような影響を受けているのだろうか。水無月祭りの形式や祭りに関する習慣の変化と現状、そして人々の祭りに対する意識を対象として明らかにしていきたい。

2. 調査地の位置と自然

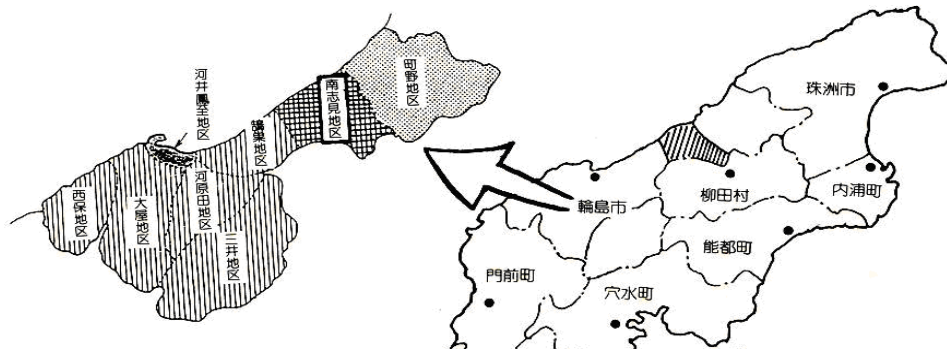


図 1.『輪島東部地域振興計画書(南志見編) みらくる』より作成

南志見地区は、輪島の市街地より国道 249 号線で東部へ 14 キロメートル行ったところに位置している。面積にして 27.16 平方キロメートルある。南志見川流域には、中心地である里町があり、南志見地区の目の前には日本海が広がっている。国道をさらに東へ行くと、曾々木、珠洲に向かい、南へ行くと金蔵、柳田、宇出津へ出る場所に位置し、内浦へ抜けるための入り口の役割を果たしている。このように南志見地区は、能登半島の内浦・外浦両方面への入り口の役割を果たしている。

1954 年(昭和 29 年)3 月 31 日付けで旧南志見村は、輪島町、西保村、大屋村、三井村、河原田村、鵜巣村と合併し、1956 年(昭和 31 年)には町野町を追加編入し、輪島市になり、その時から南志見村という村名は公では使われなくなった。また、平成 18 年には門前町との合併がなされ、2 月 1 日から新「輪島市」となっている。

現在の“南志見地区”は、白米・野田・名舟・尊利地・忍・小田屋・里・渋田・東印内・西院内・東山・小西山・大西山の 13 の町が集まったものをさしている。

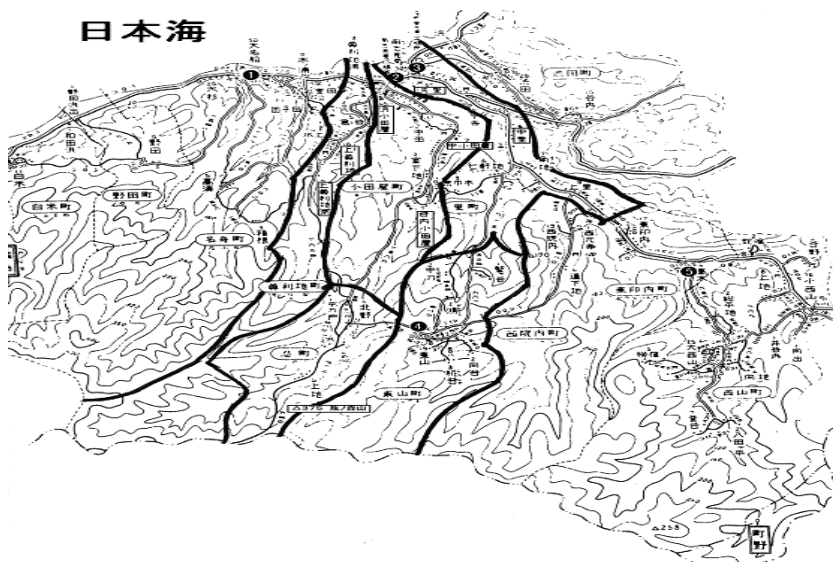


図 2.『南志見地区学制百年記念誌』より作成

上の図は、南志見地区全体の町の位置と、南志見地区内部の「組」の名称を載せたものである。水無月祭りの中心となる南志見地区にある“五か村”の「組」に関しては、四角で

くくって図に表示している。五か村については、後に説明したい。

「組」とは、現在では使用されていない名称で、町をさらに 2～3 地区に分けしている。

この名称は、現在の小・中学生の間ではほとんど知られていないもので、高校生より上の年代に通用する名称である。

2-1. 南志見の自然環境

南志見地区には、地域の中心を流れる南志見川をはじめ、尊利地川と渋田川の 3 本の河川が流れている。また、写真でもわかるように地区の周囲を山に囲まれている。地区で行



われている生業の大半が農業であり、田んぼや畑が多くある。

地区の中心となっている里町のすぐ近くには日本海が迫っている。このように、南志見地区では、山と海が身近にあるとあってよい。

3. 人口

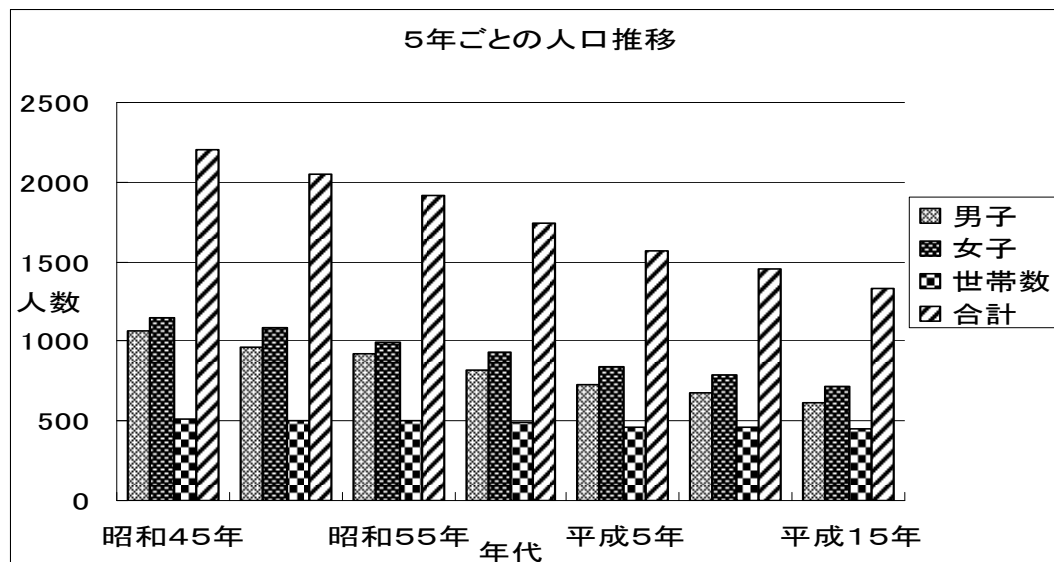


図3. (輪島市役所提供の出生年別人口より作成)

平成 18 年 6 月 1 日付けの輪島市の人口は、34,644 人で、南志見地区の人口は世帯数が 428 軒、人口は 1,243 人である。

図1からわかるように、1970 年(昭和 45 年)から 2005 年(平成 15 年)までの期間の人口

推移を5年おきにみていった結果、世帯数に大きな変化はないが、総人口は毎年減少傾向にあり、南志見地区全体でみると過疎化が進んでいるといえる。

3-1. 南志見地区五か村の人口

ここでは南志見地区13町のなかで、水無月祭りに関わる5町内である里町、小田屋町、尊利地町、東山町、忍町について、性別・年齢別人口を見て、現在の南志見地区、特に五か村の人口の現状を見ていきたい。“五か村”とは、上記の5町に対する、地区の人々の呼び方であり、以後5町ではなく、五か村に統一して表記していく。

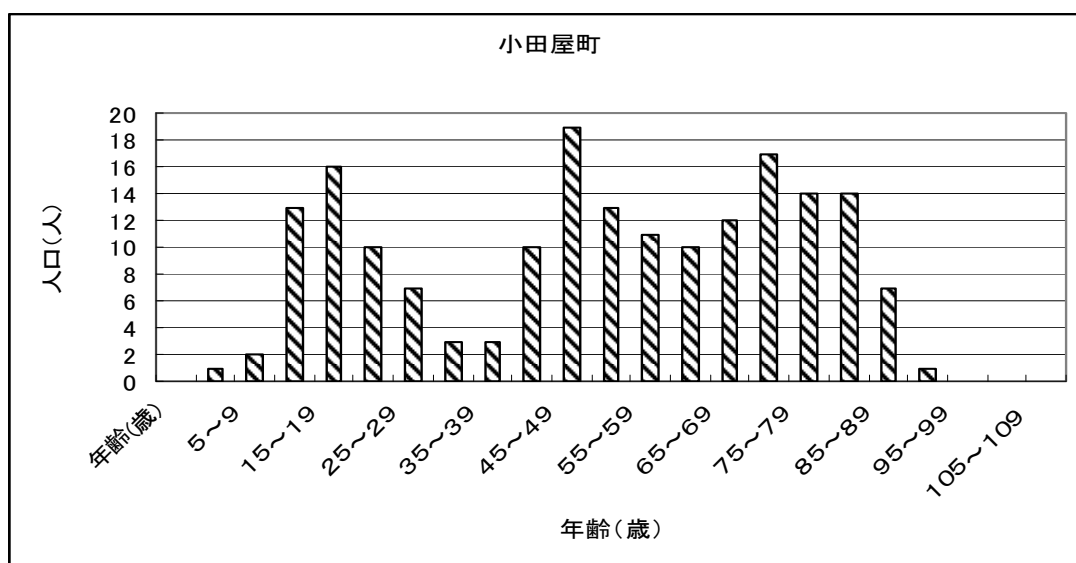


図4. (輪島市役所市民課調べ 年齢別人口集計表より作成)

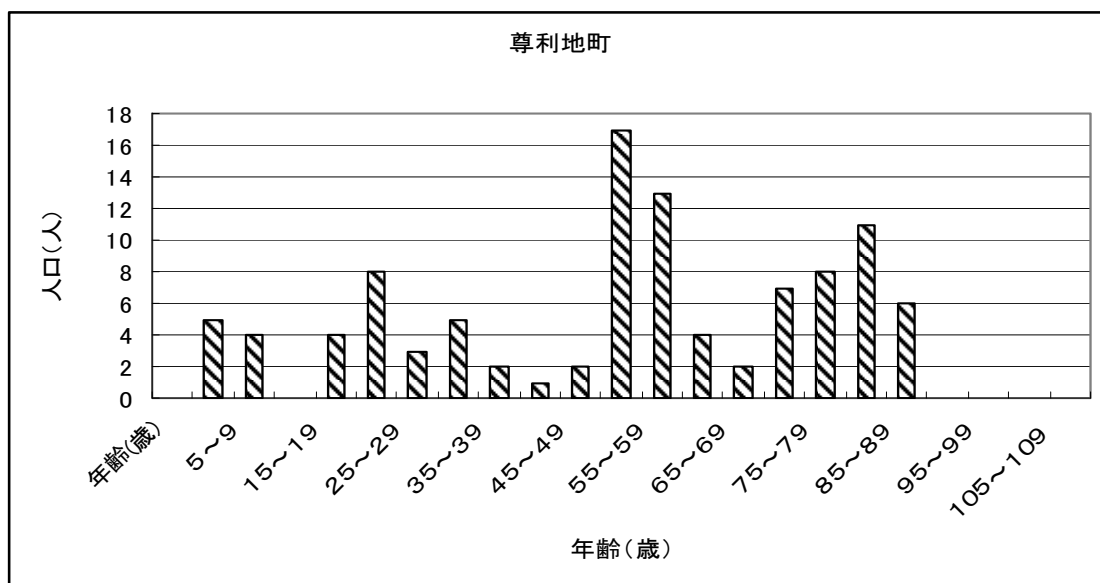


図5. (輪島市役所市民課調べ 年齢別人口集計表より作成)

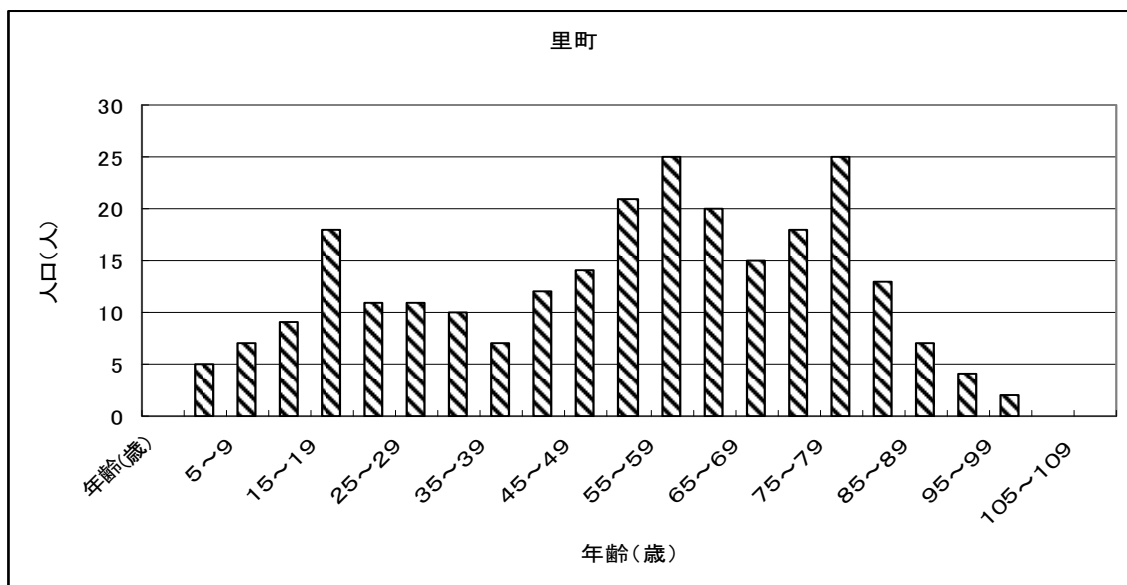


図 6. (輪島市役所市民課調べ 年齢別人口集計表より作成)

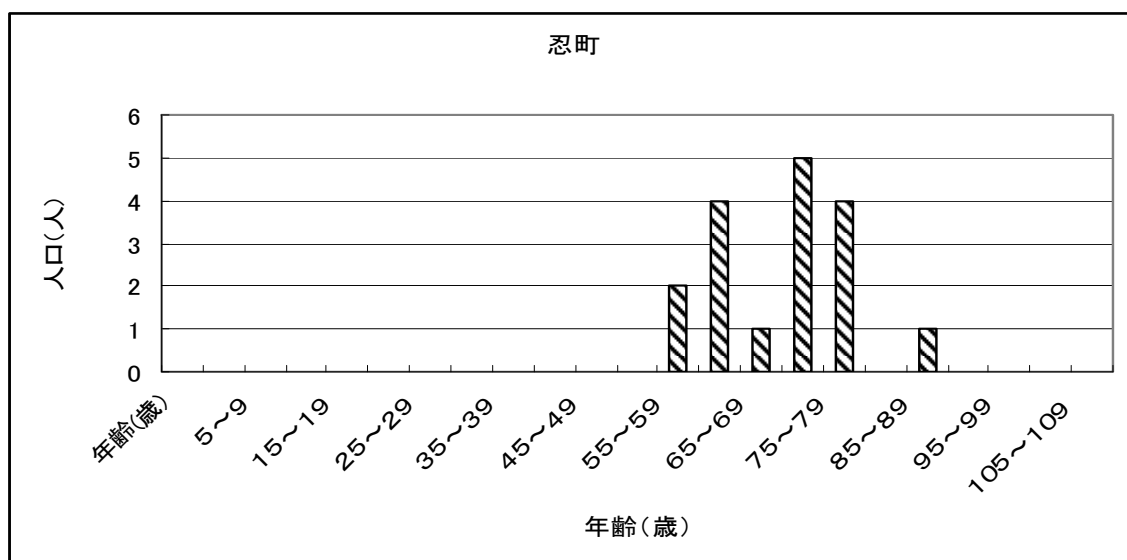


図 7. (輪島市役所市民課調べ 年齢別人口集計表より作成)

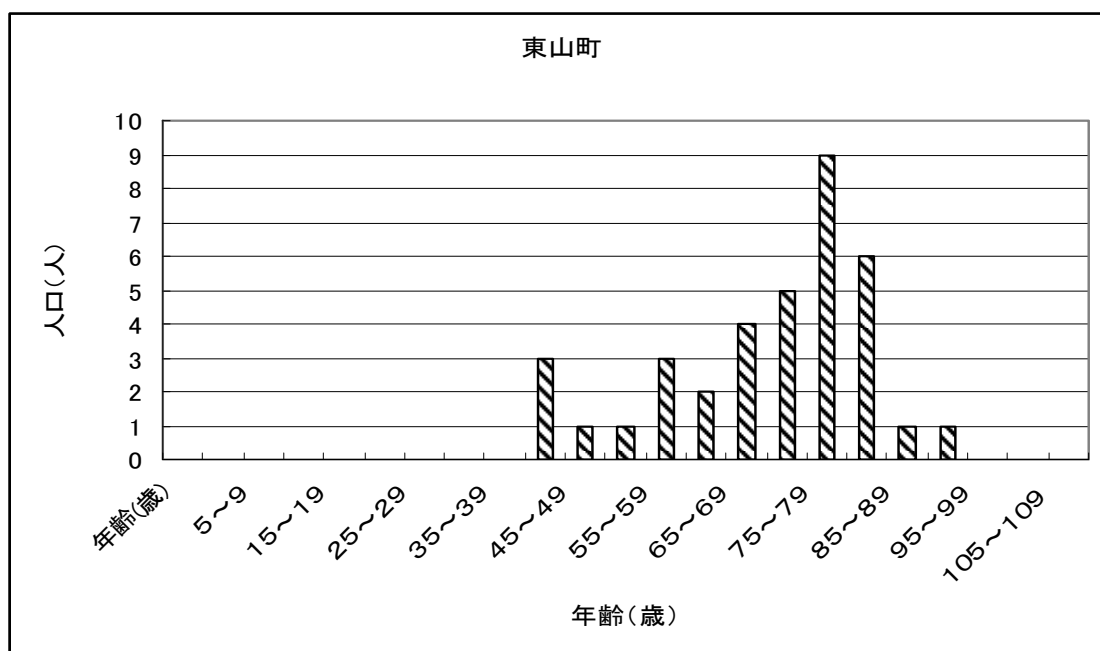


図 8. (輪島市役所市民課調べ 年齢別人口集計表より作成)

注)図 4～図 8 までの人口集計表は、国勢調査によって集計されたデータではなく、住民票によって得られた数値をもとに集計されたデータであり、実際の年齢別人口とは多少違いがあるかもしれない。

図 3～8 を見てわかることは、3 章の冒頭で述べているが、南志見地区全体で人口が減少していることである。また、五か村に絞って人口の推移を見ていくと、小田屋町では、0～10 歳まで、25～39 までの人口が他の年齢層に比べ減少している。

尊利地町では、0～20 歳までの人口が少なく、30 代～40 代後半までの人口も少なくなっている。

里町では、0～15 歳までの人口や、20 代前半～40 歳代前半までの人口が、他の年齢層に比べて減少している。

忍町では、人口統計によると、最も若い年代の人は 50 代後半であり、忍町全体の人口も 17 人しかおらず、五か村中最も過疎と高齢化が進んだ町であるといえる。

東山町も忍町とほとんどかわらない。最も若い年代は 40 代前半であり、東山町全体の人口は 36 人である。

このように、南志見地区全体から、五か村を対象に人口をみていくと、過疎化が進んでいるところがある。また、各町内を担うべき、20～50 歳代の人数も少ないことがみてとれる。

4. 水無月祭りについて

4-1. 水無月祭りの起源

水無月祭りが現在のように7月30、31日に行われるようになったのは、明治の改暦後であり、それ以前は陰暦6月の末に行われていた。陰暦6月は‘水無月’と呼ばれ、この時期に行っていたため、水無月祭りと呼ばれるようになった。

‘水無月’の‘無’という字は、「の」という字の当て字であり、6月は水の必要な時期、田んぼに水をはる時期、田んぼに水をたたえる時期というのが水無月の意味と考えられている。

4-2. 夏越(名越)の祓

陰暦6月の末に行われていた水無月祭りは、一年の折り返しの時期に行われる祭りとされていた。つまり、夏が終わって、新しい季節がはじまろうとする節目の時期であり、半年過ごすことで蓄積された身心のケガレを祓い清め、長寿を願う、みそぎ祓えの行事とされていた。一年の折り返しの時期に身心を浄化することによって、新たな活動力を得ることができると考えられていた。このような行事は水無月祓や夏越(名越)の祓と呼ばれる行事であり、形式は異なるが古くから日本固有の信仰にもとづくものであった。現在でも、全国に茅の輪くぐりという神事がのこっている。新年に祓ったケガレや罪が、知らず知らずのうち、再び蓄積してしまうため、一年の中間地点である6月に茅の輪をくぐることで、罪やけがれを払い、自分を再び清めることを目的とする神事である。水無月祭りも、茅の輪くぐりと同じ目的をもった神事だと考えられる。

南志見の水無月祭りの形式は、全国の住吉神社の根本社と考えられている、大阪住吉区にある住吉大社で陰暦では6月15日(現、7月20日)に行われた神輿洗いの神事の影響を受けたといわれている。現在の大阪住吉大社では、大阪南湾へ渡御し、潮水で神輿のお祓いをし、南港祭を行って住吉西公園で神輿が一泊し、翌日に帰社する。昔は人々も海に入り潮水を浴びる「住吉のオユ」という行事も行われていたようだ。このような事柄から南志見住吉神社で行われる水無月祭りは、大阪住吉大社の神事の影響を受けたと言えるだろう。

(小倉学, 1978. pp77)

4-3. 水無月祭りに参加する地域の範囲

南志見地区は、現在13町が集まって形成されている。水無月祭りは、この13町の中の里・小田屋・尊利地・忍・東山の五か村で行われている祭りである。しかし、実際には準備の段階で、この五か村以外の人も参加することがある。また、小学生のフレダイコや中学生主体の子供キリコには、五か村以外の出身者も参加している。このように、五か村で祭りの労働力を用意できた時代から、現代の過疎化による人口の減少により、五か村だけで労働力を用意するのが困難な時代になったことが、祭りに関わる人々の範囲を拡張させたと言える。

4-3-1. 東山町と水無月祭りの関係

水無月祭りは五か村の祭りであるが、東山町だけは祭りのさい、他の4町とは違う点がある。一つ目に、東山町の神輿は里町にある住吉神社に安置されている点である。里町の神輿は、^{かみさと}上里の八幡神社に安置されている。そのため、水無月祭りに東山町の人々が神輿を担いで住吉神社に集合する必要はないとされている。また、南志見地区の町では、水無月祭りのようにいくつかの町が集まって行われる祭りのほかに、各町内で行われる“小祭り”と呼ばれる年中行事が存在する。そのため、南志見地区では、水無月祭りで用いられる神輿のほかに、少し小さな神輿を持つ町がある。その一つが東山町である。もう一つ神輿を持っているなら、水無月祭りのときも、それを持ってくればいいのではないかという声もあった。しかし、水無月祭り本番になると、すでに本殿には5基の神輿が置かれているため、新たに神輿を加える余地はないのであるという。このような理由からも東山町は神輿を運ぶことがないのである。

二つ目に、キリコも運んでいない点である。明治前期までは、“ヨコジ”と呼ばれる道を通して、住吉神社にキリコを運んでいたそうだが、現在では行っていない(小倉学, 1978. pp31)。

また、実際に確認できなかったが、東山の区長の家には1基であるがキリコを保管しているそうだ。しかし一方では、東山町の人足数に関係なくキリコは出していない、という話も聞いた。東山町がキリコを出さない明確な理由をはっきりさせることはできなかったが、東山町の住民数や町の位置から考えて、おそらく、キリコを運ぶことが他の町内と比べて、労力がかかるためではないだろうか。後にふれるが、忍町でも現在ではキリコを出していない。これは、忍町の人口が著しく少なく、キリコを準備することが困難であるためである。また、神輿の移動に関しても、トラックの荷台に神輿をのせ、住吉神社に運ぶ方法が取られている。神輿とキリコでは、キリコの方が縦に長く、細長い。そのため、トラックにのせて運ぶ際にも神輿をのせて運ぶより破損する可能性が高いと思われる。よって、東山町でもキリコをトラックなどの移動手段にのせて住吉神社まで運ぶという選択をしなかったのだらうと思われる。

現在、南志見地区の中心地は海岸近くに位置する里町とされている。ではなぜ、その里町から離れた東山町だけが、住吉神社に自らの町内の神輿を安置することが可能なのだろうか。住吉神社の歴史からその答えを探してみたい。

住吉神社は以前、東山町と忍町の境界線にあたる^{かめのお}亀尾とよばれる場所に鎮座していたそうだ。現在の地図では標高374メートルの^{かめのもり}瓶ノ森山(図2参照)となっていて、東山町に属する場所となっている。

1898年(明治31年)に書かれた『加能宝鑑』下巻や、1911年(明治44年頃)に書かれた住吉神社の第26代神主の故中川直孝氏が書いた由緒調書では、この内容についてふれられている。また、由緒調書によると亀尾から現在の里町の住吉神社へ移動したのは鎌倉時代の承久年間(1219~1222年)とされている(小倉学, 1978. pp15-19)。

昔は、東山町の地域内にあった住吉神社が、どのような理由から現在の里町に移動した

詳しい理由はわからないが、現在、南志見地区全体の総社とされる住吉神社は、以前は東山町にあった。移動前は、南志見地区全体の総社ではなく、東山町だけの神社として存在したと思われる。その後の神社の移動にともない東山の神輿も住吉神社と共に移動し、現在、里町の住吉神社内に安置されるにいたった。ちなみに、里町の神輿は、上里にある八幡神社内にあり、こちらが里町の神輿として祭りに参加するのである。

このように、現在では里町に存在する住吉神社も、以前は東山に存在する神社であった。また、後にふれる水無月祭り宵祭りの際の、神輿・キリコの並び順からもわかるように、東山(住吉)の神輿だけがいつも真ん中に位置し、残り 4 町の神輿は 1 年ごとにローテーションする仕組みになっている。このことから、東山町は以前の住吉神社が存在した町として、他の 4 町とは少し違う扱いを受けていると言えるのではないだろうか。

5. 水無月祭りの概要

ここでは、水無月祭りがどのような祭りなのか、また、どのような準備が必要なのかについて簡単に説明したい。

5-1. 水無月祭りの流れ

水無月祭りとは、輪島市里町を含む南志見地区、全 13 町のうち、里町、小田屋町、尊利地町、忍町、東山町の“五か村”で行われる祭りのことである。旧暦の 6 月(水無月)に行われていたので、このような名称になったといわれている(小倉学, 1978. pp73)。

以前は 6 月に行われていたが、今では、7 月の 30、31 日の 2 日間にわたって、宵祭りと本祭りが行われている。30 日の宵祭りは、大体、夜 10 時 30 分頃に、里町にある住吉神社に、五か村の神輿とキリコが集合する。その後、神輿とキリコが列を組んで南志見海岸まで移動し、神輿はそのまま海岸へ、キリコは近くにある南志見中学校のグラウンドへと、それぞれ向かっていく。海岸では、あらかじめ用意されている柱松明に火がつけられ、その周囲を神輿がまわり、“ショウグリバ”と呼ばれる、ゴザをひいた場所に神輿を置く。その後、各神輿に同伴しているホコ持ちによって清められたホコを用いて、宮司たちによって神輿と地域の住民に対して祓いが行われ、残り半年の健康が祈られる。この一連の神事を“渚^{なぎさ}の神事^{しんじ}”と呼ぶ。

グラウンドでは、海岸で行われる神事の終了を待ち、神輿がグラウンドにきたら、キリコと神輿が列を組みグラウンドを 3 周する。その後、グラウンド中央にあらかじめ設置してある“お仮屋^{かりや}”に神輿を安置し、宵祭りは終了する。この神輿は、翌 31 日、本祭りの始まる午後 15 時まで、お仮屋番の人と共にグラウンドに安置される。

31 日の本祭りの日、住吉神社の宮司は午前 10 時から 1 人でお仮屋^{かりや}に向かい、祝詞^{のりと}をあげる。これを“お朝事^{あさじ}”と呼ぶ。お朝事に関して、決まった時間にお仮屋^{かりや}に向かうことはなく、今年は 10 時であった。

午後 1 5 時、狼煙^{のろし}があがり、祭りが始まる合図がされた。お仮屋では、フエとタイコの演奏が始まり、宮司の祝詞^{のりと}があげられる。お仮屋での神事が終わると神輿が海岸に移動し、

昨夜と同じように、ホコ持ちによってホコが清められ、そのホコを用いて、宮司によって神輿に祓いが行われる。その後、神輿がいったん住吉神社に帰還し、境内で子供による祭ばやしの奉納がされる。午後 16 時 30 頃には本祭りが終了し、神輿は各町内の神社に帰っていく。

水無月祭りの大まかな流れは以上のようなものである。詳しくはそれぞれの章でふれたい。

5-2. 水無月祭りの準備

水無月祭りの本番までに、まず、祭り相談という会が開かれ、今年の祭りについて、変更事項、昨年の祭りの反省が話し合われる。そこでの決定をもとにして、海岸の整備、柱松明の準備、グラウンドでのお仮屋の設置がされる。小田屋、尊利地町ではさらに、御旅所^{おたびしょ}(仮屋場)の設置もする。このほかに、“キリコをたてる”と呼ばれる、キリコの組み立て作業や、“バンバナギ”と呼ばれる、五か村の各町で行う神社やその周辺の掃除、旗、神輿の準備が、祭りの前にやっておく準備である。

ここでは、祭りの準備について簡単にふれていきたい。

5-2-1. 祭り相談

水無月祭りをを行う前に、運営にあたっての決定事項や変更事項についての確認が行われる。相談の会場は、里町にある住吉神社である。

5-2-2. 海岸の整備

南志見地域を流れる、南志見川河口付近は、年々海岸が減少している。そのため、柱松明を立てるために海岸を人工的に作り出す必要がある。今年は、7 月下旬に雨が続き、海岸が流されたため、重機を使って海岸を埋め戻す作業が行われた。

5-2-3. 柱松明

柱松明は、30 日の宵祭りに神輿が海岸へ着いたのを合図に点火される。点火された松明の周囲を神輿がまわり、渚の神事が始まる。

この松明を製作するには、バンバナギの際に、あらかじめ依頼してあった家からワラを譲ってもらう。このワラを使って、松明の燃焼部分を作る。

5-2-4. お仮屋の設置

南志見中学校のグラウンドは、海岸のすぐ近くにあり、ここに宵祭りの終盤から本祭りの開始まで、神輿を安置するお仮屋が設置される。

昔は木製の小屋を設置していたが、近年では天幕になっている。お仮屋の中にはゴザがひかれ、その前には、神輿を乗せる台が設置してある。お仮屋の周囲には、天幕を張るために木の杭が打ち込んである。

5-2-5. 御旅所^{おたびしょ}(仮屋場)の設置

31 日の本祭り終了後、小田屋町と尊利地町では、神社に神輿を帰還させる前に御旅所^{おたびしょ}と呼ばれる場所へ神輿を運び、そこでタイコと祝詞を奏上する。2 本の忌み竹^{いみたけ}をさし、その間にシメナワを結ぶ。これらは小田屋、尊利地ともにバンバナギの際に準備することになっている。しめ縄の前には、宮司が祝詞をあげる時に座るゴザを敷いておく。

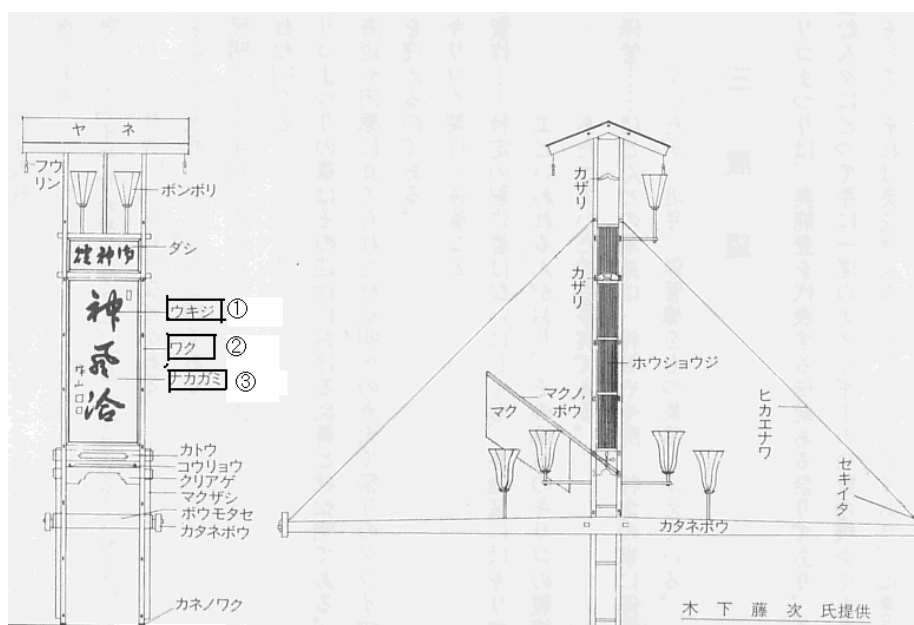
5-2-6. バンバナギ

“バンバナギ”とは、五か村で各自に行う祭りの準備のことで、各神社に町内の人々が集まって行われる。神社やその周辺の草刈や神輿の飾りつけ、シメナワをよったり、旗を立てたりするのが主な仕事である。

6-3. キリコの概説

ここではまず、キリコとはどのようなものなのかについてふれ、それからキリコの準備について簡単にふれていきたい。

6-3-1. キリコの起源と意義



9. キリコの図解

(小倉学, 1978.

pp43)

上記の図は、一般的なキリコの部位を紹介したものである。現在でもこの形から変化した部位はないそうだ。水無月祭りで使用されるキリコの場合、ロウソクが使用されるのが下の4つのボンボリである。上部にあるボンボリ内部にはバッテリーによって発光する豆電球が備え付けられている。現在では、下の4つのボンボリの部分に柵が設置され、下に板が敷いてあり、人が乗れるようになっている。祭りの本番になると、この部分に小学生が乗ってシャンギリ(カネ)を叩いている。小学生の人数は各組によって異なるが、だいたい3~4人は乗っていた。

“ワク”(図中②)とは“ナカガミ”(図中③)と呼ばれるちょうちんのような物がはめ込まれる場所のことである。“ナカガミ”はワクから外すと長方形の形をしたちょうちんのようなものであり、中に豆電球が入っている。また、下にある4つボンボリには、宵祭りの際、

海岸への渡御の前に行われるオタチの儀式のとき御神灯が移される。五か村で唯一全てのボンボリにロウソクを使用している尊利地町のキリコでは、ロウソク受けに椀が使用されていた。

キリコにはナカガミの部分に“ウキジ”(図中①)と呼ばれる漢字3文字が書かれている。昔は、このウキジと呼ばれる部分は、住吉神社の宮司などの手によって書かれることが多かったが、現在では書道家、表具屋やキリコ大工によって製作されるそう。ウキジの部分は、文字の周囲にマチをもたせて立体的にしている。そのため、近くで見ると文字が浮き出ているのがわかる。各組で所有するキリコにはそれぞれ異なったウキジが書いてある。このウキジはたいてい3文字の縁起の良いとされる言葉で構成され、ナカガミのはりかえなどの補修を行うさいに文字を変更することがある。しかし、多くのキリコが、補修の際も以前使用していたナカガミの文字を利用しているそう。

6-3-2. キリコの起源

キリコの明確な起源はわかっていないが、お祭りの際に行列の最前列の子供たちが持つ笹キリコが、現在のキリコの原型であると言われている。この笹キリコは4、5メートルの笹竹に小さな行灯をつけたものである。一人用の笹キリコが、数人用の竹キリコになり、やがて木製のものとなった。江戸時代中期以降になって、町民の経済的基盤も強くなり、地域に加勢する有力商家も現れてきた。経済的な支援が受けられることで、キリコに彫刻や金箔、漆塗りやその他の装飾を施すことが可能になった。

経済的な余裕ができたことで、各地区でキリコの大きさや装飾の華麗さを競うようになり、キリコはさらに巨大化し、技巧を凝らした作りとなっていった。しかし、大正・昭和になり各地域に電線が通り始め、キリコが通るときに背が高いと邪魔なので、キリコの小型化が進み、現在の形となった。

水無月祭りは、現在では30日の夜11時頃に南志見住吉神社に各地区の神輿やキリコが集まって行われる。昔は深夜1時を過ぎた頃におこなわれていたようだが、現在では子供も祭りに参加するなどの理由から時間が繰り上げられている。

(渋谷利雄, 藤平朝雄, 1999. pp50-68)

祭りが行われる時間帯が遅いことから、キリコには照明として神輿の灯り取りをする役割があると考えられる。キリコの原型が竹につけられた^{あんどん}行燈であったことから、キリコが灯りの役目を担っていることを物語っている。このほかに現地の人への調査を進めるなかで、“クモノスバライ”という言葉が聞かれた。これが第2のキリコの果たす役割である。“クモノスバライ”または“サキドモ”とは、神輿の先頭に行くキリコを指す言葉である。神輿が行く前にキリコが進むことで道を空けさせる、邪魔なモノを排除するなどの役目がある。また、神輿の後を進むキリコは、“アトドモ”もしくは“オサエ”などと呼ばれる。

6-3-3. “キリコをたてる”

キリコを準備するためには、まずキリコを組み立てる中心的人を決める必要がある。キリコを準備(組み立てる)することを“キリコをたてる”と呼び、キリコの準備を中心的

に行う人物がキリコのヤド(ヤドモト)となる。このキリコのヤドは、毎年選ばれる。

キリコは各町内の中で、さらに各組にわかれてたてられる。例えば、小田屋町では浜、中、谷地^{やち}という 3 集落に別れており、3 組が各自キリコをたてる。キリコのヤドは、キリコの準備から後片付けまでの責任を負うことになる。また、キリコにつく人足の用意もキリコのヤドがする仕事である。

7. 水無月祭りの準備

ここからは、すでに簡単にふれた水無月祭りの準備について、より詳しくふれていきたい。

7-1. 祭り相談

水無月祭りを行う際に事前に準備をしておく必要がある。このため“祭り相談”と呼ばれる会合の場が設けられている。祭り相談は住吉神社の社務所で行われ、各地区の氏子総代と区長、そのほかの祭りに関係ある立場の人々が参加する。

今年の祭り相談は7月17日に2時間ほど行われた。参加者は、住吉神社の宮司1人、五か村の区長5人、五か村の氏子総代8人である。ただし、氏子総代に関しては、里町から4人、残り4町からそれぞれ1人ずつの参加となっている。そのさい話し合われた内容は以下のとおりである。

- | | |
|----------------|-------------------|
| ① 今年の神輿・キリコの順位 | ④ 神渡し・宵祭り・本祭りの時間 |
| ② お仮屋・柱松明について | ⑤ 神輿・キリコの責任者について |
| ③ 松明の点火と消火について | ⑥ 花火打ち上げの寄付内訳について |

ここで、おおまかに①~⑥の項目についてふれたい。

まず、①についてである。神輿・キリコの並ぶ順番は4パターンある。そのため、毎年ローテーションしていき、5年で1周することになる。この並び順については、詳しくは10章で扱う、祭り全体の流れでふれたい。このように、毎年、並び方を決めるのではなく、4パターンあることから、毎年、祭りの前に各町内の神輿・キリコの並び方を確認しているのである。

②は、お仮屋・柱松明の設置についてである。両者は里町と小田屋町が毎年交代で設置している。例えば、今年は小田屋町がお仮屋・柱松明の設置当番であるので、来年の祭りでは里町がお仮屋・柱松明の設置当番となる。柱松明は、ワラを用意する必要があり、お仮屋も、竹やシメナワ、ちょうちんが必要であり、中に入っている電球を発光させるためのバッテリーの準備もしなくてはならない。このため、里、小田屋両町内への確認の意味をこめて、話し合いが行われている。

③の項目については、柱^{はしら}松明^{たいまつ}の点火および、綱の切断(詳細は9-1-⑤. を参照)と消火などの片付けについての連絡がされる。今年は、松明の点火および綱の切断は尊利地町の男性が担当であった。また、消火および片付けは里町の男性が担当であった。

④は、30日の水無月祭り開始時間の打ち合わせである。近年では、30日の宵祭りは、

夜 22 時頃、住吉神社に各町内の神輿・キリコが集合することになっている。しかし、今年のように、韓国から 40 人ほどの見学者が訪れるなどの理由で、集合時間が 30 分近く遅れる場合もあり、あくまでも目安としての開始時刻であるようだ。

⑤の項目については、30 日の宵祭りに住吉神社から海岸までの渡御^{とぎよう}のさい、クモノスバライになるキリコの責任者に対して、1 回目の停止位置の確認を行っている。さらに、神輿・キリコに台車がついてから、人足が転倒する事故が発生しているため、渡御やグラウンドでの移動のさいの事故に注意を払うように連絡されている。

⑥は、宵祭りの際、住吉神社から海岸まで渡御する間に打ち上げる花火のための寄付金についてである。今年は雨が降らなかったため花火は打ち上げられたが、2003 年(平成 15 年)には、雨のため花火をあげることができなかったため、翌 2004 年(平成 16 年)の花火寄付金に繰り越されている。

このように祭り相談では、祭りを運営していくために必要なことが議題になる。上述のように、祭りの進行自体に直接関わってくるもののほかに、祭り自体を運営していくための予算についても話し合いがされている。

7-2. バンバナギ

水無月祭りの下準備としてバンバナギという行事がある。バンバナギという言葉の意味として、‘バンバ’とは‘広場’を意味し、‘ナギ’とは草を‘刈る’ことを意味する。これは各地区のお宮(神社)で行われるもので、境内の草刈や神輿の飾りつけや掃除、シメナワや柱松明に用いられる縄をよったりするのが主な仕事内容である。

バンバナギを行う地区は、ほぼ、毎年 7 月 23 日の午前 8 時から各町の神社に集まり作業を行っているが、尊利地町では夜になってから行う作業もあるようだ。バンバナギを行う日は平日であったが、労働力不足からどの町でも日曜日に固定して行っている。

具体的な仕事内容(7 月 23 日)

ここでは、時間的、距離的な都合から、里・小田屋両町のバンバナギに焦点をしばって調査したことにふれたい。

7-2-1. 小田屋町のバンバナギ～八幡神社～

小田屋町のバンバナギに参加する義務がある戸数は 55 軒ある。各家から一人ずつ人が参加することになっているが、この日に参加した人は 29 人で、全体の約半分であった。バンバナギを行うのは朝 8 時頃に小田屋町の八幡神社に集合し、その日の仕事振り分けがされる。その後、8 時 10 分頃から作業が開始される。今回振り分けられた仕事の内容は以下の通りである。

- ① 八幡神社拝殿入り口に、タレマクをかける
- ② 鳥居の両脇に旗を立てる
- ③ 神社の境内と、階段下や周辺道路の草刈り
- ④ シメナワをよる

⑤ ワラを回収し、それを国道の橋下の海岸に運び、柱松明の綱をよる

7-2-2. 柱松明の綱うち

小田屋町での柱松明は南志見地区の前を通る、国道 249 号線の南志見橋の橋下の海岸で行われる。橋の裏側に竹の棒を引っ掛け、そこにロープをかけ、綱を引っ張る人がロープを張っている。

実際に柱松明の綱をよるのは 3 人であった。この綱の材料はバンパナギに参加するさいに各自で持ち寄ることになっていた。しかし、現在では、農業機械の発達により、ワラが裁断されてしまい、まとまった数量を確保することが困難である。また、地域の人でも農家ではない人もいる。そのため、シメナワや柱松明の綱をよるため、あらかじめ数件の家にワラを残しておいてもらうように依頼している。今回は二軒のお宅から 1 本の綱を作るだけのワラを集めてきた。

8 時 35 分頃から、橋の下で綱をよる作業が始まった。地面にゴザをひき、その上による人が座って作業を行っていた。その場には 5 人の男性がいたが、綱をよることができるのは 3 人で、綱をよる作業はなかなか難しいそうである。綱の長さは 1 本 35 メートルほどである。1 本の綱を作るためには 18 ソクのワラが必要である。1 ソクとは 12 本のワラのタバを集めたもののことで、1 本のワラのタバは機械によって裁断されるものが基準となっている。

綱は 3 人がそれぞれ 1 本ずつ反時計回りで巻き、その 3 本の綱を時計回りに巻いて 1 本の綱にしていく。1 本の細い綱をよる場合、継ぎ足すワラの量やタイミングは、それぞれのカンを頼りにしているようだ。

また、3 本を 1 本により合わせるときには、3 人で掛け声をかけてより強くよれるように工夫していた。そのさい、綱をよる人とロープを張っている人の息が合わせることが大事である。3 人に負けないように引っ張らないとロープが落ちてくるのである。また、ロープを引っ張っている人は、ハサミで綱の見た目を整えることも行っていた。綱をよる作業はロープを引っ張ることも含め、大変力のいる仕事で、休憩をとりながら続けられる作業であり、11 時ごろに終わった。



綱はおおよそその長さで決められている。その基準となるのが“8 の字”である。

“8 の字”とは、地元の人が綱をよる際に長さの目安として使う基準の形であり、地面によった綱を“8 の字”に置き、綱全体の長さを概算するのである。

この 8 の字とは、8 の字を 4 分割し、一つ一つが大体 1 メートルになるようにする。この 1 メートル

も長年のカンによる目算であるが、大きなズレは生じないそうである。

この 8 の字を 8~9 段用意すると綱全体の長さが 32~36 メートルになり、柱松明に用いる

のに十分な長さとなる。

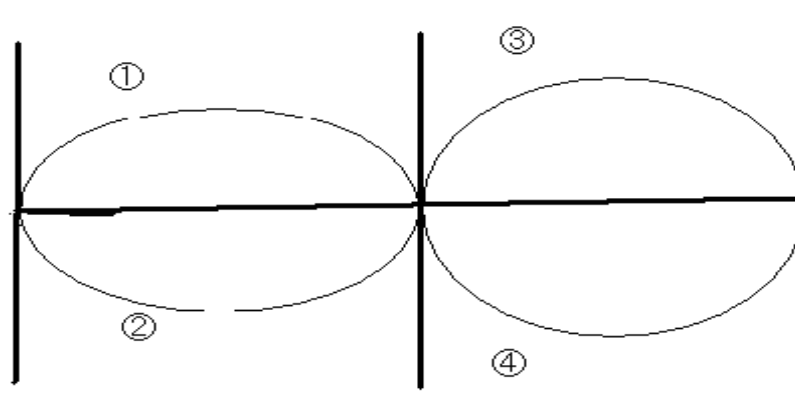


図 10. 柱松明の
網の模式

上の図 10 を参考にしてほしい。①～④は、網を 8 の字に 4 分割した際の、それぞれの場所を示している。細い線が網をあらわし、黒い太線が 8 の字を分割している線である。上述のように分割され、①～④の各部分が、約 1 メートルの長さになっている。

10 時 30 分頃に、小田屋町の八幡神社に戻ったところ、お宮周辺の草刈りは終了しており、数名の人を残して、ほとんどの人が神社に行くまでの道路の路肩の草刈りを行っていた。昼食を取ったのち 13 時 30 分頃から、草を刈る範囲を広げて作業を行うと言っていた。このようにバンバナギは、以前は半日で終了する作業であったが、現在の参加人数では夕方までかかる作業となっている。

7-3. 里町のバンバナギ～南志見住吉神社～

里町のバンバナギに参加する義務があるのは全部で 70 軒ほどである。しかし、今回のバンバナギに参加したのは 33 人であり、こちらも小田屋町と同様に約半数の参加数である。

里町で振り分けられた仕事の主な内容は以下の通りである。

- ① 境内周辺と高本社周辺のそうじ
- ② 拝殿内でのシメナワをよる仕事
- ③ 境内で柱松明の綱うち
- ④ 拝殿入り口に幕をかける
- ⑤ 神輿の大まかな飾りつけ(最終的な飾りつけは 30 日に行う)
- ⑥ 旗を組み立てる

7-3-1. 綱うち

シメナワをよるための材料は柱松明の綱と同じものを使用するが、見た目がよりきれいなものをえらんで使用していた。松明に使う綱を作るのに必要なわらの数量は 20 ソクである。里での 1 ソクは小田屋と異なり、24 タバで 1 ソクだそうだ。今回のバンバナギでは 4～5 軒のお宅からワラを提供してもらい、綱とシメナワを作っていた。

7-3-2. シメナワより

シメナワをよる作業は住吉神社の拝殿で行われた。シメナワは綱をよるよりさらに難しく、普通の綱は時計回りによっていくが、シメナワは反時計回りによっていく。これは相撲の横綱が着用する化粧まわしと同様のものである。シメナワも綱と同様に3本の綱をより、それを1本にしていく。シメナワは中心部分がふくらむ様によられており、柱松明の綱とは合わせたかが異なっている。

シメナワをよれる人は里町の中でも限られており、実際、調査の際によっている人は4人しか確認できなかった。また、2人の男性はシメナワよりの練習をしていた。60代の方でもできる人は限られており、67～8歳の人が主にシメナワによっているようだ。

8. 宵祭り当日(7月30日)の準備

8-1. 30日の午後2時～柱松明・お仮屋立て・ショウグリバ～

各町で用意した柱松明の綱やシメナワ、また、南志見中学校のグラウンドにお仮屋を建てる作業は、30日の宵祭りの日、午後2時ごろから行われる。このとき、南志見川河口付近に柱松明を立てる作業とショウグリバの忌み竹とシメナワよりの作業、さらにグラウンドにお仮屋を設営する作業がされた。

8-2. お仮屋たて

すでに祭りの概要でふれたように、水無月祭りでは、五か村の神輿が住吉神社から渡御して南志見の海岸に行き、渚の神事を終えたあとお仮屋に一泊する。このお仮屋は南志見中学校のグラウンドに30日に設置される。設営する順番は里、小田屋両町が毎年交代に当番となり設営しており、今年は小田屋町が設営の当番であった。

お仮屋は昔、木や竹で建てられており、屋根にはワラが葺かれ、正面には2本の忌竹が立てられ、そこにシメナワが張られた。お仮屋を建てるさいに必要な材料は五か村の各町で持ち寄る分量が決まっていた。だが、1970年(昭和45年)から、人手不足などの理由から現在のように天幕を張るようになった。しかし、現在でも正面に2本の忌竹とシメナワを張ることは続けられている。また、天幕の周囲には木のクイが打たれ、天幕を支えるロープが結ばれている。このロープには、神輿・キリコ人足がグラウンドを周回するときにつまずかないよう、笹竹とちょうちんを一緒に結ぶ。このほかに、天幕には電球の入ったちょうちんが下げられ、お仮屋の入り口には御神燈とかかれたちょうちんが下げられている。このような準備は全て、その年の当番の町によって行われる。



もとのお仮屋（中川直家氏画）

図 11. 以前のお仮屋

（『能登・輪島市 南志見の水無月祭り』より抜粋）



現在のお仮屋

8-3. 柱松明起こし

柱松明をたてる際、以前は四方向から綱で引っ張って柱松明を起こしていたが、現在ではパワーショベルによって起こしている。柱松明を立てるさいに使われる4本の綱はバンバナギの際、五か村で作られるが、長さは各町の人口によって決定されるようである。つまり、最も人口の多い里町では綱が最長であり、忍や東山などの人口が少ない町では綱の長さも短いのである。この5本の綱は、4本が四方の支えとなり、1本が4本の綱を縛る役割を果たす。また、先端のワラや杉の木などの炎焼部分がずり落ちないように下部に綱を巻く。この綱はバンバナギの際に忍町で作られたものを使用する。この綱は、4本の綱と松明の燃焼部分がずり落ちることを防ぐ役割を果たしている。

柱松明を支える4本の綱は、長さに応じて4ヶ所に縛られる。①海岸入り口の道路わき ②海中に打ち込まれた木のクイ ③波打ち際にある岩 ④橋の支柱である。①が最も長く、②と③が最も短い。

柱松明の先端にはワラやカンナクズを入れ、さらに灯油をかけ燃えやすくしていたそうである。だが、現在ではカンナクズを入手するのが困難であるため、杉の木を乾燥させたものを頭頂部に差し込み、それから灯油をポリタンク一本分かける。先端に巻きつけるワラの量はだいたい40ソクである。1ソクが12タバで、1タバは機械が出す束を基準にしている。

柱松明の先端には3本の御幣をさしており、この竹は忍町が持ち寄ることになっている。竹の長さは2~3メートルで、獲得した人の町のキリコに飾ることになる。かつては、御幣を取った人が幸せになれるという言い伝えがあり、柱松明が倒されたあとは取り合いになり、しばしば喧嘩になることや、輪島から若い漁師がやってきて御幣の取り合いをしたこともあったそうだ。現在では、御幣の取り合いに参加する人も減少した。

点火された松明は、木の部分が全て燃え尽きないうちに倒してしまう。倒した柱松明は、かつてはそのまま放置していたが、現在では海岸付近に木の部分だけを保管している。柱松明は^{あて}檔の木や杉の木が使われていて、長さは約10メートルほどである。1本の木はだいたい

たい 6～7 年で交換され、南志見地域で山を持っている人から寄付してもらおうそうだ。また、新しい柱を使用する場合は、住吉神社の宮司がお祓いをするそうだ。

柱松明の準備は、先端にワラを巻く作業から実際に松明を立てるまで2時間ほどかかる作業であった。この柱松明を立てる作業は、今年里町の当番であったが、綱を持ち寄った五か村の人や五か村以外の人も参加していた。

8-4. ショウグリバの設営

“ショウグリバ”とは、宵祭りのさい、神輿が海岸へ来て、燃える松明の周囲をまわった後、一時的に安置する場所である。宵祭りのさいに、ここに神輿を置き祝詞が奏上され、ホコ持ちによって清められたホコを用いて宮司が神輿に対して祓いを行う。ショウグバの設置は、海岸で柱松明をたてる作業と同時にされる。



海岸入り口付近の川原に渚の神事のさい、神輿が置かれる場所として忌み竹とシメナワが張られた。

8-5. キリコの準備

キリコを運行するためには、10～20 人ほどの人が必要である。主な内わけは、キリコを担ぐカタネ棒、キリコをひもで引っ張り、支えるヒカエ縄、フエ、タイコ、シャンギリ(カネ)などのオハヤシなどである。ここで、キリコを運行するための役割分担について簡単に説明したい。

まず、カタネ棒についてであるが、6-3-1にあるキリコの図解(図9)を参考にしてほしい。カタネ棒とは、本来、キリコを担いで移動していたときに肩に担いでいた棒のことで、現在ではこの棒の部分を押しながら移動させている。まだ神輿やキリコに台車が着いていなかった時代には、肩に棒を担ぐ際に肩と棒の間に当て物をして担いでいたそうだ。

次にヒカエ縄についてである。ヒカエ縄とは、キリコのヤネと呼ばれる屋根の下から出ている4本の縄のことである。現在では、カタネ棒に結び付けられているが、台車がついていなかった頃には、祭りバヤシにあわせてキリコを揺らす際に、キリコ本体が倒れてこないように四方から引っ張り、倒れることを防いでいた。実際にキリコが揺れる場面は水無月祭りではなく、7月31日から行われた13町内の一つである名舟町の御陣乗太鼓(名舟大祭)で見たものであるが、キリコ人足によってキリコが揺らされると、キリコは前後左右に激しく揺れ、ロウソクの火が紙に引火して燃えてしまうほどである。そのため、ヒカエ縄を四方から引っ張ることでキリコ本体の揺れをある程度制御する働きを負っている。

最後にキリコと一緒に移動する祭りバヤシについてである。祭りに女性が参加できなかった時代には、タイコ、フエ、シャンギリ(カネ)による祭りバヤシの演奏には、すべて男

性(少数ではあるが子供も含めて)であった。しかし、祭りに女性が参加するようになった今では、祭りバヤシの演奏に女性が参加するようになった。

8-5-1. キリコをたてる

キリコの世話をするのは各町にあるキリコ組と呼ばれる集団によって成される。この組は、1つの町をさらに、いくつかの組に区分し、そのなかでの話し合いにより毎年のキリコの世話役(キリコのヤド)が決定される。この区分は各地区によって名称や区分数が異なる。五か村の町内名と組数は以下のとおりである。

表1. 五か村の現在の組数

町名	各組
里	浜・中・上
小田屋	浜・中・谷内
尊利地	浜・上
忍	忍
東山	東山 (キリコを出していない)

キリコをたてるには、キリコの世話をする人を決定しなければならない。キリコの世話人は、各組で5~6人が毎年選ばれ、その中からさらにキリコのヤド(ヤドモト)を選ぶ。



世話役であるキリコのヤド(ヤドモト)は、キリコの修理・人足の確保・キリコ起こし・後始末・諸経費の割り当て・キリコの保管などの仕事を負う。キリコ起こしとはヤドモトの家の前か、もしくは適当な場所で分解された状態で保管されているキリコを形にする作業である。このキリコを立てる作業は各町で異なるが、たいていは29日の午前中に行われる。祭りが終わるとキリコは主要な部分を除いて分解され、保管される。そのため、祭りで使用する際にはキリコを原型に戻す必要がある。どの程度まで分解するかは、各町によって異なるようだが、1、2時間ほどで原型に戻せるようである。

また、キリコの保管場所も、例えば里町では、収納庫に保管し、尊利地町では、海岸付近の小屋にキリコを収め、小田屋町では、現在使われていない酒屋の倉庫に保管するなど各町で異なっている。

8-6. 神輿・キリコ人足の人数構成

各組で神輿・キリコを出すとき、担ぎ手を決める必要がある。神輿に出す人足とキリコ

に出す人足のそれぞれを決め、さらに神輿人足の中から 2 人、本社(東山)の神輿を担ぐ人を選出する。各町で人口が異なるため、全て同じ人数で担ぐわけではない。今回は小田屋町の谷地^{やち}での人数構成を例に挙げてみる。

今年、小田屋の谷地組では 15 人が祭りの人足となった。このうちキリコに 10 人がまわり、残り 5 人が神輿人足となった。キリコ人足が不足する場合、ヤドモトが人足を見つけることになっている。小田屋町の場合 3 組あるので、各組から 5 人ずつ、計 15 人の神輿人足が出るが、2 人が本社(東山)の神輿人足として選出される。つまり、小田屋町では神輿人足が 13 人参加することになる。

8-7. 子供キリコ

キリコは主に大人(成人男性)が担ぐものと、主に子供(中学生)が担ぐ子供キリコがある。しかし、現在の南志見地域では、各町内から自分の町のキリコを担ぐ労力を集めるのが難しい。よってキリコのヤドモトになった家が責任をもって人足を探してくることになっている。

昔は、各町の住人が人足になっていたが、今では他の町の人や知人、周辺地域の人などに人足料を払い、依頼して行われている。また、以前は子供キリコを里・小田屋・尊利地の 3 町内でそれぞれ 1 本ずつ出していた時期もあったが、子供が少なくなっているため 4 年ほど前から、南志見地域全体で 1 本の子供キリコを出し、かつ、2 名の大人が責任者として一緒に参加している。子供キリコを出す町の出身者には、キリコ人足としての日当は出ないが、他の 12 町内から参加した子供には日当が出るようである。しかし、後にふれるが、最近では、祭りが終わってからの送迎に手間がかかるため、里町周辺から家が遠い子供は宵祭り当日に、子供キリコに携わることは少ないようだ。

一般のキリコと子供キリコの違いは、高さや大きさもそうであるが、ナカガミの中に“子供”のウキジが入っていることである。

さらに、笹で装飾された小さな赤いちょうちんがついている点で、一般のキリコと区別することができる。

一般のキリコと子供キリコでは、装飾が多少子供っぽいところがあり、中学生がメインになって製作していることがわかるという話を聞くことができた。

また、いつ頃から子供キリコが 1 本になったのかについて聞き取りを行ったところ、次のような答えがきかれた。

「中 2 の時から、地区で 1 本の子供キリコになった。」(小田屋 16 歳)

里・小田屋・尊利地の 3 町内から出ていた子供キリコが、現在のように南志見地域で 1 本だけになったのは、今から 4 年ほど前からだと思われる。

南志見中学校の生徒が主体となって準備をする子供キリコのリーダーは里町出身の中学



3年生の中から選ばれる。また、3年生が中心となって、ナカガミの部分の装飾など、キリコの飾りつけも行う。一方、責任者をふくめた大人がキリコの骨組みを担当する。

中学校では子供キリコへの参加／不参加について用紙を配布し、親の承諾を得てから参加することが可能となる。子供キリコへの参加が許可制である理由は、おそらく水無月祭りが夜に行われるため、送り迎えに親の協力が必要であることが考えられる。今年は祭り終了の時刻が、深夜0時を過ぎていた。そのため中学生を迎えに来ることが、子供キリコへの参加に求められるのではないだろうか。

9. 水無月祭り 子供たちの祭りバヤシ練習

9-1. フレダイコ

フレダイコとは、水無月祭り本番の前に、小学生が南志見地域でオハヤシをしてまわることである。演奏する場所は毎年少しずつ異なるが、例年、学校に在籍している学生の家で、演奏するのに適した場所を選んで決定しているようだ。

南志見小学校では十数年前から南志見地区の人を呼んで、小学生にオハヤシの練習を授業の一環として行っている。練習の対象は3年生以上の生徒38名であり、練習する楽器はフエ、タイコ、シャンギリ(カネ)の3種類である。どれを選択するかは、生徒が自主的に選択することができ、学校側から強制することはない。現在の人数は、タイコ担当が22人、フエ担当が16人となっている。シャンギリはタイコを練習する生徒から出る。

聞き取り調査によると南志見小学校としては、水無月祭りは南志見地区全体の祭りであり、小学校に通ってきているどの子供達にとっても、自分の地域の祭りである水無月祭りのオハヤシを学ぶために指導の時間を設けたということが聞かれた。南志見地域では、7月30、31日の水無月祭りのほかに31、8月1日に名舟町で名舟大祭(御陣乗太鼓)が行われている。現在では水無月祭りのほうが衰退してしまっているが、名舟大祭は、あくまで名舟町だけの祭りであり、その御陣乗太鼓を練習するのは他の町の出身者にとって納得しがたいということと、水無月祭りは南志見地域全体の祭りであるから、南志見小学校に通う子供達みんなの祭りであって、自分たちの住む地域の祭りを廃れさせてはいけないという意見から学校の授業として時間が取られることになった。

今年は7月30日に行われる。午前10時に学校に集合し、最後の練習をして準備をし、午後1時頃から巡回を始めた。基本的に5、6年生が参加し、4年生は技術・体力面でついていけると判断された生徒が加わる。演奏する場所は、五か村の中で、演奏に適し、見学しやすい場所が選ばれ、引率の先生の車で移動する。一ヶ所での演奏はだいたい10分程度である。午後4時頃には学校で解散する。

9-1-1. 本番前最後の練習 (7月12日)

この日は、30日のフレダイコの本番前に行われる学校での最後の日であった。そのため、練習している生徒に対して、「本番が近いけど緊張していますか」という質問をし、次のような返答が聞かれた。

「緊張していない、初めて参加するけどおもしろそう。」(5年生 男子 フエ)

この生徒は、まだ祭りもフレタイコにも参加したことがなく、今年初めてフレダイコとかたちで祭りのオハヤシを経験するそうだ。この生徒は、自分のフエを持っていて、学校での練習の他に自宅でも練習しているそうだ。

「もう慣れた。」(6年生 男子) 「緊張しない、普通。」(6年生 女子 タイコ)

「緊張してはいない。だいたい覚えたから、家で練習することはない。」

(6年生 男子 フエ)

「緊張している。今年初めてフレダイコに参加してコバイをたたく。」

(4年生 女子 タイコ)

このように、6年生となると、フレダイコに参加したことがある子がほとんどであり、4～5年生に比べて緊張していないという意見が多かった。また、4年生からフレダイコに参加する生徒として選ばれるのは、指導者が体力、技術面を考慮して上級学年と一緒に演奏できる生徒だけである。そのため、4年生からフレダイコに参加できる子は決して多くない。上記の4年生の女子は、タイコを練習しているなかで3人しか叩くことのできないコバイを叩ける生徒であり、フレタイコに参加して演奏するのは初めてだそうだ。あとでふれるが“コバイ”とは、タイコを叩く際のパートの一つであり、もう一つある“オオバイ”よりも難易度が高く、演奏できる人が少ない。

聞き取り調査をした生徒の中には、4年生の頃から30日の宵祭りでシャングリ(カネ)を演奏していた生徒がいた。この生徒は現在6年生で、フレダイコに参加することは慣れたと言っていた。

9-2. タイコの練習方法

タイコは小学校の体育館で練習している。倉庫の中にタイコがあり、上達している生徒は実際にタイコを叩いて練習をし、リズムなどに不安を抱える生徒は机の上に黒いゴムマットをのせ、それを叩いてリズムを覚える練習をしている。

タイコ・フエ・シャングリには共通のリズムがあり、そのリズムを覚えることが、祭バヤシの練習の第一歩である。練習に参加したばかりの3年生やリズムの習得が不完全である生徒は、手が上手に動かず、うまく演奏することができない。

タイコ演奏の場合、リズムを覚えたあとは、“オオバイ・コバイ”を覚えることになる。“オオバイ”とはバチを大きく振りかぶって叩くパートであり、こちらは多少、リズムがずれても、演奏自体に大きな影響は生じない。一方“コバイ”の方は、一定のリズムを小刻みに打ち続けるパートであり、コバイがずれるとタイコ演奏全体にズレが生じてしまう。“オオバイ”は“コバイ”の小刻みに打たれる正確なリズムによって成立するためである。この“コバイ”の演奏は、左右の腕を同じリズムで打ち続ける必要から難しいとされており、演奏できる人はそれほど多くない。コバイの演奏ができる生徒は、タイコを練習している生徒が22人いる中で、6年生に1人、4年生に2人の計3人しかいないそうである。このコバイの奏者を育成するには学校での練習時間だけでは足りず、まとまった練習時間と、ある程度の素質が必要であるとされている。

9-2-1. やる気を持続させる方法

「22 人の小学生に指導者は 1 人しかいないため、全ての生徒に対してきちんと接することが難しくないですか。また、ある程度叩けるようになるまで、子供たちにやる気を持続させるために工夫していることはありますか。」という質問に対して、タイコの指導をしている男性は、次のように返答した。

「子供たちのやる気を持続させるのは難しい。教える側にたいして生徒の人数が多いため、個人のモチベーションを維持するのは大変であり、やる気が持続しない生徒もいる。教育として、ただ受動的に教えるだけのタイコ練習では競争心をかきたてることができない。だから、生徒自身に遊び心を持たせて、自分から率先して練習するように生徒自身の気持ちをもっていきたい。実際、上達する生徒は、指導を受けていなくとも自分自身できちんと練習をしている。」

このように、指導する側とされる側の人数の差が大きく、全ての生徒に対してきちんと時間をかけて指導するのは難しい。しかし、生徒のタイコに対する接し方を変えてやることで、生徒自身がきちんと練習するようになる。ある程度まで叩けるようになれば、おのずと練習するようになるが、上手に叩けないうちは、タイコに対して面白みを感じることができず、練習にも身が入らないようである。また、ある程度叩けるようになって、そこから、さらに上達するまでに飽きてしまう生徒もいる。これらの生徒に対して、限られた練習時間内に、自ら練習しようとする意識を育てることは難しいようである。

9-2-2. タイコ練習に対する子供たちへの聞き取り

ここではタイコの練習に参加している子供達に対して、「タイコの練習はキツイですか。」という質問をし、次のような返答が聞かれたので紹介する。

「キツイ。」(3年生 女子 タイコ)

「慣れてきておもしろい。」(4年生 女子 タイコ)

「慣れてくるとおもしろい。」(5年生 女子 タイコ)

上の 3 人の生徒は学年が違ったため、今まで練習してきた時間に大きな差がある。そのため 3 年生の生徒は練習が大変だと言っていた。実際、表情が少し疲れていたように感じた。残りの 2 人の生徒は、練習の際も実際にタイコを叩いて練習していたので、演奏に慣れてきておもしろくなってきたのではないかと思う。

「おもしろい。はじめからタイコがすきだったので、3 年生の時から楽しかった。」

(4年生 女子 タイコ)

この生徒は、22 人いる生徒の中で、3 人しかいないコバイを叩ける生徒の 1 人である。練習する前からタイコが好きだったと話してくれたので、もともとタイコに対して興味があり、練習自体に抵抗がなかったと思われる。この生徒は毎週 1 回行われている、成人女性のタイコサークル“波の華太鼓”の練習についていくと言っており、他の生徒に比べるとタイコにかかわる時間が長いのもコバイが叩ける要因ではないかと考えられる。この“波の華太鼓”については 13 章でふれたい。

また、同様に「タイコの練習はキツイですか。」という質問に対して、

「はじめてやっても、意外とすぐにできておもしろい。」(4年生 男子 タイコ)
という返答をきくことができた。

フエもタイコも、男子より女子の方が覚えるのが早いと言われている。ただ、それにも個人差があり、上にあげた男子生徒のように、それほど苦勞せずにリズムを覚える生徒もいる。とっかかりにそれほど苦勞しなければ、練習自体への抵抗も少ないと考えられる。

9-3. フエの練習方法

ここでは、小学校の音楽室で行われていたフエの練習についてふれたい。
以下に示すのは、オハヤシ共通のリズムを覚えるための語呂合わせ(楽譜のようなもの)である。

行きのパート

* デンコヒャヒャローオ
デンコデンコヒャヒャローロデー
デンコデンデンデンコデンデ
デンコデン

デデンコデーデン
デンコデンコ
デンコデンコヒャヒャロロ

帰りのパート(チョーチョーマ)

チョーチョーマ／ヨーマが
ダレがいうた／あーゆうた
おれがいうた／こーいうた
穴ほってえかあくした
デン
デデンコデン、デデンコデン (*に戻って繰り返し)

水無月祭りでは、9-2ですでにふれたように、タイコ・フエ・シャンギリ(カネ)に共通のリズムが存在する。フエの練習は、まず黒板にこれらのパートを書き、授業の始めに皆で読み合わせることから始まった。ちなみに、帰りのパートにあるチョーチョーマの意味は、地区の人知らないそうだ。

水無月祭りのオハヤシには場面にあわせて、4つのパートがある。この4つのパートとは、①歩み(行き)太鼓 ②走り太鼓 ③休み太鼓 ④帰り太鼓(チョーチョーマ)のことである。実際に練習している場を確認したのは、①の歩み(行き)太鼓と④の帰り太鼓(チョーチョーマ)だけであり、上記のふたつがそのうちの‘行きのパート’と‘帰りのパート(チョーチョーマ)’である。

9-3-1. 練習方法

フエの指導をしている人は南志見地域を構成する 13 町の一つである名舟町から来ている男性 1 人であり、音楽室で 16 人の生徒に対して指導している。生徒の中には自分のフエを持っている生徒もいるが、たいていの生徒は、学校にあるフエを利用している。

指導している男性は、学年によって練習課題が以下のように異なると言っている。

3 年生 リズムを覚えて指をきちんと動かせるまでが大変

5, 6 年生 雰囲気醸し出せる音色を出すこと

「3 年生は、上記のリズムを身体で覚えるまではきちんと指を動かす段階に進むのが難しい。そのため、リズムを口ずさめるようになるまで覚えさせる。そうすることではじめて指が動くようになる。一方 5, 6 年生は、音を出すことはできている。その後はタイコとあわせて演奏することで、音の他に雰囲気も奏でられるようになってほしい。」

と指導している男性は言っていた。祭り本番では、フエの音色がキリコの担ぎ手をノセルことができる。“ノセル”とは、フエの演奏によってキリコ人足の気持ちを高揚させ、人足の動きが大きくなるような雰囲気をつくりだすことである。音色の強弱によって担ぎ手の動きに‘躍動感’を与えると同時に‘押さえる’というニュアンスを加えることで、メリハリを生じさせることができる。フエによって醸しだされる雰囲気とはキリコの担ぎ手にとっても、水無月祭りにとっても大事な役割を果たすものだそうだ。

9-3-2. 飽きさせない工夫点

フエを指導している男性にも、タイコの指導をしている男性同様に、「子供たちが練習に飽きないために工夫していることはありますか。」という質問をしたら、次のような返答がかえってきた。

「昔は、生活の中での祭りの存在が大きかった。娯楽のメインであったため、自分自身でもリズムを口ずさんでいた。しかし、今の子供達は、フエの音色が出せるようになるまではすぐに飽きてしまう。そのため、フエを好んでもらうため、フエを教えている私自身を好んでもらうため、子供の中に入り込んでいこうという努力をしている。そのため、フエの練習でも、いきなりフエだけを使った練習ではなく、水無月祭りとはどのような祭りなのかということを語ったり、ハッピーを着せて祭りの雰囲気を感じてもらったこともあった。そのほかに、草笛を吹かせて唇の動きを覚えさせることもした。」

また、次のような話も聞くことができた。

「生徒にも個人差はあるが、フエの音が出た時にほめてやることをこころがけている。」

個人差はあっても、ほとんどの生徒が 3 年生のうちに音を出せるようになるそうだ。フエの音色が出た時にほめてやることで、生徒自身に、練習への持続性をもたせていると考えられる。

9-3-3. 男女の差

「同年代の生徒でも、男女の差などで覚え方に違いはありますか。」という質問に対して、次のような返答が聞かれた。

「覚えるのは女子の方が早いですが、男子の方が重い雰囲気が出る。」

男子は、女子と比べて覚えるまでに時間がかかるが、雰囲気のある音色を奏でることがで

きるそうだ。一方女子は、覚えは早いがネイロが軽く、キリコについて演奏するときも 2 人 1 組になって吹くことがある。

男女の差で覚える早さに違いが生じることについては、フエだけではなくタイコを指導している男性からも同様の話を聞くことができた。男子生徒より、女子生徒の方が 3 倍近く早く覚えてしまうそうだが、雰囲気のある音を出せるのは男子生徒の方であるそうだ。

9-3-4. フエに対してのイメージ

「フエとタイコに関して、実際に習得するまでの難しさの他に、イメージとしての差はありますか。」という質問に対して、

「フエは上手に吹ける人が少ない。また、フエが吹ける人はタイコも上手に叩ける。」

フエやタイコの指導をしている男性 2 人が言うには、フエをきちんと吹ける人はなかなかいないそうである。ただし、フエがきちんと吹ける人はタイコを叩くのも上手であるという共通の意見をもっていた。このことから、共通のリズムをもつフエとタイコの演奏では、フエで演奏する方がタイコよりも難しく、フエで祭りバヤシを演奏できる生徒は、タイコでもそれほど苦労せずに演奏することができるのではないだろうか。また、フエが難しいことは祭りバヤシを経験したほとんどの人が思うことのように、生徒の家族は子供にフエを覚えてほしいという人が多いそうだ。しかし、学校側は生徒に対してどちらの楽器を練習するかについて強制はしていない。そのため、生徒自身が楽器を選ぶことになる。ただ、家族としては難しいフエの方を覚えてほしいようである。

10. 水無月祭りの全体の流れ

この章では、水無月祭りを 30 日の宵祭りと 31 日の本祭りにわけて、はじめにそれぞれの祭りの大まかな順序をおっていき、後に詳しくふれていく。

10-1. 宵祭りの流れ(7月30日)

1. 神渡しの儀式 各町の神社で神輿に神様を移す
2. 神輿・キリコの参集 南志見住吉神社に各町内の神輿とキリコが集合
3. オタチの儀式 拝殿で行われる出発の儀式
4. 海岸への^{とぎよう}渡御 神輿とキリコが神社から海岸へ移動する
5. 柱松明への点火 一行がお仮屋に近づく頃合いをみて点火する
6. ^{なぎさ}渚の^{しんじ}神事 海岸でミソギをする
7. お仮屋での祭典 南志見中学校のグラウンドで祭典が行われる。

その後、神輿は翌日午後 3 時からの本祭りまで安置される

8. キリコの帰還(解体作業)
9. お仮屋番の様子

10-2. 本祭りの流れ(7月31日)

1. ^{あさじ}お朝事
2. お仮屋の祭典

- 3.神輿のショウグリ
- 4.南志見住吉神社への帰還
- 5.お帰りの祭典 住吉神社に神輿が集まり、お帰りの祭典を行う
- 6.御旅所への移動
- 7.神渡しの儀式

宵祭り(7月30日)

①. 神渡しの儀式

五か村の神社でそれぞれ、一時的ではあるが神輿に神様を移す儀式が行われる。これを神渡しの儀式という。この儀式が行われる時間はそれぞれの町で決まっており、小田屋町の八幡神社では夕方 5 時におこなわれ、住吉神社では、水無月祭りの開始時刻である 10 時からであった。東山の白山神社では、神輿が住吉神社に安置されているため行われていない。また、この儀式に参加する人は、宮司、各地区の区長、氏子総代であり、町によって人数は異なる。

②. 神輿・キリコの参集

午後 10 時、里町にある住吉神社に各町の神輿がキリコを先導にして、タイコ・フエ・シャンギリ(カネ)のオハヤシの演奏にのせて集まってくる。各町の神輿とキリコの一行の場合も神輿の先頭に行くキリコをクモノスバライと呼び、最後尾に行くキリコをアトオサエと呼ぶ。

今年は、住吉神社に各町の神輿・キリコが集合したのが午後 10 時 20 分頃と、予定より若干遅れていた。しかし、あくまで予定であり、このように遅くなることもあるようだ。

以前はもっと遅く、神社の前に深夜 1 時過ぎに集まることもあったそうだが、最近では小さな子供が参加するなどの理由で、現在の時間になったようだ。

②-1. 神輿・キリコの並び方

住吉神社に各町の神輿・キリコが集合したあと、神輿は拝殿の中に安置され、キリコは住吉神社前の道路に並ぶ。この神輿・キリコの並び方には 4 つのパターンがあり、1 年ごとにローテーションしている。そのため、5 年目には元に戻るとのことである。

以下に示す並び方は、神輿が拝殿内部に安置される時の並び方である。

表 2. 神輿の並び方

年度／神輿の順番	①	②	③	④	⑤
今年度	里	忍	住吉(東山)	尊利地	小田屋
2 年目	忍	里	住吉(東山)	小田屋	尊利地
3 年目	小田屋	尊利地	住吉(東山)	忍	里
4 年目	尊利地	小田屋	住吉(東山)	里	忍

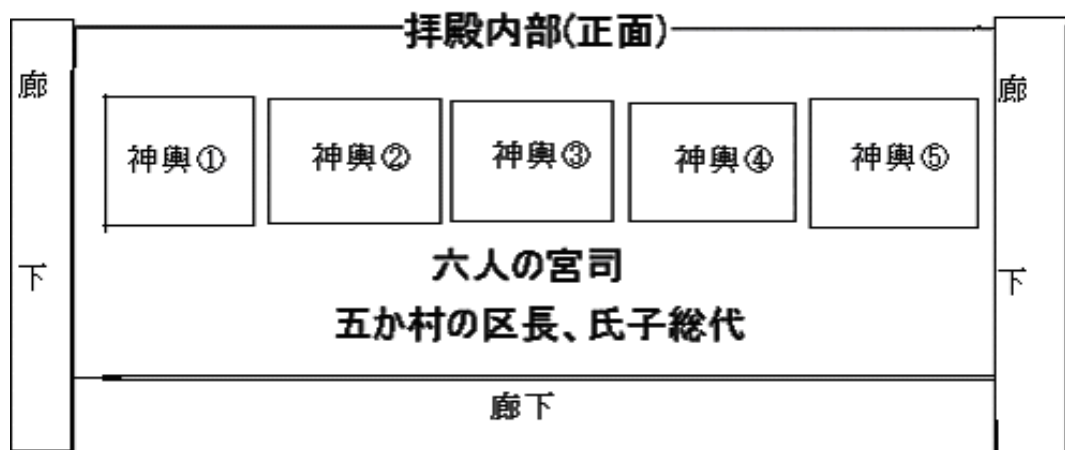


図 12. 拝殿での神輿の位置関係

表 2 の①～⑤までの番号が図 12 の神輿①～⑤の数字に対応している。例えば今年(2006 年度)の祭りでは、①に里町、②に忍町、③に住吉(東山)、④に尊利地町、⑤に小田屋町の神輿がそれぞれ置かれたことを示している。

表 3. キリコの並び方

年度／キリコの順番	①	②	③	④	⑤
今年度	尊利地	小田屋	5基の神輿	里	忍
2 年目	小田屋	尊利地	5基の神輿	忍	里
3 年目	忍	里	5基の神輿	小田屋	尊利地
4 年目	里	忍	5基の神輿	尊利地	小田屋

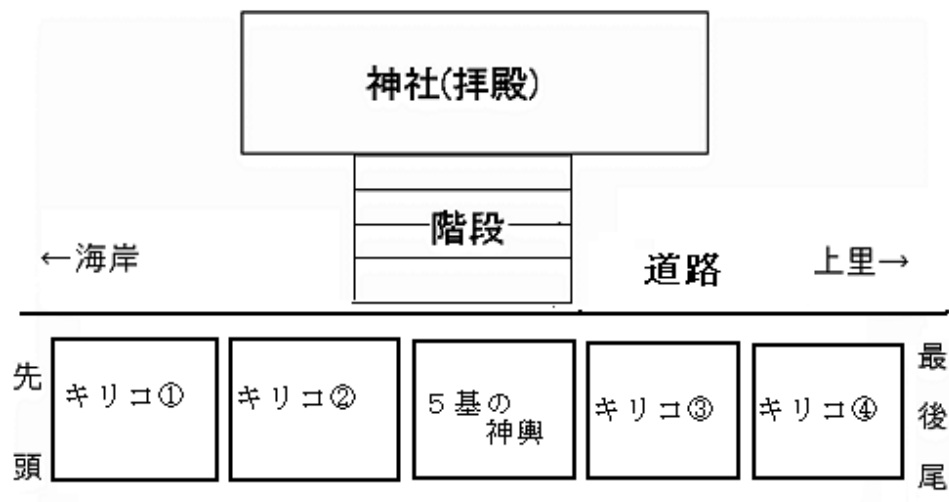


図 13. 住吉神社の位置と参集したキリコの順番をあらわした模式図

上記に示したのは、拝殿に神輿が移される前に住吉神社の前に神輿・キリコ両者が集合する際の並び方である。また、神輿の場合、5 基の神輿の中央には必ず住吉神社(東山)の神

輿がおかれる。東山の神輿がなぜ住吉神社に安置してあるのかは、上述した4－3－1の東山町の存在でふれたとおりである。

キリコの並び方に関しては、今年は尊利地町のキリコが1本、小田屋町のキリコが3本、里町のキリコが子供キリコとあわせて4本、忍町のキリコに関しては忍町における世帯数と人口の減少が著しく(補足を参照)、1969年(昭和42年)からキリコを出していない。この当時忍町では、世帯数が13戸、人口64名であったが、平成15年4月1日現在では世帯数が8戸、人口17人であり、五か村中で最も過疎の進んだ町であると言える。

現在では記録による確認しかできないが、1892年(明治25年)には神輿・キリコの並び方をくじ引きで決定していた。それ以前では、尊利地町の神輿が一番右側、つまり最上位につく慣例があった。これは住吉神社の神様が尊利地の白山神社の神様が夫婦神様であったためと言われている。しかし、この慣例に対し、他の町から反発があり、くじ引きになったそうだ。それでも、毎年平等に位置が決定するわけでもなく良くない位置に神輿を置くことが続く町もあり、現在のように5年で元に戻るようにしたのである。

④ オタチの儀式



午後10時54分から住吉神社でオタチの儀式が行われた。拝殿に安置された5基の神輿のカタネ棒(担ぎ棒)それぞれの上に板を渡し、お供え物(神饌)をのせた3つの三方を置いた。

お供え物の種類は左から、野菜と果物、御神酒、魚介類となっていた。具体的にはトウモロコシ・ナス・パイナップル・人参・きゅうりなどの野菜や果物とお米・塩・白いトックリ2本の御神酒とスルメと魚などの魚介や海草類であった。

④. 海岸への渡御

住吉神社で行われたオタチの儀式が終わると、5基の神輿は左端(先頭部分)から順番に拝殿から退場していく。神社の前では各町のキリコが海岸への渡御のため移動の準備をしていた。以下に示した図14は、大まかではあるが五か村の地図であり、住吉神社から南志見海岸までの渡御の道のりを示している。また、図15は、簡単にではあるが中学校のグラウンドをあらわしており、グラウンド内部とその周辺の位置関係を示している。

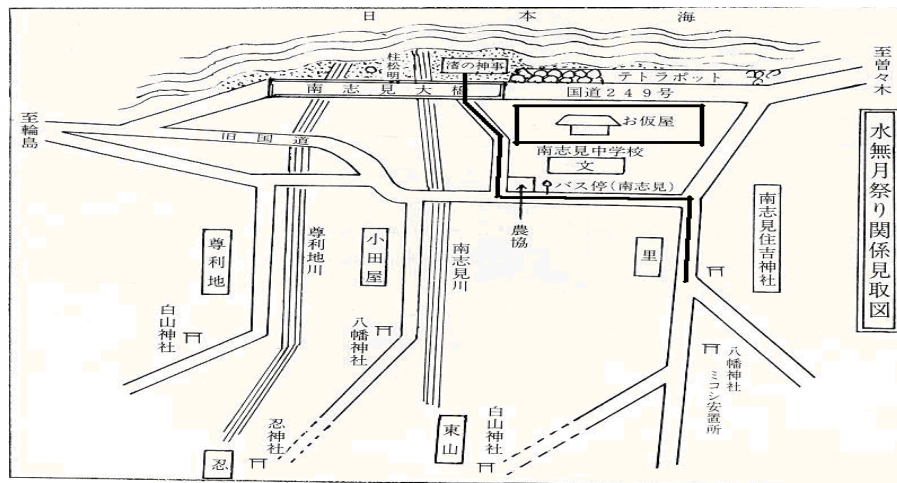


図 14. 五か村の模式図と渡御の通行路

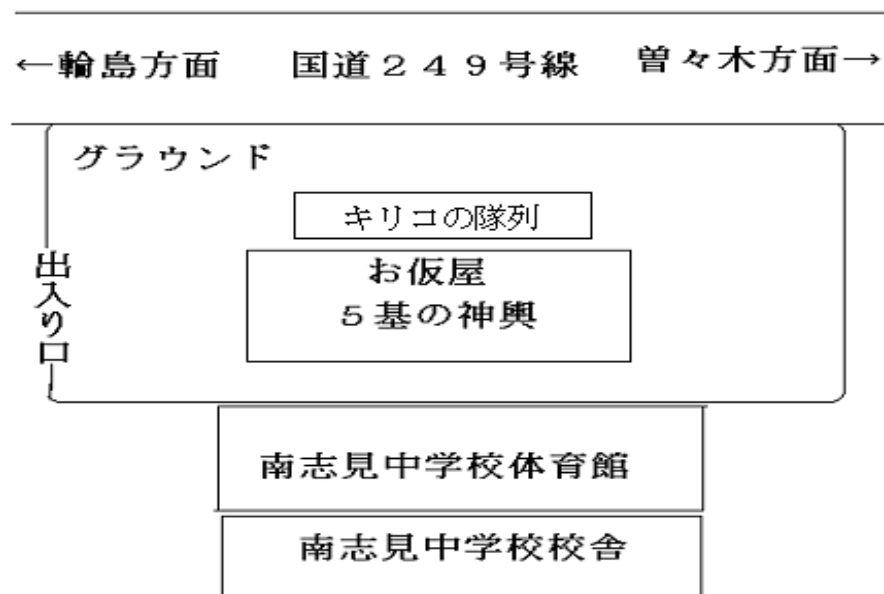


図 15. グラウンド周辺の模式図

④－１． 海岸までの順番

神社から海岸まで渡御するさい、神輿とキリコには順番がある。上記の表 3 で示したように、キリコの間には 5 基の神輿が入ることになる。神社の前でキリコの間に入った状態が渡御する際の一行である。②の今年の一行の順列を詳しくしたものを以下に示す。



①尊利地 ②小田屋(谷地・中・浜)
 ③5基の神輿(里・忍・本社・尊利地・小田屋) ④里(浜・子供・中・上)～2006年度～
 カッコの中は各町内の組名を示し、順番がそのまま集落のキリコの順番となっていて、神社から海岸まではこの順番で渡御する。途中でこの順番が入れ替わることはない。神渡しの儀式のあと、各地区の神輿・

キリコの一行にクモノスバライとアトオサエがあったように、海岸までの一行にもクモノスバライとアトオサエがある。渡御の際、キリコの進退についてはフエによる合図で行われる。

神社から海岸に向かう途中に、お仮屋のある南志見中学校のグラウンドがあり、そこにキリコが入り、神輿は海岸に設置されたショウグリバに向かう。

⑤. 柱松明への点火

グラウンド入り口で神輿とキリコが別れ、キリコが入り口に入りかけたとき、柱松明に点火する。ここ数年はこの役目を尊利地町の男性が行っている。点火役の男性は、あらかじめ南志見海岸周辺に待機しており、キリコが近づいてきたらグラウンドに入るタイミングを見計らって、柱松明に点火するのである。

柱松明への点火方法は細長い竹の先端にワラをつけ、そこに火をつけて松明に点火するものであった。

午後11時30分、柱松明に火がつけられた。柱松明には4本のヒカエ綱が張られ、その綱に人々がつながり揺さぶり始めるが、5基の神輿が山側の最も長い綱の下をくぐり抜けるまでは、松明を倒さないことになっている。全ての神輿が綱の下をくぐり抜けてショウグリバへ移動すると、柱松明が倒された。柱松明が倒れると同時に数名の人が3本の御幣を取りに近寄ってきた。獲得された御幣は在所のキリコに飾り付けるそうである。柱松明が点火されてから、倒れるまでの時間はわずかに5分程度であった。柱松明は四方を支える綱の一本を切ることで倒される。切断する綱は一番長く、海岸入り口部分に結び付けられている綱であり、今年は里町でよられた綱が切断された(図16参照)。

南志見海岸の砂浜が減少してからは、後始末を考慮して海側へ柱松明を倒すことはしなくなった。松明に巻きつけられている綱や杉の木は、海岸で燃やし、焼却される。そのため、海水でぬらしてしまうと火のつきが悪く、後始末に時間がかかるのである。よって、柱松明を倒すさいには、意図的に山側へ倒すようにしているのである。ちなみに今年は山側に倒れた。以前は山側へ倒れると豊作、海側へ倒れると大漁といわれていたそうだが、現在ではそのようなことはまったく気にされていなかった。『南志見の水無月祭り』(1978

年)では、柱松明の倒れた方向で、海・山の大漁や豊作が決まるという伝承は、形としては残っているが、すでに薄れたものとなり、約 30 年の間に、柱松明が祭りの中で担っていた役割が変化したのではないかと思う。

⑥. 渚の神事

5 基の神輿がショウグリバへ移動し、柱松明に点火される。同時に 5 基の神輿それぞれについているホコ持ちと呼ばれる人々が 1 人ずつ出て、海岸の波打ち際でホコを海水につける作業が行われる。

“ショウグリ”とは潮垢離^{しおごり}のことをさし、海水でアカを落とすという意味がある。海水につけたホコを神輿の周囲で振ることで神様に対して祓いをし、身を清めることをあらわして、この儀式を行うのが潮垢離場^{しおごりば}である。5 基の神輿が安置されてホコによる祓いからの始まる一連の流れを“渚の神事”という。

使用されるホコは各町内の神社で保管されており、長さは約 2 メートルある。先端は三又になっており、御幣が結び付けられていた。海水につけるときは、住吉神社に祭られている住吉三所明神である、表筒男命(ウワツツノオノミコト)中筒男命(ナカツツノオノミコト)底筒男命(ソコツツノオノミコト)の名前から、海水の上・中・底(下)の順でホコをつけていた。

ホコを海水につける作業が終わったら、各神輿の宮司にホコが手渡され、宮司が神輿の左・右・左の順でホコを振って神輿の祓いを行い、ホコを神輿の脇に立てかける。

神輿の祓いが終わると、5 基の神輿の前に宮司が立ち、フエとタイコによる神楽が奏され、そのあと祝詞が奏上され、ふたたび神楽が奏された。

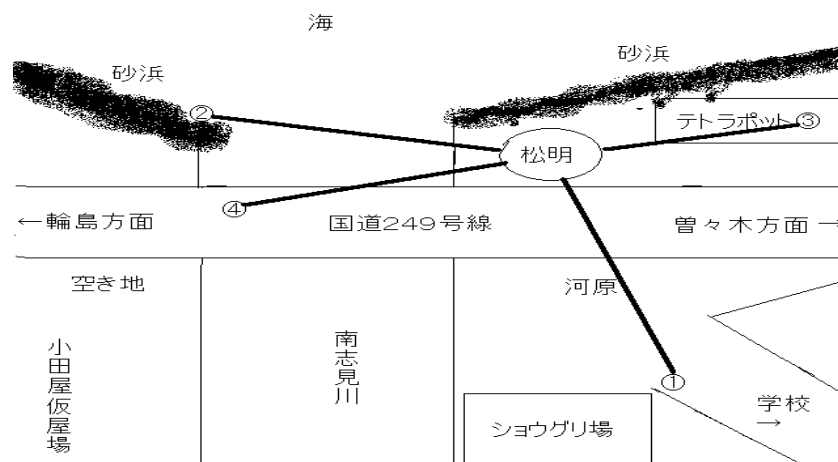


図 16. 渚の儀式時の南志見海岸の模式図

⑦. お仮屋での祭典

ショウグリバでの渚の神事が終わると、神輿はお仮屋のある南志見中学校のグラウンドに移動する。このとき、お仮屋の正面にキリコが整列している。神輿がグラウンドに入ってきたら、先頭のキリコが進み始める。その後、あいだに神輿がはいり、最後尾のキリコが出発する。このように、グラウンドでは神社の前に集まったときと同様に 5 基のキリコを中心にした隊列を組み、グラウンドを 3 周する。このとき、キリコについているオハヤシの演奏もタイコだけが行いながらまわるのである。

少なくとも昭和 53 年までは、全ての神輿・キリコに車がついておらず、人力によりかっがれていた。現在では、尊利地町のキリコをのぞいて全ての神輿・キリコが車をつけている。

グラウンドを 3 周する本来の方法として、最初の 2 周はゆっくりとまわり、3 周目はお仮屋の正面に達したときに最短距離を走ると決まっている。この“最短距離を走る”とは、お仮屋の屋根を張るため、周囲に打ち付けた杭にロープが巻いてあり、この杭の周囲を走することをさしている。

グラウンドをまわり終わると、神輿はお仮屋の中へ、キリコはお仮屋にウキジを向けて横一列に並ぶ。神輿・キリコの並び方は神社での並び方と同様である。

深夜 0 時 10 分から、お仮屋での祭典が始まった。祭典は、神楽、祝詞の奏上、神楽の順で進んでいた。この間もオハヤシはたえず演奏し続けていた。最後に、神事に参加している宮司と各地区の区長・氏子総代が御神酒を交わして解散となる。このとき深夜 0 時 20 分ごろであった。

深夜 0 時 24 分、グラウンドからキリコが各地区へ帰還し始めた。キリコのヤドモトへ戻って解体する集落もあれば、一ヶ所にまとまって解体・収納する町もある。

キリコの解体については、のちに小田屋町で行われた解体についてふれたい。ただ、ほとんどの町内は宵祭りが終わったあとに、ある程度の解体をすませてしまうようだ。

⑧. キリコの帰還(解体作業)

深夜 0 時 37 分、小田屋町のキリコがグラウンドから小田屋町中組にある解体場に到着した。ここは昔、酒蔵に使用されていた建物で、現在では収納するために保管費を払って収納している。小田屋町では 3 体のキリコが出たが、解体方法は一緒であった。

⑧-1. キリコの解体手順

ここでは、キリコの解体についてふれたい。ここでふれるキリコのパーツについては、7-4 で示したキリコの図解を参考にしてほしい。

i. マクを抜く

子供キリコを除くキリコには、赤いマクがついている。そのマクを抜くのが最初の作業である。

ii. 下のボンボリと、子供が乗る部分はずす

キリコには全部で6つのボンボリがついている。ヤネノ下に二つ、残りが4つあり、先に下の4つをはずす。また、オハヤシを演奏するなかで、シャンギリを担当する子供が乗る部分も取り外す。

iii. 台車から降ろす

キリコの本体を車の部分から取り外す。

iv. カタネボウ・ボウモタセを抜く

カタネボウとは、キリコ人足が肩に乗せて担ぐ部分であり、ボウモタセは2本のカタネボウが外れないようにはまっている棒である。2本のカタネボウの間にヒモをかけ、そこにオハヤシのタイコを吊っている。

v. キリコの塔の部分を下す

キリコには柱松明と同様に4本のヒカエ縄がついている。このヒカエ縄を使って、キリコの塔の部分を下し、上部にある2つのボンボリとヤネをはずす。さらに横に倒してから、ナカガミと呼ばれるウキジの入った枠の部分を取り外す。このとき、ウキジを破らないように注意して取り外していた。

キリコのパーツはある程度分解されるが、大枠の骨組みは解体せずそのまま収納される。細かい部品は、2階に置かれ、大枠の部分は1階に置かれる。

五か村のキリコの収納場所はそれぞれ異なっている。里町では、上里にキリコを収納する倉庫がある。小田屋町では上記の酒蔵跡が中組にある。尊利地町では海岸近くに小屋をもっており、そこがキリコの収納場所になっている。

小田屋町で行われたキリコの解体は深夜1時05分に終了し、参加した人々はそれぞれに解散した。

⑨. お仮屋番の様子

南志見中学校のグラウンドに5基の神輿を安置するために設置されたお仮屋には、1基に1人のお仮屋番がついている。しかし、東山(本社)の神輿には、お仮屋番はつかない。そのかわり東山町から住吉人神社の宮司に対して人足料が出されている。お仮屋番の人たちは、7月31日、夕方3時から始まる本祭りまでの間、神輿の前にある、3本のろうそくの火の番をしている。お仮屋番にはお弁当と一升瓶が1本ずつ支給される。この支給品を購入する資金は、東山町から出された人足料と祭りを運営するための予算から捻出されている。

お仮屋番の様子を見に行ったときは深夜1時10分頃で、4人の方がお仮屋で待機していた。すでに2人の男性は寝ていて、残りの男性は話をしていた。万一、雨が降るなど、天候が崩れたときのため、中学校の体育館が開放されているが、体育館の扉は神輿がとおれないため、お仮屋番の人たちだけが体育館に移動することができる。

お仮屋番の決め方は、各町で決まっているようだが、たいていは順番で受け持つことになっているようだ。小田屋町では毎年、小田屋八幡神社の世話をする人(宮当番)が決まっており、その人がお仮屋番をすることになっている。

本祭り(7月31日)

①. お朝事^{あさじ}

住吉神社の宮司が、本祭りが始まる前に1人で、お仮屋の様子を見て、祝詞をあげる儀式。

毎年決まった時間に行くわけではないが、今年は、午前10時頃に行った。

②. お仮屋での祭典

午後2時50分、グラウンドに宮司が到着し、3時にはのろしが上がり、本祭りの始まりを知らせた。お仮屋で行われる祭典は“オタチの祭典”と呼ばれ、神輿がショウグリバを経て、住吉神社へ帰還するための最初の儀式である。

まずフエとタイコの神楽が奏され、宮司の祝詞が奏上された。この祭典には宮司と神輿人足、氏子総代だけが参加しており、観客はほとんどいない。

③. 神輿のショウグリ

午後3時10分、お仮屋の神輿が海岸にあるショウグリバへ移動し始める。5基の神輿が全てショウグリバへ移動し終わり、同時刻22分から各神輿のホコ持ちが波打ち際まで行き、ホコを海水につける作業が行われ、宮司に手渡し、左・右・左に振って祓いをし、神楽と祝詞があげられた。

④. 南志見住吉神社への帰還

午後3時36分、渚の神事が終わり、神輿が住吉神社へ帰還する準備を始める。一行の先頭が里町の神輿で、子供のオハヤシもこの神輿について演奏された。

午後3時56分、5基の神輿が住吉神社に到着し、拝殿に上げられた。

午後4時08分から子供たちによるオハヤシの奉納が始まった。小学校で練習したオハヤシを奉納し子供たちは解散した。

午後4時26分、フエ・タイコの神楽に続き、宮司の祝詞があげられ、最後に神楽が奏上されて拝殿での神事は終了する。それから、拝殿にいる宮司と区長、氏子総代、また、境内にいる神輿人足へ御神酒が振舞われた。



午後4時43分、神社から各町へ向けて神輿が帰還し始めた。里、小田屋、尊利地町は人力で神社へ帰還し、忍町は、住吉神社の正面までトラックがきていて、そのトラックの荷台に神輿を積んで、宮司と共に忍町まで運んでいった。忍町以外を担当する宮司も、それぞれが担当する神社の神輿と一緒に神社へ向かっていった。

⑤. 御旅所^{おたびしょ}への到着～小田屋、尊利地町～

午後 5 時 01 分、尊利地町と小田屋町の神輿はそれぞれの町内の海岸に立てられた、仮屋場^{かりやば}に到着した。ここには、2 本の忌み竹が立てられ、シメナワが渡されていた。シメナワは両町内のバンバナギの際によられたものが使われ、忌み竹には各町内の神社の旗がくくりつけられていた。ゴザの上に宮司が座り、タイコで神楽をあげ、祝詞をあげる儀式であった。この儀式には宮司と区長、氏子総代だけが参加し、神輿人足は周囲を取り囲むようにしていた。仮屋場は御旅所^{おたびしょ}とも呼ばれ、里町のほかには尊利地町と小田屋町にある。渚の神事により、里町の浜に神輿が立ち寄ることから、両町内の浜にも神輿が立ち寄るために行われている。

⑥. 神渡しの儀式

午後 5 時 55 分、拝殿に神輿を置き、神おろしの儀式が行われた。儀式には宮司、区長、氏子総代、人足頭が参加し、人足は境内で様子を見ていた。儀式が終わると全員に御神酒が振舞われた。この時点で、宮司、区長、氏子総代は帰宅し、神輿人足が境内に残った。

祭り自体はここで終了したが、その後の後片付けが引き続き行われた。その日行われた後片付けは、①拝殿入り口のタレマクの回収 ②神輿人足のハッピーの回収 ③旗の回収の 3 つである。

神輿の飾りつけの本格的な取り外しなどは翌日 8 月 1 日の朝 5 時 30 分に神社に集合して、出勤前に済ませてしまうそうだ。午後 6 時 25 分、後片付けを終え、神輿人足も帰宅した。

11. 女性の仕事の移り変わり

ここでは、水無月祭りで女性が担っていた仕事の変化について、家庭での仕事を中心にみていきたい。

11-1. かつての祭りの状況

女性が祭りに直接的に関係することができなかったとき、水無月祭りにおける女性の果たすべき役割は、来客に対しての接待であった。とくにキリコ人足が多かった時代、ヤドモトでは人足の世話も行い、さらに来客の世話も行っていた。来客の世話には、自分の親戚や会社関係の仲間、さらには祭りを見に来た一般人も含まれる。近年では訪れる観光客がだいぶ減少したが、40 年ほど前までは観光客が大勢見物に来ていたそうだ。そのため、玄関を開放していると“トビイリ”と呼ばれる、観光客や知らない人も玄関や軒先、居間にあがってきた。このような突然の来客に対しても、女性たちは食事の世話をしていた。

11-2. 料理の変化～アカゴゼン～

現在では一般家庭でほとんど使われなくなったそうだが、少なくとも 1960 年頃（45 年以上前）まではアカゴゼンという冠婚葬祭のさいに使用した朱塗りや黒塗りの御膳がある。

これは客膳であり、人足や呼び客にたいして使用された膳であった。

アカゴゼンは食事のメインになる 5 つの椀物が乗る大型の膳と、一品料理が 4 つ乗っている二の膳の 2 つの膳で 1 セットである。大型の膳にはごはん、汁もの、オヘラ、酢の物、キザラ、刺身が乗る。オヘラには煮しめが盛り付けられる。内容は山菜・こんにゃく・豆腐・人参・インゲン・油揚げ・シイタケなどで、煮しめの具材は奇数の種類を使用して作ったそう。刺身の皿は本来セットの中に入っていないものであり、どのような皿に盛ってもよいことになっている。二の膳には、菓子椀、茶碗蒸し、ツボ、チョコの 4 つが乗せられる。

現在では、一般家庭でお客に対してアカゴゼンは使われておらず、来客にはあらかじめ予約しておいたオードブルで対応するのがほとんどであるようだ。また、来客も以前のトビイリのような人はおらず、呼び客も親戚を除いて、会社の同僚などもっぱら仕事上関係のある人が多くなったそう。

アカゴゼンが活用されていた時代には、漆器自体の維持、管理も大変であったが、それ以上に、料理の準備も相当の労力を必要とした。冠婚葬祭の場だけでの料理であっても、キリコの人足や呼び客に対してふるまわれる量だけでも、祭りの時期に女性が制約される大きな要因の 1 つになっていた。一方、現在の祭りの時期の来客に対する応対は、トビイリのような突然の訪問はほとんど無く、事前に予定されている客に対応することがほとんどである。



左側の膳

左上の皿に酢の物、左下の椀にご飯
真ん中(オヘラ)に煮しめ
右上の皿(キザラ)
右下の椀に汁物

右側の膳

左上の椀が菓子椀 左下の椀がツボ
右上が茶碗蒸し 右下がチョコ

11-3. 今と昔の女性の変化

現在では、以前にくらべ、来客への対応が軽減され、女性も祭りを見に行く時間があるそう。実際、宵祭りの会場である、住吉神社や中学校のグラウンドには、小学生くらいの子供やちいさな子供を連れた女性がいるのを見かけたし、家族で祭りを見に来ている人もいた。しかし、それでも祭りのさいの接客は女性の仕事であることに変わりはなく、祭りにあわせて帰省してきた家族や、親類、会社の同僚などの相手をするため、祭り全体を最初から見るとはなかなかできないそう。さらに、神輿・キリコの一行が家の近くを通るとき外に出て、通り過ぎると家に戻る人もいる。祭りの日は家にお客が来て、話をし

て楽しむ日として過ごす家庭もある。

ここで、女性と祭りの関わりについてまとめたい。具体的な時期は特定できないが、かつて、女性は家庭での接待が祭りの際に行う中心的な仕事であった。ところが、徐々にではあるが、地区全体の人口減少によって男性が担っていた部分の仕事が女性に巡ってくる機会が多くなり、現在では、女子中高生がオハヤシに参加し、人足として祭りの担い手の一員となっている。また、来客数が減少したため、祭りを見に出かける時間がうまれたことも時代の変化によるものだと考えられる。

12. 女性の進出

ここでは、昔は祭りに参加できなかった女性が、現在ではどのような経緯で水無月祭りに関わるようになったのか、また、女性の祭り進出について“波の華太鼓”を例に挙げてみていきたい

12-1. 女性のお祭り進出

具体的な時期は定かではないが、水無月祭りでは、女性の参加が禁止されていた。また、聞き取りによるものだが、女性は神輿・キリコに触れることすら許されなかったという話が多く聞かれた。また、オハヤシに関しても、青年・壮年男性が主な祭りバヤシ奏者で、人数が少なれば男性から不足分を集めた。そのため、女性が水無月祭りに直接的に参加できるようになったのは、南志見地区全体での人口減少によって、祭りの担い手の減少が生じてからだと推測される。つまり、女性が、ある程度であるが、水無月祭りに参加できるようになったのは、人足不足から神輿・キリコに車を付け始めた平成元年以前、少なくとも20年ほど前からではないかと思う。

12-2. 波^{なみ}の華^{はな}太鼓

“波の華太鼓”とは、今年4月に南志見地区に住む女性が発足した太鼓演奏をメインにしたグループである。現在のメンバーは8名で、全員女性である。結成理由としては、

「自分でたたいてみたかった。」や「名舟の太鼓を見て自分もやってみたいと思った。」など、自分で太鼓を叩きたいという強い意思を持つ女性がいたことと思われる。結成メンバーがすべて太鼓経験者ではなく、グループを結成して初めて太鼓のバチを握った人もいる。練習は週1回、里町にある農村環境改善センターと呼ばれる複合施設で、毎週火曜日、7時30分～9時頃まで行われている。指導にあたっているのは、現在、南志見小学校で小学生にオハヤシの指導をしている男性と、以前小学生を対象にしてオハヤシの指導をしていた男性の計2人である。

「練習はきつくないですか」という質問にたいして、

「教えてくれる人と、残りの人に申し訳ないし、次回の練習についていけないのもツライから、休めない。」という返事が聞かれた。

また、「男性が少なくなっているからこそ、女性が活気付けていく気になるのですか」と

いう質問にたいして、

「この地区を女性がひっぱっていくということは気にしていない。」

という返事が聞かれ、グループの結成理由にあるように、自分たちで水無月祭りの活気を復活させることよりも、自分たちが太鼓を叩きたいという意味があらわれていると思った。

7月12日、午前10時から南志見保育所で、波の華太鼓の演奏初披露が行われた。保育園の園児21名と保育士、観客数名の前でグループの名前が入ったハッピーを着て演奏が行われた。演奏は20分ほどであった。

「この訪問は保育園児に対して、お祭りの存在を認識させる意図があったのですか」という質問に対して指導している男性から、

「子供たちに存在を教えるためではなく、やる気があるからやっている。」

という返事が聞かれた。

また、「祭りで家の人が見れないのは(楽しめない)だめ。」

という返事も聞かれた。

さらに、「今は男性の祭りに対する意欲が足りない。」

という返事も聞かれた。

話を聞いていて、指導する男性も波の華太鼓のメンバーの、太鼓を叩きたいという強い意思が感じられるため、指導にあたっているということが伝わってきた。

同様に波の華太鼓のメンバーの責任者である女性に対して、

「男性をメンバーに入れることは考えていなのですか」という質問をしたら、

「男性をメンバーに加えるつもりはありません。皆さん何かと忙しいと思うけど、南志見地区に住んでいる男性の中には、グループ(波の華太鼓)に入ってまで練習をして、太鼓を叩きたいと思っている人がいるようには思わない。」

という返答が聞かれた。このことから、水無月祭りでオハヤシに参加している男性でも、仕事があるため、日常的にオハヤシの腕前を上達させようと考えている人はほとんどいないのではないと思われる。しかし、このことは女性にとっても同じではないだろうか。子供から手が離れた女性もメンバーの中にはいるが、子供が保育園や小学生であるメンバーもいる。練習会場に子供を連れて来てもいいそうだが、いざ練習が始まると子供の面倒を見ることはできないし、練習時間が夕飯時であることから、週1回の練習であっても、家族の理解や協力を得られないと練習に参加するのは難しいと考えられる。

一方、このような状況でも「波の華太鼓」の活動を続けようと思えるのには、やる気を維持させるものが存在するからではないか。

波の華太鼓の活動は、保育園での演奏をはじめ、8月9日に行われた曾々木、岩倉の九日祭りや、同14日に行われた南志見地区の納涼大会、このほかにも老人ホームへの慰問など活躍する場が増えている。また、岩倉での演奏では大変評判がよく、来年度の演奏も決定しているようだ。このほかの演奏会場でも、オハヤシの演奏に対しての評判が良かったなどの反響があったようだ。さらに、12月にも施設を訪問することが決定している。加えて、時期は未定だが、市からの要請で、能登空港で飛行機の着陸にあわせて、ロビーで

オハヤシを演奏することも決定したそうだ。これは、波の華太鼓のほか、能登一円に存在する太鼓を演奏する集団に対してなされる要請だそうだが、設立1年に満たない波の華太鼓が選ばれたことは、一定の評価がなされているということではないだろうか。

「今後の活動については、何か考えていますか」という質問に対して、責任者である女性からは、

「まずは、人数を増やしていきたい。保育園に子供がいるお母さんにも声をかけて、練習に子供を連れて来てもいいと言っているんだけど。」

という返答が聞かれた。しかし、実際にはメンバー獲得は難しく、やはり家族の理解がないと練習自体に参加できないことが厄介なようである。また、

「今までは、水無月祭りで演奏される祭バヤシだけが、演目であったが、来年からは創作太鼓にも挑戦していきたい。当初は太鼓に対して素人であったが、練習して場数をこなしていくことで、多少だが技術を身につけられた。だから今後は祭りバヤシだけではなく、波の華太鼓オリジナルの演目を作りたい。そのためには、自分たちの設備の充実が必要だと思う。シャンギリ(カネ)は新しいのを買ったけど、今、練習では太鼓を1つしか使えないし、革がゆるんでいい音がでない。創作太鼓には、太鼓1つじゃ足りないけど、太鼓自体は高価だから手が出ないし、革をはるのもお金がかかる。だから、竹を切ってきて叩く練習をすることも考えている。他の町の話だけど、婦人会が太鼓集団を作っていて、そこは創作太鼓をやっているんだけど、そこは町ぐるみで支援してもらっている。」

という返答が聞かれた。

現在、メンバーの中にはオハヤシのフエのパートを演奏できる人が1人もいない。そのため、オハヤシのフエのパートを練習することも課題であるが、そのほかに、自分たちオリジナルの演目を作っていきたいそうだ。しかしそのためには、波の華太鼓の設備の充実が欠かせないようで、工夫して練習環境を改善しようと試みている。そのため、波の華太鼓が今以上に活躍の場を広げることができれば、地域をあげて波の華太鼓を後押しするという行動につながる可能性は十分にあるのではないか。

今年の4月に誕生した太鼓集団がこれほど活躍の場を広げられたのは、メンバーの十分なやる気と、熱心な指導の両者が備わったからではないだろうか。波の華太鼓が新たな活躍の場を見つけるためには、解決しなければならない問題がいくつか存在することも事実である。しかし、メンバーの中には解散しようという意見はなく、問題を解決するにはどうすればよいのか、という問いに答えを探しながら練習に励んでいる。加えて、訪問先での反響の良さ、空港での演奏、まだ数は少ないが定期的な訪問依頼など、少しずつではあるが実績を得ているのも事実である。今抱えている問題に対する答えは、波の華太鼓としての活動によって得られる実績によって、南志見地区で“波の華太鼓”としての市民権を得ることによって、1つずつ解決しうるのではないかと思う。

13. 考察

ここでは、人口減少や高齢化など、時代の変化にともなって、祭りの中にどのような変

化が生じてきたのかをみて、その変化が水無月祭りにどのような影響を与えているのかということを考えていきたい。また、名舟で行われる御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}(名舟大祭)との比較から、水無月祭りのこれからについて考えていきたい。

これまで見てきたように、水無月祭りは、準備から本番までに様々な過程を含んでいる。まず、その年の祭りの内容を、前年度の内容を踏まえた上で決定する祭り相談が行われる。次に、祭りの下準備といえるバンバナギを行い、神社や仮屋場などで使用するシメナワ、柱松明の綱を準備する。また、中学校グラウンドのお仮屋や、海岸の柱松明を設置する作業も行われた。加えて、キリコのヤドを決定し、キリコを立てる作業も行われた。こうして祭りの準備が終了し、本番を迎えることができるのである。

祭り本番では、男性はもちろんのこと、小中学生や女性が祭りの人足としてオハヤシの演奏や神輿・キリコの人足として参加していた。オハヤシの演奏では、小学生と年配者が一緒に演奏する姿も見られた。

深夜 0 時 30 分過ぎには、宵祭りが終わり、キリコが各町内へと帰っていき、解体された。一方、グラウンドではお仮屋に安置された神輿と御神灯の見張り番であるお仮屋番が、翌 31 日の午後まで待機していた。

このように、人々の結束を保つ場としての機能を果たす水無月祭りにも、時代の移り変わりにともなう変化が生じている。大きな変化として、人口減少と高齢化による、男性の祭り人足の減少である。時代を特定することができなかったが、以前は水無月祭りに女性は参加できなかった。しかし、現在では男性の労働力が減少し、神輿・キリコに台車が着いた。

このほか、子供たちの祭りへの参加の過程にも変化が生じている。昔の子供たちは、大人の労働力が十分で、参加する機会に恵まれず、一部のオハヤシの上手な子供が祭りに参加できた。そのため、参加するための競争意識が存在し、選ばれることは名誉なことであった。しかし、現在の子供は、小学校から授業の一環として祭りバヤシの練習が強制的に行われ、以前と比べて、祭りに参加できる機会に恵まれているのである。このことが、競争意識や、参加への名誉などの意識の欠如につながり、祭りにおける活気の低下につながっていると考えられる。

その一方で、神輿・キリコの人足やオハヤシの奏者として、祭りに女性の参加がさかんに見られるようになったことも、時代の移り変わりによって生じた祭りの変化といえる。特に、女性の祭りへの進出は、今年発足した、女性だけの太鼓集団である“波の華太鼓”の誕生にも影響していると思われる。水無月祭りへ女性が参加するようになって、南志見地区で女性と祭りとの接触が認められるようになった結果が、この波の華太鼓が南志見地区に誕生するのに不可欠な土台であると考えられる。

ここまで、水無月祭りの果たす機能と、時代の移行によって生じた、祭りの変化についてみてきた。ここからは、水無月祭りと御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}(名舟大祭)との比較を行い、水無月祭りが、時代の移り変わりで生じた変化の中で、地区の人々から聞かれるような、以前の活気や威勢が復活するには、どのような方法があるのかについて考えてみたい。

御陣乗太鼓(名舟大祭)とは、南志見地域を構成している 13 町の一つである、名舟町で行われている祭りである。名舟町の位置は図 2 を参考にしてほしい。

この祭りは、舳倉島にある奥津比咩神社に祀られている神を、名舟漁港近くの、海中に建っている鳥居まで船で迎えに行くという祭りであり、その際に、御陣乗太鼓が演奏される。現在の御陣乗太鼓(名舟大祭)は 7 月 31 日と 8 月 1 日に行われ、水無月祭りと開催日が重複している。

御陣乗太鼓(名舟大祭)は、名舟町の祭りであり、水無月祭りほど神輿・キリコの数はいくつか少ないが、人足が担ぐことでキリコが走ったり、揺らされたりなどの、躍動感が伝わる祭りである。また、御陣乗太鼓自体も、達磨や夜叉などの仮面をつけた男性が 2～3 人、また 5～6 人で太鼓を打ち鳴らし、演奏の合間には“見栄を切る”という、演技も取り入れている。これらの工夫が観客に対して荒々しさや、勇壮さ、または恐怖感すら伝えている。

一方で、水無月祭りの威勢や活気のなさは、祭り人足が不足していることも要因ではあるが、主な要因として、地域の担い手である子どもたちから、祭り参加に対する競争心や、名誉などの心情が失われるという、祭りに対する意識が変化していることがあげられるのではない。

水無月祭りだけではなく、現代の祭りやその他の年中行事に関して言えることであろうが、人々の生活環境の変化により、祭りや年中行事に対する関心が薄れ、日常生活に占める、祭りやその他の行事の重要性が薄れていると思う。祈念という概念自体が、現在の生活から抜け落ちてきているのではないだろうか。しかし、その一方で自己に対して利益が望めるものにはすがろうとするのも、現代人の神仏の捉え方といえるのではない。自分が望む事柄については祈願をし、用事のない時は意識すらしない、という対象として神仏を捉えているのではない。この意識変化が、新年から夏までの半年間にたまったケガレを払い、残り半年を、健康に過ごせるようにという、水無月祭り本来の意義を失わせた。そして、この大きな土台を失った祭りへの意識も変化し、従来の水無月祭りが有していた、威勢や活気が失われたといえるのではない。このような意識の変化は、現代の人々に共通して言える事柄であるが、特に次世代を担うべき子供たちに強くあらわれる傾向にあるといえるのではない。

その一方で、“祭り”に対して観光の側面から有用性を見出すことも現代の傾向であるといえる。このことから、御陣乗太鼓は現在、輪島市の観光地としての位置をある程度意識した祭りとなっているのではない。しかし、それとは対照的に水無月祭りでは、祭りをを行う地域規模が御陣乗太鼓より大きいため、人口の減少や高齢化の影響が強く、また、人々の生活と祭りとの乖離が顕著に現れてしまい、観光を意識した水無月祭りを再構成するのが遅れてしまったのではない。

現在の水無月祭りが活気や威勢を取り戻すためには、まず、世代を担う子どもたちの、祭りに対する意識を変化させる必要がある。祭りに参加することは、名誉であり、水無月祭りに対して、自分たちが担っていくという自負心を養うことが求められる。加えて、地域の人々が、水無月祭りが本来有する意義を再認識することも必要である。また、精神面

的な事柄だけでなく、実際に人目を惹きつける要素を組み込む必要もある。御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}のように、キリコに躍動感を求めることは、南志見地域の現状からすると困難と言わざるをえない。そのため、女性太鼓集団である“波の華太鼓”の活動に注目したい。

波の華太鼓については 12 章で詳しくふれたが、南志見地区以外の老人ホームやお祭りに慰問もしくは招待を受け、素晴らしいという反響を得たそうだ。今後の活動として、能登空港での演奏が決まっている。そのほかに、創作太鼓の練習を始め、自分たち独自の演奏を作り出そうとしている。この波の華太鼓の活躍が、水無月祭りに新たな活気を生み出す起爆剤となるのではないかと思う。

一般的に祭りにおける太鼓演奏とは、御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}のように、観客を魅了するような、荒々しく勇壮であることが求められていると思う。また、水無月祭りと御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}では、開催地も時期もほとんど違いがない。そのため、比較の対象になりやすい状況を利用し、両者の差異化を図るのが、水無月祭りに活気を取り戻すことにつながるのではないか。そのためには、波の華太鼓のメンバーが目指す独自の創作太鼓では、水無月祭りに活気を取り戻すために、荒々しさも必要であるが、その一方で、御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}との区別化のため、女性だけの演奏集団としての“波の華太鼓”らしさが必要となってくる。

波の華太鼓のメンバーが創作太鼓を行うためには、女性メンバーが不足していることや、太鼓などの設備が不十分であることなど、改善しなくてはならない問題がある。しかし、南志見地区の子供たちを含めた人々が、祭り本来の意義を再認識し、女性太鼓集団“波の華太鼓”のメンバーが、自分たちの特色を発揮できる創作太鼓を生み出すことで、水無月祭りと御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}(名舟大祭)という、一方は輪島市の観光地であり、もう一方は現在、活気が失われてしまった祭りという、両者の対照的な位置を打破することが可能なのではないか。

以前は女性が参加禁止であった水無月祭りも、時代の趨勢によって近年では、女性が祭りの担い手として参加している。また、今年 4 月から発足した太鼓集団である“波の華太鼓”が目指している創作太鼓によって“水無月祭り”らしさ、もしくは“波の華太鼓”らしさを押し出すことで、場所も近く、開催時期もほぼ同時という、御陣乗太鼓^{ごじんじょうたいこ}(名舟大祭)との関係を利用し、異なった特徴をもつ祭りとして比較されることで水無月祭りは新たな可能性を見出すことができるのではないだろうか。

謝辞

本稿を記す際に、南志見地域の方々には大変お世話になった。ある日突然、祭りについて教えてほしいと訪ねていき、それ以後、仕事の合間をぬって祭り全般についてたくさんのことを教えてくださった神社の宮司さんとそのご家族。南志見地域で泊まる場所を探していて、いきなり泊めてほしいというお願いに、いろいろ面倒をみていただいた公民館の方々。バンバナギの前日からお世話になり、バンバナギ当日はほぼ一日中一緒に行動していただいた南志見地区区会長さんとそのご家族。祭りや地域の歴史、小学校への紹介をしてくださった、里町の区長さん。祭りバヤシやバンバナギの際にお世話になった、Mさん

と波の華太鼓のメンバーの方々。フエについての説明をしていただいたNさん。小学校での練習の見学許可をしていただいた校長先生。店に来るお客さんに話を聞かせてもらった、Aさんやそのとき知り合った二人のKさん。その他、地域の多くの方にお世話になり、調査をすることができました。南志見地域のみなさんに、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

補足

ここでは、南志見地区の人口について参考資料を提示したい。

1. 南志見地域の人口

ここでは、図1で示したグラフの人数と、南志見地域の五か村の世帯数を1970年から、5年おきに示している。

表4. 人口の推移

年度	男子	女子	世帯数	合計
昭和45年	1061	1144	508	2205
昭和50年	968	1083	507	2051
昭和55年	923	995	501	1918
昭和60年	816	930	493	1746
平成5年	727	840	465	1567
平成10年	675	784	460	1459
平成15年	610	718	447	1328

表5. 五か村の世帯数の推移

町内/年度	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成5年	平成10年	平成15年
尊利地	44	44	44	40	38	40	35
小田屋	64	63	63	63	64	62	63
里	93	93	94	98	94	94	90
忍	13	13	13	9	8	10	8
東山	28	26	26	26	21	21	20

参考文献

小倉学, 1978. 『能登・輪島市 南志見の水無月祭り』

石川県輪島市里町南志見住吉神社 83p

渋谷利雄, 藤平朝雄, 1999. 『能登キリコ祭り』 せいしん社 pp50-68

輪島市南志見21ビジョン策定委員会, 1995.

「輪島東部地域振興計画書(南志見編) みらくる村」 44p

輪島市役所市民課調べ 年齢別人口集計表

第2節 市の坂の獅子舞、存続と現状

崎 川 夏 耶

1. はじめに

市の坂^{いちさか}は輪島市の南部に位置する農村部である。ここでは位置の坂の伝統的な行事である獅子舞について報告する。『日本民俗辞典』によれば、獅子舞は一般的に農村地帯で五穀豊穡・無病息災を祈願して踊られている行事である。しかし、近年では農家が減少傾向にあり、また高齢化や過疎化も進んでいる。このような変化が進行しつつある農村において、獅子舞はどのように残されているのかということに焦点をあてて、獅子舞に携わっている人たちの聞き取りを中心に調査を行った。

本章ではまず、市の坂の概略を述べ、獅子舞の概要、獅子保存会、獅子舞の演目、練習、祭り当日、後片付けの順に説明をする。そして、獅子舞のあり方がどのように変化してきたかを考察する。



【http://map.biglobe.ne.jp/cgi-bin/search_map.cgi】

図．能登半島の地図と市の坂の位置

2. 市の坂の概略

	世帯数（戸）	男（人）	女（人）	合計（人）
市の坂	80	129	150	279
洲衛 ^{すゑ}	51	78	78	156
小泉	30	40	43	72
内屋	25	31	37	68
三井地区総計	1130	1216	987	2203

表1．三井内で獅子舞が行われている地区の人口

市の坂は、輪島市^{み い}三井町の中の地区の一つである。三井は上三井^{かみ}と下三井^{しも}がある。上三井はさらに小泉、漆原^{うるしはら}、新保、細屋、内屋、洲衛^{す え}、坂田がある。小泉と漆原は合併したので、合わせて小泉漆原と呼ばれる場合もある。下三井は長沢、興徳寺、中、渡合^{と あい}、本江、仁行、与呂見がある。仁行はさらに、上仁行と下仁行がある。この下三井では獅子舞は行われていない。三井にある4つの獅子舞は、すべて上三井にあり、市の坂・洲衛・小泉・内屋で現在行われている。表・1を見ると、4つの地区の中でも市の坂が一番人数の大きな地区ということが分かる。

3. 市の坂の獅子舞の概要

ここでは、市の坂の獅子舞の分類と現在の状況を述べる。

3-1. 獅子舞の型

獅子舞は大きく3つの型に分けられる。一人立ち獅子、二人立ち獅子、百足獅子である。一人立ちの獅子は、舞手が一人で頭に獅子頭をいただいて踊る。二人立ちの獅子は雌雄二頭が一对となって踊るものもあるが、百足獅子のように数人が入って踊るものもある。百足獅子は、その名の通り数人以上の人間が胴幕の中に入って踊るものである。市の坂の獅子舞は胴幕の中に4人が入るので百足獅子となる。さらに、市の坂も含めて能登獅子は、富山県の氷見獅子の影響を受けている。その特徴として、①百足獅子であること②囃子^{かづね}に鉦（市の坂では「シャギリ」と呼ぶ。）を用いるということ③獅子に対しての踊り手がまるで舞のような柔らかな動きであること、という以上三点が挙げられる。また、市の坂の獅子は雌獅子で大変珍しいということだが、獅子頭の雄・雌の見分け方の資料がなく、確認はできない。しかし、市の坂の獅子は昔から「雌の獅子である」ということは、誰もが認識していた。もう一つ市の坂の獅子頭の特徴として、獅子が「ナンバ」を噛んでいるということも挙げられる。そのため口の開閉はできない。この獅子頭の特徴は小泉と内屋でも見られる。洲衛は開閉が可能である。

（参考資料 佐伯安一 『富山民俗の位相』、1982.『日本民俗辞典』、鷹田義一 1990.『獅子舞史考』）

3-2. 市の坂獅子舞の由来

市の坂の獅子舞の由来はさまざまな説があるが、現在は使わず保存してある古い太鼓に「天保」の年号が書いてあり、少なくとも「天保年間」、あるいはそれ以前から続いているのではという話も聞かれたが、真偽の程は定かではない。さらに、市の坂の舞の一つに「チョンコヤッサ」という道中舞がある。詳しい舞の説明は後述する。この「チョンコヤッサ」は、昔、戦国武将が能登の国に攻め入り、市の坂村に差しかけたとき、お宮にいた村の天狗が獅子の上に乗って扇子を振りかざしたところ、急に武将の馬が動かなくなった。やむなく武将は馬から降り、歩いてこの村を通り過ぎた、との言い伝えがある。その伝えから、獅子舞がこの場所を通るとき、天狗は獅子の上に乗って白扇子を振りかざして

通る慣わしがあり、今でも春の祭りの際に八幡神社の鳥居から拝殿までの間を「チョンコヤッサ」で登っている。昔は、「チョンコヤッサ」は「トッコンジシ」と呼ばれ、場所も今の神社ではなく、言い伝えの武将が歩いた道を通っていたということである。この道は村の中心に位置していたが、現在はない。

3-3. 現在の状況

市の坂の獅子舞は獅子保存会の人たちによって運営されている。保存会は 20 代後半の人から 70 代前半の人まで、約 25 人の人が入っている。その中でも常時出てくる人は 15 人ほどである。仕事の都合で祭りの当日しか来られない、という人もいる。獅子に入って獅子頭を持って踊ったり、囃子をしたりしている。踊らずに役職だけ、という人もいる。さらに踊り手の子供が 10 人。幼稚園児から中学生まで踊っている。本来は小学生までなのだが、今年は五、六年生がいないため、特別に中学生が他の子供たちより少し多目のお小遣いをもらってバイトという形で踊ることになっている。最近まで女子の参加はなかったが、2 年前に初めて女の子も二人加わり、現在でも踊っている。

保存会の役職は、会長 1 人、副会長 2 人、会計 1 人である。副会長は青年団団長が当て職（青年団団長になると自動的に保存会副会長となる）で兼任しているので、実際は 3 人である。古い者と新しい者から、という考え方で今のようになった。青年団に入っている人は全員保存会に入ることになっている。役員は新年に集まって話し合いで決まる。決まりはないが、だいたい年功序列で決まっていく。

市の坂では、獅子頭を『カップパン』、獅子の胴の部分を『カヤ』という。獅子頭を持つ人を『カップパン持ち』と呼んでいる。獅子を踊る人たちは 20 代から 40 代の人を中心である。獅子に対する踊り手の子供たちは『天狗』と呼ばれている。音を担当する人たちは『囃子』と呼ばれる。囃子は横笛と太鼓と『シャギリ』がある。シャギリとは直径約 25 センチ、深さ約 5 センチの鉦（かね）のことである。囃子方の基本は、笛が 3 人、太鼓が 1 人、シャギリが 1 人となっているが、ステージなど広いところで演じる時は、太鼓を増やすことがある。

4. 獅子舞保存会について

獅子舞は昭和 30 年ぐらいまでは青年団が仕切っていた。しかし、若い人が少なくなって経費もかさみ、一度村（市の坂）に預けた。それから、年配の人でも入りやすいように保存会という名前でやり直して、現在に至る。保存会は、勤めている人なら誰でも入れるし、いつでも辞めることができる。だいたい孫が天狗を始めたり、息子が獅子を踊るようになると保存会から身を引くものである。

保存会の運営は、役員が受け持つ。会長は、練習などの日程の相談と連絡、練習の際の集会所の鍵の管理、出演の依頼が来たときにはその窓口になるという事が主な仕事だ。副会長は会長の補佐で、具体的な仕事はない。会長が都合の悪いときには、代わりに会長の仕事をする。会計はお金の管理全般を受け持つ。お祭りで花が出れば、会計が集めてまと

めて管理をする。

保存会の運営費は、主に地区からの補助金とお祭りの際の花でまかなわれている。そこから、子供たちへのお菓子とジュースとお小遣い、練習の後の大人の飲食代などが出される。その際のお金の管理もすべて会計が受け持つ。子供たちのお菓子などの買出しも、会計が担当している。少しずつ積み立てて、衣装を新調したり、カヤを直したりする。

5. 市の坂の獅子舞の演目

演目は8種類あって、それぞれ今獅子と昔獅子の二種類に分けられる。なぜ「今」と「昔」なのかは伝えられていないが、今獅子は穴水の比良というところから伝えられ、昔獅子は門前町の空熊というところから別々に伝えられたと言われている。おそらく、昔獅子の方が先に市の坂へ入っていて、今獅子が入っていく時に区別のためつけられたのでは、と推測される。さらに、今獅子と昔獅子の他に正式の演目には入らないものが二つ(⑧、⑨)と、今獅子にも昔獅子にも分類されない踊りが一つ(⑩)となっている。

昔獅子	① 京振り ② 七五三 ③ 八ツ振り
今獅子	④ 二本棒 ⑤ 宮心棒 ⑥ マサカリ ⑦ ヨッサキ
その他	⑧ バーカリ ⑨ チョンコヤッサ ⑩ 加藤清正

表2. 獅子舞の演目

5-1. 道具の説明

昔獅子で使われる道具はすべて同じ「一本棒」という道具。「一本棒」は棒の先端に刃に見立てた銀の色紙が巻いてあり、その刃と棒の境目部分に色とりどりの紙が総ふさにして付けられている。この総で刃の部分が見えないようになっている。小さいものと大きいものがある。「ヨッサキ」は総から完全に刃が出ている。演技のなかでも突く動作が多い。「二本棒」は棒の両端に総が付けられているもので、二本一組で扱う。「宮心棒」は日本刀であり、道具の中では一番長い。マサカリは斧に似た道具である。小さい子供が踊るためか、道具の中では一番小さい。

5-2. 演目の説明

昔獅子は総じて難しいと言われ、昔は中学生が踊っていた。曲の出だしをよく聞かなけ

ればならないし、身軽にジャンプをすることもあるので、小さい子には厳しい。さらに、今獅子は2分を超えるものが無いのに対して、昔獅子はおおむね2分30秒程かかる。なかでも①の京振りは3分近くかかる。今獅子は昔獅子に比べて短い曲が多い。踊りはすべて似ている部分が多い。

①の京振りが曲も長く、難しいので高学年の子が踊ることになっている。今年は例外的に中学生の子が踊っている。理由は概要の記述の通りである。京振りは、片足で跳ねつつ獅子との距離を測ったりするような場面もあるので、見えても難しいことが分かる。五、六十年前は天狗面をつけて踊っていた。⑥のマサカリは、すべての踊りに共通する手の持ち替えや足の上げ方などの基本的な動作が組み込まれた踊りなので、主に一番小さい子供や習いたての子が踊ることになっている。本当は難しい踊りということだが、これを覚えてしまえば他の踊りに応用がきいて踊りやすくなるということで、最初に教える。長い目で見れば効率的であるということだ。今年は子供4人で踊っていたが、理想は一つの演目に一人ずつなので、今年は例外的なやり方で行ったことになる。

⑧のバーカリは演目と演目のつなぎのようなもので、全員で獅子と次に踊る天狗の子の周りを曲に合わせて道具を左右に振って回る。演目の最初と最後に踊ることもある。語源は「場をかりる」からきていると思われる。⑨のチョンコヤッサはお宮へあがるときの道中舞である。獅子の上に天狗が乗って日の丸のついた白扇子を右手に、刀を左手に持って、囃子に合わせて扇子を仰ぎながら境内までの道をあがる。ゆっくりとした曲なので、カヤの中で天狗を乗せている人や天狗の足を支えている人は慎重に足並みを揃える。⑩の加藤清正は、加藤の舞、太刀踊りとも呼ばれる。加藤、と短く呼んでいる人もいた。大人2人が面とカブリをつけて刀を持って踊る。この踊りには台詞があり、秋祭り前日のイベント時には前座のような役割を果たしていた。この踊りでは、加藤清正と但馬の守が刀でチャンバラ（切り合い）をしている間に獅子が割って入る、というものであり、獅子の登場を示す意味もあると考えられる。昔は普段の祭りでも踊られていて、見に来る人も多かったため、踊りでは刀で周りを円で囲む動作があるが、それは人を除けて「今からここで獅子をやるぞ」ということを示して騒いでみせ、場を盛り上げるという意味合いがあった。現在は普段の祭りでは踊らない。

5-3. シシゴロシ

昔はやっていたが、何十年も前にしなくなった。その理由の一つは、大人が中心の踊りであり、戦争で男性がいなくなって、学ぶことができなくなったためであると言われている。二つ目の理由に、演技時間も30分から一時間と長いので、子供や見に来ている人たちも飽きてしまうためやらなくなったとも言われている。興味深いのは、「獅子を殺してしまったら来年またできなくなってしまう」というこじ付けのような話があることである。建前と言い訳だと語ってくれた本人も笑っていたが、シシゴロシをしない理由としては筋が通る気がした。

6. 獅子舞の練習

祭りの一週間前から始まる。場所は村の集会所である。時間はだいたいの目安で決められているだけで、日によってばらつきがある。

19：15	会長が集会所の鍵を開ける。少しずつ人が集まり出す。
19：37～	練習開始。はじめは少人数であるが、徐々に集まってきて演目を一通り行う。
20：08	休憩が入る。
20：20 頃	練習再開。
21：58	練習終了。子供たちにはジュースとお菓子が出る。



練習の様子

練習では獅子頭は持たず、座布団を獅子頭に見立てて使う。これは獅子頭が重いというのも理由ではあるが、第一に獅子頭が傷まないようにするためである。昔は桶やざるを使ってやっていたこともあったという。カヤに入る人たちはカッパン持ちの人の後ろについて自分の踊り方の確認をしながら練習する。多いときは 7, 8 人の人たちが後ろに連なって所狭しと練習をする。練習時にはカヤは使わない。しかし、本番でカヤを使う際には気をつけなければならないことがある。カヤの部分は獅子の胴に当たるところなので、布がたるんでへこみができると不自然なので、カヤに入る人たちはお互いの距離を測りながら踊る。練習時にも、お互いあまり近づきすぎないように注意しているように見えた。カッパン持ちの人については、獅子頭の振り方には個性が出るので、一人一人自分の振り方というものを持っている。中には強いこだわりを持って振る人もいる。さらに、それぞれ得意な踊りというものを持っていて、できるだけ得意な演目で獅子頭を振れるように割り振る。しかし、囃子の笛や太鼓に合わせて獅子頭の顔を前に向けての決めの動作は、全員が気をつけなければならないことである。さらに、獅子頭は顎を見せるようにすること、で

きるだけ下を向かないようにすることが獅子らしくするコツで見栄えも良くなるということだ。練習の際には、一曲終わると子供たちの指導とは別に、カップン持ちの人やカヤの人たちにも指導がされることがある。年配の人から若い人へ言うこともあれば、若い人同士で意見を言い合う事もある。

6. - 1 練習での指導

天狗の子供たちの横で、一人お手本になる人（Aさん）がいっしょに踊っている。教える役が一人なのは、複数で教えるとどうしても一人ひとり教え方が違ってしまい、そうすると覚える子供は混乱するので何年も前から代表して一人が教えているということだ。演目が終わるごとにAさんから子供に指導がある。周りからも踊っている途中でも「もっと足上げま！」という声がかかることもあるし、時には終わった後に「上手になったな」と褒めるようなこともある。

Aさんから子供への指導の際の特に気をつけている事や留意点を聞いた。Aさんが言うには、小さい子供たちは踊れなくてもいいからとにかく音を聞かせて、その場の雰囲気慣れさせることが重要だという。子供は音さえ覚えてしまえば、あとは基本を教えるだけで覚えていける。さらに、今年はマサカリを踊る子達が似たような年齢である事もあるが、子供同士のライバル心を刺激してやって、闘争心を育てる事が大事なのだという。高学年の子への指導は、小さい子供への指導とは違う。小さい子なら失敗しても許される面があるが、小学校4年生以上の高学年になると、上手いのは当たり前、踊れて当たり前になるので、見に来ている人を意識させて『見せる』踊り方を教えるようにする。もう一つ、これは子供全員に対しての留意点だが、子供には平等に接するよう気をつけている。

練習時にも父親・母親・姉弟・祖父母ら家族が見に来ていることもあった。練習を見に来るようになったのはごく最近のことで、それまでは関わるようなことはなかったという。集会所が建つ前は、区長や獅子の親方（現在の会長）の家の土間や庭先で練習していたので、人様の家へは見に行きにくかったということも考えられる。

子供たちの練習は一時間半ほどで、9時前には終わり、帰宅する。その後大人は慰労をかねた、反省会をする。練習の後みんなで飲む酒が楽しみだとほとんどの人が言っていた。今回は、秋祭り前日の輪島市内のイベントで、市の坂の獅子舞が披露される予定だったので、その打ち合わせがされたりした。さらに、そのイベントで加藤清正が踊られるので、その練習も子供たちが帰った後に行われた。イベントの前日（練習最終日）は、ステージでの礼の仕方や並び方、待つときの体勢などを念入りに確認していた。

6-2. 踊りへの具体的な指導内容

以下、Aさんから伺った指導の内容をまとめる。

踊り全部に共通することは、頭と天狗が直径1メートルの円の中におさまるように踊ることである。跳ぶ動作が多いと、位置があっちこっちと動いてしまうので、よくない。あとは自分の扱う道具の本来の使い方を教えることである。例えばマサカリは林業や農業と

関わる道具である。振り方一つにも、その道具の使い方の動作が関わる。木を切るにはどうやって切るのか、どこに力を入れたら切れるのか、ということを教える。宮心棒は刀なので、ただ振り回すだけではだめで、大きく振りかぶって体全体で体重を乗せて流れるように、切る時には切る、突く時には突く、という動作一つ一つを丁寧にする。二本棒は色とりどりの総で目をくらませながら、華やかな感じに踊る。ヨッサキは突くことが基本の動作で、色とりどりの総が槍を隠して、その間に獅子の喉を突くのだという。昔獅子で共通する一本棒もヨッサキと似ていて、色とりどりの総で刃を隠して、華やかに見せながら油断させておいて突く。これは『突く』動作と『華やか』に見せる動作とが合わさった、いわば踊りの集大成である。指導する側にとっても子供へ対しての指導が厳しくなるのではと思われる。

7. 獅子舞の準備

以下の準備の様子の説明は、前日のものである。今回は、前日に輪島市内で行われる記念式典への招待があったため、本来なら祭り当日の午前に行われる準備が、前日にほぼ終わっていた。市の坂の獅子舞はよくこのような招待を受けることがある。山梨県や滋賀県などへも招待を受けて行った。招待されればできるだけ行きたいと、会長も言っていた。このような遠征でも子供たちの母親が同行することはないという。母親に心配ではないかと聞いたところ、自費で行かなければならない事と、心配するような小さい子供たちは父子での参加がほとんどなので父親がいるため心配はない、という事であった。必要最低限の遠征の費用（宿泊費や移動用バス、食費など）は輪島市から出る。

前日は午前8時過ぎに集まって、道具やわらじの確認と獅子にカヤをつける作業が行われた。道具はあまりにも傷んでいたら直す。この日直したのはヨッサキ一本のみであった。緑・紫・赤・白・青・黄の長方形の色紙を二枚ずつ重ねて約5センチを残して切り込みを入れる。その切らなかった長い辺の部分を槍に巻いてテープで留めて紙を広げて完成である。わらじは角結びをして、赤い紐を通す。その際、できるだけ同じ長さ・同じ太さの紐を選ぶ。朝早くから作業に参加していたのは、6人ほどでほんの小数であった。その中の3人が若手の人で、年配者任せにしない、若い人たちの熱心さと律儀さが伺える場面であった。

獅子頭は前日の練習が終わってからカヤを付けて、その状態のままカヤを広げて集会所の畳の上に置いておく。広げて置くのには、カヤを乾かすためである。



わらじの角結びの作業

8. 秋祭り当日

秋祭りでの道順は、まず八幡神社から^{とうもと}当本（当本というのは祭りの宿になる家のことを指す）の家に行き、鳥居と御神木しかない権現神社へと向かい、最後にまた八幡神社に戻って終わりとなる。昼の12時前後に集会所に人が集まり出し、おのおの着替え始める。

子供たちの衣装は、色鮮やかな着物に、鉢巻・脚絆・もんぺ・白足袋・わらじである。正式な衣装では花笠を被るというが、省略された。年少の子供たちの着替えは大人が手伝う。親子で参加しているところは、父親が着せていることもあった。一人だけ母親が手伝いに来ていたが、着替えを手伝った後はすぐに帰って行った。年長の子は途中まで自分で着替える。最後、着物をたすきがけにする段階になると、大人でも数人しかできないので、その人たちのところにみんな集まって行く。赤と黄色の長い紐を持った子供たちが列になって順番を待つ。七五三・八つ振り・京振りを踊る子達は、最後に「カブリ」という長い髪の毛が付いたものをかぶる。このカブリは硬い素材でできているので、踊っている最中などに目に入ることがあると、とても痛いという辛い事情が聞かれた。

獅子を踊る人の衣装は、脚絆・白い長袖のシャツ・紺の股引・赤の前掛けに水色の帯をまわして、草わらじを履き、頭に豆絞りをしめた姿である。赤の前掛けには下の裾に鈴が付いていて動くたびに音が鳴って華やかである。囃子方は平服の上に獅子とは違う丸い紋が入った赤い前掛けに水色の帯をまわして、上から^{はっぴ}半被を着て^{きやはん}脚絆をつける。花笠を被ってわらじをはくのが正式なのであるが、祭り当日では省略され、花笠は被らず豆絞りのみで、わらじも履かずに普通のスニーカーなどであった。



準備の様子

8-1. 神社での神事

八幡神社で神事が行われる。例年より少し早めの開始だという。御神灯に火が入れられ、宮司の言葉で神事の開始が知らされる。お払いや玉串奉奠^{たまぐしほうてん}などがある。玉串奉奠では、氏子総代、区長、当本、自警団団長、青年団団長、婦人会会長に続いて獅子保存会会長も神前に玉串を捧げる。

8-2. 当日の獅子舞の流れ

12:00 過ぎ	集会所に人が集まり出して、まず大人から着替え始める。
12:30 頃	子供も着替え始める。
13:00 頃	だいたい全員の子供の着替えが終わる。
13:30 頃	大人の着替えも終わる。 子供はトラックの荷台、大人は徒歩で八幡神社まで移動する。
13:56	神社で神事開始。
14:30	神事が終わって、獅子が先導して神輿が出発する。
14:45 頃	当本のに到着。 マサカリ・二本棒・八つ振りが踊られる。間にバーカリ。
15~20 分、休憩。当本のに料理が振舞われる。	
15:15	七五三・宮心棒・ヨッサキ・京振りが踊られる。
15:30 頃	道が T 字になっているところへ移動する。近くの老人ホームのバスが来ているので、その前まで。 マサカリ・宮心棒・八つ振りが踊られる。間にバーカリを踊る。
15:35	権現神社へ移動・到着。
15:45	権現神社に到着。
15:50 頃	御神木の前で神事開始。
16:00 前後	七五三・二本棒・ヨッサキ・京振りが踊られる。間にバーカリを踊る。

15～20 分、休憩。周辺地区の当番から料理が振舞われる。その後、移動する。	
16：30 頃	津九田 ^{つくべた} へ到着。 七五三・二本棒・マサカリ・八つ振り・宮心棒が踊られる。間にバーカリを踊る。
16：45 から 20 分間休憩。	
17：05	ヨッサキ・マサカリ・京振りが踊られる。間にバーカリを踊る。
17：15	移動。八幡神社へ戻る。 子供はトラックの荷台、大人は徒歩で移動する。
17：30	八幡神社到着。 神事が行われる。 獅子舞の人たちは、随時集会所へ帰る。
18：00	だいたい着替えも終わり、各々帰宅。 数人の人が残って軽い慰労会がされる。
20：30 頃	最後に残っていた人も全員帰宅。

移動の時は、囃子・天狗・獅子・神輿の順に行く。移動の最中にも囃子は鳴らし続ける。神輿には滑車が付けられていて、十数人ほどで引く。引き手は当番制で、地区を半分に分けて順番に回していく。その際、獅子に出る人はできるだけ避けることになっている。

獅子の人たちへは当本の家と権現神社と津九田で振る舞いの料理が出る。この出される料理は「煮しめ」という。煮物でなければならないという決まりはなく、今年是有名な韓国料理の「チヂミ」を出した人もいて、なかなか好評だったようだ。当本や権現神社ではちゃんとしたご飯が出されるが、津九田では軽いものが出される。子供たちにはお菓子が配られる。保存会の人たちは子供たちにとっても気を配っていて、子供に全員お菓子が行き渡ったかを何度も確認する声が聞かれた。さらに、移動でたびたびトラックが使われ子供が乗せられる理由は、祭りは午後いっぱい、辺りが暗くなるまで続くというかなり長い時間がかかり、小さい子供たちにとって踊る場所から場所への移動が一番疲れるそう。そのため、少しでも子供への負担を減らそうという事でトラックが用いられる。そうしたことで子供たちへの配慮が窺える。秋祭り当日は、練習の成果を示す「本番」であると同時に、新しい事に挑戦する「練習」の場でもある。春の合社祭りとは異なり村祭りなので、ほとんどが知り合いで少しの失敗は大目に見てもらえるという気安さからだ。普段は尻尾を振った事がない人を尻尾に回したり、獅子頭をあまり振ったことがない人にも振らせてみたりと、本番ではあるけれど気負わない緊張感を持ちつつ踊れる気楽さが窺える。



当日の獅子舞の様子

8-3. 祭り当日の花

獅子舞を踊ると、天狗をする子の家や近所の人、親戚からも祝い金が出る。これを『花』という。集まった花は会計が管理する。新築などの祝い事があるときには『おこし』と言って、多めに花を出し、家の前で踊ってもらうことがある。しかし、獅子を呼ぶということは神輿の宿になるということなので、神棚やその周辺を掃除したり振る舞いの料理を用意したりと大変なことが多い。何より、花代が高いことと振る舞う料理やお酒、子供たちに配るお菓子・ジュース代で相当の額になることもあって、最近では減多におこしはない。

9. 後日・片付けと反省会

今回の片づけは秋祭り翌日の午後1時から行われた。平日の昼間なので、手が空いている人がすることになっている。普段は1~数人で、30分ほどで終わる。道具や獅子頭は、それぞれ箱に入れてまとめて集会所に保管しておく。カヤは日干ししてこれもたたんで保管する。クリーニングに出したりはしない。一回でぼろぼろになったわらじは捨てるか集会所の脇で燃やしてしまうこともある。衣装は各家で次の祭りまで持っていることになっている。その間に丈が短くなったりすれば、各自で直す。昔は着物もわらじも全部家で作っていたが、現在では着物は何十年か前に寄付されたものをずっと着ているし、わらじも三、四十年前は全部各家で作り、十数年前までは近所の年配の女性が何人かで作ってくれていたが、今は業者から買っている。カヤも20年前ぐらいに寄付されたものを破れたところと同じ色の接ぎを当てて使っているが、そろそろ替え時だと多くの人が言っていた。

反省会は、祭りの翌日の夜に開かれる。集会所で6時頃から始まる。大人と一緒に天狗の子供たちも参加する。母親も参加している人もいた。こういう時でも女性は関わらず、料理から片付けまで全て保存会の人たちが行う。参加人数は少ないが、普段交流のない若い人と年配の人がコミュニケーションをとったり、獅子舞に対するそれぞれの意見を出し合ったりする良い機会になっている。たとえ意見がぶつかって言い争いになったとしても、次の日には「酒の席だから」とお互いに許容し合う。それが市の坂の人と人との付き合い方なのである。しかし、この反省会や日々の練習の後の慰労会については地域と保存会とで

温度差が大きい。「獅子の連中は飲んでばっかりいる」とはよく言われる台詞だそうだ。昔は地域のほとんどが参加していて、祭りでの花やおこしも活発にあって、経費に困らなかった頃は良かったが、だんだんと花もおこしも減って、地区の寄付金に頼るようになると、状況が変わってきた。寄付金は春と秋の祭りと輪島祭りの際に、一戸千円から集めることになっている。そうすると、せっかく寄付した金で酒盛をしているというふうには地域の人からは見えるようだ。今後、このような温度差をどうやって無くしていくのかという事も獅子舞を存続していく上で、重要な問題である。

10. まとめと考察

ここでは、今までの現状を踏まえて、昔と今では獅子舞はどのように違うのかを踏まえて、ではどのように残されていくのかについて考察していきたい。

聞き取りによれば、50代以上の人々が記憶している子供時代の獅子舞と現在の獅子舞とでは、様子がかなり異なっている。かつては子供が多く、現在のように誰でも入れるというわけではなかった。本家の長男しか獅子に参加できなかったという話もある。一番踊りが上手い子がチョンコヤッサの上に乗るという決まりがあったので、子供の間で激しい競争があった。獅子の上に乗って白扇子を仰ぐというのは当時の子供たちのステータスであった。

この頃は、子供の側でも積極的に獅子舞に参加していた。囃子方の音楽をテープに録音して、子供たちだけで練習をしていたこともあった。大人の側でも、積極的に獅子舞に参加していた。教える方も厳しく、踊りができなくて叩かれて泣いたこともあった、という人もいた。現在では、教え手は子供に気を使うので、このような厳しい練習風景はありえない。大人でも他に娯楽がなかったので、だいたい獅子に参加していたし、気分が乗れば祭りでも練習でも大人が昔獅子を踊ってみせたりしていた。現在はこのような光景は見られないが、かなり最近まで見られた光景のようである。現在の若手の人が少年時代に天狗の役割を演じていた頃の記憶として、八つ振りを大人が踊っていたという話が聞かれた。

いわば、かつては、獅子舞は「売り手市場」であり、現在 50 歳前後の人たちが天狗をやっていた頃も、子供が多かった時期で、子供にやる気がなければ、辞めたければさっさと辞めろ、という風だった。現在では状況は一変している。かつては子供たちのステータスであったチョンコヤッサの上に乗る役割も、現在では、年少の子や一度も乗ったことがない子で小柄な子が乗るだけのものになっている。

現在特に深刻なのは、20代から40代の担い手が減少していることである。かつての獅子舞で主役を担っていたのは若い人びとで、獅子舞も荒っぽい部分があった。現在の市の坂の獅子頭の重さは約 5~6 キログラムだが昔の獅子頭は十数キログラムもあり、あまりに重すぎるので、酔った振りをして河原の石にぶつけてわざと壊したというエピソードが面白おかしく語られている。

若い人々の減少は、表 2 をみれば分かる。

	0～20 歳	21～40 歳	41～60 歳	61～80 歳	80～歳
男（人）	15	15	34	44	6
女（人）	24	10	31	56	11
合計（人）	39	25	65	100	17

表 2. 市の坂の年齢別人口

保存会には 20 代・30 代の人合わせて 6 人参加している（そのうち獅子の踊り手が 5 人、囃子が 1 人）が、その上は 40 代後半まで年齢が飛ぶ。20 代の、昔ならば青年団に入っていたような年代の人たちが少ない（の）ことの理由としては、大学へ行っている、卒業してもそこで就職している、戻ってきても獅子に参加しない、という状況が挙げられる。

獅子頭を持って踊るのは重労働なので、カップン持ちは 50 前後が限度であると思われる。現在のカップン持ちの人たちのうち 3 人があと数年でカヤの後ろに回ることになる。そして、それも長くは続かないと推測される。そうすると、若手の人たちだけで 8 つの踊りを回していくことになる。いくら若くて体力があるとはいえ、大変だろう。踊りっぱなしの人が出る可能性もある。下からどんどん若い人が入ってくれば問題ないのだが、現状は厳しい。

その中で、年配の人たちや若手の人たちは、子供たちの参加を促そうとさまざまな試みをするようになる。練習時の子供たちへのお菓子とジュース、祭りを終えた後のお小遣いも、会計の面から見れば巨額の出費である。さらに、祭り当日には、子供たちの移動の労を省くために、トラックで移動させたりもしている。子供たちへの接し方にも気を遣っている。練習中の叱り方、指導の仕方にも気を使っている。練習後や祭り当日での子供たちにお菓子がきちんと配られているかどうか確認することにすら気を配っている。

獅子舞の担い手たちは、子供に獅子舞をさせることにとても努力していることが分かるが、子供たちの意識はどのようなものなのだろうか。現在、天狗をしている男の子たちに「将来は獅子になって獅子頭を振ってみたいか」という質問をしてみた。全員に聞けたわけではなく、四人のある程度上の年齢の子に聞いてみた。答えは、天狗として踊ることが好きだから獅子にはそんなに興味はないという子が一人、やってみたいという子が二人、分からないという子が一人となった。これだけを見ると頼りないと思われるが、やってみたいと答えた子で「踊っているお父さんが恰好いいから」という子がいた。子供たちもまだ将来がどうなっていくか分からないが、獅子に携わる大人、それは父親であったり、近所の人であったりさまざまだが、「残そう、伝えよう」という大人たちの姿勢を見て育ち、獅子舞を考えていくのではないだろうか。それが、子供を大事にするという市の坂の獅子舞の存続のあり方だといえる。

この中で、地域における獅子舞の役割も変化しつつある。かつての獅子舞では、地元の人々と外からやってきた人の間の区別が明確だった。昔の市の坂には独特の言葉で、新しく入って来た者を「しんづら」、昔からいるものを「こうづら」と呼び、新しく入ってきた

人たちには獅子頭を触らせなかったという昔話がある。これは今の年配の人たちしか知らないことで、その人たちもそういう話を聞いたことがある、ということだった。現在では、こうした「しんづら」「こうづら」の区別は無く、現に、数年前に東京からこの市の坂へ引越してきたという家の子供でも、気軽に獅子に参加している。これからの獅子舞は、女の子を含めた子供たちや、外から移移り住んできた人々を取り込むことで存続を図ってゆくことになるのではないかな。

今回の調査では獅子保存会の方々をはじめ、そのご家族の方々、市の坂のみなさまに、本当にお世話になった。特に、橋本幸男さんと坂下照彦さんには、色々な場面で調査を助けていただき、本当に感謝している。いろいろな人の協力で、なんとか調査を終えることができ、こうして報告書にまとめることができた。重ねてお礼申し上げる。

第4章 地域と観光化

第1節 キリコ祭りの観光化についての取り組み

塚 本 枝 里 子

1. はじめに

輪島市は能登半島の北部に位置している地方都市である。日本海に面し、また市総面積の大部分が高洲山^{こうしゅうざん}をはじめとする山々に囲まれている。このように自然に恵まれた輪島市には、例えば第1章で取り上げる輪島塗のような独特の文化が今もなお息づいている。また、第3章で詳しく述べられている白米^{しらよね}の千枚田のような独特の風景もあり、多くの観光客が輪島市を訪れる。

近年日本全国の市町村では、地元が持つ観光資源を最大限に利用しての観光地化が押し進められている。それはここ輪島市でも決して例外ではない。ここでは、輪島市で行われる輪島大祭を例にして観光化について考察していく。次に輪島市観光についての概要を記す。

2. 概要

2-1. 輪島市の観光についての概要

輪島市の観光資源にはさまざまなものがある。代表的なものにはまず、河井町の本町商店街通りで正月の三が日と毎月10日、25日以外のほぼ毎日開かれ、地元の海の幸、山の幸や民芸品などが集い、県内外から訪れる観光客でにぎわいを見せる朝市がある。また日本の棚田百選に選ばれ、季節ごとにその姿を変える白米^{しらよね}の千枚田や、輪島市の東外れにある岩倉山の岩倉観音と千体地藏などに挙げられる厳しい自然の影響を受けた数々の名勝地もある。そして冬の風の強い日にしか見ることができない「波の花」といった珍しい自然現象など、輪島市にしかない多種多様なものが存在する。昭和30年代の初めに公開された映画『忘却の花びら』は奥能登観光ブームが起きるきっかけを作った。また、松本清張の小説『ゼロの焦点』の舞台にもなったことから奥能登観光ブームは白熱していった。観光資源の一つとして、夏期輪島観光の柱の一つである輪島大祭がある。輪島大祭とは、夏も終わる8月の第4週(22日～25日)に集中して行われる、旧輪島町の4町(河井町、鳳至町、海士町、輪島崎町)にあるそれぞれの神社で行われるキリコが使われる例大祭のことである。次の項目で「輪島大祭」についての詳細を記す。

2-2. 輪島大祭の概要

輪島大祭とは、毎年8月22日から25日まで開かれる海士町、河井町、鳳至町、輪島崎町の旧輪島町の4町にそれぞれある4つの神社(奥津比咩神社、重蔵神社、住吉神社、輪島前神社)の夏祭りの総称である。この祭りはそれぞれが二日間かけて行われ、第一日目を宵祭り、第二日目を本祭りと呼び、主に夕方から夜にかけて行われる。奥津比咩神社を除いた3つの神社の祭りは行う内容が共通している。

重蔵、住吉、^{わじまさき}輪島前各神社での祭りの流れは、最初に神事が行われる。その後、キリコが神社の前に集まる。全てのキリコが集まってから神輿と引きずり松明が神社を出、御輿の後から各町内会が出すキリコがついて行き、町中を練り歩く。キリコが町内を練り歩くことによって、町内の一年間の厄をキリコの上部に取り付けられた御幣に集めるといわれている。



写真 1. 引きずり松明（^{わじまさき}輪島前神社にて）

それぞれ大松明が設置されている広場（重蔵、^{わじまさき}輪島前の場合は海岸沿いにある広場に、住吉の場合は市内を流れる川の中州にある輪島市役所前の駐車場広場）に集結する。そして全てのキリコと神輿が広場に集まったところに、全長 8 メートルの大松明に火が点けられ、松明神事が行われる。松明神事は宵祭りのクライマックスで、参加者の感情の高ぶりはピークに達する。大松明に点火される火は、御輿と一緒に神社から出た引きずり松明の火である。

大松明の上部には 3 本の御幣が付けられていて、これを取った者は一年間勝ち運が付くと言われているため、各町内会の代表の若者たちは必死で御幣を奪い合う。



写真 2. 松明神事に使われる大松明（住吉神社大祭の大松明）

松明神事はものの 10 分ほどで終わり、その後神輿はオカリヤ（御仮屋）に入り、キリコは神輿が入ったオカリヤの前を通過してそれぞれの町に帰っていく。この時キリコの上部に付けられた御幣に新しい神様が宿り、それぞれの町内に運ぶ役割を果たすといわれている。以下にそれぞれの祭りについて簡単に述べる。

海士町^{あま}は九州から移り住んできた漁師たちが作った町である。そのため、奥津比咩神社^{おくつひめ}の祭りの内容は他の三社と異なっている。まず、神社から担ぎ出された神輿が町内を練り歩く。神輿を担ぐのは海士町に住む若者だが、若者達はそれぞれ腰巻きを着け、化粧をして女の恰好をしている。これは奥津比咩神社^{おくつひめ}の祭神が女性の神であり、男が御輿を担ぐと神が嫉妬するといわれているため、担ぎ手は女装をして担ぐのである。その後輪島崎町にある袖ヶ浜へ行き、神輿を担いだまま海に入る入水神事が行われる。

重蔵神社の祭りでは、もっとも多い 20 基のキリコが各町内会から出される。夜にキリコが行列を組んで大松明のある広場まで行進していく様子は幻想的の一言に尽きる。このとき、他県から来た人に対して、キリコ担ぎ体験を行えることがある。また、宵祭りのクライマックスである松明神事を間近でよく見えるように、栈敷席が設けられている。

住吉神社の祭りでは、キリコを担いでの激しいパフォーマンスが行われる。これは担ぎ手の多くが若者であるからこそ可能なのである。この祭りで行われるパフォーマンスの目玉は、キリコが大松明の設置されている広場まで練り歩く最中で輪島川に架かる、松明でライトアップされた橋の上を走るパフォーマンスである。住吉神社の前での激しいパフォーマンス（キリコを担いだままその場を回転する）の後で行われるため、橋の上で転倒してしまう場合もあるという。この時にキリコが壊れてしまう場合があるという。その時は、キリコを持つ町内の家々が平等に修理費を出し合ってキリコを修理する。

輪島前神社^{わじまさき}の祭りにはキリコ以外にも「天神昇龍燈^{てんじんしょうりゅうとう}」という青森のねぶたに似た灯籠も出される。しかし、この灯籠は担ぎ出されることはなく、展示されているだけである。これ以外にも、輪島崎の若者が祭りを盛り上げるために、お金を出し合って手作りの竹製のキリコを作って担いでいる。このキリコは祭りも終盤になると、足が折れ、ぼろぼろに壊れてしまう。これは当日の祭りの動きがいかに激しいかがうかがわれる。また、タイの形をしたキリコも出る。輪島前^{わじまさき}の松明神事の時には、御輿と一緒にこのタイ型キリコも大松明の周りを回るため、非常に盛り上がると地元の人からうかがった。



写真3. 輪島前^{わじまさき}祭りの天神昇龍燈

また、輪島大祭は過去に四つの祭りを一つにまとめて行おうという案があったのだが、各町民の意識の違いにより実現することはなかった。しかし、輪島前^{わじまさき}と重蔵の神主さんは

肯定的な考えであったという。また、ある市民の考えでは、①それぞれが奉っている神の違い、②重蔵神社と住吉神社の格の違い（住吉神社の神格が重蔵神社の神格より高い）といった理由から、一緒に祭りを行うことは出来ないし、もし一緒に出来たとしても、各神社の氏子がそれを許さないだろうと思うということをうかがった。次にこの祭りに欠かせないキリコについて詳しく触れる。

2-3. キリコについて

奥能登地方の夏から秋にかけての祭りに欠かせないものが、『キリコ』と呼ばれる御神燈^{ごしんとう}である。大きさとしては、もっとも小さいもので2メートルほど（これは子どもキリコと呼ばれる）、祭りでよく使われるキリコは4~5メートルのものから最大15メートルとさまざまである。輪島大祭で使用するキリコは4~5メートルの20人ほどで担ぐことができる小型のキリコがほとんどだが、70人以上でようやく担げる10メートル以上の大型のキリコも使われる。輪島大祭のキリコは総輪島塗製のものが使用されている。

『キリコ』は『切子灯籠^{きりことうろう}』を縮めた呼び方で、漢字で『切籠』と書く。輪島市から南に下った辺りの中能登地方では、キリコを『オアカシ（御明かし）』、または『ホートー（奉灯）』と称するところもある。

キリコのルーツは、もとは神行行列で使われていた、子供が一人で持ち歩ける「笹キリコ」という、笹竹に小さな角灯をつけ、中にロウソクを点す簡素なものであると言われている。この笹キリコは現在もお祭りで使われている。これが長い年月をかけて「担ぐ山車^{だし}」と喩えられるような現在の巨大で豪華な装飾を持つものに変化していった。また同じキリコと言っても、地域によってはさまざまな形状のキリコがあり、祭りに華を添えている。きらびやかで地域性の強いキリコは、観光資源として重要であり、パンフレットで紹介されているキリコ会館がキリコの魅力をアピールしている。

次の節で「キリコ会館」という、キリコを展示している博物館について説明する。

3. キリコ会館

3-1. キリコ会館の概要

輪島市塚田町にあるキリコ会館には、輪島大祭で実際に使用されるキリコを含め20数本のさまざまな大きさのキリコや3基の神輿、松明神事で使用される実物大の大松明（約8メートル）が展示されている。また、実物のキリコ以外にも能登の各地の祭りを撮影した写真のパネルや祭りを描いたイラストの展示や、奥能登で行われる奇祭を再現したマネキンの展示もあり、能登各地の主なキリコ祭りの映像を、常時放映して説明したりなどしている。

キリコ会館の建物は元々ボーリング場であった建物を稲忠^{いなちゅう}（株）（輪島市内にある輪島塗直販と観光施設を経営する企業）が買い取り、お祭りに関するものを展示して作られた“お祭り”博物館である。

3-2. キリコ会館の来場者数

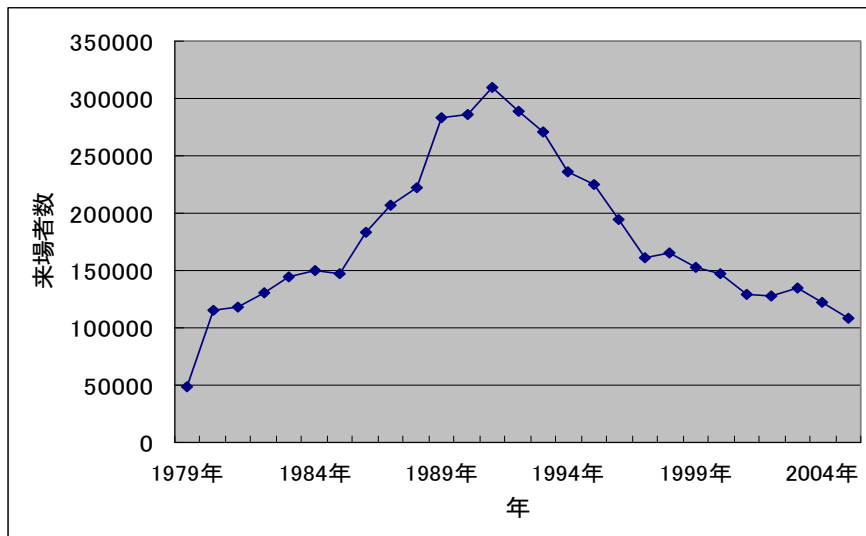


図1. キリコ会館の年度別入館者数

このキリコ会館は昭和 54 (1979) 年 6 月 1 日にオープンして以来、毎年 10 万人を超える人が来場する。バブル全盛期の頃には 30 万人以上の来場者があったが、バブルがはじけた以降の来場者数は年々減少し続けている。また上で示した入館者数の推移のグラフからも分かるように、ここ最近の来場者数は 20 数年前の 1980 年を下回っており、年々減少傾向にある。

年間を通じて、能登半島各地でキリコ祭りが行われる夏ごろは、キリコ会館を訪れて、キリコを見てから本物の祭りを見物していく人が多いが、実際の入場者が多く訪れるピークは、仕事の一段落がついた秋ごろである。

しかし、近年では大型バスが何十台も来ても、乗っている人数が少ないため売り上げが伸びないこともあるという。

キリコ会館の中に入ると、薄暗い館内に灯りがともされたキリコが立ち並び、祭りで実際に使われているおはやしが BGM で流されていて、実際のお祭りの中にいるような雰囲気味わうことができる。しかし、会館内が薄暗いのはお金の節約のためという事情がある。

私がお話をうかがったキリコ会館の副館長の越戸 光雄氏は、元々輪島塗の職人(蒔絵師)であったが、バブル崩壊によって輪島塗を作るだけではあまり儲からなくなってきたため、こちらの副館長を務めているとのことである。

3-3. キリコ会館の展示物

キリコ会館内で展示されているキリコには、記念に作られた 15 メートルの白木の大キリコ『能登國』や、館内の展示物の中で最も古い江戸時代末期に作られたキリコ『豪福徳』も展示されている。後者のキリコは輪島市内のある町が所有しているもので、キリコ会館

では毎年この町に 10 万円を支払っている。この町にはこの大キリコを保存できる大きさの場所がないため、キリコ会館に展示物として貸し出すのと同時に置いているのである。キリコ会館はキリコの保管場所も兼ねているそうである。また 10 数本ある高さ 4~5 メートルの小型キリコは、奥津比咩^{おくつひめ}、重蔵、住吉それぞれの大祭で実際に使用されているものも含まれている。これもまた、先程の大型キリコと同様に保管場所も兼ねて展示している。大祭の時期になると、これらのキリコの中から 7~8 本が各町の祭りに出払ってしまうため、展示物の数が減ってしまい、館内が寂しくなってしまうという。

その他、実際使われていた御神輿 2 基や、能登キリコ祭りを PR する歴代のポスター、奥能登地方各地で行われるいくつかの奇祭をマネキンで再現した模型、また、能登地方の祭りの様子を撮影した写真、祭りの様子を描いたイラストなどが展示されている。



写真 4. キリコ会館で展示されているキリコ

3-4. キリコ会館での取り組み

キリコ会館はインターネットで情報を発信しているが、どれほどの人がこの Web ページを見て訪れているのかということについては、統計を採っていないため効果の程はよくわからないらしい。

また、有名人が訪れたりしたことが新聞記事に掲載してもらうことは無料の広告となるため大いに歓迎するそうである。最近あった例が、2006 年 5 月 20 日~21 日に行われた小泉純一郎前首相の能登訪問である。小泉純一郎前首相が訪問した際にキリコ会館にも訪れ、石川県知事にキリコ祭りを全国に宣伝するように言った。また、この訪問の後にキリコ祭りに興味を示したと思われる当時の内閣からの問い合わせもあり、内閣宛てにキリコ会館のパンフレットを送ったそうである。

もう一つの例が映画やテレビドラマのロケ地となり、それ目当てに観光にやって来るということである。最近の例では、石川県の金沢市や輪島市が 2006 年夏に公開された映画『釣

りバカ日誌 17』の舞台の一つとなった。この映画の劇中ではキリコ祭りも登場している。また、他にも何本かの映画の撮影の舞台になったとのことである。これらの宣伝効果もある程度期待しているというが、この映画を観て、どれくらいの人が輪島に興味を持って訪れてくれるのかは予測がつかないそうである。

キリコ会館に初めて訪れてキリコを見た観光客は感動するそうである。キリコ会館の方ではこの後に本物の祭りを見てもらえると嬉しいと言っていた。

キリコ会館には高さが2メートルほどの「子供キリコ」がある。これは、祭りに関する講演会の時に舞台の脇に置いて祭りの雰囲気を出したり、その他の行事があった時の飾りに使ったりするためのものである。また、町によっては小学校の低学年の子が実際に担いだりするために子供キリコを貸し出している。

キリコ会館では来館した観光客を写真に撮影して、出口に出てきた人に希望した人に来館記念写真として販売をしているが、収入としては昔から少ないとのことである。

修学旅行を輪島市などの奥能登に誘致するための取り組みも行われており、財団法人全国修学旅行研究協会の奥能登環境学習セミナーが2006年8月17日～19日に開かれた。

石川県国際交流協会の人外国の人を連れて頻繁に訪れることがあり、キリコを初めて見た外国の人は、熱心に解説を聞いていて、大キリコ前で記念撮影を撮る時には、はっぴを着てうれしそうにポーズをとっていたし、また、各自が持っていたデジカメで写真をたくさん撮っていた。

次の節で、輪島市観光課の行っている取り組みについて説明していく。

4. 輪島市観光課

4-1. 輪島市観光課

ここでは輪島市観光課で聞いた、市当局の観光課への取り組みについて述べる。

現在、世界総生産（GNP）の12パーセントを観光産業が占めている。近年では地球規模で、そして地域間での観光競争が激しくなっている。そのため輪島市観光課では、交流人口を増やすために、輪島市全体を観光地として県内外にPRするとともに、通過型観光からの脱却を図るためにさまざまな取り組みを行っている。

近年の観光はさまざまな知恵が生かされており、また、経済効果を求める『仕掛けられた』観光が増えているという。その最先端が長野県飯田市である。輪島市観光課では、釣り、キリコ担ぎ体験などの祭り体験、石川県の県木・アテ（ヒノキアスナロの方言）を原料とした和紙作り体験など、地元にある自然を利用して実行可能な提案をしている。次に観光課が行っている取り組みについて詳しく述べる。

4-2. 観光課での取り組み

輪島市観光課では、既存のものを観光産業に生かす試みを行っており、その結果の一つが輪島大祭の観光化である。輪島市観光課がどのような取り組みを行っているのかを、輪

島市観光課の本田 晴夫氏に話を伺い、以下のような話をうかがった。

輪島に観光に訪れる都会の人たちは、非日常性や癒しを求めるためにやって来るのだという。

観光課では、キリコ祭りをその土地に残る神社の祭りとして PR し、そのままの形を見せるようにしており、祭りそのままの興奮を見てほしいとのことである。観光課が市内の観光パンフレットを作成することは、産業観光に結びつける行為である。また、キリコ会館の項でも述べたが、新聞に載ったりすることで、輪島市の知名度・露出度を高めて、輪島に来てもらうきっかけを作っている。

このような広報の結果、周囲が評価して初めて観光が成り立ち、評価された地域は初めて観光地となる。また、地元にあるものを使って仕掛けを作るしかなく、多くの観光客が来ても、その人達に対して説明をする人材がいなければ、観光はうまくいかないが、そういった人材を育成することは難しいと考えている。市としては、そのような人材を確保することで輪島市の観光をテーマパークとに近い形で展開させようと考えている。その手本となるのが岐阜県高山市、長野県小布施町、大分県湯布院町である。特に湯布院は温泉が湧くことから癒しのテーマパークとして確立されている。

また、輪島に訪れた観光客などに対して、輪島市では町の至る所にキリコをかたどった観光案内板などを市内のあらゆる所に設置している。私が市内で見た看板などには、下の写真のような看板が市内のあちこちに見られた。



写真5. 左:カラクリ時計つき市内観光案内板、右:輪島市アピールの看板

また、祭りの時には観光協会と協力して栈敷席を設ける（重蔵大祭の松明神事）、キリコ会館からキリコを借りてキリコ担ぎ体験を行うなどの取り組みも行っている。そして、祭りの裏側を知ることによって観光客はもっと楽しみを感じることができる。

栈敷席は、重蔵大祭の迫力ある松明神事を間近で見られるように設けられたものである。

この栈敷席は松明神事を良く見られるように、一段高く設けられている。これは、大松明が立てられている場所がキリコが立ち並ぶ広場からは遠く、見えづらいためである。毎年輪島大祭のパンフレットに紹介されており、毎年、旅行者や地元の宿の要望を受け、約200席を設けてそのうち3分の2が埋まるという。今年の2006年8月23日には120席設けられた席が大部分の110席埋まった。観光協会の人の話では、毎年設定した席はかなりの人で埋まっており、個人で来る人やツアー客が半々であり、Webページを見て問い合わせをしてくる人もいるという。また、地元の人も松明神事を良く見るために予約してくる人もいるという。

本田氏の意見では、観光は古いものを大事にして評価されるものであり、新しく創り出すことも必要である。観光の切り口はたくさんあり、キリコ祭はその1つであり、古いもののみではなく、新しいもの（近年建設が進められている北陸新幹線など）を創り出すことも必要である。また、市民の中でも、キリコ太鼓を何人かで打って競演し集客する人や（こちらは住吉大祭で見られた）、ある人を中心にして新しいキリコ祭りを提案する人も出てきているという。

また、市では修学旅行の誘致を行っており、訪れた学校に対して助成金を出すという制度も行っている。

4-3. ふらっと訪夢に展示されている朱塗りのキリコについて

ふらっと^{ほうむ}訪夢とは、2001年に廃止されたのと鉄道七尾線の旧輪島駅の建物を改修して作られた、バスターミナル及び輪島市観光案内所のある道の駅のことである。

ふらっと訪夢の輪島市観光協会があるロビーの中には、大きさ4~5メートルほどの朱塗りのキリコが展示されている。このキリコは河井町の重蔵神社の「オトウグミ（御当組）」（41歳の厄年の男性が自分たちの厄を払うために一年を通して神事に携わる組織のこと）から寄贈された物で、元々あったキリコを改修したあと、復元を図り、輪島で初めて「輪島塗朱塗りキリコ」として完成されたものである。ふらっと訪夢は、金沢から高速バスに乗って輪島に訪れた人が最初に訪れる場所である。そして、朱塗りのキリコが置かれているロビーには市内観光案内所がある。つまりここに入ってくる人の目に必ず留まるようになっている。輪島に初めて訪れる人は、これを見て『キリコ』というものに興味を持つものと思われる。次に輪島市内の土産物屋で売られている土産物について簡単に触れたいと思う。

5. 土産物に関して

輪島市内で土産物を扱っている店や朝市通りの店のほとんどには、輪島塗を施した根付けが売られている。さまざまなモチーフの絵柄が蒔絵の技術を使って描かれたもので、一つあたり数百円と、土産物としてもっとも手頃な価格で売られている。

また、輪島塗製の箸も売られている。この箸は本物の漆を使った本塗のものと代用漆を使った箸がある。前者のものは高価で、後者のものは手頃な値段であるため、代用漆製の箸の

ほうがよく売れているらしい。

キリコ会館で最近よく売れている物は輪島塗の箸（代用漆製）で作られたキリコの置物）である。この置物は、大きい物で 5,000 円～6,000 円、小さい物で 1,500 円と手頃な値段であるため、よく売れているという。

これを見ると、工芸品には輪島塗の技術を生かして作られたものが多いことが分かる。また、石川県内の他市町村にある土産物屋で見られるようなさまざまお菓子類、その地域にしか売られていないモチーフのハローキティの根付けや、キーホルダーなど、どこの観光地の土産物屋に行っても見られそうなものも売られていた。

次の節で、重蔵大祭で大キリコを出している本町商店街について触れようと思う。

6. 本町商店街

6-1. 本町商店街の大キリコ

本町商店街は輪島市河井町にある、朝市がたつ朝市通りにある商店街である。ここでは 2 年前から江戸時代末に作られた高さ約 11 メートルの大キリコを担いで輪島大祭に参加している。この大キリコは、本町商店街の中ほどの場所に店を構える塗師屋・天甚権兵衛商店が所有している。

この大キリコは、1910（明治 43）年に起こった河井町の大火で担ぎ棒が消失したものの、2003 年に輪島市宅田町にある真照寺の本堂で担ぎ棒以外の部品が発見されたもので、その年に行われた朝市通りの整備事業（空中に張り巡らされた電線を地中に埋設して無電柱化し、道路に化粧ブロックを施した）の記念として、担ぎ棒を新しくアテの木で作り直して、それに輪島塗を施し、また見つかった部品の傷んだ箇所を同じく輪島塗で修復したものである。

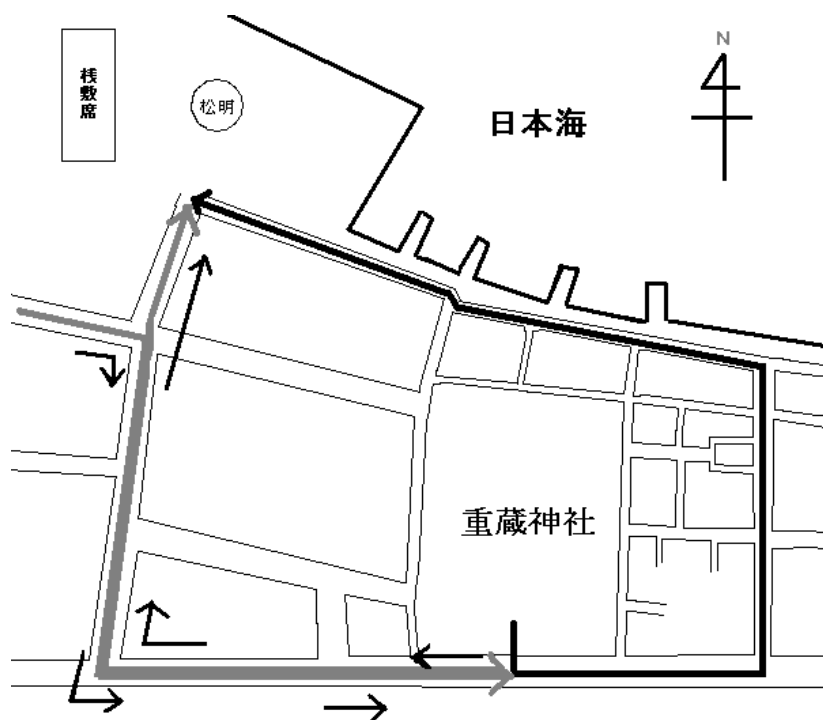
また、本町では昔は個人的にキリコを所有している家も多かったが、上記にした火事のためにほとんどの個人所有のキリコが焼失し、現在では現存しているキリコは天甚権兵衛家のもののみとなっている。

6-2. 大キリコを出すようになった理由

ここ数年、本町商店街では、商店街の青壮年が中心になって構成される「九区大切籠奉賛会・祭興会」が中心となって、上記にある大キリコを出して重蔵神社の祭りに参加するようになっている。このキリコを出すようになったのは、近年の祭りのマンネリ化した状態を改めるためだという。大切籠奉賛会の中心人物の一人である中宮 春男氏（本町商店街にて“塗太郎”という輪島塗関連の店を構えている）の話では、近年の祭りは一瞬の内に終わるような状態が 20 年ほど続いていたという。また、少子高齢化の影響を受けて、三十軒に一基の割合で出していたキリコも各町内会で一基という状態になってしまったこともマンネリ化を促進する結果となったという。そして、その土地の老人達もマンネリ化を進めた原因という。そして、神事に重点を置いておくと廃れていくとも言っていた。

中宮氏の意見では、こうしたマンネリ化を打開するには、少数派が変えていかなければいけないという。その打開の第一歩が、大キリコを出して祭りに参加することだと考えている。

昨年までは大キリコを組み立てても、小型キリコが通る道を通ることは出来なかったのだが、今年 2006 年から、行政側に掛け合って電線や道路標示や看板などを一時撤去してもらって同じ道を通ることが出来るようになったのだそうである。このおかげで今年は大キリコを担ぐことが出来たが、このことは行政が協力してくれてからやったと言う雰囲気もあるらしく、来年も同じように担げるかどうかは分からないということである。



(黒色矢印は小型キリコのルート、灰色矢印は大キリコのルート)

図2. 重蔵神社大祭のキリコが通るルート

しかし、小型キリコが通る道路は細い路地裏が多く、また暗い道が続くため、観光客に見せるには向いていない。

また、商店街の人たちが協力して大きなキリコを出せるようになったが、今後続いていくかは分からない。現在、中宮氏は奉賛会の役職に就いているが、人が自動的に役職に就いていく仕組みが出来てくれば、特定の人に負担がかからず楽になるとも言っていた。大キリコを担ぐ人の年齢層は 40 代が最も多く、人手が足りない場合は、知り合いなどに協力を要請している。私も実際に大キリコを担いで祭りに参加したのだが、大キリコを担いでいる人はほとんどが 30 代～40 代の人ほとんどであった。市が観光客を誘客したいのであれば、商店街としては歓迎するとのことである。次の節でこれまで述べた事について考察をしていこうと思う。

7. 考察

キリコ祭りは移動することで進行していく祭りであるため、青森のねぶた祭りや、山形の竿灯、仙台の七夕、山形の花笠の三大七夕祭りのような大規模なもので、その場を移動せずに行えるタイプの祭りのように行うことは、こうしたキリコ祭りの性質上無理なことである。しかし、祭りを観光化し、観光客を誘い込むことによって、その地域にはお金の流れが出来、ひいてはそれが地域の活性化につながっていく。観光関連の職業に就いている人はそうしたお金の流れが地域の活性化につながっていると言うことをよく認識している。市は客に泊まってもらうことによる経済効果を狙っている。

観光化への取り組みとしては、市内に観光客向けの市内観光案内板を立てたり、パンフレットを作成して市内の見所や宿泊場所、食事処などを紹介したりと、市内に経済効果をもたらす手助けを行っている。キリコ会館と協力して体験イベントを企画したり、映画のロケ地の誘致などを行ったりなど、積極的にアピールを行っている。

町の人の対応としては、市が観光化していることは、人が来て市内がにぎやかになるので嬉しいことであるという。

キリコ会館および輪島市観光課が特に最近期待している活動としては、①Web ページを利用しての情報発信、②訪れた人を対象とした体験イベントを行っていること、といった共通点が挙げられる。

しかし①に関しては、いくら情報を発信しても、過去に輪島に訪れたことがある人でもう一度訪れたいと思う人、もともと輪島に興味がある人でなければ、たまたま別の Web ページにはあってあったリンクを目にして、偶然にそのページにたどり着いた人以外は、よほどのことが無い限り、目に留めることは少ないのではないだろうか。このことは、上記に挙げた二つとは別の観光関連業者からも同様の意見を聞き取っている。

次に②については、実際にキリコを担ぐという体験することによって、もしくは松明神事を身近に見ることによって、キリコ祭りの持つパワーを直に感じる事が出来るという利点はある。しかし、キリコ担ぎ体験は人数がある程度いないと行うことが出来ないという欠点がある。

個人的な意見としては、①に関しては、よく駅に掲示してあるような観光ポスターを製作して全国的に掲示する、または輪島市関連の企業の CM を流すといったことが有効ではないかと考える。

②に関しては、キリコ担ぎ体験についてはキリコ 1 基の担ぎ手の中に何人か地元の人を入れて先導させることによって、より深く祭りのパワーを感じてもらえるようにすることである。

8. お世話になった方々

キリコ会館副館長・越戸 光男氏、輪島市観光課・本田 晴夫氏、本町商店街・中宮 春男氏、その他、本町商店街の方々、聞き取りに快く応じて下さった方々へ、心よりお礼を申し上げます。

第2節 朝市の現状

佐 久 間 悠 司

1. はじめに

輪島の朝市は、古くは平安時代にはじまり、現在まで続いている。昭和 30 年代までの朝市は、地元の人々が売り買いをし、日常の話題を交換し合う場であった。しかし、現在は、多くの観光客が土産を求めて訪れる観光客向けの朝市へと変わっている。この報告では、このような経緯をもつ朝市について観光客、地元の人、朝市の運営側といった 3 者のそれぞれに着目して、現在の朝市の現状を見ていきたい。

2. 朝市の概要

2-1. 朝市の歴史

輪島では千年も前の平安時代から神社の祭礼日などに生産物を持ち寄って物々交換しあっていたのが市の始まりだと言われている。年代を下って、室町時代には一ヶ月のうち四と九のつく(4 日、9 日、14 日、19 日、24 日、29 日)、月に六回ある市日を「六歳市」と呼んでたくさんの人で賑わうようになった。

昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて、奥能登紹介番組の放送、奥能登を舞台にした映画、能登を主題とした歌謡曲などが次々とマスコミを賑わせ、輪島に観光客が押し寄せるようになってきた。このような時代の流れとともに、地元の人々の売買とコミュニケーションの場であった朝市は、徐々に観光客を主な顧客とする市へと変わっていった。新鮮な食材を売る店が立ち並ぶ朝市は、全国から観光客を引き寄せるようになり、年間、200 万人から 250 万人もの観光客が訪れるようになった。

2-2. 輪島朝市の現在

輪島朝市は輪島市河井町本町通りにある。通りの中は 360 メートルの直線道路の両側にテント張りの露店が隙間なく並んでいる。朝市は毎日午前 8 時から正午まで開かれる。各組合員が都合の良い日に出店しているために出店数は日によって異なる。観光客の多い夏場は、通常で 200 店前後、多い日には 250 店前後の店が並ぶ。朝市が観光市となった、後の昭和 45 年から、市が開かれる時間帯に限って通りを歩行者天国とする措置がとられた。なお、原則として、月の 10 日と 25 日、正月の 3 日間は休市になる。



図1．朝市道りの場所

3．観光客からみる朝市

朝市には全国各地から膨大な数の観光客が訪れる。朝市の客層は地元の人よりも観光客が中心である。調査した限りでも地元の石川県をはじめ（以下、県・都・府省略）東京、群馬、岡山、山形、大阪、千葉、神奈川、滋賀、岐阜、和歌山、三重、埼玉、静岡、名古屋、福井、富山、奈良、新潟、長野、愛媛、宮城など津々浦々から観光客は訪れていた。とりわけ、旅行会社が企画するツアーの一環として訪れるツアー客が目立っていた。ここでは観光客中心に朝市を見ていく。

3－1．観光客数

朝市には膨大な数の観光客が訪れているが年々減少傾向にある。以下に年別の朝市入場者数、年別の輪島市における観光客数をについてまとめた。

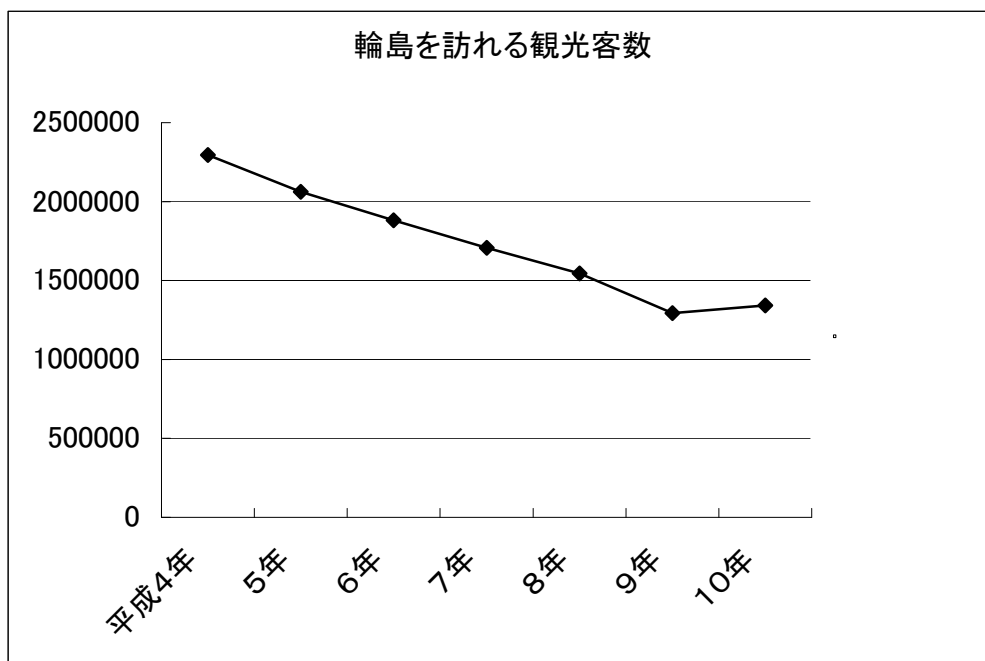


図2．輪島を訪れる観光客数の変化

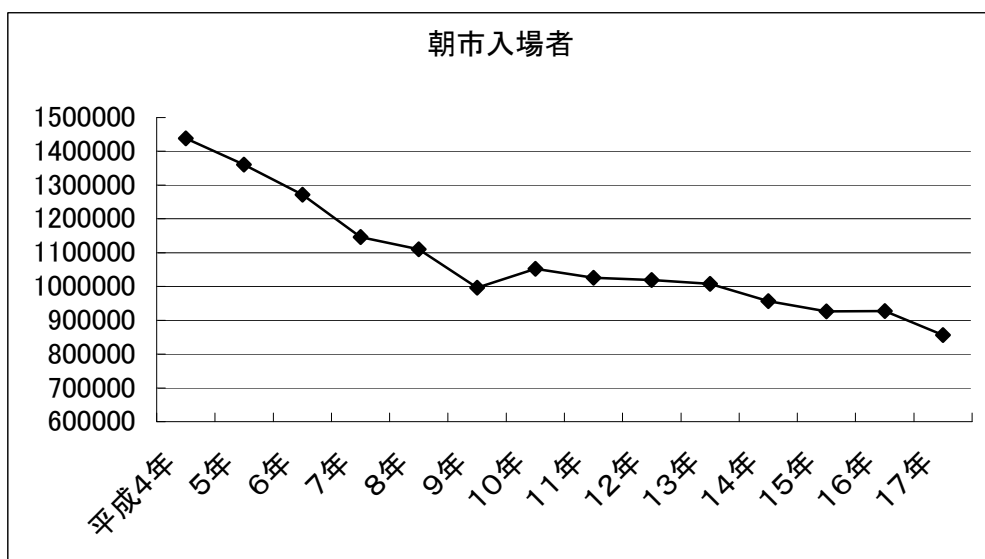


図3．朝市入場者数の変化

グラフにまとめた通り、輪島を訪れる観光客数は年々減少傾向にある。それに伴い朝市を訪れる観光客数も年々減少している。平成4年は143万8千人の観光客が訪れていたが、平成17年は85万5千6百人と約60万人も減少している。

次に月別の朝市入場者数について見ていく。朝市に一番多く観光客がおとずれるのは 8 月である。長期休暇を利用した家族旅行で能登や輪島を訪れる人が多いためと思われる。

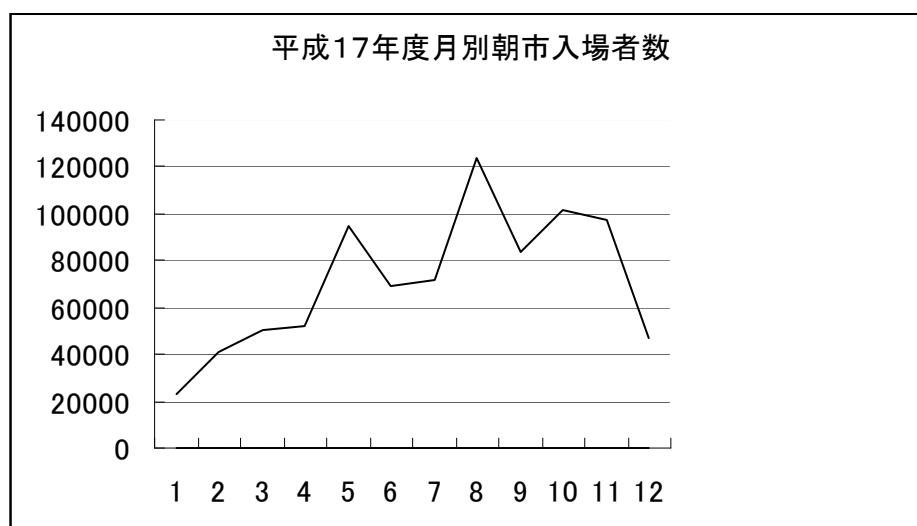


図 4. 平成 17 年度の月別朝市入場者数の変化

3-2. 朝市の一日における観光客の来場者数

朝市における年間、月別の来場者数について見てきたが、次は一日における朝市来場者数について見ていく。9 月 1 日金曜日と 9 月 3 日日曜日の平日と休日に分けて調査し、以下の表にまとめた。(朝市には入り口がいくつかあり、この調査は入場者のもっとも多いと考えられた正面入り口において、入場者を性別と世代別にカウントした。世代については外見で判断した。したがって、下の表は調査日の朝市入場者数をすべてカバーしたものではなく、世代別人数もおおまかな目安である。)

表 1. 平日(9 月 1 日)と休日(9 月 3 日)の朝市入場者数

9 月 1 日(金曜日)

男	50 代以上	30 代以上	15 歳以上	15 歳未満	全体
8～9 時	42 人	24 人	5 人	1 人	72 人
9～10 時	72 人	21 人	8 人		101 人
10～11 時	31 人	17 人	8 人		56 人
11～12 時	7 人	7 人	3 人		17 人
合計	152 人	69 人	24 人	1 人	246 人

女	50代～	30代～	15歳以上	15歳未満	合計
8～9時	67人	16人	6人	1人	90人
9～10時	114人	31人	15人	1人	161人
10～11時	45人	11人	5人	1人	62人
11～12時	9人	8人	7人		24人
全体	235人	66人	33人	3人	347人

9月3日(日曜日)

男	50代以上	30代以上	15歳以上	15歳未満	全体
8～9時	88人	58人	33人	1人	180人
9～10時	141人	25人	13人	2人	181人
10～11時	109人	71人	21人	2人	203人
11～12時	51人	19人	6人	3人	79人
合計	389人	173人	73人	8人	643人

女	50代以上	30代～	15歳以上	15歳未満	合計
8～9時	105人	45人	19人	4人	173人
9～10時	102人	30人	15人	2人	149人
10～11時	138人	42人	22人	5人	207人
11～12時	76人	30人	10人	2人	118人
全体	421人	147人	66人	13人	647人

やはり、平日と休日では休日のほうが入場者数は多く、男性と女性を比べると女性のほうが多少多い。年齢別に見ると年配者が多く、若年層が少ない傾向が見られる。休日ともなると朝市通りは多数の人でにぎわっている。

次にさきほどの表から、時間帯別の朝市入場者数について平日と休日の両方の面から詳しく見ていく。

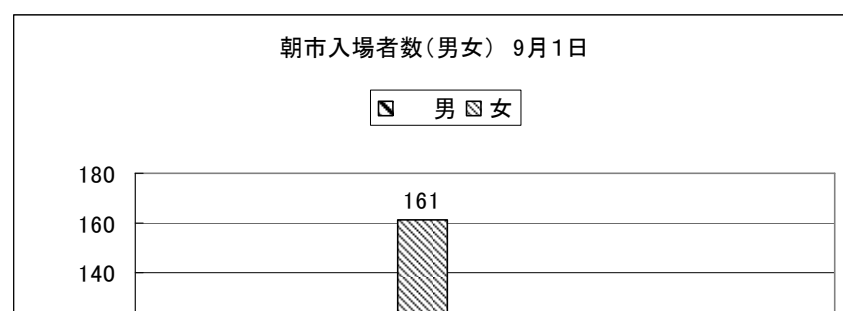


図 5．時間帯別朝市入場者数（平日）

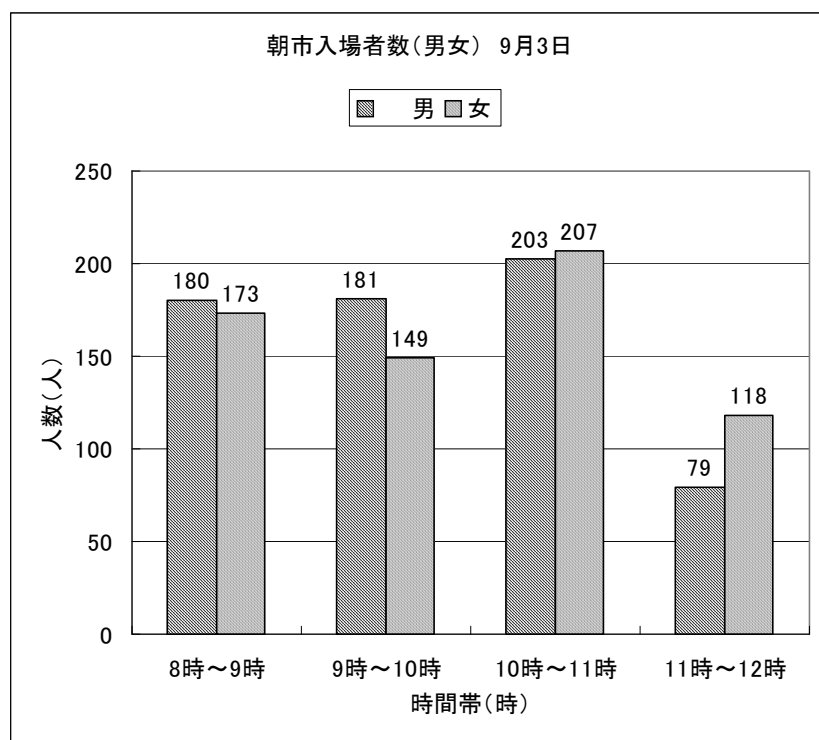


図 6．時間帯別朝市入場者数(休日)

平日は、9～10 時の間に男女ともにもっとも入場者数が多くなっている。この時間帯は朝市がもっとも観光客でにぎわう時間帯である。ただし 10～11 時になったら急に朝市内の人数が減るというわけではなく、次に説明するが観光客の朝市における滞在時間の平均

は 30～60 分なので 10～11 時の時間帯も朝市は充分賑わっており、朝市入場者は急に減るのではなく 12 時に朝市が終わるまで徐々に減っていく。男女の数では女性の入場者のほうが男性よりも多い。

休日は、平日と比べて時間帯による入場者の差は少なく、どの時間帯も多く観光客でにぎわっている。8 時の朝市開始から、多くの観光客が訪れ、11～12 時の時間帯に入場者数は減るが朝市内の観光客数は依然多く、その賑わいは朝市が終わる 12 時まで続いている。平日とは違い朝市を訪れる男女の数に大きな差はなく、男女ともに多くの観光客が朝市を訪れている

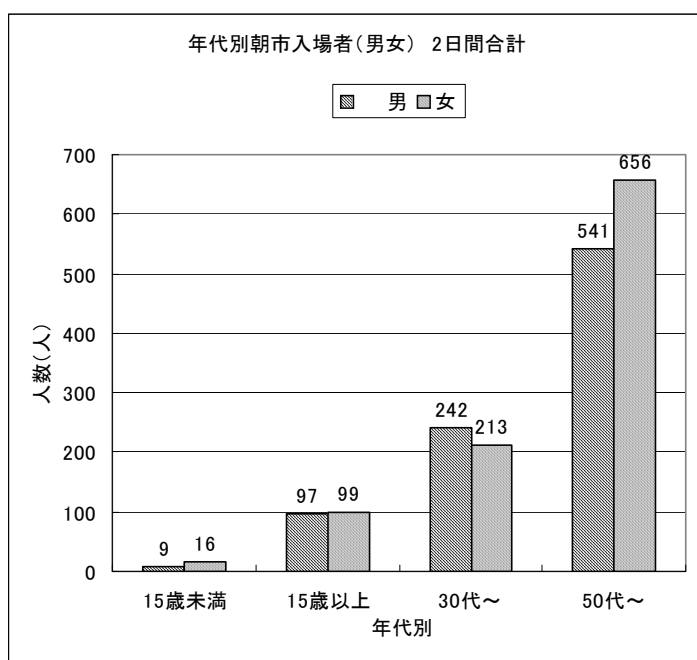


図 7. 年代別朝市入場者数

朝市を訪れる人の年齢に平日と休日で相対的な差はなく、全体的に年齢が高い人が多く訪れている。図 7 の通り年齢をおうごとに朝市を訪れる人々の数は多くなっている。このことから朝市の中心的な客層は年配の人々といえる。

3－3. 観光客の朝市における行動

ここでは朝市内における観光客の滞在時間、買い物などの行動について述べていく。ま

ず観光客の朝市における滞在時間についてだが、これはツアー客と一般客で多少異なるものの、大概として言えることは多くの観光客の滞在時間は 30～60 分ということである。この時間内に観光客は朝市内を見物し買い物をしている。男女、年齢、形態などでの滞在時間の特徴などはみられない。

表 2. 観光客別の朝市滞在時

ツアー客	朝市では自由に見て回り、どのツアー客も 50～60 分の時間がとられている。主に年配の方が多い。
一般観光客	20 代カップル 約 30 分 家族連れ(夫婦 50 代子ども 20 代女) 約 40 分 家族連れ(祖母 1 人夫婦 50 代子ども 10 代男女) 約 50 分 家族連れ(夫婦 30 代子ども幼児 2 人) 約 70 分 友人連れ(20 代男) 約 30 分 友人連れ(20 代女) 約 30 分

たいていの観光客は何かしら買い物をしている。観光客の方に話を聞いたところ、やはり海産物を買っている方が多かった。観光客のイメージとして朝市＝海産物という関係が成り立っているようだ。「せっかく朝市に来たのだから海の物を買わなくちゃ！！」という声が多数聞けた。その他、意外にも年配の方々を中心に朝市とはあまり関係のないようなクッキー等のお菓子類など万民向けのお土産が多数買われていた。これは朝市のお土産というよりかは石川県のお土産として買われており、朝市が観光客における石川旅行のお土産購入ポイントとして見られることがわかる。

3－4. 観光客の朝市に対する印象

観光客の朝市に来てもった印象とはどのようなものなのか。「活気がある」「人の多さにびっくりした」「海産物がたくさん売っていて思わず買ってしまった」「こういう場所には始めて来た、とてもおもしろい」「また来たくなった」など朝市について好印象をもった人が多いようだ。しかし能登独特の強い言い回しによる方言のせいかわ「なにを言っているかわからなかった」「販売マナーが悪い」などの声も聞かれた。

4. 地元の人から見る朝市

昔までは朝市は地元の人々のコミュニケーションの場で海のものと山のものの物々交換が行われていた。しかし現在では観光地化され、そのような地元の人のコミュニケーション

ンの場という意味合いは薄れている。地元の人はそんな朝市をどのように見ているのだろうか。

4－1．地元の人の朝市利用状況

地元の人の朝市利用状況を知るために朝市通り・朝市通りから少し離れた場所にある某ショッピングセンターにて調査を行った。

・朝市通り

実際、朝市には地元の人も訪れている。ただその数は少なくやはり観光客が多数を占めていた。

朝市を利用する理由としては「鮮度が良い」「家から近い」「地物が買える」などの答えが多く、その他「安い」「顔なじみ」などの答えも返ってきた。

・某ショッピングセンター

30人の地元の人を対象に調査をしたが、朝市を利用するという人が誰もいなかった。朝市を利用しない理由としては「朝市は観光客の行くところ」「遠い」「駐車料金がかかるため車でいけない」「時間帯が合わない」「スーパーのほうが便利」などの答えが聞けた。

朝市を利用する人は家が近い人、そのうえ仕事をしていない年配の方が中心である。そのためか、地元の人を朝市であまり見かけない。家が遠い人、仕事がある人は駐車場の問題、時間帯の問題などで朝市は利用しないようである。その他、最も多く聞かれた答えとして「朝市は観光客のもの」というものがあり、地元の人々は朝市を昔までのような地元のコミュニケーションの場とは認識していないようであり、実際コミュニケーションの場とは言えなくなっている。

表3．地元の人の朝市利用状況とその理由

	朝市を利用する	朝市を利用しない
--	---------	----------

理由	鮮度が良い 家から近い 地物買える 安い 顔なじみ	↑ 多 ↓ 少	朝市は観光客の行くところ 遠い 駐車料金がかかるため車で行けない 時間帯が合わない スーパーのほうが便利
人数	少 < 多		

5. 朝市運営側の朝市

5-1. 朝市の運営組織

朝市全体を統括し、運営していく機関として存在するのが輪島朝市組合である。出店者は商売を始める前にこの組合に加入し、出展の許可を受けなければならない。許可を受けた者はその証明として、店の軒先に木の札をかける。出店者の間ではカンサツあるいはフダと呼ばれているが、正式には朝市組合員之証と言う。その札には組合の番号と、出店者の氏名が記されている。しかし、以前は一度取得すれば生涯有効であったが、何世代も前の親類の名義のまま出店するという問題があったため、2004年度からは毎年更新するように変更され、現在では期日が明記された新しい「輪島朝市組合員之証」を店の軒先にかけている。場所は暗黙の了解として代々世襲されている。

平成18年度のデータによると、現在の組合の加入者は338人となっている。組合はいくつかの部会によって構成されている。地域ごとあるいは販売品目別ごとによって部会は構成されており、全部で36の部会がある。現在、組合長1人、副組合長5人、会計理事2人、理事14人、監事2人、事務局2人で事務局以外は338人の組合員から選出されている。役員の任期は2年であり、年一回の総会のほか、理事会は毎月、そのほか理事会は毎月ひらかれている。組合員の87%が女性で高齢化や後継者不足も心配されている。

各部会名称 (H18.7.1 現在)

① 本町商店街部会	51人
② 輪島崎鮮魚部会	46人
③ 海産物部会	42人
④ 諸部会	21人
⑤ 海士町鮮魚部会	18人
⑥ その他集落部会(主に野菜、民芸)	160人 (30集落)

5-2. 販売品目

朝市で販売されている品目は多種にわたり、輪島の特産物や民芸品など、観光客が土産

をかうには最適な場所である。主な販売品目と登録者数は以下の通りである。

朝市組合販売品目別登録者数（平成17年度7月1日現在）

鮮魚	64 人
海産物・塩乾	46 人
野菜・海草・山草・花	149 人
民芸品・土産品・漆器・玩具・古美術	49 人
菓子・飲料・酒・餅・せんべい	11 人
食料品・果物・卵・かまぼこ	12 人
衣料・傘・履物	8 人

5－3．朝市の努力

近年、朝市には全国から多数の観光客が訪れる。そのため売り手と観光客の間でさまざまなトラブルが生じることもある。そういったトラブルを改善するため、より観光客を増やすために朝市はさまざまな努力をしている。具体的な例を挙げると、苦情に対応するためのインターネットの整備、朝市では生の魚も扱っているため保存法、食べ方の説明の徹底、自身をもって観光客に商品を売るために品質の向上などである。印象的なのがカニなどの場合は品質のよさにこだわるため輪島自前のものではなく北海道産のカニを売っていることである。多少拍子抜けの感はあるが、それほど朝市は商品の品質にはこだわっている。（ここからも朝市が観光化されたことがわかる）

また、朝市の売り手による輪島独特の少し語彙の強い方言、商品の押し売りなどによる観光客とのトラブルも問題となっている。

朝市の観光客の減少については先ほども説明したが、減少した観光客を呼び戻す努力も行われている。一時期 200 万人とも言われた観光客の数は平成 17 年度には 85 万 5600 人にまで減少しており、頭がいたい。売り手自身も観光客の減少は痛感しており、「10 年前は休みの日なんて人で道なんて見えなかったよ～、ずいぶん人が減っちゃって…」と嘆いていた。

6．まとめ

今回、輪島の朝市を地元の人、観光客、朝市側のそれぞれの視点から調査した。地元の人にとって朝市は、以前の地元の人びととの交流の場ではなくなり、観光客のもので、地元の人々の台所ではなくなった。これは朝市が観光化した観光市となり地元の人々の生活市ではなくなったことを意味している。地元の人々の多数が朝市は観光客のものだと感じており、これが地元の人々が朝市に行かない主な理由ともなっている。これは、地元の人々の生活形態の変化により、朝市が行われている時間帯には地元の仕事に就いてる人々は仕事

であり、物理的に朝市を訪れることができないなどの理由も、少なからず影響しているように思われる。観光客にとって朝市は石川の観光地として訪れる格好のポイントであり、観光客にとっては輪島といえば朝市というような、観光地の象徴となっている。また観光客にとっては「朝市といえば海産物」というようなイメージが存在し、新鮮な魚介類をもとめて朝市を訪れる観光客も多い。朝市を訪れる人々の大半は観光客であり、このことから朝市は観光市であるということが出来る。朝市側の人々にとって朝市は生活の主であり、朝市で生計をたてている人もいる。朝市の主なお客はやはり観光客であり、また、輪島市全体にとっても朝市が観光産業としての大きな財源になっているため観光客の減少を危惧し、観光客の増加に向けて努力している。このことから朝市が観光市であると言えることができる。

このように輪島の朝市は、以前のような地元の人に密着した地元の人々のための生活市ではなく、観光客を購入の主な対象とした、観光客ありきの観光市であるということが出来る。このことは決して悪いことではなく生活市というすばらしい文化から観光市というこれもまたすばらしい文化として変化し、これからも朝市は進歩し続けるであろう。朝市を歩いていると「兄ちゃん、おいしいよ！！見てって！！」、「兄ちゃん、安くしとくよ！！」などひっきりなしに声をかけられる。その声につられて商品を見に行くとおばちゃんの巧みな話術にのせられ思わず商品を買ってしまう。嫌な気持ちはせず、おばちゃんと話をしていると逆にあたたかい気持ちになる。私はここに本当の朝市の魅力があるのだと思う。朝市のおばちゃんたちと触れ合うと、まるで自分が輪島の地元の人間であるかのような錯覚を覚える。それほど朝市のおばちゃんたちは親しみやすく、あたたかいのだ。朝市のあたたかさは観光市となってもなんら変わっていないのである。

第3節 白米千枚田の観光化と保全活動

杉 本 優 子

1. はじめに

白米千枚田^{しろよねせんまいだ}は、多くの観光客が訪れる輪島市の観光名所の一つとなっている。そこで、白米千枚田という棚田が観光化されていった経緯や、観光化されている中でどのように千枚田での農業を維持し続けてきたのかについて興味を持ち調査することにした。調査は5月から12月にかけて毎月1, 2回輪島市や白米町で行った。ここでは、白米千枚田に関する文献と現地での聞き取り調査で得た内容を報告していくこととする。

2. 白米町の概要

2-1. 白米町の歴史

白米千枚田がある白米町は、輪島市の市街地から東の曾々木^{そそぎ}方面へ約8キロメートル行ったところに位置する。白米町には、およそ700年来の歴史がある。古くは壇ノ浦の戦いの後、九州から平家の落人が逃れてやってきたと言われている。彼らは現在の熊本県と宮崎県の県境に位置する泉村^{いずみ}から、有力な親戚を頼って白米に来たそう。白米では目の前に広がる海と後ろに広がる山を活用し、江戸時代までは狩猟や稲作、焼畑農業、製塩などを行い、自給自足でどこの支配も受けない自由な自治体であった。江戸時代になると、加賀藩の支配下に入ることになる。それにより、白米の人々は年貢を納めるため、製塩や米作りに力を入れるようになる。白米は能登の外浦^{そとうら}のほぼ中央に位置するが、漁船を使うほどの入江がなかったため、製塩と農業の村として発達していった。現在の千枚田は、江戸時代中期に天災による山津波^{やまつなみ}でできた日本海に至る斜面に、藩の命令により新しく作られたものであると言われている。明治時代になると、人々の生業の中心は製塩から農業へと移っていった。白米町は、江戸時代は「能登国鳳至郡白米村^{の とくにふげしぐんしろよねむら}」と呼ばれており、明治時代に入ると「石川県鳳至郡南志見村字白米^{いしかわけんふげしぐん な し み むらあざ}」となり、現在は「輪島市白米町」となっている。



図1. 白米町の位置（北陸・道の駅HPより転写）

2-2. 白米町の人口と農業

白米町に現在暮らす人口は、現地での聞き取り調査によると男性 15 人、女性 22 人、20 歳未満 5 人の計 42 人である。世帯数は 18 世帯であり、そのうち一人暮らしの世帯が 7 世帯、二人暮らしが 5 世帯となっている。白米町全体の平均年齢は 58.6 歳であり、一人暮らしの世帯は全て 70 歳以上と高齢化が進んでいる。図 2 は、現地での聞き取り調査によって得た白米町の各世帯の性別と年齢を図式化したものである。60 歳以上の人口をみると、男性が全体の 60 パーセント、女性が全体の約 80 パーセントとなっており高齢化が進んでいることが分かる。

図 3 は現地での聞き取り調査による、白米町の世帯における農業種別を表したものである。この図をみると、現在の白米町の農業世帯は、専業・兼業農家合わせて 7 世帯であることが分かる。専業・兼業農家の中でも、国指定文化財になっている千枚田で農業を行っている農家は 4 世帯のみである。図 3 の離農世帯とは、以前は水田で農業を行っていたが、現在は行っていない世帯である。しかし、現在でも多くの離農世帯では自分たちで食べる分だけの野菜などは作っているというところが多くみられた。

千枚田での農業はまず、4 月中旬の^{たづく}田作りの作業から始まる。下旬には^{あぜ}畦つけ（注 1）をする。5 月上旬には代かき（注 2）が行われ、田に水が張られる。中旬にはボランティアも参加し田植えが行われ、6 月から 8 月には水の管理や草刈がされる。そして、9 月にまたボランティアが参加し稲刈りが行われる。下旬にははざ干し（注 3）、10 月上旬に^{だっこく}脱穀と精米を行い水田での農作業は終了する。



写真 1：白米千枚田

注釈：（1）畦つけ：畦とは、水田と水田との間に土を盛り上げてつくった小さな堤のことである。畦つけとは、各水田に畦を形成していくこと。

（2）代かき：田植えのために、田に水を入れて土を碎いてかきならす作業のこと。

（3）はざ干し：稲刈り後、刈り取った稲を束にして干し乾かすこと。

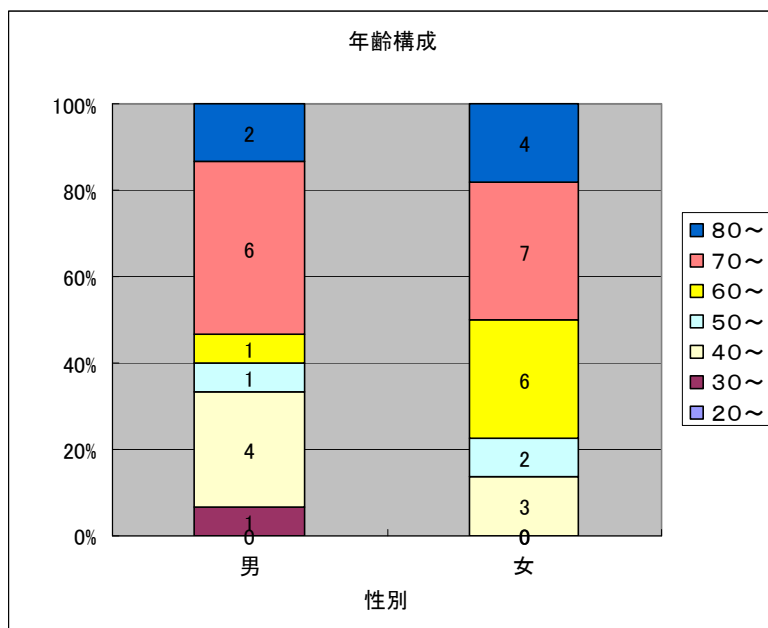


図 2. 白米町の年齢別人口構成

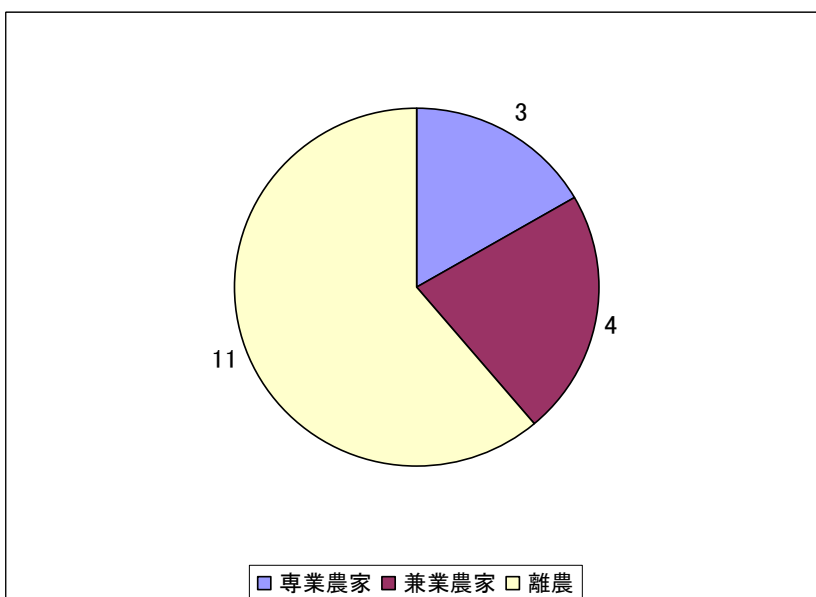


図 3. 白米町の農業種別

2－3. 白米千枚田の概要

棚田とは山の斜面や谷間の傾斜地に、階段状に造られている水田をいう。一般に、小さなものまで数えれば千枚にも達するところから「千枚田」ともいわれている。白米千枚田では、田の 1 枚の面積が小さいことから、『狭い田』という言葉が『千枚田』に変化していったとも言われている。

白米千枚田は、標高 70 メートル付近に立地する白米集落の下 60 メートル辺りから海岸線近くまで拓かれている。千枚田は田の 1 枚の面積が狭く、耕耘機等の機械が入らない。

そのため、農作業は手作業で行われてきた。1968 年（昭和 43 年）頃に、石川県と輪島市から耕作助成金を出す代わりにこのままの田の形で耕作を続けてほしいという要望があり、白米の人々は 1970 年（昭和 45 年）に、この要望を受け入れて今日まで至っている。保全当初の千枚田は田の数が約 2 千枚あった。現在は、白米町の間を通る国道 249 号線の下にある千枚田だけで、1,004 枚ある。この枚数は、2001 年（平成 13 年）に国指定文化財に指定されている枚数である。田の枚数が以前より減少しているのは、1970 年以降に棚田を観光地化する動きが進み、棚田の側を通る国道 249 号線の拡張工事や、農道の整備、また国道脇に棚田の景観を一望できる千枚田ポケットパークと呼ばれる道の駅を作ったことにより、田の一部が潰されたことが原因である。現在、1,004 枚ある田のうち、耕作枚数は 862 枚であり、休耕地が 106 枚、畑が 36 枚となっている。

3. 白米千枚田の観光化

3-1. 白米千枚田の観光

白米千枚田は現在、輪島市の重要な観光資源となっている。このように市の観光資源となった背景には、時代の変化が影響している。輪島市内からバスで白米千枚田に向かうまで、海岸線には多くの棚田を見ることができる。古く江戸時代には、その棚田を全て能登の棚田と呼び有名であったそう。棚田のある斜面は地すべり地帯であり、毎年 4 月に地すべりで崩れた田の畦を直す作業を行っていた。崩れた田を手作業で直すため、田はどんどん細分化され小さくなっていった。昭和に入ると、日本で農業の機械化が進み、機械を入れられるように田の面積を広くする区画整備が全国で行われた。能登の棚田でも同様に区画整備が行われ、白米千枚田以外の地域では田の面積を大きくしていった。白米千枚田はというと、周辺地域と同様に区画整備を行いたかったが、輪島市と県から補助金を出す代わりに景観を守って欲しいという要請を受け、区画整備を行わなかった。白米町の人、「手作業は大変だし、本当は田を大きくしたかった。でも、大きくしていたら今みたいに有名になってないだろう。」と話していた。

棚田の保全事業は、1970 年代に本格的に始まる。1974 年までは観光資源保護対策事業として、県と市から毎年 40～50 万円の耕作助成金が出された。さらに、1975 年から 1980 年には歴史的観光資源保護対策事業として 50～100 万円の耕作助成金が、1981 年から 1990 年には千枚田景勝保存会助成金として 100～140 万円が毎年県と市より支出された。しかし、1991 年に県が助成金の支出を打ち切った。そのため、輪島市は前年度より 20 万円増額し 160 万円の助成を行った。県が助成金を打ち切ったのは、千枚田の間を通る国道 249 号線の拡張工事に際して、県と市が 1 億円を支出し、国道脇に駐車場、レストハウス、公衆トイレを備えた展望台である千枚田ポケットパーク（道の駅）を建設したことによる。県はこの施設を地元が無償で貸すことにより、そこから得られる収益で助成金の捻出が図れると判断し、助成金の打ち切りを決めたのである。しかし、その後、地元の要望もあり

1992 年には再び県と市による 160 万円の助成が行われるようになった。

白米千枚田の景観は、これまでさまざまな賞や百選に選ばれている。下の表 1 を見れば分かるように、白米千枚田の景観は高く評価されている。また、この景色を見に多くの著名人も棚田を訪れている。最近では、平成 17 年に当時首相であった小泉純一郎衆議院議員が白米千枚田を訪れ、「絶景だ。」と言われたそうである。

表 1. 白米千枚田が選ばれた各賞

昭和 31 年	市指定名勝
平成 3 年	日本の米作り百選
平成 4 年	手作り郷土賞
平成 6 年	手作り観光地百選
平成 8 年	水の郷
平成 11 年	日本の棚田百選
平成 12 年	県指定名勝
平成 13 年	国指定文化財名勝

3-2. 白米千枚田での観光客の動向

白米千枚田には全国各地から観光客が訪れる。時期としては、5 月の田植えから、9 月末の稲刈りにかけて多くなる。冬場は寒さもあって、観光バスが止まることは少ない。観光客は、観光バス、自家用車、バイクで来る人が多い。台数としては自家用車が多いが、観光客の人数としてはツアーなどで観光バスを利用し来る人が多い。千枚田ポケットパークに止まっている車のナンバーを見るだけで、全国各地から観光客がやってきているのがわかる。9 月に 11 時から 13 時までの 2 時間、ポケットパークに入ってきた車の数を数えたところ、観光バス・旅館のバス合わせて 14 台、自家用車 51 台であった。自家用車は、鹿児島から横浜までさまざまな地域から来ていた。また、中には台湾から来ている人もおり、白米千枚田の知名度の高さを伺うことができた。このほか、中国や韓国から来る人もいる。

観光客が千枚田で要する時間は、約 10 分であり、その間に景観をカメラに納める人がほとんどだ。観光客が白米千枚田で楽しむのは、景観だけではない。話を聞いたり、観光客の行動を観察したりしていると、田の景観とともに地元の人とのふれあいを楽しむ人も多いことに気づいた。千枚田ポケットパーク内には、地元の老年女性たちが出している露店がある。朝の 9 時頃から夕方 4 時頃まで、午前と午後の二回に分けて有志で集まった地元の老年女性が交代で店を出す。露店では、店を出している女性たち手作りの麻で作ったお守りや市内から仕入れてきた置物などが売られている。観光客の中には、「以前来たとき、ここでお守りを買ったんだけど、まだあるかな。」と寄って行く人もいれば、露店の女性と話し、「また来るから元気で。」と言って帰る人もいる。露店を出す地元の女性は、「い

ろんな県から来る観光客とこうやって話しができるのが楽しい。」「また、来たよって言って訪ねてくれる人がいればまだまだ頑張ろうと思う。」と観光客とのふれあいを楽しんでいた。また、写真を撮りに来た観光客には、地元の人が農作業をしている姿をモデルに田の風景を撮る人や、地元の人に声をかけ写真を撮らせてもらう人もいた。写真を撮っていた観光客は、「農作業着を着ている人は地元の人だと思って、写真を撮らせてもらった。この場所で昔から一生懸命に農業してこられた人と一緒に、この景色を撮ることに意味がある。」と話していた。

3-3. 千枚田でのイベント

輪島市の重要な観光名所となっている白米千枚田では、千枚田を使ったイベントを行い観光地としてのピーアール活動を行っている。主に行われているのは、千枚田結婚式とフォトコンテスト、そしてボランティアによる合同の田植え・稲刈りである。ここでは、千枚田結婚式とフォトコンテストについてみていくことにする。

① 千枚田結婚式

白米千枚田で 2000 年から始まり、毎年 9 月末に行われる。参加するカップルはインターネット上で全国から募集される。式はカップルを奥能登おくの とに古くより伝わる田の男神おとこがみ女神おんながみに見立て、伝統的な形式で行われる。これまでに、この結婚式で計 16 組が式を挙げている。



写真 2. 千枚田結婚式

表 2. 結婚式当日の進行表	
9 : 0 0	縄張り <small>なわばり</small>
: 0 6	まだら節 <small>ふし</small>
: 1 2	新郎・新婦の入場
: 1 5	神楽 <small>かぐら</small>
: 1 7	儀式
: 3 8	指輪の交換
: 4 0	新郎・新婦 誓いの言葉
: 4 3	玉ぐし奉獻 <small>たまぐしほうけん</small>
: 5 0	儀式
: 5 5	神楽
: 5 9	宮司退場
1 0 : 0 1	記念品贈呈、結婚証明書贈呈
: 0 7	輪島市長あいさつ
: 1 5	稲を刈る（共同作業）
: 2 1	新郎・新婦退場
	ツトを配る

輪島まだら…輪島に伝わる独特の節回しの祝い歌である。結婚式や祭礼などめでたい宴席には必ず披露され合唱される。

縄張り…奥能登に古くから伝わる風習で、花嫁行列の行く手をふさぐという祝意を込めた妨害をする。先頭に行く仲人が縄を持つ人に祝儀を渡すと、縄を解いてもらえる。縄の数が多いほど盛大に祝福されている。

ツト…もともと披露宴で席に参加できなかった人たちが、新郎新婦よりツトをもらうことで幸せのお裾分けをしてもらうことや、お酒の振る舞いのつまみを分けてもらう風習のことをツト投げと言う。千枚田結婚式では、式終了後に藁わらを袋状に編み、その中にお菓子入れ、式に参加した人や見に来ていた人に配っている。（写真 3）

今年は、9 月 23 日に行われ 2 組のカップルが白米千枚田で式を挙げた。そのうちの 1 組はスイス在住の夫妻で、夫がスイス出身、奥さんが栃木出身の国際カップルであった。千枚田での結婚式に、「主人のあこがれていた漆塗りうるしぬりの里で、日本式の結婚式を挙げられ感無量です。」と喜びを表した。

千枚田結婚式では、輪島市長夫妻が仲人を務め、大勢の観光客に見守られながら表 2 のような神前結婚しんぜんの式順で式が進行する。式の中には輪島の伝統的風習も取り入れられ、千枚田結婚式を通じて輪島の文化をピーアールしている。式の終盤には、千枚田で育ったコシヒカリの稲を紅白の布で飾られた鎌で刈る、夫婦の共同作業があり、ここでしか体験で

きないものとなっている。結婚式の中で市長がスイスから参加の夫婦に、「この千枚田を世界へ発信してください。」と挨拶を述べた。このことからわかるように、このイベントは、大勢の観光客やメディアが見に来ており、観光地としての輪島、また白米千枚田の名を全国に発信する場となっている。

観光客の中には、このイベントだけを楽しみに見に来てくる人も多い。午前7時頃には、すでに人が集まり始める。千枚田ポケットパーク内の駐車場は車がいっぱいになり、道路に車をとめて見学する人も大勢見られた。また、地元の方の好意により民家の駐車スペースにとめさせてもらう人もいた。カメラを手に訪れていた人の中には、一番良い場所を狙って場所取りを行う人もおり、一番の人気スポットは新郎新婦が稲を刈る場所だった。早くから見に来ていた人に話を聞いたところ、以前も白米千枚田を見に来たというリピーターの人が多くみられた。

事例：「棚田を見るのが好きで、いろんな所を回っているのだけど、前に（白米に）来て素晴らしかったからまた来たいと思っていた。結婚式があるって新聞で読んで見たいと思い来た。」（大阪、女性）

「去年も結婚式を見に来て良かったので、今回は写真仲間を連れて来た。」（京都、男性）

「毎年見に来ていて。いい写真を撮りたいから、早く来た。稲を刈る姿を撮りたい。撮った写真はコンテストに応募する。」（男性）

「日帰りで見に来た。新聞で読んで、この結婚式が見たくて。～(式終了後)～また、来年見に来たい。」（横浜、男性）



写真3. ツト



写真4. 千枚田結婚式（稲を刈る様子）

② フォトコンテスト

白米千枚田では、カメラ片手に景観を写真に収めに来る人が多い。そのような人を対象

にフォトコンテストが行われている。2004年と2005年は、白米千枚田独自のフォトコンテストを行い、多くの写真愛好家が訪れた。2006年は、白米千枚田独自のコンテストは行っていないが、「能登半島丸ごと写真づくしフォトコンテスト」というものが実施されてい

る。このコンテストでは、石川県宝達志水町^{ほうだつしみず}と富山県氷見市^{ひみ}を含むそれ以北の能登半島一帯で、能登半島の自然・風土・歴史・人をテーマに撮った写真を募集している。景品には、能登空港往復ペアチケットや輪島塗コーヒークップなどが送られる。

このようにフォトコンテストを行うことで、写真愛好家などの興味を引き、能登の観光ピーアールを行っているのである。

3-4. 観光客と地元の人の感想

a) 観光客の感想

千枚田ポケットパークで、白米千枚田を見に来ていた観光客に話を聞いた。

「昨年も白米千枚田を見に来た。田んぼの景色がきれいで、また写真を撮りたくて。この景色のためだけに来たんだ。」(男性)

「日帰りで来た。白米千枚田は有名なので、今までにも何回か見に来たことがある。でも、何度来ても素晴らしい。水田の様子がすごい。」(女性)

「海がすぐそばにあってきれい。景色がいい。」(女性)

「絵を描きに来たの。海の色と空が(田の)緑に映えるね。きれいね。」(女性)

「(田が)小さいね、すごい。大変やね。田植えの時きれいやろうな」(女性)

「全国の棚田を回っているけど、ここの棚田は海に面していて特別きれい。」(男性)

観光客の感想としては、田の面積の小ささに驚く人も多かったが、海と水田の景観に感心する人が多かった。白米千枚田が観光地として人気があるのは、千枚田が日本海に続く斜面にあり、田と海、そして空が一度に楽しめる景観があるからのようだ。また、千枚田が水田であり、季節によって景色が変わると言うのも、人気の一つのようなった。

b) 地元の人の感想

白米千枚田の観光化が進み、観光客が日々訪れる状況をどう思っているのかについて、白米町の地元の方に話を聞いた。

「(露店で)観光客の人と話すのが楽しみ。」

「観光客が大勢見に来てくれて『きれいだね』と言ってくれるから、(それが励みになって)農業を続けられる。」

「農作業は大変だし、観光客がいなければ(やる気が起きなくて)とつくに廃れていって行くんじゃない。」

「たまに、話しかけてくれる人がいて話すのが楽しい。お客さんと話しながらだから(楽しんで農作業が)できる。」

など、以上のように地元の人の高齢化もあり農作業は大変だけど、千枚田を見に来る観光客が大勢いることが励みとなり農業のやる気を起させる要因となっていることが分かる。観光によって現在まで、白米千枚田の農業が維持されてきたと言えるだろう。

1. 千枚田での農業の保全活動

白米千枚田は国指定文化財名勝に指定されているため、現在の田の形を維持しなくてはならず、田の面積を勝手に変えてはいけない。また、水田での農作業も景観を維持する上で毎年行わなければならない。しかし、現在、地元の人の高齢化や農作業が重労働のため、地元の人たちだけでは農業が維持できない状況になっている。そこで、行政や地元では千枚田での農業を保全するため様々な活動を行っている。

4-1. 千枚田景勝保存会せんまい だ けいしょうほぞんかいによる活動

白米町の人で結成されている会。市から補助金を受け取り、それを千枚田で農業を行っている人たちへの耕作補助という形で使用する。助成金を受け入れる窓口として、地元側で 1981 年に設立したのが、千枚田景勝保存会である。この保存会は、白米町の区長が会長となって運営しており、助成金の配分などの管理を行っている。また、千枚田ポケットパークに設けられた土産物の店の賃貸や自動販売機からの収入などにより、耕作助成金の一部が負担されているほか、ポケットパーク内のトイレ清掃費、棚田の水管理費などがまかなわれている。

4-2. 白米千枚田愛耕会しろよねせんまい だ あいこうかいによる活動

2006 年 4 月に、白米町の近隣地域である南志見地区な じ みの人 4 名で結成された。以前から農業に興味があった代表の人が、定年退職したのをきっかけに、白米町の区長と知り合いだったこともあり千枚田で農業を手伝うことを始めた。4 人のメンバーは、全員農業経験者であり、中には南志見地区で自分の田を持つ人もいる。全員が農業経験者であり、自宅も白米町の近くであるため、全農作業を自分たちで行っている。田植えや稲刈りなど、人手がいるときにはメンバー以外に南志見地区の人がボランティアで 50 人ほど手伝いに来る。耕作地は、昨年まで石川連合がボランティアで使用していたが、今年から参加しなくなったので、その分の田を愛耕会が代わりに耕作している。

愛耕会のメンバーに話を聞いたところ、「ここ（白米千枚田）は今（農業が）大変だから、自分たちで出来ることがあれば手伝いたい。」「愛耕会メンバーがこれから増えていけばいいな」と話してくれた。また、白米の地元の人には愛耕会に対し、「これまで近くの地区の人が千枚田を手伝いに来ることはあまりなかった。全部（の農作業を）やってくれるので助かる。」「連合のぬけた田を引き継いでくれて、南志見の人を大勢連れてきてくれるのでありがたい。」と、白米千枚田愛耕会に期待しているのがうかがえた。

4-3. ボランティア団体による活動

白米千枚田の保全活動の特徴の一つとして、ボランティアによる農業参加が挙げられる。ボランティアによる活動は、輪島市商工観光課が窓口となり 1993 年に始まった。ボランティアには、輪島市や石川県にある企業や団体、学校などが参加している。活動としては主に田植えと稲刈りを行なっている。千枚田での田植えや稲刈りは、ボランティアが市役

所の呼びかけで同じ日に合同で行う。稲刈りに関しては、千枚田結婚式の日に合わせて行われている。このボランティアによる田植え、稲刈りの時には、農作業終了後に千枚田ポケットパークにおいて、作業に参加した人や千枚田を見に来ていた観光客におにぎりや鍋、飲み物が市から振舞われる。

ボランティアによる農作業では、田植えと稲刈りに参加する団体も異なる。どちらも参加している団体から、どちらか一方だけ参加の団体、その他に田植え稲刈り以外の農作業も行う団体まで様々である。(表 3)

表 3. 平成 18 年度、ボランティア活動に参加した団体		
田植え	稲刈り	その他の作業
オムロン 輪島公民館 住吉町青壮年部（野々市町） 金沢大学留学生 J A おおぞら 日本航空第二高等学校 シルバー人材センター 輪島市職員 南志見小学校・保育園 ほか一般参加など	オムロン 輪島公民館 金沢大学留学生 J A おおぞら シルバー人材センター 輪島市職員 南志見小学校・保育園 輪島実業高校 ほか一般参加など	J A おおぞら シルバー人材センター (輪島市役所からの委託)

ボランティア活動を行う団体のうち幾つかの団体に、活動を始めた理由や実際に参加した感想を聞いた。

① J A おおぞら

1996 年からボランティア活動を始める。始めた理由は、白米町の人から農業を行う人が減っているという状態を聞き、農業を手伝ってほしいと頼まれたことにあった。J A おおぞらでは、以前から白米千枚田のコシヒカリを販売していたこともあり、力になろうと活動に参加した。参加人数は、田植えや稲刈りのときは約 300 人の職員が参加している。新人職員はなるべく参加するようにしているそうだ。このほか、J A おおぞらでは 3 月下旬の田^た起^{おこ}しから 10 月の稲刈りまで年間の全ての農作業を自分たちで行っている。草刈や田起しなどの農作業には、農業のベテランの職員が 15 人ほど参加する。

実際に農作業を行った感想では、

「農業が機械化されて今では味わえないものが、白米千枚田では味わえる。」

「(ボランティアに参加する人の中には) 普段農業を行っている人も多いが、していても千枚田での農業は大変。」

「日本の原風景としての白米を守っていききたいので、活動をしている。」

と、手作業での農業を大変だと感じつつも、白米での農業や景観を維持していくため力になりたいという印象を受けた。

② 輪島公民館

1998年からボランティア活動に参加する。活動を始めたのは、公民館の職員の人々が以前農業をしていて、子供たちにも体験してほしいと思ったのがきっかけだったそうだ。ボランティア活動は田植え、稲刈りの時に、市役所から問い合わせを受けて行う。参加するのは、輪島市中心街に住む小学生 10～15 人ほどと公民館の職員である。子供たちの参加は募集によるものであるが、中には毎年参加している人もいる。

活動に参加した子供たちの感想は、

「(農作業は) 大変だけど、終わった後におにぎりなどが出る楽しみがあるから楽しい。」

「(農作業が) できると嬉しい。」

など、これまでしたことのない作業を体験する楽しさや、おにぎりなどのボランティア活動に付随するものを楽しむ人が多い。ボランティア活動に付随するものとは、農作業後のおにぎりや鍋以外にも、ボランティア活動取材しに来るテレビなどのメディアや、稲刈りでは同日に行われる千枚田結婚式のことである。

公民館の職員の方は、

「地元の人(輪島市の人)が関心を持たないといけない。(自分たちが)率先して守らないと。千枚田が草わらになったらさみしい。」

「若い人には興味のない人も実際にいるけど、一度行ってみると興味もつ人も思う。」

「今は小学校の行事との兼ね合いもあり、田植えと稲刈りしか参加してないけど、(他の農作業について)市から要請があれば考えたい。今後も白米千枚田でのボランティアは続けて生きたい。」

と、輪島市の方が白米に興味を持ち、活動に参加していただくことが大切であると話してくれた。

③ 南志見^{な じ み}小学校

2006年から、南志見地区のメンバーで結成された白米千枚田愛耕会の誘いで参加する。南志見小学校は以前、南志見地区の農家の人のところで農作業を体験していたのだが、千枚田の農作業が高齢化などで困難になっていると知り、千枚田で農業体験を行うことにしたそうだ。農作業には、5・6年生 21 人が参加した。子供たちの中には、家で農業をしている人が多いが、農業を手伝っている人は少なく、ほとんどの生徒が初めての体験であった。そのため、白米千枚田愛耕会の方の教えを受け農作業を体験した。この活動は、「地元の小学生が、千枚田を救うため立ち上がった!」と地元のメディアで大きく取り上げられた。

南志見小学校の人に話を聞いたところ、「一粒一粒の米を作る大変さが分かった。」と話す生徒もあり、
「地元を見直すきっかけになった。昔の人の苦勞が分かる。」
「今後もいろんなボランティア活動の一つとして続けていきたい。」と話してくれた。

この他にも、毎年参加しているボランティア団体や、授業の一環として参加する学校が多いのが特徴的だった。また、団体以外に一般の人も市役所から募集しており、農業に興味をもつ人が参加したり、当日白米千枚田に来ていた観光客で飛び入り参加したりする人もいる。

2. おわりに

白米千枚田は、輪島市の重要な観光地の一つとなっている。そのため、様々なピーアール活動をして観光客誘致を行っている。その一つである千枚田結婚式は、近年では知名度も上がり観光客が多く集まる一大イベントとなっている。千枚田を訪れる観光客に話を聞くと、海と水田を一度に楽しめる景観を楽しむ人が多かった。このことから、観光地として千枚田をピーアールする場合、水田を維持していくことが必要であると考えられる。しかし、現在白米町では、高齢化などにより農業を行うことができない家が増えている。このような状態に、輪島市ではボランティアの募集や補助金を出すなどの対策を行っている。現在千枚田での農業は、これまで述べたように多くのボランティア団体の協力で行われている。また、近年では白米千枚田愛耕会など周辺地区の人による活動も行われ始めた。これらの活動が、高齢化が進む白米町にとり千枚田での農業を維持していく上で大きな力となっているといえる。

最後になりましたが、この調査を行う中でお世話になった白米町の皆さん、輪島市観光課、商工会議所、ボランティアを行っている方々等に心からお礼申し上げます。

参考文献：

- 中島峰広、1999.「日本の棚田－保全への取り組み－」
- 中島峰広、「百選の棚田を歩く」
- 「平成 13 年度全国棚田サミット パンフレット」

第4節 輪島市での地酒普及への取り組みについて

稲田有香里

1. はじめに

能登は酒造りに適した気候で、日本の主な杜氏（とうじ）集団の1つであるとされる能登杜氏の技術が根付いており、美味しい日本酒を造ることができる条件が揃っているといわれている。しかし、国税庁発表の資料によると、1973年（昭和48年）を境に全国的に日本酒の消費量は減少へと転じており、2002年（平成14年）には全盛期の半分近くまで落ち込んでしまっている。

表1. 酒類販売（消費）量の推移

年度	平6	平11	平14	平15	平16
（単位）	キロリットル	キロリットル	キロリットル	キロリットル	キロリットル
清酒	1,256,849	1,029,854	888,283	826,467	745,734
ビール	7,056,792	5,508,143	4,132,270	3,783,324	3,616,890
焼酎	606,402	721,153	832,089	921,490	983,070

「酒のしおり」（平成18年5月 国税庁課税部酒税課発行）より引用

原因としては、食生活の欧米化に伴ってビールやワインを好む人が増えたこと、焼酎ブームによる焼酎の普及など、アルコール飲料に関する趣向が多様化したことが挙げられる。また、若年者や健康志向者によるアルコール離れが進み、日本酒の消費量は激減した。

このように、日本酒の消費量が低迷している中で、輪島市にある酒蔵や小売店が地酒普及についてどのような意識を持っており、どのような取り組みを行っているかについて調査した。

2. 調査と調査地の概要

石川県輪島市の河井町と鳳至町、釜屋谷町を中心に、調査を行った。輪島市にある酒蔵、酒の販売を行っている小売店、「のまんかいね輪島」で活動を行っていた方々、鳳珠酒造組合と輪島市の方々を対象として聞き取り調査を行った。

2-1. 輪島市で日本酒の製造・販売を行っている酒造

輪島市には過去多くの酒蔵があり、日本酒の製造が行われていた。昭和のはじめには市

内に 10 軒以上あったという。しかし、時代が進むに連れて、米の不作や日本酒消費量の減少などの影響により、多くの酒蔵が日本酒造りから退いていった。そのため、現在輪島市にある酒の小売店は、もともと酒蔵であった店が多い。近年では、平成 15 年の時点で 6 軒あった酒蔵が、平成 16 年に 4 軒に減少した。現在輪島市には 4 軒の酒蔵があり、それぞれが小規模で丁寧な酒造りを行っている。

清水酒造：1862 年（文久 2 年）創業。創業者が杜氏の肩書きを持っている異色の蔵元。創業者の精神を受け継ぎ能登杜氏が丹精込めて醸す酒は、普通酒でも本醸造規格で品位の高い酒である。大吟醸は、平成 5・6・8 年全国金賞受賞。代表銘柄は「能登誉」。

日吉酒造：1912 年（大正元年）創業。輪島の朝市通りに面した比較的新しい酒造。代表銘柄は「白駒」。

白藤酒造：1722 年に廻船問屋として創業し、質屋を経て江戸時代の末より酒造りを始める。現在 8・9 代目を中心に家族で酒造りに励んでいる。代表銘柄は「白菊」。

中島酒造：蔵元自ら酒造りを行うユニークな酒蔵として注目を集めている。品質追及に意欲的で、小量生産に徹し、味わい重視の旨い酒を目指している。代表銘柄は「能登 末廣」。

奥能登「輪島・曾々木・門前」完全攻略ガイド（平成 15 年 3 月）より引用

2-2. 日本酒の製造過程

日本酒を造るための仕込み作業は、江戸時代の後半ごろから「寒造り」といって、空気の澄んだ冬の寒い時期に行われる。酒蔵では杜氏をはじめとする酒造りの職人を蔵人（くらびと）という。蔵人にはさまざまな役割があり、酒造りの責任者である杜氏を筆頭に、杜氏を補佐して酒造りの進行を管理する頭（かしら）、麴造りの責任者である麴屋（こうじや）、酒母（酏）造りの責任者・酏師（もとし）、酒を搾る責任者・船頭（せんどう）、蒸米を担当する釜屋（かまや）など、実に 10 種類以上の役職がある。そして、杜氏の下で働く蔵人は、杜氏の出身地を中心に集められ、酒造りの季節になると集団で移動し、住み込みで仕込み作業を繰り返す。しかし今日では、杜氏の数には減少傾向にあり、作業工程の合理化や機械化が進むことによって、仕込み作業は時代とともに変化してきている。また、酒蔵の規模によっても工程は異なるが、ここでは一般的な作業工程を説明したい。

①精米・蒸米（むしまい）

酒造りは、原料となる玄米を精米し、蒸すことから始まる。蒸し米は麴造り、酒母（もと）、もろみの仕込みに使われる。

②麴（こうじ）

蒸し米に黄麴菌を植えて麴を造る。麴は酒母、もろみにいれて米のデンプンを糖化していく役割を果たす。

③酒母

酒母は蒸し米、水、麴に酵母を加えたもので、もろみの発酵を促す酵母を大量に培養したものである。日本酒造りには、良い酵母が大量に必要であり、文字どおり「酒の母」といえる。

④段仕込み

ここで日本酒造りの特徴である 3 段階に分けて仕込みをする段仕込みが行われる。1 日目は初添え。翌日は仕込みは休みである。酵母はゆっくりと増えていき、3 日目に 2 回目の仕込み（仲添え）をし、4 日目に 3 回目の仕込み（留添え）をして仕込みは完了する。段仕込みは、雑菌の繁殖を抑えつつ酵母の増殖を促し、もろみの温度管理を行いやすくするための日本酒独得の方法である。

⑤もろみ（造り）

この酒母に麴、蒸し米、水を加えてもろみを仕込む。このもろみがやがて原酒となる。

⑥新酒

20 日ほどかけて発酵を終えたもろみは、圧搾機で搾られ、酒と酒粕に分けられる。搾りたての新酒は、ろ過、加熱（火入れ）され、そして貯蔵される。また製成後、一切加熱処理をしないお酒を生酒といい、製成後、加熱処理をしないで貯蔵し、出荷の際に加熱処理するお酒を生貯蔵酒と言う。精米から、並行複発酵、段仕込みというとても複雑な工程を経て、約 60 日間をかけて、日本酒は造られる。

3. 調査の結果

3-1. 製造

現在、輪島市には酒蔵が 4 軒あり、それぞれ大体 12 月から 3 月にかけて、日本酒の仕込み作業に取り掛かる。作業は手作業で、機械に頼らない昔ながらの作り方で行われており、いずれの酒蔵も 500 石以下の小規模生産である。4 軒のうち 2 軒は杜氏を呼び、杜氏、杜氏が連れてくる下働き数人、蔵元とその家族で 5~6 人のグループを編成し、作業を行う。残りの 2 軒は杜氏を呼ばずに、蔵元が杜氏としての役割に就き、蔵元（杜氏）、蔵元の家族と雇用人で 5~6 人のグループを編成し、作業を行う。この編成方法が各酒蔵で基本的に取りられているスタイルであるが、何らかの理由により違った形態で作業を行う場合もあるそうである。また、現在では作業を行う際などに女性も蔵に入るが、昔は蔵への女性の出入りは禁止されていたそうである。はっきりとした理由はわからなかったが、酒蔵の方に聞いたところ、「女性の月経が不浄だから」、「仕込み中の蔵は暑くなるので蔵人が上半身裸で作業することもあり、そこへ女性が入りするのは良くないと考えられていたのでは」と

いう意見が得られた。

各酒蔵とも、創業以来変わらぬ土地で製造・販売を行っており、蔵や家屋は文化的にも貴重なものである。日本酒を造るために使用する水は、それぞれ井戸水や山から引いてきている水であり、米は、酒造好適米である山田錦や五百万石が主に使用され、輪島市で生産された米を使った日本酒も作られている。

どの酒蔵も質の高い日本酒を造ることを目指しており、利益やコストダウンだけを目標としてはいない。精米歩合が高く、コストのかかった日本酒を造っており、少し高くてもおいしい日本酒を製造したいと考えていることがわかった。



写真 1. 日本酒を仕込むタンク

3-2. 杉玉

酒蔵の軒先に杉玉が吊るすという習慣が日本全国で見られる。杉玉とは、スギの葉を集めて丸い玉の形にした造形物である。酒林（さかばやし）とも呼ばれる。筵（むしろ）を丸めたものに杉の枝を刺して固定し、丸く整えて作られる。今日では核となる部分には筵ではなく、針金や発砲スチロールなどが使用されることが多い。2月～3月に、新酒が出来上がると軒先に杉玉を吊るすことによって、周囲に新酒が出来たことを伝える。吊るし始めたときは杉の枝は青いが、日がたつにつれて枝は枯れて茶色くなっていくため、杉玉の青色から茶色へという色の変化が、新酒の熟成具合を周囲の人に知らせる役割ももっていた。杉玉の起源は、酒の神様に感謝をささげるものであったとされる。また、もろみを甑（こしき）でこす際に、もろみを入れた袋が破れてしまったときなど、その破れた箇所に杉の葉を刺して応急処置をするのだが、この杉の葉を新酒が出来上がった後に、しばって屋根の上に投げるという習慣がかつて存在し、それがいつの間にか、球体に成形した杉玉を吊るすという習慣になった、という考えもある。現在では酒蔵だけでなく、小売店などでも店内や軒先の杉玉を吊るすこともあり、酒蔵や酒屋の看板的存在として認識されつつある。

輪島市にある酒蔵・小売店でも杉玉は吊るされており、その大きさは店によって違いがあった。杉玉は杜氏などが手作りするところもあるが、業者から買う場合もあるという。

新酒が出来上がる時期には、青い杉玉が吊るされていないと、近隣の人から「まだ新酒は出来ないのか」と話しかけられることがあり、観光で輪島市にきた人も、杉玉を見て店に足を運び、日本酒に興味を持つということがあるという。杉玉を吊るすという習慣が周囲とのコミュニケーションの1つになっている。



写真2. 杉玉

3-3. 販売

輪島市の地酒は、各酒蔵、輪島市内の小売店・スーパーなどで主に販売されており、石川県内だけでなく県外の小売店でも販売しているところもある。また、通販も行っている。

酒蔵、小売店での客層は、地元の人と観光客が半々くらいの割合であるが、朝市通りに面する店や、その付近にある店では観光客が地酒を購入していくことが多く、それ以外の店では地元の人が購入していくことが多い。季節によっての違いもあり、夏のお盆の時期や、酒蔵見学が行われる時期には多くの観光客が来る。また、酒蔵、小売店ともにビールや缶チューハイ、ジュース、タバコなど日本酒以外のものも販売しており、地元の人はいそがしさを求めて来ることもある。地元の人が地酒を買いに来るときは、結婚式や葬式、祭り、新築祝いなどの贈答用としてや、どこかへ行くときにおみやげとして購入していくことが多い。地元の人が晩酌などのために買って行くのは、主に一升瓶の本醸造酒であり、好みのメーカーのものを購入している。各酒蔵では、「輪島朝市」「輪島大祭」「うるしの里」「輪島物語」などの名前の日本酒も製造している。これらは、輪島で酒造りをしているのだから輪島にちなんだ名前の日本酒がほしい、という思いと、観光客がおみやげとして手に取りやすくなるだろう、という意識が合わさって造られている。

各酒蔵・小売店の方は「輪島市の地元の人には、輪島市に美味しい地酒があるということをもまだ十分に知ってもらえていない」と感じていると言っている。そのため、小売店では、輪島市にある4軒の酒蔵で造られた日本酒だけではなく、新潟県や金沢市、珠洲市にある酒蔵のものを店頭に並べているという対応も見られる。地元の人がその日本酒を買いに来たときに「輪島市の地酒も美味しい」ということを伝え、輪島市の地酒を少しでも多くの人に知ってもらおうとする取り組みを行っているという店もあった。

また、今日の若い人などの間では日本酒は度数が高くてたくさん飲めない、種類がたくさんあって何を飲んだらいいのかわからない、などの日本酒に対するマイナスイメージによって、日本酒離れが進んでいる。このような意識を変えるために、日本酒のおいしい飲み方や楽しみ方を紹介する冊子を置いたりしている。

各酒蔵、小売店は、店の立地する場所などから、地元の人を販売ターゲットとする店と観光客をターゲットとする店にわかれるが、どの酒蔵・店も、地元の人・観光客関係なく少しでもたくさんの人に日本酒を楽しんでもらいたいという考えが根底にある。

3-4. 地酒普及のための活動

(1) 酒蔵見学

輪島市にある4軒の酒蔵では、それぞれ酒蔵見学が行われている。日本酒の仕込みが進み、新酒が出来始める1月の末から2月の中頃にかけて酒蔵見学が開かれており、輪島市の観光協会と協力して、4軒が1週間ずつ見学者を受け入れている。この時期の酒蔵見学はツアーに組み込まれていることが多く、見学に来る人は観光客が多い。酒蔵では観光で輪島市に来たツアー客以外でも、個人・団体問わず見学は受け入れているが、地元の人が見学に来ることはほとんどないという。各酒蔵が酒蔵見学を行う目的としては、日本酒をどのように製造しているのか、輪島市の地酒がどのようなものであるかを少しでも知ってもらい、飲んでもらう、ということがある。そのため、日本酒の製造過程をよりわかりやすく理解してもらえるように、製造過程を描いたパネルを展示している酒蔵もあった。

見学に来た人にわかりやすく地酒について広く知ってもらうため、地元の人・観光客関係なくいろいろな人に来てほしいと考えている。



写真3. 製造過程を描いたパネル

(2) 「のまんかいね輪島」

日本酒の消費量が低迷し、輪島市にあった酒蔵も年とともに減少し、4軒となったことを受け、輪島市の地酒をかけがえのない地域資源として捉え、これらを守ろうと

いう動きが出てきた。また、輪島商工会議所も、地産地消の観点から、地元の酒を地元で消費しようという運動を企画した。

この動きに賛同する 13 名の有志が、輪島の地酒を切り口に地域振興を考える「のまんかいね輪島」(NPO 法人) という団体を設立し、地域振興策を検討した。輪島市のすべての地酒が飲める立ち飲みバーを開店する企画を作成し、平成 15 年 9 月から数 10 回の企画会議を経て、平成 16 年 10 月に「唼き酒バーGYAT (ギャット)」を旧輪島駅ふらっと訪夢にオープンさせた。「輪島という狭い地域に、4 軒の酒蔵が集中し、それぞれの蔵が、質の高い酒造りを行っているということは、全国に誇るべきと考え、こうした輪島のかげがえのない伝統文化を守り、さらに輪島の生活者が豊かな生活を送るため、輪島の地酒の普及・啓発するための活動を行い、地産地消システムの推進を目指すということ」を、目的としていた。また、「GYAT (ギャット)」という名前は、輪島市の方言で「蛙」のことである。この名前には、昔の日本酒の盛り上がりがかえってくるように、仕事を終えて自宅に「帰る」前に 1 杯やっていってほしいという願いと、蛙の鳴き声である「ゲコ」と「下戸」をかけて、酒に弱い人でも気軽に寄って行くことが出来るというイメージが重ね合わせられている。

商品は、4 つの酒蔵から 4 種類、計 16 種類の酒を用意し、つまみは、輪島にこだわった食材を仕入れて提供していた。客層は、観光客や女性客など新しい客層の取り込みを意識していたが、男性客が多かったという。地元の人と観光客の割合としては、オープン当初は地元の人も来たが、主に観光客が大半をしめていた。のまんかいね輪島では、会員を 100 名集めており、地元協力者の取り込みにも力を入れていた。会員には輪島塗のぐいのみ、1 杯無料券(10 枚)、新酒が特典としてプレゼントされた。

のまんかいね輪島では、地酒の利き酒大会の企画運営、地酒の飲める店や買える店がわかる「地酒マップ」の作成・配布、新たな日本酒の楽しみ方として、「日本酒カクテルの研究開発」を行った。また、桃色酵母を使ったピンク色の日本酒の製造を企画し、仕込み作業には関係者だけでなく一般の参加者も関わった。完成時には、輪島市内のレストランでパーティーが開かれた。この日本酒はバーで飲むことができ、地酒とのセット販売も行われた。

同業種による共同経営は利害関係が絡み、運営が極めて難しいが、この活動の運営者である 13 人には、各酒蔵の 4 名以外に、日本酒好きが好きな公務員や団体職員、自営業者などが含まれ、あくまで共益団体ではなく、酒を振興する公益団体ということを重視していた。

しかし、バーは立地条件の悪さなどによりリピーターが増えず、会員も集まりにくくなった。経営は赤字となり、2006 年 2 月に閉店した。それに伴い、のまんかいね輪島も 2006 年 8 月に解散となった。

この活動によって、輪島の地酒販売に関して大きな変化があったわけではないが、バーの客が店で飲んだ地酒を気に入って各酒蔵、小売店に買いに来るということが何度かあり、関係者らは地酒の普及に少しではあるが効果があったと考えている。

4. 考察

輪島にある4軒の酒蔵は、創業時から変わらない土地と建物で酒造りを行っており、質の高い日本酒を作ることを目指している。全国的にだけでなく、輪島市内でも「輪島においしい地酒がある」ということがあまり知られていないと各酒蔵、小売店ともに感じている。売り上げも知名度も上がってほしいと考えているが、突然ブームになると、生産量が追いつかずにいつもの顧客に販売できなくなってしまう、ブームが収まったときに、拡大しようとしていたら赤字となってしまう恐れがある。小規模生産のため、急に需要が高まると、それに対応できない可能性がある。今回調査した酒蔵見学とバーの営業では、大きなブームとなることはなかったが、多少の効果は得られている。突然大きなブームを生むより少しずつ広めていくことが、より安定した地酒の普及につながると思う。

今後、輪島市の地酒産業が発展していくために、バーの経営を行ったように、市内4軒の酒蔵内での連携を結び、普及のための活動を行う、メディアやホームページなどを利用した豊富な情報の提供、また、商品だけでなく販売形態などについての消費者の意見を集め、反映させていくことなどが考えられる。

輪島での地酒の製造は、伝統を守りながら輪島という土地に根付いて行われている。その伝統や土地、建物は文化資源・地域資源としても大切なものである。

参考文献

秋山裕一、1994、「日本酒」、岩波新書

安嶋是晴、「コミュニティビジネスとして地物を活かしたレストラン開設研究事業 ～輪島地産地消システムの開発と行政と市民との協働のあり方の研究～」

日本酒造組合中央会ホームページ <http://www.japansake.or.jp/>

第5章 海女の社会と文化

第1節 海士町の概況

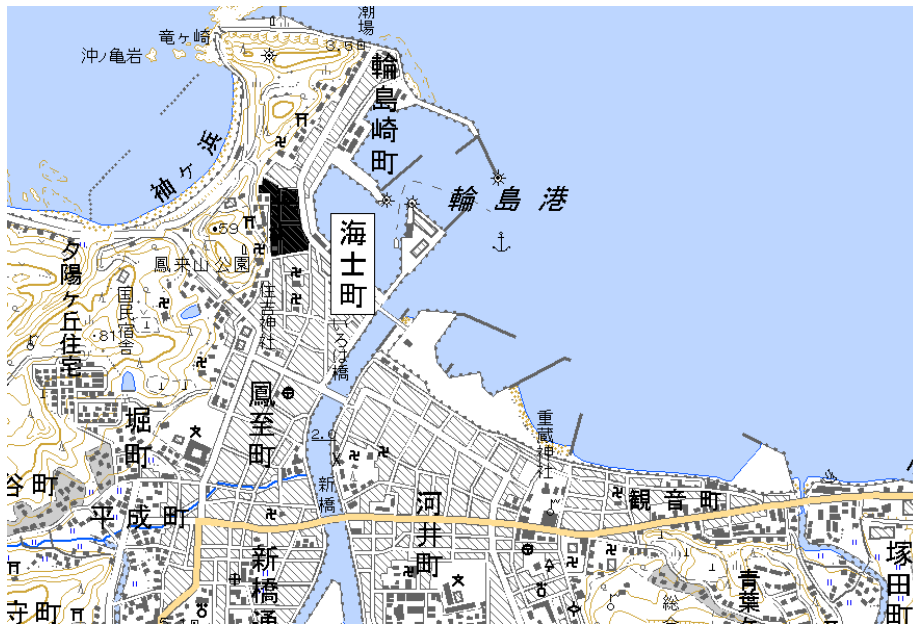


図1. 海士町

(国土地理院 <http://watchizu.gsi.go.jp/watchizu.aspx?id=56360750> より作成)

海士町は輪島市の北西部にあり、北は輪島崎町、南は鳳至町に囲まれた町で、東は輪島港、西は鳳来山丘陵に接している。

海士町自治会には現在 387 世帯が登録している（2006 年）。その全てが海士町に住んでいるわけではない。海士町民の人口増加に伴い、町民の居住区域が近隣の鳳至町や輪島崎町などへ拡大した。

能登の沖では、寒暖両流が流れ込むため、日本海でも屈指の好漁場となっている。中でも海士町は約 350 隻の船を有し、輪島市漁協の所属全船数の約 40%を占める。

潜水漁を行う海女の人数と技術も全国屈指であり、また海女の夫は漁船漁業を営む漁師が多い。

表 1. 平成 18 年海女年代別人数（人）

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代	計
海士町	-	1 4	2 6	3 6	3 1	1 8	1 3	-	1 3 8
舢倉島	1	6	3	1 0	8	1 3	2 2	4	6 7
統計	1	2 0	2 9	4 6	3 9	3 1	3 5	4	2 0 5

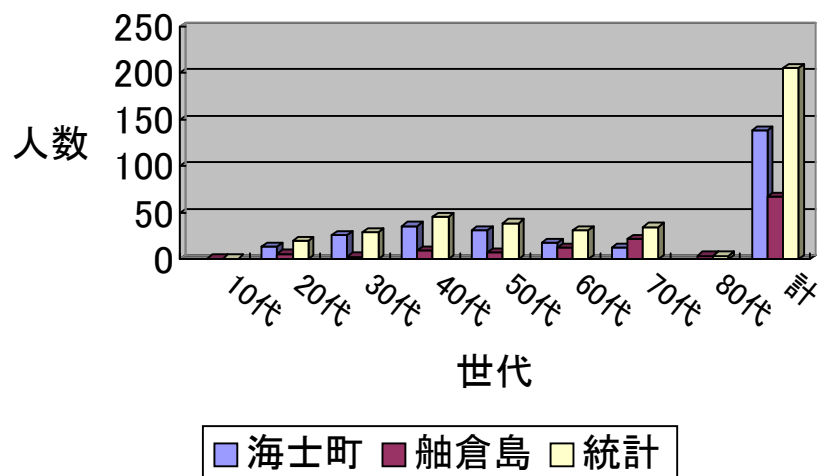


図 2. 世代別海女人口（平成 18 年）

1. 海士町の歴史

海士町民の祖先は、他の土地から来たのではないかと考えられている。それは、「アマコトバ」と呼ばれる海士町独特の言葉や、潜水漁などの漁業方法が輪島崎や鳳至町の住民たちと異なるからである。現在は、永禄年間（1558 年～1569 年）に九州筑前国鐘ヶ崎（現在の福岡県宗像郡玄海町鐘崎）から来たという説が有力である。

海士町に住む人々の主な漁場である舢倉島は、能登半島の輪島市北方 49 km の日本海上に位置する、1 周徒歩約 1 時間の低平な島である。海士町民はこの島を明治 34 年（1901 年）に、現在の輪島市名舟町から買い取った。以降、現在に至るまで、舢倉島での居住と近海での漁業は、海士町民にのみ許されている。

舢倉島を名舟町から買い取った 1901 年から、動力船が普及し定期船の運行が始まった 1962 年までの約 60 年間、7 月から 9 月のアワビ・サザエ漁解禁の時期に、海士町民は舢倉島へ家財道具を持ち舢倉島へ渡島し、漁に専念した。現在も、舢倉島には 61 世帯あり、夏の間舢倉島に住んで漁をする人も数十人いるし、1 年中住んでいる人もいる。

また、舢倉島は、海女の島としてだけではなく、渡り鳥の中継地でもある。渡り鳥の種

類は世界各国から年間約３００種類を超える。



図３．舯倉島

(YAHOO!! JAPAN 地図情報 <http://map.yahoo.co.jp/>)

表２．海士町戸数の推移（平成１８年）

	舯倉島（戸）	デカタ（戸）	割合（％）
１９３０年	２２０	２５７	８５
１９７４年	１５４	３６９	４２
１９９２年	８９	４５９	１９
１９９８年	８２	４２８	１９
２００６年	６１	３８７	１６

２．呼称

このように、舯倉島は海士町に所属している。しかし海士町の人々は、島から見た本土側の海士町を「天地（テンチ）」や「地方（デカタ）」と呼び、舯倉島と明確に区別している。デカタは、舯倉島から見た本土側の海士町（テンチ）と、その周辺で海士町民が多く居住する地のことである。



写真 1. 輪島港と海士町

(輪島市 <http://www.city.wajima.ishikawa.jp/index.htm>)

3. 海女業

ヂカタの海女は、親戚や友人同士で4人から8人くらいのグループをつくり、一隻の船に乗って出漁する。このグループ漁には、底引き網漁の漁師たちが漁船を提供している。ヂカタの海女のほとんどが自分の船を持っていないし、輪島漁港から舢倉島や七ツ島までは遠いので、グループで行かないと燃費が高くなってしまいますので、グループ漁を行うのだという。

舢倉島の海女は個人所有の船で出漁する。その船は重量1 t未満のモーターボートである。1隻の船に同乗する海女の人数は2人か3人、多くても4人で、主に家族である。海女の夫や息子で手の空いている男性が、2、3人の海女を乗せて漁場まで送迎する船もある。舢倉島の海女の漁場は舢倉島近海である。

漁最盛期の海女の1日は忙しい。ヂカタの海女は午前5時から6時頃に起床し身支度を整え、昼食用の弁当の用意をして7時頃漁港に集まってくる。一方舢倉島の海女は午前5時頃起床する。そして6時半から7時頃、前日漁獲して海中に沈めておいたサザエを漁協へ持っていく。海女たちが船着き場に現れるのは午前8時半頃である。

ヂカタの場合、出漁時刻は漁場によって異なる。舢倉島、七ツ島近海で漁を行う日は6時半頃出漁し、輪島近海で漁を行う日は7時半頃出漁する。舢倉島では、漁場まで15分ほどで着くので、出漁時刻は舢倉島近海の漁開始時刻の9時頃になる。出漁後は船上でウェットスーツに着替えるなど、準備をする。

漁開始時刻は磯入組合で定められており、舢倉島で漁を行う日は午前9時、輪島近海、七ツ島近海、ヨメグリで漁を行う日は午前8時半である。漁終了時刻も磯入組合によって定められている。舢倉島近海では午後2時半に終了し、輪島近海、七ツ島、ヨメグリでは午後3時に終了する。

漁を終えると、海女を乗せた船が次々に帰港する。ヂカタでは、帰港する時間は漁場によって異なるが、だいたい午後３時半から午後４時半までの間である。漁港についたら素早く水揚げをする。漁港に隣接する輪島市漁業協同組合へ、サザエ、アワビを運び入れる。舢倉島の海女は午後３時頃帰港する。帰港するとサザエを大きさ別で分ける作業をする。そしてこれらのサザエは翌日漁協に持っていく翌朝まで、ナイロンの網袋に入れて自分の船にくくりつけ、海中に沈めておく。アワビはとれた当日の午後３時半から午後４時までの間に漁協へ持っていく。

ヂカタの海女も舢倉島の海女も水揚げが終わると帰宅するが、それからウェットスーツと水中メガネを洗って乾かすという作業がある。それが終わると風呂に入り、休憩をとる。しかしすぐに夕食の支度をしなければならず、とても忙しい。そして夜は次の日に供えて９時から１０時頃には就寝する。

海女は７～９月のアワビ・サザエ漁の時期以外は、それぞれのペースに合った生活を送りながら体を休める。飲食店でアルバイトをしたり、夫の漁の手伝いをしたり、ナマコや海藻をとりに潜ったり、人それぞれである。

第2節 海士町と済州島の海女についての漁業と社会組織の比較

林 慧璟（イム・ヘギョン）

1. はじめに

海女という生業は、世界のなかで日本と韓国だけにあると言われている。そして、日本では海士町・舢倉島が、韓国では済州島が、それぞれの国で「海女の町」としてよく知られている。海士町・舢倉島の概況についてはすでに説明されているので、済州島について簡単に紹介したい。

済州島は韓国語の発音の表記では、‘ゼジュド’になり、文字の表記の仕方は二つがある。韓国では、日本の行政単位である‘県’にあたるのが‘道’である。済州島は一つの‘道’であるため、「済州道」とも書くことができる。‘県’も‘島’も韓国語では、‘ド’の発音になるため、発音だけでは区別がつかない。調査は地域の行政区分とは関係なく、島の漁村を対象におこなったので、ここでは「済州島」という表記を使うことにする。

済州島は、韓国の最南端に位置している最大の島であり、8個の有人島と54個の無人島で構成されている。面積は1848.2㎢、人口は2005年現在、55万9,747人である。年平均の気温は約16度で、沿岸に暖流がながれ、気温の変化が少ない典型的な海洋性の気候である。

済州島の地域内総生産学額の比重を見てみると、1次産業が14.6%、2次産業が18.7%、3次産業が66.7%で、済州島が観光地として発展するにつれ、サービス業の比重が圧倒的に多くなっている。2003年現在、観光客の数は、491万3,390人であり、そのうち、外国人の観光客は22万1,017人、特にその中でも日本人の観光客が約50%を占めている。

済州島は、4面の海岸を巡って漁村が形成されており、村ごとに海を警戒線で分け、テリトリーは厳しく守られている。海の所有権を持っている村では、‘漁村契’という漁業をしてうる人々の利益と生活面での向上のため作られた組織があり、済州島では、現在のところ、100個の漁村契が存在している。今回、私が調査地として訪ねたところは、東北に位置する細花里（‘里’は、日本の‘町’に当たる韓国の地域の構成単位）、下道里、有人島である牛島の五峰里である。以上の場所の位置は、下の図1に示した。

表1. 済州道の海女の年齢別人数（2005年）

年代	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代～	合計
人数	0	0	66	652	1,512	2,278	1,037	5,545

出所：‘済州道旅行100倍楽しむ’ <http://cafe.daum.net/gajacheju>

表2. 細花（セハ）里、下道（ハド）里、五峰（オボン）里の世帯と人口（2005年）

	世帯	人口	男	女
細花里	839	2,117	1,038	1,079

下道里	850	2, 148	1, 082	1, 066
五峰里	206	513	235	278

出所：済州道庁ホームページ <http://www.jejusi.go.kr/>



図 1. 済州島の地図

出所：韓国ソウル旅行情報ガイド http://www.seoulnavi.com/map/area_z_map.html

※ 細花里は、地図の右上に表記されている。

下道里は、地図の右上、細花里の右方面の横に位置する。

牛島の五峰里は、地図の最右に位置している牛島の北の方に位置する。

2. 社会組織

海士町と済州島の漁村は、まず、町の様子から異なっている。海士町では、海辺に住宅が並んでいる反面、済州島では、住宅の他、周りに畑が並んでいる。陸地と離れている済州島は、海上運送が発達してなかった昔では、ある程度の食料を事業自得しなければならなかったのである。しかし、水がたまらなく吸収してしまう土地の性質の上、米の農業ができず、畑の農業を進むようになった。主な生産物は、ジャガイモ、ニンジン、ニンニク、豆、麦などである。このような畑を中心とした農業は今でも続いており、また、農業に対する関心度と熱心、関わり度は現在の方がもっと高くなっている。これに対する理由は後に回すことにする。



写真 1. 下道里、住宅街の周りの畑

海士町と済州島の生活の環境が大きく異なることを述べた上で、それぞれの地域で、漁業と町民の生活向上を目的で作られた組織である、‘自治会’と‘漁村契’を比較して、表に示してみる。

表 3. 自治会と漁村契の比較

	自治会（海士町）	漁村契（済州島）
加入資格	町の出身者	町の出身かつ居住
加入単位	戸ごと	戸ごと
下部組織（組）の分け方	舢倉島での土地割りが基盤 海士町、希望次第	土地割り
下部組織（組）の代表	氏子総代（奥津比咩神社） 檀家総代（法蔵寺） 組割の代表者（自治会） 当元（祭りの祭、仕切りの家）	組割の代表者 1～2 人 潜水会長
会議の頻度	一ヶ月に一度。（海が荒れる日曜日）	定期は決算総会（2 月） 2～4 回の臨時総会
漁業以外の事業	奥津比咩神社の管理 法蔵寺の管理 町の祭りの仕切り	民宿やペンション運営 海女食堂運営

まず、それぞれの組織に加入するためには、町の出身者であることが求められる点が共通している。ただし、漁村契では、出身だけではなく、現在居住していることが加入条件として求められる。これに対して、海士町では、人口が増えるにつれ、決められている町の中に住みきれず、輪島市内の他町に転出した人が多いため、加入条件に居住は入っていない。なお、済州島では、全体的に若者層の漁村離れが進んでおり、町の中では、空き家が増えている。これは、若者が比較的に多い海士町と対照的である。

加入する際は、どちらの組織とも、世帯ごとに加入する。済州道では、海女業に限って

は、世帯ごとに一人または二人と、作業に参加できる人数を限定している漁村契が多い。個人の私物である農地とは違い、会員であるみんなの共有財産である海という共同作業場で、限られている資源をとることにより、お互いに競争心が発生するのは自然である。七つ島や舢倉島という広い作業場を持っている海士町とは違い、隣の町の海が見えるような、海士町とは比較的に狭い作業場を持っている各町の漁村契では、強い競争心と摩擦を避けるためにも、世帯ごとの作業従事者を限定して、公平性を保つ必要があるのである。

町の全体をまとめる巨大な組織というものは、下部組織の存在と支えの活動がなくては、その役割を果たすことができないのである。それぞれの下部組織の分け方を比べて見ると、海士町では、もともと舢倉島での土地割りを基盤にして分けられ、陸地の海士町では、希望によって世帯ごとに入ることになっている。済州島では、農地を挟んで町ができているため、一つの町の中でも、いくつかの家の群れができ、その群れごとに下部組織が分けられている。

下部組織ではそれぞれの代表を選び、その代表たちによって会員のみんなの意見がまとめられる。海士町では、各組ごとに‘氏子総代’、‘檀家総代’、‘組の代表者’、‘当元’という4人の代表者を選ぶ。自治会では、町の中で存在している、奥津比咩神社と法蔵寺の管理もしており、全町民が同一の氏子でありながら同一の檀家である。また、上に述べたように組ごとにその代表者を選び、管理にも手を抜いていないのである。組の代表者は自治会で行われている会議に出席し、漁業や町に関わる問題について、各組のみんなの意見をもとに話し合い、また、その結果をみんなに伝える役割をする。当元は、海士町の最大の祭りである、輪島大祭のときに仕切りの役割をする家のことである。これは、毎年順番に回ってくるものであり、その年に葬儀があったときには次の家に飛ばすことになっている。



写真2. 海士町の奥津比咩神社



写真3. 海士町の法蔵寺

済州島では、‘組の代表者’と‘潜水会長’を選ぶ。組の代表者の役割は海士町と違いがないが、その人数は一人とは限らなく、二人を選ぶところも多い。潜水会長というのは、潜水＝水にもぐる、つまり、海女業を表わしている言葉であり、潜水会長というのは、各

組の海女の人たちをまとめる役割をするとともに、組の代表者と一緒に漁村契の会議に参加し、海女業に対して海女たちの声を伝える役割をする。潜水会長を別を選び、海女たちの声を重要にしていることをみると、海女業が漁村契にどんなに大きな影響を与えているのかが予測できる。

組織で行われている会議は、海士町では、一ヶ月に一度、海が荒れる日曜日に定期的に行われている。その反面、済州道では、定期の決算総会が一年に一回行われ、その以外は、2～4回の臨時総会が行われる。会議の議題でも、海士町では、漁業を含め町民の生活に関わる題まで幅が広いが、済州島では、決算総会の以外は、海女業に関わっての議題ができた際に臨時総会が行われるほど、海女業に関わる議題がほとんどである。

自治会では、漁業に対する事業以外にも、小学校に入る子供たちの健康と安全、免学を祈る入学際、舢倉島の海で行われる水上運動会、子供から年寄りまで町民のみんなが協力して盛り上がる輪島大際など、町民の娯楽や連帯のためにさまざまな行事を行っている。

一方、韓国の最大の観光地として知られている済州島は、夏の休暇時期のピークである7月～8月になると、名が知られている観光地以外に海を挟んでいる漁村にも大勢の人々が尋ねてくる。この観光客を目当てに漁村契に入っている海女たちは、食堂を開き、順番を決めて営業をするようになった。朝、海で捕ったばかりの新鮮な海鮮物を提供することで、観光客の評判もよく、現在は、夏の休暇時期以外にも、バスのペキジコースとして定着したところもある。この勢いを引き続き、最近では、インテリアにも気を配った民宿やペンションを建て、運営する漁村契も出始めている。下道里では、昨年、目の前に海が広がるところに食堂と入れたペンションをオープンし、ホームページを開設するなど、広告に気を配っている。



写真4. 下道里のペンション

出所：下道漁村契センター <http://www.hadobada.co.kr/>

3. 海女業

韓国では、‘海女’という言葉に‘済州島’を連想するほどである。前の表1. で見とれる

ように、海女の人数は日本と比べて非常に多いが、その一方で高齢化が進んでおり、何十年後には、済州島で海女を見ることができなくなるのではないかという心配の声が高まっている。その対策として、海女業を観光資源として活用しようとする動きが出はじめ、海女たちの安全と大魚を海の神様に祈る儀式を宣伝するほか、昨年の夏に海女博物館を創設するなど、観光化についての工夫が行われている。

済州島と海士町の海女の作業方法を比べてみると、目立つ違いは、作業場までの移動方法である。海士町では、1～8人に分かれ、夫や息子、親戚の漁船を利用して移動する。これに対して、済州道では、100箇所の漁村契のうち、船を利用するのは、5箇所以下であり、ほとんどのところでは海のわきから海女たちは泳いで漁場に行く。舢倉島では、夫が海女である妻の腰に結ぶ綱を船の上で、船を操作しながら持ち、妻が潜るという方法も今は数少なくなっているが行っている。このような男女の協力による作業は、済州島では、少なくとも現在のところ、見ることも聞くこともできない。

海士町と済州島の下道里の海女業を行う時期と時間を比較してみよう。海士町では、7月から9月までにアワビとサザエ漁が行い、この3ヶ月間はほとんどの海女が漁に参加する最も盛んになる時期である。時間は陸地である海士町が9時から14時30分まで、舢倉島が9時30分から14時30分までで30分のずれがある。

下道里では、10月から12月までアワビ漁を禁止、7月から9月までサザエ漁を禁止している。その解禁の時期は海士町より長く、年平均の気温が約16度で、沿岸に暖流がながれてあるため、冬でも潜っている海女たちが多い。済州道では、全体的に潮の流れが激しく、隣の漁村契であっても潜る時期と時間はさまざまである。下道里では、潮の流れに合わせ、6日間潜り、8日間休むことを繰り返し、一ヶ月間で漁に出る日は12日間である。潜る時間も日が経つにつれてずれることになり、6日目になると午後に潜り始めることになる。一日で潜る時間は、4時間～5時間程度で、1時間の昼休みがある海士町とは違って、海に入る前に軽食をし、別に食事の休みを取らなく漁を続ける。

家から海までの移動手段としては、海士町では、現地の人々が‘ネコ車’と呼んでいる三輪車を利用している。これは、後ろに荷物を載せるところがあって、収穫物を運ぶのに便利になっている。下道里では、原動機付き自転車で海のわきに建てられている脱衣場まで移動する。脱衣場は、済州道の補助金で建てられており、海女たちは作業が始まる一時間ほど前に集まり、簡単な食事を取りながらおしゃべりをするなど、娯楽場としての役割も果たしている。牛島の五峰里を訪ねた時、海女の夫だと自己紹介をし、インタビューに応じてくれたある男性が脱衣場に対するイメージについて語った部分をそのまま引用することにする。「脱衣場は、海女のストレス解消場でもあるよ。集まって、私たち夫の悪口をいっぱい言うのさ。そうすることで、みんなでいっぱい笑ってすっきりして帰るから私たち（夫たち）も助かるものなのかな（笑）」



写真5. 舢倉島のネコ車



写真6. 五峰里、脱衣場の前の原動機付き自転車

上にも少し触れたように、海士町では、家族や親族、親しい関係である男性が船で、海女たちの出迎えをする。その以外にも、妻の命綱を持ってあげる（海士町では、こういう夫のことを‘タイシオトコ’と呼んでいる）、昼食の運びなど、男性によるサポートを受けながら作業をしている。

下道里では、サザエが解禁されてからの1週間ほど、海のわきで妻を待っている夫たちを見つけることができる。この人たちを現地の人たちは‘出迎えもの’と呼んでいる。サザエが解禁されてからの1週間までは、収穫の量が多く、重いため夫たちが持ってあげるため、作業が終わる時間に合わせて作業場に来て待っているのであるが、日が経つにつれ、その収穫物が少なくなり、出迎えものの姿も見えなくなる。また、下道里では、5月の1日から2週間ほど天草の作業を実行しているが、この作業は取る期間も短く、みんながこの期間中には天草にだけ集中するため、解禁する何日前から体を休める、先日は緊張感で眠れないなど、海女たちの競争心はほかの作業よりいっそう高く、負担が高い作業である。この作業には、一秒を戦う緊迫心で、夫を含む手が空いている家族が動員され、海のわきでいっぱいになったカゴを取り替える作業を手伝う。これも最初の1週間がピークで、その後は、わきで待つ家族の姿は減っていく。

二つの地域の夫や家族によるサポートを比較してみると、海士町のほうがもっと直接的なサポートをしていると言えるだろう。

4. まとめ

済州島は、昔から農業と漁業を共にした半農半漁の地域である。夫が漁師であり、妻が海女でありながら、農業が忙しい時期は農業の方にもっと時間をあて、その後の時期には、潮の流れに合わせ漁業に行い、早朝や遅い午後に農業を行う生活が一般的な漁村の様子であった。しかし、漁業の養殖化と近海・遠洋漁業の大量化が進むにつれ、日本のようにスーパーでも刺身を売っているほど水産市場が広くない韓国では、資源が減る、また、油の

原価が高くなる一方である状況で、漁船の規模が小さい沿岸漁業では、船を維持することも難しくなった。それで、自然に漁業をやめる男性たちが増えることになり、町の船着場から漁船の数が減りつつ、現在は、漁船や海女業に使う船でいっぱいな状態である海士町での風景とは比較的に、すかすかな状態である。漁業をやめた男性たちは、自然にもう一つの経済活動であった農業に専念するようになり、その規模も増やすようになる。妻である海女たちは、畑と海を行き渡りながら仕事をする。二つの仕事をする海女たちの労働の重さは、韓国でもよく知られており、‘済州島に嫁に行くと苦労が大変だ’とか‘済州島の女の人仕事虫だ’とか‘済州島の女の人気が強い’などという済州島の女の人を表すことわざや表現が存在している。また、済州島の海女たちは、仕事で疲れ、大変なときに‘女で生まれるより、牛で生まれたらよかったものを・・・’という言葉の口にする。この言葉は、仕事ですぐ疲れを感じる女の身より、もっと疲れに耐えて仕事ができる牛で生まれたら、自分にかかせられているたくさんの仕事ができるのにという、現在の自分の状況を嘆く意味が含まれている言葉である。



写真 7. 海士町の港の様子



写真 8. 細花里の港の様子

漁業は、一つの町が漁業権を持っている海で、町民と一緒に経済活動を行う場所なので、お互いの協力と理解が強く求められる業である。それで、自然にみんなの財の権利を保護するためのルールが必要になり、みんなをまとめる組織が求められるようになった。しかし、農業の場合は農地が私有化しており、個人個人の判断によって作業を行うことができるので、農業のために町のみんなをまとめる組織の必要性は弱い。

韓国の農村地域には、町を代表し、町に存在する国の行政機関と町民をつなぐ役割をする‘里長’という人が存在する。しかし、里長を囲む組織もなく、漁村のようにみんなの経済活動を保障、保護する必要もないので、町民の行動を制約することもなく、その役割は比較的に軽い。

半農半漁である済州島では、町を代表する‘里長’と漁村契を代表する‘漁村契長’が存在しており、この二人が町の有力者として認識されている。男性たちが漁を活発に行い、漁村契に加入していた頃には、漁村契というのは、事務室や会館を立て、職員を置き、財

産管理をするなど、町の中でその行事力は強く、町の事が漁村契の都合に合わせて決められるなど、‘町の共同体’としての役割をしていたのだが、男性たちが漁をやめることにつれ、漁村契からも離れるようになり、現在では、漁村契の役人を任されている少数の男性が残っている。したがって、漁村契の性格は、‘町の共同体’から海女の利益を保護するためである‘海女の共同体’のように変わることになり、現在の海士町自治会のように、漁村契が町全体に影響力を与えるのはもう難しくなっている。

また、海士町のような‘タイシオトコ’や出迎え、食事運びなどの直接的なサポータは見られなく、‘出迎えもの’という間接的なサポータしか見られなくなったのも、男性が魚をやめ、農業に集中するようになったことと、その影響で町から漁船がなくなったことが一つの原因ではないかと思われる。

漁業に関わる事業以外にも、町の神社や寺を運営することで生まれから死んだ後にも町民の世話をしている自治会は、さまざまな祭りや行事を通じて、町のみんなの共同感と団結感を強めていくことができる。また、こうすることで、若者に町民としての認識や誇りを持たせることができ、漁村離れを留めることができるのだろう。

現在、自治会の会長である西見氏は海士町のことを、「海士町のみんなは暖かい。他の地域からはじめて来た人たちにもとても親切だ。こっちは温情がある町なのだ。私は、海士町のみんなを誇りに思っている。」と語り、その自身がある口調や顔の表情からも、会長の心をうかがうことができた。また、自治会では、舳倉島の発展と若者の引きとめ策として、島特徴の塩作りに全力を注いでおり、その宣伝や島の観光化にも力を入れているという。

5. 謝辞

今回の調査を完成するまでは、大勢の方々にお世話になり、力を貸していただくことになった。特に、急に訪ねてきたにもかかわらず、自治会に関する資料を提供し、宿所まで貸して下さった西見自治会長と自治会の事務員である磯野氏、舳倉島での滞在の際には、何から何まで面倒を見てくださり、調査が終わった後も応援を送って下さっている大角氏の家族、済州島では、はじめて逢うにもかかわらず、いろいろお世話をしてくださった海女博物館の職員の方と下道里の漁村契の事務員であるジャ・ヨスン氏、また、作業の途中であるのにもかかわらず、快くインタビューに答えて下さった海士町と済州島の海女や町民のみなさんに心から感謝するところである。

参考文献

海士町自治会 1997.「海士町開町 350 年記念誌」北國新聞社

富山大学人文学部文化人類学研究室 1999.「海民文化の現在－石川県輪島市海士町・舳倉島－」 あけぼの企画（株）

第2節 海士町の食文化

飯塚 芳恵

1. はじめに

あままち

輪島市海士町には、海女業を営んでいる女性が平成18年現在で217人いる。既婚の海女の女性の配偶者は、漁師である場合が多い。このように海士町には海と密接に結びついた生業をおこなっている人が多く住んでいる。かつては食事の主な素材は海産物であったと思われるが、スーパーなどで様々な食材が簡単に買えるようになった現在でも、日常の食事に海産物が多く使われているのだろうか。

以前は海士町町民どうしの結婚が多かったが、現在では広く他地域との通婚がおこなわれるようになり、親戚関係も近隣の鳳至町や河井町に広がっている。海士町出身者で現在は海士町以外の町に住む人も多い。また、海士町の概況で示したように20代、30代の比較的若い海女も少なくない。

これらの事情から、海士町の海女の人々の食生活は、かつてと比べると、輪島市内の港から離れた他の町と変わらない、特徴のないものになってきているとも考えられる。

現在の海士町の食生活には、海女漁や漁業といった生業が反映した独特の特徴が見られるのだろうか。本報告では、このことについて、海士町の女性を中心に聞き取り調査をおこなった。

2. 海士町の食材

海士町には、海女だけでなく、漁業を営む漁師も多い。そのため、海藻類や貝類の他、さまざまな種類の魚も水揚げされる。たとえば、春はメバルやタイ、夏はサザエにアワビ、秋はフクラギやハタハタ、冬はカワハギとカニ、といったように、海士町の前に広がる輪島漁港は一年を通して魚介類の水揚げで賑わう。

海士町の人々が海女業（潜水漁）と漁業で獲っている海産物を表1に示した。

表1. 海士町の高産物

		正式名称（）内は方名
海女漁	海藻	ツルアラメ（カジメ）、イワノリ、ワカメ、ツルモ、アオサ、モズク メカブ、エゴ
	貝類	アワビ、サザエ、シタダメ、ジメ
漁船による漁	まき網漁業	アジ・サバ・イワシ・フクラギ・ガンドブリ・ブリ
	定置網漁業	イカ・タイ・ヒラメ・スズキ・アジ・カマス・ブリ
	底引き網漁業	カレイ・ヒラメ・タイ・イカ・ニギス・カニ
	刺し網漁業	タイ・ヒラメ・メバル・アカラバチメ
	はえなわ漁業	アラ・トラフグ・アナゴ

3. 海士町の調理、保存法

海士町の主な収穫物である貝類、海藻類、魚類について、海士町の女性に聞き取り調査を行った。そして、海士町で採れる海の食材の中から実際に海士町民が普段食べているものに焦点を当て、日頃どのように調理、保存されているかを調べてみた。

3-1. 貝類

まず、海女の最重要収穫物である貝類について見てみよう。

表 2. 貝類の調理法、保存法

食材	調理法、保存法
アワビ	刺身、塩茹で、麴漬け、塩漬け、貝焼き、アワビご飯
サザエ	刺身、麴漬け、塩漬け、サザエご飯、つぼ焼き、串焼き
シタダメ	シタダメ汁、ぬか漬け

1) アワビ

7 月になり漁が解禁されると、海女は競い合うようにアワビ採り漁に励む。家庭で食べる場合、とれたてのものは刺身にして食べる。また、アワビを塩水で煮る場合もある。煮る際には、濃度の高い塩水で茹でて、塩辛い味付けをする。アワビの殻には排泄のための孔があいているが、この孔にワカメなどの海藻を詰めて、後で詳しく述べる魚醤油のイシルを入れて焼く「貝焼き」という調理法もある。

アワビをご飯の具にして炊き込んだり、麴漬けや塩漬けにしたりもするが、こういった調理法はサザエの方でよく用いられる。

この他にも、バターで炒めたり茶碗蒸しの具にしたりするということがある。

海士町に住む人は、アワビを口にする機会は多い。たとえば、海士町の 80 代の女性は、「アワビの貝焼きが大好き」と語っていた。一方、河井町の A さん（30 代、男性）は「アワビは高いからなかなか食べられないね」と言い、同じく河井町の 20 代の女性は「親戚からもらったら食べるくらいかな」と語り、海士町以外の輪島の人々にとってアワビは身近な食材とは言えないようである。

2) サザエ

輪島市の海士町以外でも作られるが、特に海士町で「サザエご飯」という料理がある。「サザエご飯」は地元ではお祝いや祭りのときに食べられる他、日常的に作る家もある。作り方は、まずサザエの殻を割って肝を取り除き、次に鍋でサザエをさっとゆでて薄切りにする。炊飯器にといだ米とだし、しょうゆ、酒と、サザエの煮汁を入れて炊く、というものである。「サザエご飯」を、どのような時に食べるのかを海士町の人に尋ねてみた。す

ると、60代の女性は「孫の誕生日にサザエご飯を作った」と話していた。また、Bさん(30代、女性)は「金沢から親戚が来たときに作る」と語っていた。そして、60代の女性は「(サザエご飯は)普段でもよくするよ」と言っていた。しかし、70代の女性からは「(サザエご飯なんて)そんなめんどくさいものしないよ」という話を聞いた。特別な日に作る家もあれば、日常的に作る家もあったが、手間がかかるため作らないという家もあった。

一方、河井町のAさんは「子どもが(祭り会場からサザエご飯を)タッパーでもらってくると、そういえば今日はお祭りだったなと思う」と言っていた。珍しいものではないが、日常的に食べてはいないようである。

サザエを使った料理で、サザエのカレーというのを聞いた。しかしサザエのカレーは、「舢倉島ではよく作ったが、最近では肉を使うカレーがほとんどで、年に1回あるかないかだ」という話がほとんどだった。しかし50代以上の女性は、サザエのカレーの方が好きだという声が多く聞かれた。そこで、「ではなぜサザエのカレーをしなくなったのか」と聞いたところ、「今ではご飯は娘が作るようになったので、肉のカレーしかしなくなった」や、「子供に合わせるので」という回答がいくつか得られた。

サザエはアワビと同じように、麴漬け、塩漬けにもされる。作り方は、採ってきたばかりのサザエの殻を割り、身を取り出して内臓を取り除き、塩に漬ける。漬けるときに、魚醤油のイシルを少量入れるという家もあった。塩漬けや麴漬けにすると、冷蔵庫で1年くらいもつという。調査中も、漁から帰ってきてすぐに港で採ってきたサザエの殻を金づちで割っている海女を多く見かけた。塩漬けや麴漬けはご飯にのせて食べたり、酒のつまみとして食べられている。また、サザエの麴漬けは正月料理の一品として海士町の多くの家庭で食べられている。

「どうして漬けて保存食にするのか」と聞いたところ、デカタでは、「1年中食べられるように」や、「売り物にするため」といった回答が多かったのに対し、舢倉島では「保存食として」という声が多かった。なぜこのような違いがあるのかというと、塩漬けや麴漬けは、デカタでは観光地の食べ物として朝市で売られていたり、旅館やホテルに売っていたりする一方、舢倉島では海が荒れた日は定期船が運行しないため、島のどの家庭でも保存食が作られているということに由来する。

3) シタダメ

シタダメとは巻貝の一種である。シタダメ汁とはシタダメが入っている、味噌で味付けをしたおつゆなのだが、私がごちそうになったシタダメ汁は、シタダメ以外の具はなく、汁にシタダメのだしがしみ出ているととてもおいしかった。汁を飲みながら貝の身をつまようじで取り出して食べる、と教えられた。

また、Bさんは「うちのおばあちゃんがシタダメのぬか漬けを作ってるんだけど(小さい貝なので)ちょっとしかできないから、ばあちゃんしか食べない」と言っていた。このCさんの義母(元海女)は、自分で作ったシタダメのぬか漬けをご飯にのせて食べるという。このように、シタダメをぬか漬けにする家もあった。

その他にも、輪島では、居酒屋の先付けとしてシタダメを食べたりもするという。

輪島ではアワビ、サザエ、シタダメの他にも、ジメ（ズメ）という貝が一般的に食べられている。ジメ（ズメ）貝は、海岸の岩場にくっついている。よいだしが出るため、味噌汁に入れたりそうめんつゆのだしとして使われたりしている。

3-2. 海藻類

次に、海女のもう一つの重要な収穫物である海藻について聞いた。メカブ、カジメどちらも、採れたての生のものと保存用に乾燥させたもののそれぞれの調理法がある。

表3. 海藻類の調理法、保存法

食材	調理法、保存法
メカブ	味噌汁の具、お茶菓子、メカブ茶、ご飯にのせて食べる、酢の物
カジメ	味噌汁の具、和え物、煮物

1) メカブ

メカブは4月から5月にかけて採られる。旬の生のメカブは、塩をかけてご飯にのせて食べたり、茹でて酢醤油をかけて食べるなど、食事のメニューのひとつとして食べられている。また、乾燥させて保存し、味噌汁の具として入れたり、小さく切ったものはそのままお茶菓子にして食べたりお湯を注いでメカブ茶にするなど、食事のメニューのひとつとしてはあまり使われていなかった。しかし使用頻度は高く、1年間を通して食べられている。

2) カジメ

輪島市で一般的に「カジメ」と呼ばれているものは、正式にはコンブ科カジメ属ツルアラメである。本当のカジメは太平洋側にしか生息していないが、このツルアラメは日本海側に生息し、特に舳倉島近海や七ツ島近海ではツルアラメがよく採れる。以下ではツルアラメを「カジメ」と記す。「カジメ」は冬が旬であり、1月から2月に採れるものは生のまま刻んで味噌汁に入れたりゴマ和えにしたり油揚げと一緒に煮るなどして食べられている。3月から4月のものは生のものを茹でて乾燥させ、保存食とする。乾燥させた「カジメ」は、味噌汁に入れる程度だという。9月から10月のものは天日干しにして乾燥させ、燃やして出た灰を入浴剤にする。そうすると体が温まるという。5月から8月頃のものは硬いのでほとんど採らない。

60歳の女性は、「初雪が降る頃になるとカジメがおいしくなる」と言って、少し時期は早かったが採れたての「カジメ」汁をごちそうしてくれた。「カジメ」は初め茶褐色だが、

おつゆに入れた瞬間、鮮やかな緑に変わる。そして強い粘り気が出る。



写真 1. 刻んだカジメ

このように、どちらの海藻も、生のものは副菜として食卓に上るが、保存用として乾燥させたものは、「味噌汁に入れるくらい」といった声が多かった。

この他にも、岩ノリやモズク、アオサなどが輪島沖で採れ、季節によってさまざまな海藻が家々の食卓に登場している。

3-3. 魚類

海士町の漁師が採る数多くの魚は主に刺身、焼き魚、煮魚にして食べられるが、このような一般的な調理以外の加工の仕方や保存法についていくつか紹介したい。

1) イシル

イシルとは、イワシやサバ、イカなどを使って作られる魚醤油で、また、独特の香りがある。イシルは海士町だけでなく、輪島全体で広く使われている。

作り方は、まずイワシの頭と内臓に多めの塩をかけて樽に密閉する。そして半年以上たってから出てきた上澄みがいしるである。30代の女性は、「イシルの樽は動かしていいのは3回までで、それ以上動かすと上澄みが取れなくなる」と教えてくれた。ほとんどは漁師の家、つまり主に海士町で作られている。しかし、最近は作る家が少なくなっていて、近所で作っている家からもらったり買ったりしている家が多くなってきたという。

煮物に使う他、サザエなどの麴漬けに少量入れるとおいしくなる。

2) 「アゴのカツオ」

「アゴのカツオ」とは、トビウオで作られる煮干のようなものである。「アゴ」というのはトビウオの方名である。うろこ、頭、内臓、羽を取除き、よく塩水で洗ったものを茹で、乾燥させる。海士町では毎日の味噌汁や正月の茶碗蒸し、そしてそうめんつゆと、1年を通して「アゴ」でだしをとっている。また、「アゴのカツオ」にそのままマヨネーズをつけると酒のつまみにもなるという。「アゴのカツオ」は自家用に作っている家が今も多い。ま

た、海士町以外の親戚に配ったり、朝市で売っている家もある。

「アゴのカツオ」作りの時期になると、取り除いたトビウオの卵巣を醤油で炊き、ご飯にのせて食べる。しかしそれは少量しか作れないため、「アゴのカツオ」を自分の家で作っている海士町住民しかほとんど食べる機会がない。

3) むか漬けなど

フグのむか漬けやハタハタのむか漬けなどいくつかあり朝市でも多く売られているが、このような加工をするのは主に輪島崎に住む漁師が多い。また、フグのむか漬けの食べ方は様々で、焼いて食べる人もいれば茹でて食べる人もいた。茹でる食べ方は海士町以外ではあまり見られないという。しかし海士町の中でも、「塩辛いものが好きで、茹でると味が薄くなるので焼いたものの方が好き」という人もいた。

以上のように、海士町民によって採られる海産物は様々な形に調理、保存され、旬ではない時期でもおいしく食べられるように工夫されている。

4. 実際の食事の例

輪島市の3世帯について、1週間の夕食のメニューを尋ねた。その結果を示したのが表2であるが、世帯Aは輪島市河井町の方で、漁業には関わっていない方である。世帯Bは海士町の方だが、家に海女はおらず、夫も漁師ではない三世代同居の家庭である。世帯Cは漁船による漁と海女漁を営む海士町の三世代同居の家庭である。

表4. 夕食の例

世帯	A	B	C
11月19日	豚肉とキャベツの炒め物 タコの水炊きの物 豆腐となめこのみそ汁	茹でガニ ぶり大根 大根サラダ チクワとキャベツの炒め物 みそ汁 漬け物	かつ鍋 アワビの水炊き カニのみそ汁
20日	茹でガニ カニのみそ汁 卵焼き	すき焼き ガンドブリ刺身 サラダ 漬け物	焼き魚(マス) フグのタラの塩漬け焼き 干しガレイ 漬け物

21 日	弁当	カレー鍋 サラダ 漬け物	カニ飯 干し赤ガレイの焼き物 カボチャの煮物 ミズブキの煮物 イモノコ（サトイモ）のみそ汁
22 日	チャーハン レバーと野菜の炒め物 豆腐とワカメのみそ汁	おでん 茹でガニ サラダ みそ汁 漬け物	焼き魚（カマス） アワビの刺身 イモノコ（サトイモ）の煮物 サラダ 漬け物 青菜のみそ汁
23 日	きしめん	外食	イカ焼き 餃子 カニのみそ汁 サラダ
24 日	イカの姿焼き がんもどきの煮物 納豆 肉団子のスープ	コロッケ 切り干し大根 煮豆 サラダ みそ汁 漬け物	イワシ刺身 ダイコンとタラコの酢の物 鶏の唐揚げ 納豆巻き
25 日	カツ丼 エノキのみそ汁	蒸し鶏のゴマサラダ レンコンのきんぴら キノコのスパゲッティ みそ汁 漬け物	アジのタタキ 鶏野菜鍋

*魚介類の入った品目には を付けた。

上の表をまとめたものが下の表5である。

表4を見ると、世帯Cでは1回の食事の品数が多い。食材別で見ると特に魚介類が多いが、野菜は少ない。また、外食も少ない。肉の登場回数はどの家でもあまり変わりはないが、世帯Cでは肉が食卓に出る日でも魚も食べる。調査日がカニの解禁直後だったため、どの家でもカニが出ていた。世帯Aや世帯Bでは、知り合いの漁師からカニをもらったということだった。

調理の仕方は、世帯Cでは魚貝類を焼き魚や刺身にすることが多く、炒め物が少なかった。世帯Cで、魚介類は簡単な調理法のものが多いのは、食事を作る女性が海女業をしていて忙しいことが多いからである。実際に、海女業の最盛期は特に、刺身や焼き魚などの簡単なおかずで済みますことが多いという。

世帯Bは海士町に住むが、家族の中で漁に携わっている人がいないためか、魚の登場回数は世帯Cより圧倒的に少なく、一方野菜の登場回数は多い。さらに煮物や炒め物といった調理法がよく使われている。同じ海士町に住む住民でも家に漁師や海女がいるかないかで、食材や調理法に違いが見られる。

表 5. 食材別品数

	A	B	C
魚介類	5 品目	4 品目	14 品目
肉類	4 品目	3 品目	4 品目
野菜	3 品目	17 品目	10 品目
外食・弁当	1 回	1 回	0 回

5. 魚介類の分配

海士町では、採れた魚介類を近所や親戚に配っている。漁師のいる家は魚を、海女がいる家は貝類や海藻を、海女や漁師がいない家にお裾分けをする。

分配にはいくつかのパターンがある。まず一つ目は、海士町民同士の分配である。この場合、漁師のいる家から漁師がいない家に、魚をあげることが多い。50代の海女は「夫は漁師ではないから（漁師の家から）魚をもらうこともある」と語っていた。また、今では家で作る人が少なくなったイシルも、近所の人が作ったものをもらっている家もある。

二つ目のパターンは、海士町民とその他の輪島市民との間の分配である。以前は海士町民どうしの結婚が多かったが、現在では他の地域との結婚がおこなわれるようになり、親戚関係も近隣の鳳至町や河井町にも広がっている。また、海士町民が増え隣の輪島崎町や鳳至町に住む海士町民もいる。これらのことから、魚介類の分配も海士町に留まらず広く行われている。この場合は、海士町民が魚介類を、その他の地区の人からは野菜や米をもらうということが多いようだ。海女である 50 代の女性は、「野菜は買うこともあるけど、（農家に）魚をあげて野菜をもらうことも多いね。物々交換だよ」と言っていたし、海女の 50 代の女性も、「野菜は買うけど米は親戚からもらう」と言っていた。河井町に住む A さんも、「カニの季節になると、買わなくても 1 回はどこかの家からもらうから、買わない」とのことだった。

では舢倉島での分配はどうだろうか。舢倉島では魚介類の物々交換はデカタほど盛んに行われていない。それは、舢倉島に住む人はほとんどが海女か漁師で、どの家でも魚介類が豊富だからである。ただ、数は少ないが、海女や漁師がいない家もある。そのような家

には当たり前のようにみんな魚介類をお裾分けしている。そして緊急時の助け合いの意識はとても強い。舢倉島には畑や田んぼ、商店がなく、また食料を運んでくる定期船も一日1便しかないので、海が荒れると10日間食料が届かないこともあるという。このような場合に備えて、舢倉島では保存用の食べ物がそれぞれの家に豊富に揃っているのだが、それでも食料がなくなった時には近所で食料を分け合って助け合うというのが当然のこのように行われているという。このような緊急のとき以外でも、米がなくなったときや醤油を貸してほしいときなど、近所との行き来は頻繁にされている。このようなことから、舢倉島の場合は「物々交換」というより「助け合い」という感じだった。

6. まとめ

以上のように聞き取り調査を行った結果、「海士町独特」という食材はわずかしかな存在しない。なぜかという、海士町でとれた魚介類を海士町以外の地区の親戚や近所に分配し、物々交換が盛んに行われているため、海士町より頻度は少ないものの同じものが食べられているからである。しかし、1週間の食事のメニューを見ても分かるように、海士町の、特に海女や漁師のいる家ではほぼ毎日魚介類、特に魚が食べられていて、河井町ではあまり特徴はない。海士町民であっても海女や漁師がいない家では、夕飯メニューの魚介類の登場回数を見ても他の地区の人とあまり違いはなかった。

しかし、調理方や保存法の面で違いが見られた。海士町では魚介類を保存用に漬けたものや乾燥させたものが多い。漁業、特に海女業は体力をととても消費することから、海士町では貝類や魚類を塩辛く漬けたものが好まれる。海藻は、とれる時期によって上手に使い分け、年中使われている。また、漁で忙しい時期は特に、夕食は簡単なもので済ませることが多い。

海士町では肉も普段から食べてはいるが、魚介類が圧倒的に多かった。肉が食卓に登場していても、一緒に魚も登場しているなど、魚はあって当たり前という感じであり、海士町の家庭では、魚中心の食事がされていると言える。

7. 考察

なぜ海士町では魚介類を保存用に漬けたものや乾燥させたものが多いのだろうか。

海士町ではそのとき旬の魚介類が大量にあり、そのままでは食べきれないため、保存用に加工するのではないかな。また、サザエやアワビは海女にとっては宝であり、とても大事な存在である。その大事なサザエやアワビを1年中食べていたいため、麴漬けや塩漬けなど加工しているのではないかな。サザエの麴漬けを正月に食べるというのは、それだけその食材を重要な、縁起のいいものと考えているからではないかな、と考えた。

海士町以外では、親戚や近所から魚介類をもらうものの保存するほど多くはないし、新鮮なおいしいものが食べたいと思うため、加工せず刺身や煮魚として食べるのではないかな。

また、夕飯のメニューを見ると、AさんとBさんは魚介類の登場回数が少ないためもあるが、メニューの中に魚介類が出る日と出ない日がはっきり分かれていたり、2日間出る

日が続いていたりする。それは、魚介類をもらった日ともらわなかった日が関係しているのではないか。もらった日には魚介類が数品目出たり、2 日間続いて出ていたりして、もらわなかった日は魚介類が登場しないのではないか、と考えた。もちろん、魚を買うこともあるので全てがそうとは言えない。しかし、一日に数品目の魚介類が出ていたりするときは、そう考えられるのではないか。

いずれにせよ、輪島市海士町は魚介類中心の食生活を送っていて、海士町の漁師や海女がとった魚介類は、輪島市の他の地区へも分配されている。こうして、海の幸の豊富な輪島市がつくられているのは間違いないようだ。

8. 謝辞

今回の調査で、海士町以外だけでなくたくさんの輪島市の方々にお世話になりました。私が海女の方々にぎこちない質問をしたときも、漁から帰ってきて疲れているにも関わらず親切に答えてくださったり、いろいろな方を紹介してくださったりしていただきました。また舩倉島では、食事のときなど島の方々に混ぜていただいて、とても温かく、濃い時間を過ごすことができました。秋に補足調査に行ったときには「また来てくれたの！」と言って迎えていただいて、そのうれしさは忘れることができません。

海士町を始め、輪島市の皆様のご協力のおかげで今回報告書を完成させることができました。とても感謝しています。本当にありがとうございました。

参考文献

守田良子 1988 年『日本の食生活全集 聞き書 石川の食事』社団法人 農山漁村文化協会

竹内潔 1999 年『海民文化の現在—石川県輪島市海士町・舩倉島—』富山大学人文学部文化人類学研究室

第3節 チアマイという病

長谷川 彩

1. はじめに

輪島市海士町には、潜水漁を営む海女が多いが、海女の間では「チアマイ」という疾患にかかる人が少なくない。この報告では「チアマイ」を中心に潜水漁という生業と関わる疾患について述べていきたい。まず「チアマイ」がどのような病であるのか実例を挙げる。そして、なぜ海女に多くみられるのか、ラテンアメリカの女性にみられる精神的疾患「ネルビオス」と比較して潜水業を生業にする海女と「チアマイ」の関係を探る。

海士町は舳倉島という離島も含む。舳倉島の概要は海士町概要のページを参照してほしい。舳倉島の平成18年夏期滞在者数は100人で、その内男性が47人、女性は53人である。このほとんどが漁業関係者である。舳倉島には昭和36年に診療所が開設し、以前は年輩の医師が数年ごとに交替で勤務していたが、現在は自治医科大学の卒業生が半年交替で勤務している。

調査は海士町と舳倉島で、主として潜水漁を営む海女を対象に聞き取りをおこなった。また、舳倉島駐在の医師にもインタビューをおこなった。

2. 舳倉島診療所の利用状況

まず海女がかかる疾患について舳倉島診療所の利用状況から簡単に見ていく。

海女は4月から7月まではナマコ漁をしたり、カジメ、テングサなどの海藻をとる。アワビ、サザエ漁が7月から10月まで続き、この間海女は酸素ボンベを使わずに潜水漁を行う。10月からはナマコ漁と岩ノリ採りが行われる。

表1. 平成18年6月～8月の舳倉島診療所利用状況

月	一月あたりの患者数
6月	163人
7月	184人
8月	169人

診療所の医師から聞き取った話を以下に記していく。4月から7月は岩場での海藻採りがあり、その際に腰をかがめるので腰痛を訴える人が多い。

7月以降はアワビ、サザエの海女の潜水漁が解禁になる。足ヒレをつけて水深十数メートルまで潜る潜水漁は耳に水圧がかかるため、鼓膜の内側と外側の圧力が大きく異なる。そのため2メートルから3メートルも潜ると耳が痛くなり、放置すると鼓膜が破れる場合がある。鼓膜内外の圧力差を同等しくするために、鼻腔から鼓膜内側の内耳に空気を送る必要があるが、海女はこれを耳抜きと呼んで鼻をつまみ息を強く吐いて行う。これが耳に負担となり中耳炎や外耳炎の原因となる。そのため耳の疾患を訴える人が増える。

舳倉島の患者はほとんどが60歳以上であるので、大半は高血圧、高脂血症、糖尿病な

どの治療のために訪れる。

舳倉島の人にはムカデに咬まれるなどして腫れあがっても医院を利用しない人が多い。医師に頼らず自分で治そうとする人が多いのである。また毎日仕事がある人が多く、安静にしているということがなかなかできないので、薬を出してもらって働き続ける場合がほとんどである。

そして、海女の 5、6 割は「チアマイ」と呼ばれる胸がドキドキする不快感など原因の分からない不安症のために抗不安薬を使用している。

「チアマイ」は「チアメ」とも呼ばれるが、この報告書では「チアマイ」で統一する。

3. 「チアマイ」について

海女の半数以上がかかっているという「チアマイ」がどのような病であるのか、なぜ海女に多く見られるのかを以下に実例を挙げて明らかにしていく。

3-1. 「チアマイ」の症状

具体的にどのような症状を「チアマイ」と呼ぶのだろうか。

例えば B さん（50 代）は「原因は分からないけどチキネエ、チキネエ（辛い辛い）って言うこと。」と説明し、同じく 50 代の A さんは「陸にいてもどこにいても不安。ドキドキする。」と言う。このことから「チアマイ」は原因不明の動悸や不安を訴えることであるといえる。

症状によっては仕事量にさしつかえが出る場合もある。

「波がくるのが恐ろしかった。チアメにかかった人は他の人から見ても分かる。普段サザエを 10 個捕れる人が 2、3 個になると“あの人チアメだ”と思う。症状が軽くてもチアメっていうこともある。」（C さん 60 代）

「胸の中がドスーンとなる。空きっ腹で海にもぐれない。お腹空いたらなる。12 時になったら船にあがって飲み物や何か食べないとそれ以上海に潜れない人もいる。その人はパン一口でもジュースでも食べないときつとチキナイことになる(苦しくなる)と信じている。」

（D さん 50 代）

このように、「チアマイ」と呼ばれる状態は症状も程度もさまざまである。なんとなく気持ち落ち込んでいることも体調が良くないことも、何かが心配で心配で落ち着かなくなることも含まれる。

「チアメやーとちょっと体調悪くてもいう人がいるし、気分が落ち込んだときでもいう人がいる。若い人の中ではそんなに症状悪くなくても軽くチアメやーという人がいる。ドキドキして、心配・不安になったりすることはチアメという。」（E さん 30 代事務職）

「チキネーチキネー（辛い辛い）よってなることがチアマイ。一人でおったら不安になることとか一人で具合悪くなったらどうしようとか考えること。ウミオチするともいう。なんとなく前は潜ってた所に潜れないとか、なんとなくいつもの調子でなく不安がいっぱいなこと。」（G さん 30 代）

G さんは「チアマイは気持ちが沈むこと、気持ちの問題。だから血の病でチアマイというのかも」とも言っていた。

「ウミオチ」と「チアマイ」は異なる。「ウミオチ」は海に潜ることが怖くなることである。しかし両者には関係がある。

「船の近くにいないと不安というもの。今チアメだ。何十年も前からチアメで、風が吹いたり波が来たりしたら空ばかり見てしまう。一度お腹が空いたと思ったらそればかり気になる。友人はパンを袋に入れて浮き輪に結んでおき、いつでも食べられるようにしておいた。ウミオチとチアメは違う。ウミオチは思っていたよりも海が濁っていたり、潜ったところが予想以上に深いところだったりすると急に怖くなること。テレビで雅子様が人前に出たなくなっているのを見て雅子様はチアメヤーと（みんな）いう。」（H さん 60 代）

「チアマイ」の症状に大抵共通するのは、動悸が起こる、突然不安になる、なんとなく気が沈む、海に入ったり潜ったりすることが怖くなるなどのことで、一つのことが気にかかる脅迫神経症のような状態になる場合もある。

3-2. 「チアマイ」になるケース

以上のような不安を訴える人には傾向がある。ここで、どのような人が「チアマイ」になるのか見ていく。

C さんは「男でチアメの人は海士町にはいないようだ。」と言う。このことからわかるように、「チアマイ」は女性に特有の病である。

話を聞いていく中で、私は海に潜るのは怖くない、「チアマイ」になったことがないので知らないという意見もあった。なる人とそうでない人がいるというのが、海女の誰でもなる可能性はある。「海女でもかかる人もいるし、かからない人もいる。今 10 人に 1 人ぐらいチアマイのひとがおるかな。誰でも明日なる可能性がある。」（H さん）しかし「チアマイ」になる人に傾向がないわけではない。

H さんは「同じ状況でもならない人はならない。何でもクヨクヨしたり、気にするよう

な人はなる。」という言う。

「海女さんに限らずなる。」(I さん 60 代)

「海女ではなくても体調がぐんと悪くなったりするとチアメという。けっこう元気そうな人もチアメっていつてる。産後の養生が悪くてもチアメっていう。河合町では聞いたことがない。」(F さん)

「チアマイ」にかかるのはほとんどが海女であるが、このGさんとEさんの発言から、海女以外の人「チアマイ」にかかる場合もあることがわかる。また、高齢の人がなりやすく、若い人で「チアマイ」になりやすいのは子どもを持った人である。海女のベテラン・初心者に限らずなる可能性がある。

「おばあちゃんがたくさんなっている。(夏期舳倉島で) 1人で暮らす老人の生活不安が原因かもしれない。」(B さん)

「若い人でも子どもをもった人でチアマイになった人がある。子どものいる人がなりやすい。」(D さん)

「若い人からチアマイについて聞いたことがない。15歳から潜っている19歳の人もチアマイについて何か言ったことがない。」(E さん 20代)

3-3. 「チアマイ」になる原因

このような「チアマイ」にはどのような時にかかるのだろうか。

Dさんの場合は「海の底で耳の鼓膜に穴が空いた時にチアマイになった」ということである。〈注〉またDさんは「チアマイは予防できない。子どもの世話など疲れがたまったらいきなりなる。」と説明する。

このように、漁の最中に「チアマイ」になる場合は海で大きい波や事故など怖い思いをしたことがきっかけとなる。疲れがたまるとなりやすく、子どもができると世話や心労が増えるので「チアマイ」になりやすくなる。

「空が黒くなってきたら前怖かった時を思い出すのでダメで入れなくなるときがある。時化(シケ)などの時がきっかけにもなる。チアメはいつなってもしょうがない。疲れがたまっているとやすしい。」(H さん)

また、海で誰かが「チアマイ」になったと聞いたことがきっかけになる場合もある。

「深く潜った人がチアマイになったと聞いて深く潜れなくなった人達がいる。」(A さん)

「チアマイ」には、些細なきっかけでなる場合もある。症状が人それぞれであるので自分が「チアマイ」になったと思った時点で「チアマイ」であるといえる。そのために、いつなるのかが分からず予防が難しい。

3-4. 「チアマイ」の治癒

次に、「チアマイ」になった場合、海女の人々がどのような治療法をとるのか、何をきっかけに回復するのかを見ていく。

「チアマイ」になった人は主に、医療機関や薬に頼って治療を試みる。

「薬があるだけで安心して治ったり、薬がなくなったら悪くなったりする人もいる。薬で治る以外に、時期が過ぎれば治る人もいる。1月になってすぐ治る人もいる。」(Aさん)

「医者ということに左右されやすいので大丈夫だよっていわれると大丈夫になる。」(Fさん)

このように病院で診てもらったり、薬を飲んだり、大丈夫といわれるだけで良くなる場合がある。

一方で、「時期がくると治った。波が来ると怖いのがちゃんと治るまで10年以上かかった。いろんな病院回っても治らなかった人もいる。」(Cさん)というふうに、時間がたてば治ると答える人も多かった。

症状がさまざまで、「チアマイ」になったという判断が各個人によるので、治る時期も本人が治ったと思う時が治ったときである。

自助努力で治そうとする人もいる。

「家に帰ってその後2日から3日海に入れなかった。浅い所から入る練習をして入れた。チアマイは予防できない。なだめられたら治らない。そんなもんに負けてられんと(周囲の人間に)怒られて海に入ると治る。2、3ヶ月でだんだん海に潜れるようになり、2年から3年でちゃんと元通りになった。」(Dさん) Dさんも周りの人に励まされ病院に通うことなく克服している。

「何か食べればすっきりする。タバコを吸うとホッとする。タバコはみんな持っている。」(Hさん) 調査中喫煙する海女は多く見られ、実際海女のほとんどがタバコを吸っている。

「チアマイ」にかかった人は大半が潜水する深さを変えたりして漁を行っていた。また、空腹のまま漁を続けると辛くなるという人は必ず何か口にしている。このように、「チアマイ」にかかってもほとんどの海女が不安な要素を減らすことで漁を続けていた。

また、海女に限らず違う職業の女性でも「チアマイ」という言葉を使うが、これは海女

の表現に影響を受けたものと考えられる。

4. 「チアマイ」と「ネルビオス」

ここから、ここまでみてきた「チアマイ」と、同じく女性のみみられる「ネルビオス」を比較して、「チアマイ」が海女にみられる原因を考察していく。

4-1. 「ネルビオス」の原因

「ネルビオス」は中央アメリカのメスティソ社会にみられる女性特有の、ある種の身体的苦痛や不安感などを指す。スペイン語のネルビオ（神経）からくる言葉で、「神経が弱い」とかかるといわれている。また、一時的に身体が疲労した状態でもかかる。

その原因として、「夫が酒やタバコを飲む」、「夫が妻に対してひどい生活を強いる」、「男性が女性を暴力性をもって支配する」、「女性の働きすぎや考えすぎ」などが挙げられる。このことから、ネルビオスの背景には、メスティソ社会の男性優位性による女性の地位の低さがあると分かる。つまり、「ネルビオス」の原因が女性の心身の疲労にあるといえる。

4-2. 「チアマイ」と「ネルビオス」の比較

「ネルビオス」の背景にある女性の地位の低さは、「チアマイ」の場合でもいえるのだろうか。各世帯の収入において海女の収入が占める割合は決して少なくない。かつては女兒が誕生すると赤飯を炊いて祝ったほど、女性は重宝がられた。現在でも、タイシオトコと呼ばれる海女の夫や父親は、海女漁の補助的作業を担う。よって、海女の社会的経済的地位が男性より低いとはいえず、「ネルビオス」とは違う要因で「チアマイ」が生じると考えられる。

5. 考察

では、なぜ海女に「チアマイ」が起こるのだろうか。「チアマイ」について海女との関係を考察していく。

5-1. 不安障害としての「チアマイ」

まず、ここまでの「チアマイ」をまとめる。

栃木真一の『石川県舩倉島の海女に見られる不安障害の検討—いわゆる「チアマイ」の臨床的特徴について』によると、「チアマイ」は不安や体調の不良を訴える不安障害、パニック障害である。

また、外見から原因が見つけられない気の病と思われるものはすべて「チアマイ」と呼ばれる。そして、普段の習慣に変化が起きて体調に悪影響が生じた場合も「チアマイ」とされる。

5-2. 海女の生活と「チアマイ」

次に、「ネルビオス」の原因の一つにあった心身の疲労が海女にもみられるか考察する。

まず身体への負担についてだが、海女は朝 6 時に起き、朝ご飯とお昼の弁当を作るなど家事をして、漁の準備をして 7 時半には全員出漁する。その後昼食をはさみ、おおよそ 2 時、3 時まで酸素ボンベなどの助けを借りずに潜水漁をした後、港に帰り、漁獲物の仕分けをし、家ではまた家事をする。幼児がいる場合は、さらに育児に労力を割かなければならない。このように、海女は起きている時間のほとんどすべてを家事と潜水漁で費やしていて、他の仕事をしている女性には生じないすさまじい身体への負担があるといえる。

心理的負担について述べると、潜水漁は波の荒さ、潮の流れによって生命を失う危険が常につきまとう。漁の最中に鯨の被害はごく稀であるが、「(鯨が) 遠くに見えるだけですごく怖い」という声を調査中よく聞いた。潜水漁ができるかどうかは天候に左右され、天候次第で収入も左右される。さらに、その日どれだけ獲れるのかは海に潜ってみるまで分からない。よって、潜水漁は危険と不安が常につきまとう生業であるといえる。

5-3. まとめ

最後に、今までみてきたことと、考察をまとめる。

「チアマイ」は海士町だけでみられる症状で、しかもほとんどの場合、海女だけがかかる。男性優位社会が背景にある「ネルビオス」とは異なり、潜水漁と家事の両立から蓄積される疲労、生命の危険と漁獲に対する不安などが、「チアマイ」の原因であるといえる。「チアマイ」は人間の制御できない海で生業を行う海女の生活そのものが、根本的な原因となって生じる不安障害だといえるだろう。

参考文献

輪島市発行、2006.『輪島市統計書』

舩倉島診療所、2004.『舩倉島診療所便り 9月号』

あとがき

石川県輪島市は古くから漁業と伝統工芸を中心に栄えた町です。祭礼にも他の地域には見られない特色を持ったものが多くあります。また、その一方で、北陸有数の観光地として、輪島は全国的に知られていて、朝市を中心に町はいつも多くの観光客で賑わっています。私たちは、このように伝統と活気に満ちた町の雰囲気惹かれて、輪島を調査地として選びました。

私たちは平成 18 年度(2006 年)の夏期を中心に、調査を行いました。調査は各自が現地に関心を覚えたテーマについて進め、そして、それぞれの調査結果を持ち寄ってまとめる形でこの調査報告書を作成しました。したがって、この報告書は輪島市の人々の生活文化をすべて網羅しているわけではありません。また、調査が行き届かなかったために、調査内容や記述など、不備な点も多々あると思います。しかし、この報告書でとりあげたそれぞれのテーマは、これまでに刊行されている輪島についての書物ではほとんど触れられていない事象が多く、伝統を引き継ぎつつ、あるいは新たな伝統を創りつつ、輪島に暮らしている人々の現在の姿をさまざまな視点からとらえたものだと思自負しています。この報告書から、私たちが体験したのと同じように、輪島の町と人々のいきいきとした姿を少しでも感じとっていただければ幸いです。

今回の調査にあたっては、輪島の多くの方々のおかげで協力をいただきました。この報告書がお世話になった方々へのささやかなお礼になれば、これにまさる喜びはありません。

平成 18 年度調査参加学生一覧

飯 塚 芳 恵
稲 田 有香里
イム・ヘギョン
崎 川 夏 耶
佐久間 悠司
進 藤 至
杉 本 優 子
塚本 枝里子
野水 裕紀子
長 谷 川 彩
渡辺 佳央里

奥能登の文化誌
—石川県輪島市の生活文化の「伝統」と「現在」—
地域社会の文化人類学的研究（16）

第2刷 2008年3月20日

編集 竹内 潔

発行 富山大学人文学部文化人類学研究室

〒930-8555 富山市五福 3190

Tel.& Fax 076-445-6186

Email anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷 なかたに印刷